
バカとテストと失われゆく記憶(ロストメモリー)

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと失われゆく記憶 ロストメモリー

【Nコード】

N9907T

【作者名】

唐笠

【あらすじ】

振り分け試験当日の放課後、とある事件により吉井明久は日付が変わることに記憶がリセットされてしまう！？さらには召喚獣までもが……！？

原作のバカテスに沿いながらも、まったく違う物語となっていく本作。

話の都合上、明久、瑞希、雄二の出番が多くなっております。

明久×姫路を前面に押し出しておりますのでご了承ください。

第0問 その日は僕がいなくなった日（前書き）

バカテスの連載小説第2弾！

本作もどうぞよろしくお願いします

第0問 その日は僕がいなくなった日

明久SIDE

「姫路さん、大丈夫？」

「はあ、はあ、大丈夫ですよ……」

振り分け試験の最中、姫路さんは高熱をだしてしまった。

僕は姫路さんが心配で家まで付き添いでやってきていて、今はその道中だ。

隣を歩く姫路さんは元々体が丈夫でないことも拍車をかけて、すごく辛そうだ。

「おっと！」

突然、体の重心を崩した姫路さんを支える。

その細身ながらも自己主張が激しい体を支えると、ふわっという香りが漂う。

「あつ、明久君すいません／＼／」

恥ずかしそうに姫路さんが言う。

まあ、公然の目の前で抱き抱えられたら誰だって恥ずかしいよね。

ちなみに姫路さんが僕の事を名前で呼ぶのは理由があったりするが、それはまたの機会ってことで。

「ぼつ、僕の方こそ急にごめん／＼／」

当然、僕の方も恥ずかしい訳です。

街中で女の子を抱き抱えるだけでも恥ずかしいのに、相手はあの姫路さんだ。恥ずかしくない訳がない。

僕は姫路さんを支えながら立たせると、再度歩き始めた。

しばらくすると車通りの多い、大通りにつく。

僕は青信号を確認して、姫路さんの肩を担ぐように渡る。

「明久君、ありがとうございますね……」

「これくらいなんてこ、危ない姫路さん!!」

僕は姫路さんを思いっきり突き飛ばす。

幸い、姫路さんは別の車線までとんでいったようだ。

キキイイーーーーー!!!!!!

ただ、僕がよけるだけの猶予は残されていなかった……

第0問 その日は僕がいなくなった日（後書き）

いかがでしょうか？

今回は物語の機転となるプロローグのみで、次回から原作に沿っていきます。

なお、こちらは不定期にあげていきますのでご了承ください。

第1問 頭痛と記憶となくなった春休み

明久SIDE

ジリジリジリジリジリ！

けたたましい目覚ましの音で目が覚める。

「ほわあ~~~~」

欠伸を手で押さえながら周りを見渡す。
そこはいつもと変わらない僕の部屋だ。
確か昨日は……

「くっ!？」

突然頭痛におそわれる。

頭に手を当てるが、目立った外傷はなさそうだ。

痛む頭を押さえながらも普段着に着替える。

ピンポン

こんな早朝からチャイムの音になる。
玄関に向かい、扉を開ける。

「おはようございます明久君」

なぜだか姫路さんがいた。

しかも文月学園の制服を着て、鞆まで持っている。

「おはよう姫路さん。こんな朝早くなんの用かな？」

制服を着ながら遊びに来たわけでもないだろうし……

「明久君、今日から学校ですよ」

「えっ？」

姫路さんの言葉に固まる。

今日から学校だって？

そんなバカな。

だって昨日は……

「つつ！」

またさっきの頭痛だ。

「あつ、明久君大丈夫ですか!？」

姫路さんがうずくまる僕に駆け寄ってくる。

「だっ、大丈夫だからし……んぱ——」

薄れゆく意識の中、姫路さんが僕を呼ぶ声が聞こえる。
この感じ、前にも……

「うつ……」

目が覚める。

「もう大丈夫ですか？」

姫路さんが僕を覗き込むようにたずねる。
「どうやら、僕の家の間で居るらしい。
ご丁寧にも布団に寝かせてもらっている。」

「うん、突然倒れちゃってごめん……」

まだ少し頭が痛むが、起き上がる。

「まだ起き上がったなら危ないですよ。ゆっくりしててください」

姫路さんが僕を布団に押し返すように、両手でゆっくりと押す。
すると不思議な事に残っていた頭痛がきれいさっぱりなくなってしまったのだ。

「姫路さん、本当にもう大丈夫だって」

「本当ですか？」

姫路さんの疑問に首を縦に振る。

「それより、今日から学校って本当？」

姫路さんが嘘をついているとは思えにくいけど、一応聞いてみる。

「……はい」

一瞬、姫路さんの顔に陰が落ちたのは僕の気のせいだろうか？
それにしても今日から学校だなんて。

まだ、春休みはなにもやっていない気がする。

「きつと明久君は疲れてるから、勘違いしたんですね」

「そうだよね、ハハハ」

そうだ、春休みがまるごとなくなるなんて事がある訳ないじゃないか。

「じゃあ、制服に着替えてくるね」

立ち上がろうとする僕の手を姫路さんがつかむ。

「……制服はここにあります」

そう言って姫路さんは鞆から、新品の制服を取り出す。
もちろん文月学園の男子用の物だ。

「これって新品だよね？」

「その……明久君は坂本君とふざけてて制服を破っちゃったじゃないですか」

そうだったのだろうか？

雄二と取っ組み合いをして

制服を破ったなんてことはなかったと思ったけどなあ……

そう思いながらも制服に着替える。

当然だけど、姫路さんのいない僕の部屋でだ。

桜が舞い散る中、僕と姫路さんは走っていた。

僕が気絶していた時間が思った以上に長く、遅刻寸前なのだ。

僕ならまだしも、姫路さんが僕のせいで遅刻になるのは、なんともいたたまれない。

角を曲がると、前方には校舎と鉄人が見える。

「吉井に姫路遅い、いやおまえらはしょうがないか……」

珍しく鉄人が遅刻寸前を許してくれた。

てつきり、重い拳でもくらうかと思ったのになあ……

「これが二人のクラスだ」

鉄人から僕と姫路さんに一通ずつ封筒が渡される。

吉井明久 Fクラス

姫路瑞希 Fクラス

姫路さんは途中退室で0点だから仕方ないし、僕の方は言わずもだろつ。

そういえば、あの日はどうやって帰ったんだっけ……？

疑問を持ちながらも僕の学校生活が再び幕をあけた。

第1問 頭痛と記憶となくなった春休み（後書き）

正体不明の頭痛に悩まされる明久。

そしてなにかを知っている瑞希。

次回、明久の身に起こったことを知るもう一人の人物が！？

第2問 あの日あったこと（前書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます

第2問 あの日あったこと

バカテスト1

問題 ○月○日で○の中に同じ数字が入り、特別な日を3つ答えなさい

姫路瑞希の答え

1月1日 正月・7月7日 七夕・11月11日 世界平和記念日

先生から

正解です。ちなみに奇数の月はすべて用意されているので調べてみてください。

吉井明久の答え

5月5日 姫路さんの誕生日

先生から

確かに特別な日ですが、一般的なものにしてください

「さっさと席につけウジ虫！」

これが僕の教室でかけられた第一声だった。
僕はともかく姫路さんをウジ虫扱いしたのは誰だか確かめるため、
声がした教卓に目を向ける。

そこには、よく学校に入れたなと思うほどに赤い髪に鍛えられた身体、そして僕よりも背丈が高い

「やあ、不細工おはよ」

不細工こと、雄二がいた。

こいつは一年の時からのお友で、小学生時代は神童とまで呼ばれていたらしい。

まあ、結局は『元』神童な訳で、今は学力最低のFクラスの仲間だ。

「ところで雄二、一つ聞きたいんだけど？」

「なんだ、俺が教卓にいる理由か？」

「うっん、違うんだ」

笑顔で雄二の前まで行く。

「だあれがウジ虫だ!!」

姫路さんの分も合わせておもいつきり雄二を左手で殴る。
しかし、僕の拳は簡単に止められてしまった。
しかも、止められた拳はびくともしない。

おかしい……

確かに雄二は力が強いけど、こんなに簡単にパンチを止められるほどではない筈なのに……

それとも、僕の力が弱くなったのか……？

「明久、そろそろ先生が来るから席につけ」

雄二が僕の手を離す。

それと同時に教室のドアが開き、幸薄そうな先生が入ってきた。

「では、各々好きな席に着いてください」

先生の支持を受け、僕は雄二と姫路さんの間の席に着く。

しかし、これが本当に教室かと思えるくらいに酷い設備だった。

机はなく、ちゃぶ台に使い古した座布団。

すきま風が入ってくる窓。

更にどこからともなく漂うカビ臭い匂い。

「先生、僕の座布団に綿が入ってませーん」

一人の生徒が抗議する。

「我慢してください」

ひどいな、おい……

「先生、すきま風が寒いんですが？」

また別の生徒が抗議する。

「心頭滅すれば火もまた涼し」

いや火もまた涼しじゃないよ、寒いって言ってんでしょ……

しかも先生のアゴが一瞬、しゃくれた気がするののは気のせいだろうか？

ため息をつきながら机に突っ伏す。

バギッ！！

豪快な音と共に、僕のちゃぶ台が真っ二つに割れた。

「先生、僕のちゃぶ台が無惨な姿なんですけど？」

無理と分かっているながらも、抗議はしてみる。

「これをどうぞ」

先生が何かが入った袋を教卓から取り出す。

よかった、さすがにちゃぶ台くらいは面倒みてくれるのか

先生から袋を受け取り、中身を確認する。

その中には——金槌と釘、更にちゃぶ台の設計書が入っていた……

「技術室で新しいちゃぶ台を作ってきてください」

文月学園は想像以上に厳しい場所でした……

NO SIDE

明久が教室を出た後、すぐに教卓まで破損したため、福原先生も用務室へ出ていった。

それを見計らったように雄二が前へ出る。

「みんなに話しておくことがある！」

よく通る雄二の声にみんなが前を向く。

「さつき出ていった明久だが、あいつは大変な状況にいる」

「明久になにかあったのか？」

美少女の秀吉が雄二に質問する。

「秀吉は知らないというか、俺と姫路しか知らないことだからな。姫路も前に来い」

雄二の指示を受け、瑞希も前に出る。

本来なら底辺であるFクラスに彼女がいることに教室が沸き上がる。

「みんな静かにしてくれ。確かに姫路がここにいるのは異例だが、明久の方が重大なんだ」

再び全員の注目が雄二に集まる。

「姫路、本当に話してもいいんだな？」

小声で聞く雄二に瑞希は「はい」とうなずく。

「明久は振り分け試験の日にある事故にあった。それが原因であいつの中では、毎日が振り分け試験の次の日なんだ」

「坂本、それってどういうことよ……」

ポニーテールとリボンがトレードマークの美波が悲しそうに言う。

「明久の中の記憶は振り分け試験の日までの記憶とその日の記憶しかない。」

もつと解りやすく言うなら、あいつは昨日の事は覚えていられない。永遠に振り分け試験の次の日を過ごしているんだ」

雄二の発言に再び教室が沸き上がり、様々な憶測が飛び交う。

「あいつってヤクザとかとつるんでんじゃないのか」

「もしかしたら生まれつきなんじゃねえの」

「いや、人体実験の被験者かもしれないぞ」

「明久君はそんな人じゃありません!!」

瑞希が教室中に響き渡るほど、声を張り上げて叫ぶ。

彼女からは想像もできないほどの大きな声にクラス中が静まり返る。

「おい姫路、ここは俺に——」

「明久君はそんな人なんかじゃないんです！」

瑞希は雄二の制止も聞かずに続ける。

「明久君は……明久君は私を庇って車に跳ねられたんです……」

瑞希は振り分け試験の日にあったことを話し始める。

明久が高熱を出した自分を氣遣って家まで送ろうとしてくれたこと。
車にひかれそうになったところを明久が庇ってくれたこと。

気づいたら、明久と共に病室で寝ていたこと。（偶然通りかかった
雄二が病院に連絡してくれた）

春休み中に明久と出掛けたり遊んだりしたが、どれ一つとして覚えては
いなかったこと。

瑞希が話し終える頃には、いつもの声の大きさでも教室中に聞こえる
くらいに静まり返っていた。

「明久ってやつ大変なんだな」

「ああ、本人がいないとしてもあんなこと言っちゃって悪かったよ
な」

「悪いやつどころか、いいやつだよな」

「あつ、俺もそれ思った」

「だよな、咄嗟に自分を犠牲になんかできるもんじゃねえし」

クラス中の反応がさつきとは真逆になっていた。

「みんな最後に聞いてくれ！」

当然だが、明久はこの事を知らない。いや正確に言えば知っても忘れてしまうわけだ。

ただ、この事を明久に言わないでほしい。

これは医者から言われたことなんだが、今の明久は一日分以上の事を覚えようとすると危険な状況らしい。だから下手に考え込むような、こういう話はしないでほしいんだ。当然、勘づかれないように自然体で接してやってくれ」

雄二の呼び掛けにクラス中がうなずく。

「じゃあ、そろそろあいつも戻ってくる頃だろうし、自己紹介といくか。右端から順番にだ」

こうしてクラス中に吉井明久がどういう人間なのか認知された。ただ、物事はいつも余計なものをつけてくるわけで……

（クククッ、いい事を聞いたぞ）

第2問 あの日あったこと（後書き）

その日の記憶を引き継がない明久。

それは彼にとってどう働くのか！？

よろしかったら感想、評価などお願いします

第3問 戦力はいかほどに？（前書き）

感想くださった方、評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方、そして読んでくださる読者の方々ありがとうございます。

今回は秀吉は他に類を見ないほど壊れてますので、原作の秀吉じやなきやダメだという方はお気をつけください

第3問 戦力はいかほどに？

明久SIDE

僕が新しいちゃぶ台を持ってFクラスに戻った頃には自己紹介が始まっていた。

「おお、明久か。さつさと席につけ」

ちゃぶ台を雄二と姫路さんの間に置き、そこにつく。

「自己紹介が始まったばかりで良かったですね」

笑いかけてくれる姫路さんの笑顔が今日もまぶしい。

おそらくこの笑顔だけで一食（水道水）抜きにしてもやってくれるだろう。

「意外に早く終わって良かったよ。なんなら今度、姫路さんの分も作ってあげようか？」

「なら、一緒に……いえ、やっぱりやめておきます」（約束しても明久君は覚えておくことができますから……）

伏し目がちになる姫路さん。もしかして僕に悪いと思っているのだろうか？

「遠慮しなくても作っておいてあげるからさ」

半ば強引に約束を取り付ける。

「なら……お願いしてもいいですか？」

遠慮がちに、でもどこことなく期待の眼差しで僕を見ている気がする。

「うん。っと、そろそろ秀吉の番だね」

姫路さんとの約束を取り付けて前に向き直ると、ちょうど秀吉が立ち上がるところだった。

「木下秀吉じゃ。みな、よしなにじゃ」

戸籍上男である美少女、秀吉の笑顔は今日も可愛かった。

本人は男だって言い張っているけど、じきに胸も成長してくるに違いない……

「……土屋康太」

名前だけの自己紹介はムツツリー二のあだ名で通っているプロの力メラマンだ。

別に本業な訳ではないけど、色々とプロ顔負けの腕前なのだ。ただ、彼の名誉のために内容は伏せておこう。

それからしばらく関わり合いのなかった人の自己紹介が続く。

その後、ポニーテールと大きなリボンがトレードマークの帰国子女の島田さんの番になる。

「趣味は吉井明久を「島田！」」

雄二が突然島田さんに叫ぶ。

なにがあつたんだろうか？

なんか不吉な事を言おうとしてたみたいだから、一応雄二に感謝しておこう。

「わっ、わかつてるわよ……」

島田美波です。ドイツ育ちだったので難しい日本語は解りませんがよろしく願います」

島田さんがお辞儀をする。

この男ばかりのFクラスで姫路さんと秀吉と並ぶ清涼剤だけあつて男子たちがあれやこれやと言ひ合つてる。

「ドイツ帰りつてことは帰国子女じゃね!？」

「つて事はお嬢様なのか!？」

「いや、お嬢様ポジションは姫路さんだろ」

「だな。ということはひんny腕はそっちにまがああ!!」

この喧騒の中、島田さんが的確に言つた犯人を見つけて間接技を決めている。

僕も下手な事は言わないようにしよう……

「貧乳最高なのじゃ」

つて誰だ!?!この騒ぎの中、こんなことを言えるやつは!?!

……つて、『じゃ』?!

ありえないとは思いつつも秀吉の方を見る。

そこには島田さんに折檻されている哀れな秀吉の姿が……

いくら普段から自分が男だと訴えていても、このタイミングでその男らしさはどうかと思う……

そんな秀吉に呆れていると僕の番がやってきた。

クラスに馴染むためにも第一印象は大切だね

「吉井明久といいます。気軽にダーリンって呼んでくださいね」

「……ダーリン……!」「……」

予想以上にノリがよかった……

「おいダーリン、さっさと座れ」

しかも、雄二までもダーリンと呼ばれる始末だ……

僕がへこたれるように座ると、隣の姫路さんが困ったような顔で聞いてきた。

「明久君はダーリンって呼ばれたいんですか?」

「姫路さん、あれは冗談だからね……」

できれば本気にしないでほしいよ……」

僕の訴えに姫路さんはホッとしたらしく立ち上がる。

「姫路瑞希といいます。みなさんよろしくお願いいたしますね」

ペコリと頭を下げる仕草がなんとも言えない可愛らしさをもしだしている。

当然Fクラスの野郎共も大はしゃぎな訳で――

「やっぱりいかにもなお嬢様だよな」

「正に才女って感じだな」

「わしは貧乳派じゃ」

「姫路さんさえいれば何もいらない」

とりあえず最後のやつは探し出す必要があるな。

あと、再度島田さんに折檻されている秀吉は助けなくていい気がしてきた。

「ゴホッゴホ……」

自己紹介を終えて座った姫路さんが咳き込みながら席につく。

本来ならAクラスにいるはずの姫路さんがこの劣悪な環境にいるのはしのびない。

なにより体の弱い姫路さんにこの環境は過酷だろう。

「雄二、ちょっと廊下までいいかな？」

立ち上がり、隣の雄二の肩に手を置く。

「ああ、かまわない」

僕たち2人は廊下に出ていった。

「で、姫路のために試召戦争を仕掛けたいんだろ？」

「なんで分かってるの……」

なぜだか僕が一言目を発する前から言いたいことがバレていた。しかも、オブラートに隠して言うつもりだったのに、ご丁寧にも本心の部分を言われてしまった……

「お前はわかりやすいんだよ。まあちょうどいい。俺も試召戦争を仕掛けようと思っていたからな」

「えっ、雄二も!？」

まずい、これは僕へのライバル宣言か……？

「ああ、世の中学力が全てじゃないってことを証明したくてな」

「うん、なら頑張ろうよ」

少なからず、今のところはライバルではないみたいだ……

「「打倒Aクラス!」」

お互いの拳をグーで殴り合い、笑う。

「坂本君となにを話していたんですか？」

「ちよとこれからの計画をね」

曖昧にごまかし席につく。

僕たちが戻ってきた頃には雄二を抜く自己紹介が最後だった。

雄二は教壇に上がり、一度クラスを見回してから声を張り上げる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は坂本なり代表なり好きに呼んでくれて構わない」

雄二が一呼吸いれる。

「みんなこの設備に不満はないかあ！！」

「おおありじゃー！！」

クラス内の上々の反応を見て雄二がうなずく。

「俺も不満がある。だからAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う
！」

「バカな、そんなことができるわけがない」

「そうだ、俺たちがAクラスに勝つなんてことなんか夢のまたその
また夢だ」

早くも諦めムードが漂い始める。だが、ここで諦めてしまわれると
僕にとってもつらい。

「みんな諦めるのはまだ早いじゃないか！」

立ち上がって叫ぶ。

「おつ、吉井がやる気らしいぞ」

「なら俺たちだってもたもたしてられないな」

「だよな。吉井が言うなら頑張ってみるか」

意外なほど、僕の発言に影響力があつた……

「ああ、明久の言う通り諦めるのは早い。それに俺たちのクラスは勝てる理由がある」

「なに、そんな凄いやつがいるのか!？」

「おい康太、姫路のスカートの中を覗いてないでこっちに来い！」

「……!?(ブンブン)」

「ふえ!？」

あわててスカートの裾をおさえる姫路さんと、畳の痕を頬に残しながらも否定するムツツリーニ。

とりあえず、あとで撮れた写真を見せてもらおう。

「こいつがかの有名な寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

ムツツリー二。

それは親しい仲では普通に呼ばれている名だが、一般的には男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑をもってあげられる名だ。

「あいつがあのもツツリー二なのか!？」

「だが、そんな大物がこんな一般の場にいるはずがない」

「でもあのあからさまな証拠をあげられても否定する様は正にムツツリー二だ」

なぜだかムツツリー二が凄く偉大な人物へと昇華されていた……

「木下秀吉だっている」

秀吉はその演技力をもってしてでの評価だろう。

本来なら美少女としても活躍できたかもしれないけど、さっきのあれを見た後だとさすがに女の子として扱うのはひけてくる……

「そしてなにより姫路瑞希だ。みんなだって姫路の実力は知ってるはずだ」

確かにFクラスという立場上、僕たちの点数は総じて低いものだ。その中でAクラスでも上位の上位にくい込む姫路さんをどう配置するかで勝敗は大きく変わってくるだろう。

「俺や明久だってがんばる」

なんで僕の名前をだs「たしかにな」

えっ？

「ああ、吉井や坂本ならやってくれそうだな」

「そういえば坂本は小学生時代神童と呼ばれてたんだな」

「なおさら心強いじゃないか」

「俺たちはなにがあっても坂本と吉井についてくぜ！」

意外なほどに僕の評判はよかった……

「よし、まずはDクラスから征服だ！！」

「」「」
「おおー！！」「」

「全員筆を執れ！出撃の準備だ！！」

かくして僕たちの初めての試召戦争が始まった。

第3問 戦力はいかほどに？（後書き）

まず最初に秀吉ファンの方すいませんでした。

普段から「わしは男じゃ」と言っているので男らしくしようとしたら、間違った意味で男らしくなってしまうました。
重ね重ねすいませんでした！

そして次回からついに試召戦争！

更には。。。のお弁当が……

第4問 春休みは花嫁修行！？（前書き）

原作と比べると早いですが、今回は姫路さんのお弁当の話です。
では、お楽しみください

第4問 春休みは花嫁修行！？

Dクラスとの鬪いを午後控えた僕たちは昼食をとるため、屋上に来ていた。

ちなみにDクラスへの戦線布告は姫路さんを除いた、いつものメンバーで行ったためか特に酷いめにあわずにすんでいる。しかし僕は屋上に来て、やっと気づいたことがあった。

お弁当を持ってきてない……

今日は朝から色々あったし、なにより今日から学校だということを忘れていた僕がお弁当を用意しているわけがない。

どうしようか焦っていると、姫路さんが可愛いピンクの布に包まれた長方形の箱を差し出してきた。

「姫路さん？」

「明久君、よかったらお弁当食べます？」

若干うつむき加減で姫路さんが聞いてくる。

視線を一度、包みから姫路さんの方に戻すと、そこには姫路さん自身の物とおぼしき弁当箱がある。

ということは――

「もしかして僕のために作ってきてくれたの？」

「その……明久君が学校のこと忘れてると思って……」

迷惑だったでしょうか……？」

「そんなことないよ。ありがとう姫路さん」

「（意外に瑞希って積極的ね）」

「ん？島田さんなに？」

「別になんでもないわよ！」

僕は姫路さんの手から弁当箱を受けとり、フタを開ける。

そこには色艶やかな白米、定番のだし巻き玉子、サクッと揚げたエビフライ、隅に盛り付けられているポテトサラダ等の魅惑的なものがきちんと並べられていた。

「うまそうだな、貰うぞ」

「……同じく」

「わしもじゃ」

いつの間にか隣に来ていた三人がお弁当をつまみ食いしてしまった。

「……モグモグ、この程よい食感に、いい味配分、うまい（のじゃ）！」

三人の口から全く同じ言葉がでる。

そんなに美味しいのかと思い、僕もエビフライをつまむ。

エビフライは口に入れた瞬間、香ばしい匂いを発し、噛む度に衣のサクツとした感じがたまらなかった。

「うまい！」

あまりの美味しさに思わず大声をあげてしまった。

「ウチもちよつといいかしら？」

「はい島田さん」

島田さんの方に弁当箱を差し出す。

「モグモグ、本当にすごい美味しいわ！」

島田さんも美味しそうに食べている。

さすがにこれ以上あげると、僕自身の取り分が無くなってしまふので弁当箱を引き寄せ食べ始める。

「うん、姫路さんって料理上手だね」

「みなさんのお口にあつたようで良かったです」

「これくらい美味しいと姫路さんと結婚する人は幸せだろうなあ…」

…」

「ふえ！？えつと……明久君はその方がいいんですか…」

「うん、結婚する人は料理ができた方がいいからね」

なぜだか姫路さんの顔が赤い。

もしかして、また体調を崩したんだろうか？

「姫路さん大丈夫？」

また体調を悪くしたらなら保健室まで連れてくよ？」

「いつ、いえ私は大丈夫ですから心配はいりませんよ……」

そう言うところ姫路さんは、さっきよりもうつむいてしまった。

雄二SIDE

「（ねえ坂本、なんで瑞希はあんなに料理が上手なの？）」

明久お得意の天然タラシスキルを発揮している間に俺の方に小声でたずねてきた。

「（驚くかもしれないけど、春休み前のあいつの料理は食べたもんじゃなかったんだぞ）」

「（うそ！？あんなに美味しい料理つくるのに！？）」

「（ああ、というか初めて食ったときは冗談抜きで失神したからな）」

俺は島田に姫路の料理について話し始める。

「（明久が事故にあって退院したのは、事故にあった翌日だった。俺と姫路は事故日当日に担当医師から明久の記憶障害について聞か

されたんだ。

当然、姫路は明久の世話をしようと春休み当日から身の回りの事をやっていた。もちろん、明久には色々と理由をつけてな。

それで当日は俺も手伝うことになって、いざ昼飯って時に姫路が用意してくれたんだ。

一応病人である明久に一番最初に食べさせるのは悪いと思い、一口味見したところで俺は意識を失ったんだ。

意識が戻った俺は、これからの明久のためにも姫路に正直に話した。そして改善策として俺の幼なじみの翔子、要するにAクラスの霧島を呼んで姫路に料理を教えてもらった。

姫路も本当ならAクラスだったって事もあってか二人はすぐに打ち解けて、次の日には姫路の料理が食えるものになっていた。

それ以降は翔子も教えてないって言うから、単純に姫路の頑張りだろうな。

ただ正直、ここまで上手くなってたなんて驚きだけだな」

「（そんなことがあったの……）」（いくら吉井の記憶が一日でリセットされるとしてもウチはどれだけ出遅れてたんだろう……）」

見え見えの島田の表情に思わず苦笑してしまう。

「（まっ、明久たちも話し終わったようだからシャキとしろ）」

「（別に落ち込んでなんかいないわよ!）」

耳元で小さいながらも耳に響く声を出されて、思わず耳を塞ぐ。

「そっいえばなぜDクラスからなのじゃ?」

ちょうどいい所に秀吉からの質問が入った。

明久たちもちょうど話し終わったみたいだから、この話題を昼飯の肴とするとするか。

明久SIDE

午後になり試召戦争が始まるまで残り数分だ。
昼飯の時に雄二から聞かされた計画には正に神童と感じさせるものがあり、少し見直したりもした。

「明久、お前は絶対に持ち場を離れるなよ」

「はあ、教室で雄二の護衛だなんて地味だね」

「まあ、そんなにしょげるな」

そう、僕の役目は教室で雄二の護衛らしい。
まあ、最終的には回復試験を受けている姫路さんが来るまでの時間稼ぎな訳だけどね。

「お前がしつかりやらなきゃ、姫路にAクラスの設備を使わせてやれないだろ？」

「確かにそうだね。よし、俄然やる気が出てきたよ！」

カチッ！

時計が1時を示す。

それはDクラスとの試召戦争の開始時刻だ。

「「「「いくぞおお!!」「」「」

Fクラスのみんなが意気込む。

この勝負、絶対に負けられない。

頑張ってくれるみんなのためにも、姫路さんのためにも!

第4問 春休みは花嫁修行！？（後書き）

春休み間の修行により瑞希の料理は絶品に。

次回こそは前回やるといつてやらなかったDクラス戦をやりま
すので、よろしくお願いします

第5問 格上の相手は油断する？（前書き）

お気に入り登録数が10を突破しました！
ご愛読ありがとうございます！

第5問 格上の相手は油断する？

「いよいよ始まったね」

「ああ、こういうのは最初が肝心だからな」

僕と雄二はムツツリー二のビデオカメラで戦況を見ている。

「最前線部隊が衝突するぞ！」

見ると島田さん率いる最前線部隊がDクラスの最前線舞台と衝突していた。

N O S I D E

「島田美波、行きます！試験召喚獣、サモン！」

Fクラス 島田美波 数学112点

青い軍服にサーベルをもった美波の召喚獣が現れる。

「木下秀吉、参るのじゃ！サモン！」

Fクラス 木下秀吉 数学32点

白い袴に薙刀をもった秀吉の召喚獣が現れる。

「須川亮、行くぜ！サモン！」

Fクラス 須川亮 数学28点

柔道着に棍のようなものを持った須川の召喚が現れる。

「一人高いやつがいるが、それ以外は雑魚だな。サモン！」

Dクラス 鈴木一郎 数学78点

「二人でやればなんとかなるだろう。サモン！」

Dクラス 山田太郎 数学82点

両者の召喚獣が出揃い睨みあう。

「行くわよ！！！」

「いざ勝負じゃー！！！」

「いくぜー！！！」

先に動いたのはFクラスの方だった。

狙いは全員、鈴木だ。

なるべく多人数で一人を倒すようにとの雄二からの命令なのだ。

「くっ、山田！」

鈴木が秀吉と須川の攻撃を押さえながら叫ぶ。

「わかってるって！」

山田の召喚獣が鈴木への援護に向かうとするが、その進路は美波の召喚獣により塞がれてしまう。

「ここから先は行かせないんだから！」

「うっ……」

美波個人と山田個人では戦力差は歴然だ。

うまく立ち回れば山田の勝利もありえるが、それは召喚獣の扱いに慣れていればの話であって、単純な動きしかできない両者ではほぼ勝ち目はないだろう。

そして鈴木は点数は秀吉と須川の合計点より勝っているが、手数の問題なのか苦戦を強いられている。

この勝負、今のところはFクラスが有利だ。

明久SIDE

「なんとかなりそうだね」

「いや、そうもいかないらしいぞ」

「えっ？」

「くつ、まずいぞ五十嵐先生と布施先生を呼ばれた！Dクラスは科学で勝負する気だ！！」

廊下から誰かが叫んでいる。

「ほらな」

雄二は初めからこの状況を予想していたのか、随分と余裕そうだ。

「戦死者は補習！！！」

鉄人の声が響き渡る。

「嫌だ！！あんな拷問は耐えられない助けてくれー！！」

「拷問？違うな、趣味は勉強、尊敬する人物は二ノ宮金次郎という立派な生徒に仕立てあげるための教育的指導だ！」

一つの部屋に大量の人を監禁するのが拷問じゃなければ、いったいなんと言っのだろうか？

残念ながら僕はその問いに対する答えを持ってはいない。

「雄二、当然作戦があるんだよね？」

むしろないと補習室送りだ。それだけはなんとしても避けなければならない。

「ない！」

雄二の無情な言葉が教室に木霊する。

「どうするんだよバカ雄二！このままじゃ補習室送りじゃないか！」

「心配するな。いくら科目が科学に変わったとしても、すぐに戦況は変わりはない」

「そうか、そうだね。それよりも僕たちは戦況の把握の方が」
そこにいらっしやるのは美波お姉さまではありませんか！」

「うっ、美春！？」

ビデオカメラに島田さんの方を色々と危ない目で見ているグルグルドリルの髪型の女の子が映る。

「お姉さま行きますわよ、サモン！」

Dクラス 清水美春 科学86点

「ああもう！サモン！」

Fクラス 島田美波 科学24点

どう考えたって島田さんが負けるだろう。

そう考えている内に決着がついてしまった。

もちろん、島田さんの敗北というかたちで……

「ああ雄二どうするんだよ！」

もう僕らのクラスはほとんど残ってないんだよ！」

「ぐわあああ！」

「うわあああ！」

「不覚！」

「ドジっちまったな……」

次々と廊下から聞こえてくる悲鳴。途中、明らかに僕らのクラスじゃない人が入っていた気がするが気のせいだという事にしておこう。

ガラガラ

教室の扉が開き、Dクラス代表の平賀君と数人の取り巻きがやって来た。

「代表自ら討伐とはご苦労だな」

「そっちこそ取り巻きが一人で大丈夫なのか？」

「問題ない。なぜならこいつは観察処分者だからな！」

僕の方を指さす雄二。

「バカな、観察処分者だど！？」

「文月学園始まって以来の初である観察処分者だというのか！？」

「この学園でたった一人という観察処分者だなんて……」

「……要するに雑魚だな」「……」

Dクラス一同が口を揃えて言う。

「そんなに言うならやってやろうじゃないか！サモン！」

平賀君個人に恨みはないが、平賀君を指さす。

「なら一騎討ちといこうか、サモン！」

僕と平賀君の召喚獣が対峙する。

Fクラス 吉井明久 科学33点

Dクラス 平賀源二 科学134点

「いくぞー!!」

平賀君の召喚獣が先に動き、僕の方に向かってくる。

普通このままでは僕の負けは決定しているが、それは召喚獣の扱いに慣れていないならの話だ。

「よつと」

木刀で相手の足を払いコケさせると共に木刀で叩きつける。

平賀源二 科学108

「なに!?!」

平賀君は格下の相手に点数を減らさせたことに動揺しているらしい。

「まだまだあ！」

体勢を立て直される前にもう一発きめる。

平賀源二 科学94点

「くそっ！」

「平賀、援護いれるか!？」

「いや、一騎討ちでやるって言っただから一騎討ちでやるぞ」

平賀君にもプライドがあるらしく、仲間の援護を拒む。

「そつまぐれが続くと思うな！」

再度、平賀君が向かってくる。

次は右に避けてから攻撃かな

そう考え、右に避けようとするが、なんと召喚獣は僕の意味とは反対に左に避ける。

「えっ!？」

「もらったあああ！」

召喚獣があらぬ方向に避けてしまったために反応が遅れ、平賀君の攻撃がヒットする。

「くっ……」

吉井明久 科学3点

なんとか直撃は避け、戦死は免れたものも、観察処分者に付与されるフィードバック機能により全身に痛みがはしる。

「吉井君チェックメイト」「いいや平賀、お前らがチェックメイトだ！」

「なに!?!」

雄二の発言にDクラス一同の注目が集まる。
その瞬間、教室の扉が開き――

「姫路瑞希、行きます!サモン!」

Fクラス 姫路瑞希 科学396点

Dクラス 平賀源二 科学93点

「えっ?」

勝負は一瞬でついた。もちろん、姫路さんの一撃でだ。

〈戦後対談〉

「はあ、まさか姫路さんがFクラスだったなんて……」

平賀君がうち萎れながら言う。

まあ、誰も姫路さんがFクラスだなんて思わないよね……

「試召戦争のルール通り教室は明け渡す。ただ、明日にしてほしい」

確かに今日は遅いし、その方がいいだろう。

「雄二、それでもいいよね」

「いや、設備の交換はしないつもりだ」

「えっ？」

雄二の言葉に耳を疑う。

「俺たちの目標はあくまでAクラスだ。極端な話、Dクラスの設備に興味はない。」

もちろん、Dクラスがある条件をのんでくれればの話だがな」

「条件は？」

設備交換を免れるとあってか、平賀君は食いついてきた。

「それはここでは言えないから部屋を移そう」

「ああ、わかった」

第5問 格上の相手は油断する？（後書き）

うーん、ここまででは一日の出来事ですから特色が付けづらいですね。
一応、所々オリジナル要素は入れていますが……

Dクラス戦決着。

そして明久の召喚獣におとずれた不具合！？

次回もお楽しみください！

第6問 不幸の恋文（前書き）

今回は会話パートですので会話文が多めです。

第6問 不幸の恋文

〔数分後の教室〕

「みんな新学期そうそうご苦労だった。今日は遅いし、明日は回復試験があるから帰っていいぞ」

雄二の言葉にぞろぞろとFクラス生徒が帰り始める。

「そういえば雄二、Dクラスの設備を交換する代わりにだした条件ってなんだったの？」

「悪いが、それは秘密だ」

「ちえっ、雄二の意地悪」

「なんとでも言え」

悪態をつく僕に対して雄二は何食わぬ顔だ。

「明久よ、ちとこちらを手伝ってくれんかのう」

秀吉が立て付けの悪い窓を開けるのに苦戦している。換気でもするつもりだろうか？

「うん、今いくよ」

「あもう、坂本君ちよつといいですか？」

僕が秀吉の方へ行くと同時に姫路さんが雄二をつれて廊下に出ていった。

なにを話すのか気になるが、秀吉を手伝ってあげなきゃいけないから……

いや、やっぱり気になるので窓からそつと覗くことにする。

なにやら二人で話しているようだが、なにを話しているのかは聞けない。

ただ、姫路さんが恥ずかしそうにもじもじしている事だけは分かる。

どうやら雄二とはこれからについて話し合う必要があるはそうだね

「覗きとはお主も趣味が悪いのう」

いつの間にか隣にいた秀吉が僕に言う。

ただ、自己紹介の時に地雷を踏みまくってた秀吉には言われたくない。

「……覗きは犯罪」

一番言われたくない人物こと、ムツッリーニに言われてしまった。

確かに正論だが、ムツッリーニに言われると癪にさわる。

「さあ、吉井に木下、土屋も覗きなんてしてないで換気を手伝って」

島田さんの言葉に僕たちは渋々と窓を開けに行く。

雄二SIDE

「ああ、俺もともと興味があつたんだがきつかけはあいつの一言だ」

「じゃあ明久君は……」

目の前の姫路が嬉しそうだが恥ずかしそうな顔をしている。

「さあな。振り分け試験でなんかあつたみたいで、それで譲れないもんでもあつたんだろ？」

からかうように姫路に笑いかける。

「振り分け試験ってことは……」

「俺はこれ以上言えないが、姫路の想像は大方間違っていないと思うぞ」

そう、いくら記憶を失おうとも、何度記憶を失おうともあいつの想いは変わることはない。

きつと、全てを忘れようとも変わることはない。あのまっすぐな気持ちも想いも全て。

俺は無条件にそう信じれた。

明久SIDE

「雄二、姫路さんとなに話してたのさ」

帰り道、隣を歩く雄二に放課後の事をたずねる。

「ああ、誰かさんの誰かさんのこれからについてだ」

どうやらこいつは本格的に僕の敵に成り下がったようだ。

「雄二、僕も雄二と話したい事があるんだ」

「俺は構わないが明久、お前は鞆どこに忘れてきた？」

「えっ？」

見ると手に持っていると思っていた鞆がない。

「教科書を忘れるならまだしも、普通鞆を忘れるか？」

「おかしいなあ、なんの違和感もなかったよ」

「それはお前が普段から空同然の鞆しか持っていないからだろ」

言い返したいが、凶星すぎてなにも言えない……

「まあいい。明日はBクラス戦なんだから、今から学校戻って取ってこい」

「うん、わかったよ」

はなっから雄二が付き合ってくれないのは分かっているのでひき止めたりはせず、学校に向かって走る。

ガラッガラガラ

2 - F の立て付けの悪い扉を開ける。

あれ姫路さんだ。どうしたんだろう？

自分のちゃぶ台に座り、何かを書いている姫路さんに近づく。

「姫路さん、なにしてるの？」

「ふえ！？わわっ！？あつ、明久君！？」

姫路さんの驚きと共に何かを書いていた紙が、僕の前に舞い落ちる。

『あなたのことが好きです』

そんな一文が目に入る。

「明久君、それはそのう……」

それを拾いあげ、姫路さんに手渡す。

「変わった不幸の手紙だね」

『こいつ認めない気だ！？』

黙れ、僕の中の悪魔！

「明久君、それはすごく困る勘違いなんですけど……」

「今度僕が正しい不幸の手紙の書き方教えてあげるよ」

『そんなもん知らないだろ！』

いいや、今なら雄二に対して幾万通りもの不幸の手紙をだせる自信があるよ。

「そのう、不幸の手紙じゃないんですけど……」

「嘘だ！現に僕はこんなにも不幸な気持ちになってるじゃないか！」

『いい加減認めろよ』

「違っんです」

姫路さんが優しく僕の手を掴む。まずい、これは非常にまずい……
なんとかして話題を繋がないければ……

「相手は同じクラスなの？」

「はい……」

姫路さんが恥ずかしそうに言う。

『雄二も同じクラスだしな』

いちいち追い討ちをかけないでよ！

「そいつのどこがいいの？外見なんて良くもないし」

『自分の事を棚にあげるなよ』

「いえ外見じゃなくて、もちろん外見も好きですよ」

『諦める、これはマジだ』

諦めたら、そこで試合終了だろ！？

「まさか中身も？」

「はい……」

「確かに肝臓とか強そうだけど、頭の中身は軽そうだよ？」

『今のお前なら現実逃避大会でギネスとれるよ』

そんな不名誉なギネスなんかいらないよ！

「それは体と頭の話なんですけど……」

「まさか性格も？」

「はい、優しくていつも明るくて元気です」と私の憧れだったんです」

「そう……その手紙……」

「はいつ!？」

ここは素直に応援してあげよう。

「その手紙うまくいくといいね」

「はいつ!」

満面の笑みの姫路さんは本当に幸せそうだった。

「その明久君、よかつたら私がこの手紙を書こうと思った理由を聞いてくれますか？」

「理由？僕なんかでよければ聞くけど」

「私、いつも一番になれないんです」

そう姫路さんが切り出す。僕からしてみれば色々と凄いつけどなあ

「なにをしても一番になれなくて、いつも誰かの力を借りているんです。

だから、だからこそ、この想いだけは誰にも負けないように一番でいたいんです。例え、それが届かないとしても、その人の記憶に残らなくても一番でいたいんです」

「姫路さん……」

僕はこんなにもまつすぐな想いにこたえる術を持ち合わせていない。

いいや、そもそも僕に向けられた想いでもないのに答えようとする
こと自体が間違えなんだ。

ただなぜだか、この言葉は僕に向けられている気がしたんだ

「帰ろうか姫路さん」

結局、僕はその想いを確かめられるほど勇氣はない。

「そうですね」

ただ近くで姫路さんが幸せならそれでよかったんだ

第6問 不幸の恋文（後書き）

ラブレターのパートを少し加筆しましたがいかがでしょうか？
そして次回から日付が変わって、いよいよ設定が活きてきます！
感想、ご意見等もいただけると嬉しいです。

では、次回もよろしく願います

第7問 記憶の欠片（前書き）

今回から日付が変わります。ただ、時間的にはほとんど進みませんが……

第7問 記憶の欠片

瑞希SIDE

「おやすみなさい明久君。 また明日、初めての二年生で……」

寝ている明久君の側から離れ、試召戦争でほつれてしまった明久君の制服を鞆にいれます。 各部屋の明かりも消して私は自分の家に帰りました。

↓次の日↓

昨日はDクラスと試召戦争をして見事、勝利を納めました。そして今は明久君の家に向かっていている訳なんです、今日はなんて言ってごまかししょうか……

でも本当に明久君に真実を伝えない事が明久君のためになるんでしょうか？

今の明久君は記憶の許容範囲が一日分しかなく、このような考え込む事を言うのはご法度だって分かっていますけど、やはりこれではない気がするんです。

そうこう悩んでいる内に明久君の家までついてしまいました。

ピンポン

「はい」

昨日と同じように私服姿の明久君が出てきます。私はあと何回この光景を繰り返し見たいんでしょうか？

ただど心中を明久君に知られる訳にはいけないので、なるべく笑顔で接します。

「明久君、おはようございます」

昨日と同じように明久君は呆けています。だから私も昨日と同じ言葉をかけることにします。

「明久君、今日から学校ですよ」

「えっ？」

明久君が驚きと共に少し考え始めます。

「つつ！」

昨日と同じように明久君は頭を押さえてうずくまりだします。

「あつ、明久君大丈夫ですか！？」

私は明久君に駆け寄り首を抱えあげます。

「だつ、大丈夫だからし……んぱ——」

「明久君！明久君！」

気を失った明久君を揺さぶりますが、起きる気配がありません。やっぱり昨日となにも変わらず……

「うつ……」

居間に布団をしき寝かせていた明久君が目を覚ましたようです。

「明久君、大丈夫ですか？」

「うん、もう平気だよ」

そう言っただけで無理に起き上がろうとする明久君を両手でそっと押し返します。

「まだ起き上がったなら危ないですから、ゆっくりしててください」

「本当にもう大丈夫だって」

そう言っただけで再度起き上がった明久君の顔は確かにさっきまでの無理をしている顔ではありませんでした。あの日から明久君は度々、頭痛で苦しむ事がありますけど原因は分らずじまいです。

「それより今日から学校って本当？」

「正確には昨日からなんですけど、明久君は停学処分を受けていましたから今日からなんですよ」

とつさに嘘をつく。昨日と同じ嘘をついてもよかったんですが、それでは試召戦争の事を説明しづらくなっちゃいますから……

「そうだったかなあ……？」

「きっと明久君は疲れてて覚えてないだけですよ」

「ごめんなさい明久君……」

私は明久君に何度も嘘をついています。多分、これから毎日、何回も……

「そうか、そうだね。じゃあ制服に着替えてくるよ」

立ち上がる明久君の腕を掴み、鞆から制服を取り出します。

「明久君の制服はここです」

「えっ？」

「明久君は坂本君とはしゃいで制服を破っちゃったじゃないですか」

「ごめんなさい明久君……」

本当の明久君の制服は私の家にあるんです。明久君が私を庇ってボロボロになってしまった制服が……

「ほら、早く着替えてこないと学校に遅れちゃいますよ」

「あっ、うん……」

明久君は制服を持って自分の部屋に着替えにいきました。

桜舞い散る中、私と明久君はゆっくりと登校します。昨日と違って明久君が気を失っている時間が短かったもののんびりと言っても時間に余裕がありそうです。

「そういえば姫路さんは振り分け試験の日、熱をだしちゃったからFクラスなんだよね」

「そうですね」

「ごめんね、力になれなくて」

申し訳なさそうに言う明久君は以前となんら変わりのない明久君です。そう、私の大好きな優しい明久君です。

「明久君が謝る事なんてありませんよ。それに――」

「それに？」

「明久君と同じ2年Fクラスなのは嬉しいですよ」

明久君の記憶に残らないのをいい気になって少し大胆な発言をします。

「そっか、僕もFクラスなんだ。僕も姫路さんと同じクラスで嬉しいよ」

やっぱり明久君はこういう反応なんですね。だけど、ここで気づかれるよりはいい気がします。だって、ここで想いが伝わったとしても明日になれば、またいつもの関係なんですから……

「これからたくさんの思い出をつくってきましょうね」

「うん」

記憶に残るのは私だけですけど、今一緒にいるこのときを大切にしていきたいです。できれば、ほんの一部分でも明久君の記憶に残ってくれる事を願って笑いかけます。

〈文月学園〉

学校に着くとクラスにはまだ誰もいませんでした。

「一番乗りだね」

「そうですね、一番乗りですね」

誰もいない教室で二人っきりというのは、なんだか非常に気まずい気がします。

『ピンポンパポン』

二年Fクラスの姫路瑞希さん、至急学園長室までおいでください』

校内放送での呼び出しです。

「明久君、ちょっと行ってきますね」

「あつ、うん……」

少し心配ですけど、明久君において学園長室まで向かいます。

（約30分後）

学園長先生の話は明久君の状況についてのものでした。あの事件の事は私の両親から学校には伝えてありますから、近況報告といったところでしょうか。

ガラガラ

教室に帰るとクラスの2/3くらいの生徒が来ていました。

「よお姫路、明久のやつ知らないか？」

「クラスの中にいないんですか？」

坂本に質問で返ししながらクラスを見回しますが、確かに明久君はどこにもいません。

「それがFクラスどころか、どのクラスにもおらんのじゃ」

「ほんと吉井はどこに行っちゃったのかしら」

「……危険」

木下君に美波ちゃん、土屋君も心配そうにしています。

ガラッガラガラ

「ふう、間に合った」

私の後ろの扉が開き、そこには真新しいちゃぶ台を持った明久君がいました。

「あつ、姫路さん。はい、約束してたちやぶ台」

驚きで声がでません。だって、その約束をしたのは昨日で明久君は覚えていないはずが……

「ひつ、姫路さん!？」

気づくと私は明久君に抱きつきながら泣きじゃくってました。多分、周りからは好奇の目で見られているでしょうけど、私にはこうする以外の方法がない気がしたんです。

「つぐ……あ……明久君……ぐす……」

涙が止まりません。なぜだか分かりませんが明久君は昨日の約束を覚えていて……明久君にとって存在しないはずの昨日の記憶が一部分でもあつて……

「どっ、どうしたの姫路さん!？」

明久君が驚いて離れようとするのを強く抱きつき阻止します。ここで明久君を離したら、またどこかへ行ってしまいそうで……またなにも覚えていられない明久君に戻ってしまいそうで怖かったんです……

「行かないでください……」

ただ一言、そう言うのが精一杯でした。

「大丈夫」

私の頭に優しく手がのせられます。

「大丈夫だよ姫路さん。僕はどこにも行ったりしないよ。ずっとここににいるから安心して」

「明久君……」

優しく乗せられた手につい目を細めてしまいます。明久君の記憶がなぜあるのかは分らないですし、調べる事もできません。ただ、ここに明久君が、明久君の優しい手が私のすぐそばにあるという事実が幸せです。

明久君……

もし、明久君の記憶が一生戻らないとしても、明久君と同じ時を共有できないとしても……大好きです

第7問 記憶の欠片（後書き）

なぜだか残っていた明久の記憶！？
果たして彼の身になにか！？
次回は明久視点でお楽しみください

第8問 記憶の欠片2（前書き）

PVが15000を越えました！
これからも本作をよろしく願います

第8問 記憶の欠片2

明久SIDE

何が起きているかわからない。姫路さんが放送で呼ばれて一人になってしまったから、約束してあった新しいちゃぶ台を作って持っていた。そうしたら姫路さんは僕に泣きながら抱き着いてきた。

本当に分らない事だらけだ。姫路さんを泣かしたのは僕なんだろうか？ならなぜ泣かせてしまったのか？ちゃぶ台が気に入らなかつたから？僕が妙なお節介をやいたから？それとも誰かにいじめられたとか？

どれも的外れな気がする。僕では姫路さんを泣き止ませる事はできない気がする。悔しいけど僕はどうすることもできやしない……

だけど、いつまでもこうしていたら姫路さんにあらぬ噂がたってしまう。だから姫路さんを僕から引き離そうとする。だけど姫路さんはまわした手を尚更強く握り、離そうとしてくれない。

「行かないでください……」

力なく、か細く姫路さんが呟く。それはまるで雛鳥が親鳥から離れるのを恐れるような呟き。『護ってあげたい』という気をおこせる声。それは僕の中にいる僕じゃない僕にもすみわたるような訴え。

「大丈夫」

姫路さんの頭にそつと手をおく。

「大丈夫だよ。僕はどこにも行ったりしないよ。ずっとここにいる

から安心して」

周りから好奇の目で見られるかもしれない。でもここで姫路さんを突き放してしまったら、僕は大切なものを失ってしまう気がする。それに目を細めて幸せそうにしている姫路さんをさっきの泣き顔に戻したくない。悲しくて泣いているのとは違ったようだけど、それでも泣き顔より幸せそうな顔の方がいい。それは姫路さんに限った事ではなく、誰にでも言えること。バカな僕にでも誰かを笑わす事ぐらいはできるから。それが僕にできる精一杯なんだ。

「（瑞希、みんな見てるわよ）」

「ほえ！？ほわわわ！？明久君すいません！」

何かを島田さんに耳打ちされた姫路さんが離れる。正直、ちょっとおしい気がするけど仕方ない。僕と姫路さんじゃあ不釣り合いな事は明確なんだから……

「謝ることなんてないよ。それよりもう大丈夫？」

なんで泣いてたか分からないけど、僕で力になれるならなりたいたいものだ。

「大丈夫ってなにがですか？」

「なにがって、姫路さんが泣いてたから何かあったのかと思って」

「そつ、そうでしたね。なんでもないんです。ただ、目にホコリが入っただけですから」

ホコリが入っただけであんな泣き方はしないと思うけど。やっぱり姫路さんはどこかが抜けてる気がする。

「えっ、でも「明久、人の事情に首突っ込むのは野暮ってもんだ」

事情を聞こうとする僕を雄二が制止する。確かに雄二の言う通り、人には聞かれたくない事情があるだろう。僕もあの姉の存在はみんなに知られたくはないしなあ……

「それはそうと明久よ、なぜ新しいちゃぶ台を作ってきたのじゃ？」

「ああ、これは昨日姫路さんとやkつく!？」

また今朝と同じ頭痛に襲われる。いったいなんなんだこの頭痛は!? それに昨日? 昨日は姫路さんと会ってなんかいないし……

自分で言った言葉なのになにも分らない。なんで僕はちゃぶ台を作ったんだ!? いつ姫路さんと約束したんだ!? 僕はいったいどうしちゃったんだ!? 答えのない疑問が頭の中に幾重にも渦巻く。みんなの僕を呼ぶ声がどんどん遠くなっていく。いや、僕の意識が薄れていつてるんだ……

誰かが僕のそばに駆け寄ってくる。ためだ……まぶたが重たくて開けることができない……

やわらくて、温かな手が額に重ねられる。まるで僕の頭痛を取り去ってくれるかのような。ほら、頭痛がだんだんと薄れていつて……

「治ったあああ!？」

思わず跳ね上がりながら叫んでしまう。さっきまで僕を苦しめていた頭痛はきれいさっぱりなくなっていたのだ。

「明久君、もう大丈夫なんですか？」

正座をしながら姫路さんが驚いたように言う。正座をしているところを見ると、さっきの手は恐らく姫路さんのものだろう。そういえば今朝も姫路さんが看病してくれたんだっけ。もしかしたら姫路さんは看護職が向いているのかもしれない。

「あつ、うん。もう平気だよ」

「明久が急に倒れたから心配したのじゃ」

「ほんと、どうなるかと思っただからね」

「……無事で安心」

みんなの心配してくれている言葉が胸にしみる。僕はこんなにも友達思いな人たちを友達にもてているのだから幸せ者だろう。

「姫路、少しいいか？」

「あつ、はい」

雄二が姫路さんを誘って廊下にする。いったいなんの話をするんだろう？

「吉井、窓から覗くんじゃないわよ」

なぜか島田さんにやろうとしていることがバレた。さすがに、ここで島田さんに逆らって再起不能になるのは嫌なので、おとなしく引き下がる。それに新しいちゃぶ台を姫路さんの古いちゃぶ台と交換

しなければと思い、持ち上げる。

「明久よ、もしよかったら演劇部に古いちゃぶ台をくれんかのう？」

「うーん、姫路さんも新しいちゃぶ台があればいいと思うからいいんじゃないかな？」

「恩にきるのじゃ」

秀吉の笑顔は今日もまぶしい。ただ、秀吉がいつもよりも（ムツツリー二的な意味で）男らしく思えるのは気のせいだろうか？まあ何はともあれ、古いちゃぶ台を処分する手間が省けたことは確かだ。

「そういえば吉井は試召戦争について知ってる？」

「あつ、姫路さんに聞いたから大方は知ってるよ。確か昨日、Dクラスに勝ったんだよね。ごめんね力になれなくて」

登校途中に姫路さんに教えてもらったことを話す。あーあ、僕も試召戦争やりたかったなあ……

「明久が気にする事ないのじゃ」

「そうよ、吉井には今度の時に目一杯働いてもらうんだからね」

「……重労働」

「ははは、お手柔らかにたのむよ」

雄二SIDE

俺と姫路は教室から出て、なるべく人目につかない物陰に移動した。その方が明久や姫路のためにもなるし、なにより俺の命のためにもなる。こんな怯えながら学校生活をおくるくらいなら、春休み初日に翔子に頼るんじゃないかと今更ながら悔やむ。

「その坂本君、話というのは……？」

「分かっているとは思うが、明久の話だ」

物陰から周りを見回す。もしこの話がFクラス以外の連中にバレたら非常に危険だ。特に次の目標であるBクラスに聞かれたとあつたら、これ以上ない程のディスアドバンテージだ。どうやらHR開始前とあつてか、廊下にはだれ一人として出ていないようだ。

「あいつの記憶障害は治っていないんだよね？」

「多分、治っていないと思います。今朝行った時も、昨日と同じ反応をしてましたし……」

「そうか……」

なら、なぜ明久は姫路とのちゃぶ台の約束だけ覚えていたんだ？あいつの中で覚えていられる記憶と覚えていられない記憶があるのか？いいや違う。あいつの記憶の許容範囲はその日、一日分のみだから残るはずがないんだ。なら、どうしてだ？明久の中でなにがおこっているんだ！？

「あろう、坂本君？」

中々、次の言葉を発しない俺を不思議に思ったのか、姫路が心配そうな顔をしている。

「ああ、すまないな姫路。そういえば、春休みもあいつは頭痛に悩まされた事があつたよな？」

春休みに俺と姫路と明久でいる時にも、何度かあいつは頭痛に悩まされていたことがある。

「そうですね。原因は分からずじまいですけど……」

確かに原因は分からずじまいだ。だが、今日のあれを見て確信したことがある。

「だが、解決策がない訳じゃない」

「明久君の頭痛を治す方法があるんですか？」

「ある。それもすごく簡単な方法だ」

最初から憶測として候補にはあがっていたが、まさか本当にこれが解決策だとは思わなかった。

「その方法は姫路、お前が明久に触れることだ」

「私が明久君にですか？」

「ああ、姫路が明久に触れるだけで、明久の頭痛は治る。春休みのピクニックや山菜採りの時だってそうだっただろ？」

「あれはただ、私が看病してただけで……」

どうも姫路は明久関連の事となると卑屈になりやすい。それは明久にも言えるか。

「そんなに卑屈なるなよ。現状で明久を頭痛から解放させてやれるのは姫路しかいないんだぞ。だから頼んだからな」

「私にできるでしょうか……」

「俺や他のやつらはどうしようもないんだ。それに合理的に明久のそばにいられるぞ」

「かつ、からかわないでください！」

姫路が顔を真っ赤にしながら言う。ここまで見え見えの好意を抱いているんだから、気づいていないのは当の明久くらいだろう。いや、姫路も明久の気持ちに気づいていないんだから、お互い様ってな。

「つと、福原先生も来たことだし教室に戻るぞ」

廊下の角に担任の福原先生を見据えながら、俺と姫路は教室に戻る。

（HR終了後）

俺は今後の作戦を話すために壇上に上がる。

「みんな、昨日はDクラス戦ご苦労だった。今日の午前中で補給試験を受けて午後にBクラスと戦争だ。準備はいいかー！」

「「「「「おおー！！！！」」」」」

上々の反応だ。試召戦争では点数は重要な要素だが、ときにモチベーションの方がものを言うときがある。うちのクラスの強みは、このモチベーションの高さだろう。もちろん、設備の良いものにしたという理由もあるが、全員が明久に感化されている。

まったく、すごいやつだよ。記憶はあいつの中でリセットされ続けている。あいつの言葉や想いはみんなの中で生き、突き動かしている。明久、お前が今の状況じゃなきゃ、こういう学校生活をおくっていたんだろぅな……

「雄二、僕は補給試験やる必要がないけど、どうすればいいかな？」

「そうだな。じゃあ、みんながテスト勉強をしている間に先生を呼んできてくれ」

本当は明久も補給試験が必要なんだが、どう言いくるめるかな。

「そうだね。僕はテスト勉強の必要がないから行ってくるよ」

「いや、お前はバカだから補給試験を受ける。まあ、テスト勉強の必要はないから呼んできてはもらうが」

「まったく、人使いがあらいなあ」

文句を言いながらも先生を呼びに行ってくれるあたり、あいつの人のよさがでているのだろう。

ガラッガッガラガラ

明久が出ていったものの数秒後に扉が開く。入ってきた人物は根本恭二と数人の取り巻きだった。根本恭二とは何かと悪い噂がつきまとう人間でテストはカンニングの常習犯、喧嘩に刃物はデフォなど、とにかくいけすかないやつだ。

「Bクラスの代表がうちになんのようにだ？」

「なんの用って、宣戦布告に決まってるだろ？」

こちらを蔑んだ目で見てきやがる。つくづくいけすかない野郎だ。

「上位クラスが下位クラスと試召戦争しても意味ないだろ？」

「なら、負けたクラスは勝ったクラスの言うこと聞くというのはどうだ？」

こんな事を提案してくるなんて何か策があるに違いない。だが、策ならこちらにも用意してある。いっちょ、知恵比べといこうじゃねえか。

「わかった、そのルールでもう。こっちもちょうどお前らと戦おうと思っていたところだしな」

なにより、わざわざこちらが出向く手間が省けたというものだ。

「開始時刻はいつがいいんだ？」

「俺たちは補給試験を受けなければいけないから午後にしてくれ」

「わかった、午後だな」

根本はそう言うのを外に向ける。だが、その足が教室の敷居をまたぐ事はなく、こちらに向き直りほくそ笑む。

「言い忘れてたが、俺は吉井の秘密を握っている。吉井のやつには
らされたくなければ、俺を討たないことだな」

それだけを言い残し、根本は教室から出ていった。

俺たちは完璧なまでにはめられてしまったんだ……

第8問 記憶の欠片2（後書き）

かなり不利な幕開けとなってしまったBクラス戦。果たして打開策はあるのか！？

次回もよろしくお願いします

第9問 突破口は渦中の中心（前書き）

なかなか更新できなかったのに、その間にお気に入り登録してくださった方々どうもありがとうございます

第9問 突破口は渦中の中心

明久SIDE

「ねえ雄二、今回はやけに防御に人員をまわしすぎじゃない？」

昼食前に雄二がクラスみんなにBクラス戦の作戦を教えているところに質問する。

「いや、ほらあれだ。BクラスといえばAクラスに次ぐ強豪だろ？だから、しばらくは籠城して様子を見るんだ」

雄二にはやけにはぎれが悪い言葉を疑問に思いながらも質問を続ける。

「それにしても40人も防御にまわる必要性がないと思うんだけど？」

そう、僕たちのクラスは約50人。その内の40人も防御に割くなんて滅多にないことだ。

「それはあれですよ。その、坂本君は攻め込むタイミングを見計らってるんです」

僕の横から雄二に助け船をだしたのは姫路さんだ。

「ああ、姫路の言う通りだ。なるべく狭い通路で先見隊が粘り、隙をみて総攻撃を仕掛け根本を討つ！」

いつもなら力強く、頼もしいはずの雄二の言葉はなぜだか心細く、
なにか不安をもっているように感じた。

午後 試召戦争開始時刻

「先見隊任せたぞ！」

「『おーお！』」

僕と姫路さん、島田さんを含む10人はFクラスから飛び出した。
今の選択科目は数学だから姫路さんはもちろんのこと、島田さんも
戦力になるはずだ。

余談なのだが、お弁当はわざわざ姫路さんが作ってくれていた。
才色兼備という姫路さんのイメージ通り、彩り豊かなお弁当は美味
しさもさることながら、どこかで食べたことがあるような懐かしさ
さえ感じた。本当に前、食べたことがあるように……

「いたぞ、Bクラスだ！」

姫路さんのペースに合わせている僕たち三人よりも先行している横
溝君が叫ぶ。

前を見れば確かに3人のBクラス生徒がゆっくりと歩いてきている。
下位クラス、それも底辺のFクラス相手ならば歩いてでも充分とい
うことだろうか？

「いくぜ、サモン！」

「みせてやるぜ、サモン！」

「Fクラスだからってなめるなよ、サモン！」

横溝君、今井君、前川君の召喚獣が出揃う。

「バカは引っ込んでろよ、サモン！」

「ちっ、姫路がいるぞ！サモン！」

「なら早めに片付けて総攻撃だ、サモン！」

さすがにDクラスと試召戦争しただけのことはあつてか、姫路さんの情報は相手にも伝わっているみたいだ。

「吉井、瑞希、急ぐわよ！」

「うん！」

「はい！」

当然ながら手数が同じの場合は僕ら、Fクラスに勝ち目はないから三人を助けにいくために走り出す。

雄二SIDE

俺たちは今、Fクラスの教室内でいる。なんとかして俺の思惑通りに事が運ばいいんだけどな……

「雄二よ、少し時間をもらっていいかのう？」

「秀吉か、どうした？」

話しかけてきたのは木下秀吉。

こいつは俺の一年の頃からの友達であり、演劇部のホープ、文月学園内で多数のファンクラブをつくられるなどの様々な面があるやつだ。最近は色々な意味でFクラスに相応しくなってきた。

「疑問なのじゃが、なぜ明久を先見隊に入れたのじゃ？」

「その話は少し待て」

俺はムツツリー二に右手で合図を出す。

「……盗聴機類はない」

「ありがとなムツツリー二」

「……これくらい普通のこと」

すばやく動き報告をすませるムツツリー二。こいつはこういった類いのことをやらせたら全生命体の中でもトップクラスだろう。

「で、話に戻るわけだが、俺たちの中で根本を討つことができるのは誰だ？」

「なにを言っておる。わしらが根本を討つてしまえば、明久に秘密をばらされてしまうのじゃぞ」

「……右に同じく」

否定的な二人の顔は心から明久を心配しているものだった。

「まったく、あいつには人を惹き付けるなにかがあるんだろうな。いや、かくいう俺もその一人か……」

「いや、一人だけ根本を討つことができるやつがいる。それは——」

わざともったえぶったようにとめる。

「明久本人だ」

普段、あまり表情に出さない二人が驚いたのも無理はない。なんとって渦中の人間を使った大勝負なんだからな

「明久にできるわけが——そうか、わしらは根本を討つことができぬという枷があるが、明久にはその枷がないのじゃ！」

「ああ、あの場にいなかった明久にはその制約はない」

「……でも所詮は屁理屈」

ムツツリーニが否定的な態度をとる。普段から危機にさらされているやつだから仕方のないことだろう。

「ああ、これは屁理屈だ。だが、明久が根本にこの事を聞かされる前に討てれば、この勝負俺たちの勝ちだ」

「そして、その突破力をえることができるのは何も知らぬ明久だけということじゃな」

「その通りだ。ただ、この作戦には大きな欠点がある」

「……用意できるものなら用意する」

さつきとは違い、ムツツリー二も乗り気のような

「いや、用意するものじゃないんだ。この作戦に必要なのは明久に対する起爆剤だ。それも明久が怒り狂うほどのな」

明久SIDE

「明久君、右です！」

姫路さんの指摘をつけ、召喚獣を左に跳ばせる。僕の召喚獣が跳びさったのほぼ同時にもといいた場所に相手の槍が突き刺さる。

「あつ、ありがとう姫路さん」

「はいっ！あつ、美波ちゃん危ないです！」

姫路さんの召喚獣についている腕輪から熱線が発せられ、島田さんの召喚獣に襲いかかろうとしていたBクラス生徒の召喚獣、二匹が巻き込まれていく。

この腕輪は点数が一定以上の生徒の召喚獣に付属するらしいけど、腕輪の能力を使う度に点数が減ってしまったため何度も使えるものではない。

「瑞希、ありがとう」

「美波ちゃん、明久君、あと少しの辛抱です。頑張りましょう！」

姫路さんの言う通り、最初の三人と援軍としてやってきた十人も今は残すところ四人となっていた。

それに比べ、僕らの戦死者はたったの二人だ。これも一重に姫路さんと数学では点数の高い島田さんのおかげだろう。

ただ、姫路さんが腕輪を使ったのはさっきので三回目なのが不安ではあるんだけど……

「ウチらの力みせてやるんだから！」

「そうだね。残り四人、頑張ろう！」

雄二SIDE

「で、結局まとめると、明久を先見隊にいたのは根本を討つため。姫路と島田をいたのは明久の補助と姫路を温存して根本に警戒心を抱かせないため。」

防御要員を増やしたのは、姫路と島田に守らなきゃならない人員を減らすためだ」

秀吉とムツツリー二に説明したことを再度まとめ、説明する。

「考えあつての割り当てとは、さすが雄二じゃな」

「……策士」

「これくらいできないとクラス代表は務まらないだろ？それに俺たちの目的はAクラスだ。こんなところで立ち止まっちゃいけないんだよ」

そう、俺たちの目標はAクラスだ。いくら卑劣な手を使われようと
も立ち止まってなんかいられないんだ。

明久SIDE

「これで終わりだ！」

Bクラス最後の一人の召喚獣を木刀でなぎはらい、一時的ながらも
僕たちの勝利に終わる。

結局、損害はBクラス13人に対してFクラスは3人。上位クラス
相手には充分すぎる結果だろう。ただ――

「はぁはぁ……」

隣で辛そうにしている姫路さんに胸がいたむ。本来ならばAクラスにはいれるだけの実力があるのに、今はこんな劣悪な環境で戦いを強いられている。

それはあの日、振り分け試験の日に僕が起こしたことが原因で……

「吉井、ポケットとするな！次の部隊が来たぞ！」

はつと我にかえり、眼前を見据えると、そこには14〜16名のBクラス生徒が見える。

さつきこそちらは僅かな損害で済んだが、それは姫路さんや島田さんの助けがあつてこそだ。

島田さんは体力があるが残り点数が少ない。姫路さんにいたっては体力も点数も限界にきてしまっているという状況だ。

そしてこの状況で僕にできることは一つだけだ。みんなより三歩ほど前に出て腹に力をこめる。

「Fクラス吉井明久がBクラス全員に数学勝負を「挑みません！」ええ！？」

横から僕の晴れ舞台に飛び込んできた声に振り向くと、そこには姫路さんがいた。

「明久君はこの状況を坂本君に伝えるために戻ってください」

「でもそれなら姫路さんや島田さんが戻った方がいいんじゃない……」

当然ながら姫路さんや（数学に関しては）島田さんの方が僕よりも点数上限は上なのだ。ならば雄二への報告も兼ねて補給試験だって受けれるのだから、二人が戻った方が得策だ。

「じゃあ、この場を吉井に任せて何コンマ秒持つわけ？」

どうやら島田さんの考えでは、僕は一秒すらもちこたえれないらしい……

「それに体力なら明久君の方がいますから、Bクラスの方に追い付かれる事ありません」

確かに姫路さんの言うことにも一理ある。

例えばここで僕がBクラスを請け負ったとしても、あの人数で避け続けることはできない。逆に姫路さんと島田さんに任せれば、僕がFクラスに戻るだけの時間は稼げるだろう。だけどそれは――

「やっぱりダメだ。女の子二人をこの場に残しておくなんてできない」

「二人だけじゃないぜ」

「ああ、俺たちを忘れてもらっちゃあ困るな」

「いつちょ、派手に暴れてやろうぜ！」

「須川、横溝、今井……」

みんなの男気に涙がでそうになる。こいつらそんなにしてまで女子に好かれないのか！

「大丈夫ですよ明久君。いざとなれば腕輪もあと一回使えますから」

「ウチだつて本気だしてやるんだから」

「二人とも……」

ごめん！必ず、戻ってくるから！必ず助けに来るからね！」

僕はFクラスに走り出す。

後ろでは戦いが始まつたらしく、喧騒が聞こえてくる。こんな時になにもできない自分が嫌になる。

姫路さんたちを助けることもできない

庇うこともできない

一緒に戦うことすらもできない

「くそおおおー！！」

なら、今僕ができる精一杯を。僕にでもできる精一杯をやるしかないんだ！

第9問 突破口は渦中の中心（後書き）

Fクラスに一人戻る明久！果たしてどうなる！？

よろしかったら、感想・評価のほどよろしく願います

第10問 クズと試召戦争と急展開（前書き）

PV20000をこえました。ご愛読ありがとうございます。

第10問 クズと試召戦争と急展開

明久SIDE

「雄二！」

Fクラスの扉を乱暴に開けて入る。

「どうした明久」

「今すぐ援軍を！このままじゃ姫路さんたちが戦死しちゃうよ！」

必要最低限の事のみを雄二に伝える。

「なら今すぐと言いたいが、今すぐは援軍はだせない」

「どうして！」

「相手が援軍が来ることを見越していた場合、なんらかの罠がはられてある筈だ。

だから、ムツツリー二の情報収集が終わるまで補給試験でも受ける」

悠長に言う雄二に腹がたってくる。

姫路さんたちは僕が援軍を連れてきてくれると信じて送り出してくれたのに、僕は期待に沿うことすらできないなんて……

「なら、いい。僕一人でも助けに行くから」

そう言い放ち、きびすを返そうとする僕の肩を雄二が掴む。

「待て明久。今のお前が行ったところでなんになる？姫路や島田の負担を増やすだけだろ？」

「それは……」

雄二に言われてはつとなる。こいつは僕とは違って、対極を見据えて行動しているんだ。

それに比べて僕は目先の事しか見ていなかった。僕はなんてバカだったんだろう……

「わかったよ、雄二。その代わり、援軍には僕も加わるからね」

「言われなくても入れるつもりだバカ野郎」

美波SIDE

「はあはあ……」

体力に自信のあるウチでもさすがにきつくなってきたわね……

もう残っているのはウチと瑞希の2人だけ。それに比べて相手は残り12人もいる。

「瑞希、ウチらもそろそろ潮時ね」

相手を見据えながらも、ウチの背中をカバーしてくれている瑞希に声をかける。

「明久君はもうFクラスについたでしょうか……」

「いくらバカでもついたんじゃない？」

こんな状況で他人の心配をできる瑞希には頭が下がる。

坂本から吉井を最優先で守るようにとの指示がウチと瑞希には密かにでてたけど、本当に献身的な子だと思う。

「よかったです。なら——」

瑞希の召喚獣に付いている腕輪が光ります。

つて、ちよつとまって！瑞希は吉井がいなくなつてからも一度、腕輪の能力を使っていた。そして瑞希が吉井に別れ際に言つた言葉には「あと一回なら腕輪を使える」というものが入っていた。

つまり瑞希が今、腕輪の能力を使えば消費できる点数が足りなくて戦死となつてしまう！

「瑞希ダメよ！」

「きゃあ!？」

とつさに瑞希を突き飛ばす。幸い、瑞希に外傷はないようだ。それに瑞希が集中力を欠いたせいか、腕輪の輝きも収まっている。

「あつ、危ねえ……」

「あいつらが仲間割れしてくれなかったら熱線にやられてたところだった……」

安堵しているBクラス生徒を他所にウチは突きとばしてしまった瑞希に駆け寄る。

「ごめん瑞希」

「いえ、私の方こそ先走った行動をしてしまいすいません」

やっぱり瑞希は吉井の目的が果たされたから、後に続くであろう援軍の負担を少しでも少なくするために、自らの命をなげうつとしていたのだ。

「さあ瑞希、ウチらはウチらでできる範囲まで粘るのよ！」

差し出したウチの手を瑞希が掴む。

「はいっ！頑張りましょう美波ちゃん！」

「いやあゝ素晴らしい友情劇をどうもありがとう。ゴミ捨て場に咲く二輪の花」

後方から聞こえてきた嫌みな声に振り向くと、そこにはBクラス代表の根本がいた。

「Bクラス代表がじきじきにでてくるなんて余裕じゃないかしら」

思いつきり根本を睨み付けてやりながらも瑞希に目配せをする。ここで根本を討ってしまい、戦後対談で口封じなり先生に言うなりす

れば万事解決だ。

「おやおや、そんなに怖い顔するなよ。じきに俺の女になるんだからよ」

「なに言ってるんのあんた。ウチも瑞希もあんたみたいな性悪の彼女なんかにはならないわよ！」

瑞希の召喚獣が根本の召喚獣に攻撃するまであともう少し……

「おつとキツいねえ。これでも俺は優しいんだぜ？ほら、こんな落とし物まで拾ってやったんだからさ」

そう言って根本は右ポケットから桜色の可愛らしい便箋を取りだし、ほくそ笑む。

「そつ、それは……」

瑞希が明らかに動揺してしまっている。おそらくあの便箋は吉井の事も絡め、完璧に瑞希を封殺するための道具。これでは瑞希に根本を討たせるのはほとんど無理。ならウチが――

「おおつと、言い忘れてたが俺は戦後対談で口封じされても吉井にバラすぜ」

「卑怯よ！」

思惑が外れた以上、ウチも手も足もでない。

「おいお前ら、こいつらを連れてけ。こいつらは捕虜だ」

根本が後ろにいるBクラス生徒に指示をだすと何人かの生徒がロープを持ってきて、ウチらの手首、足首を縛っていく。当然ながらウチらは抵抗することすらできなかった。

明久SIDE

「……報告」

補給試験が今さっき終わった僕と雄二の所にムツツリーニがやってくる。

「ご苦労だったムツツリーニ」

「……これ」

ムツツリーニが雄二にビデオカメラを渡す。この中に今の状況が録画されているということだろう。録画が再生される。

そこには姫路さんと島田さんだけになりながらも、懸命戦う二人の姿。どうやら音声機能はないらしく、なにを言っているのかはわからない。

後に続く援軍のために腕輪の能力を使い、戦死しようとした姫路さんを（ちよつと強引な方法で）とめる島田さんの姿。

そして根本君がポケットからとりだした便箋に動揺、悲しみ、恐れを含んだ顔をし、動けないでいる姫路さんの姿が映っていた。

「クソ野郎が……」

「明久どうした!？」

思わず漏れた僕の言葉に雄二が驚く。

だけど、今大切なのはそんなことじゃない。

なぜだか根本に無性にむしゃくしゃした。

許せないなんて生ぬるいものじゃない。

姫路さんを悲しませたことを後悔させてやる!

あの便箋がなになのか僕にはわからない。

だけど、根本はそれを使って姫路さんを悲しませていた。

それは、それだけ姫路さんにとってあの便箋が大切だという証拠。

僕にはまったく関係のないものだとしても、姫路さんが僕にこの事に関わってほしくなくても関係ない。

これは僕個人が根本の事を無性に許せなくて、腹がたって喧嘩をうりにいく。ただ、それだけの事だ。

「ムツツリー二、二人の居場所は？」

「……おそらくBクラス」

「ありがとう」

ムツツリー二に礼を言い立ち上がる。

「雄二、悪いけど僕を戦線から外してほしい」

「構わない。お前みたいな雑魚はいてもいなくても変わりないからな」

こういう時の雄二は話が早くて助かる。

「ただし、こっちも好き勝手やらせてもらっからな」

「うん。もといい、僕が好き勝手に行動するんだから構わないよ」

多分、雄二はまた対極を見て行動している。本来なら僕もそれに従うべきなんだろう。だけど雄二は僕の気持ちを理解してくれた。目の前の事しか見えなくて、わがままな理由で戦線を外れる僕の気持ち。

「総員に告ぐ、今から明久のために道を作る！明久を根本の所まで通すんだ！！」

「『『『『おーおー！』『』『』』」

掛け声と共に、僕たち総勢40名はFクラスから飛び出した。

『Fクラス、Bクラス間の廊下』

「来たぞFクラスだ」

Dクラスの前に固まっているBクラスの集団が声をあげる。だけど、立ち止まるわけにはいかない！僕たちはBクラスの集団へと突っ込んでいく。

「Bクラス中島美幸が『Fクラス田中健太が受けます！』」

相手が言い終わる前に、こちらから勝負を受ける。これは雄二がみんなに出した命令で、僕が勝負を挑まれて動けなくなるのを阻止するためらしいのだ。

「Bクラス佐々木孝明が「Fクラス藤田智也受けます！」

「Bクラス中谷純也「Fクラス榎田良平受けます！」

どんどんみんなが僕なんかのために犠牲になっていく。でも、それを気にして立ち止まったりしたらそれこそみんなに示しがつかないみんなのためにも僕のがままのためにも、そして姫路さんのためにも必ず根本の所にたどり着くんのだ！

「くっ、こいつら強行策でBクラスまで行く気だ！誰か根本のやつに報告しろ！」

「俺が行ってくる」

まずい、この策が根本に早く伝わってしまえば奇襲性が落ちてしまう。そうなれば、人員を割きすぎた僕たちに勝ち目はない。

その時、雄二が僕の横をものすごい速さで横切っていく、報告に行こうとしていたBクラス生徒の肩を掴む。

「Fクラス代表坂本雄二がめえに数学勝負を挑むぜ！」

「雄二！」

雄二が戦死したらそこで僕らの負けだ。なのに雄二はなにをやっているんだ！？

「いいから行け明久！」

「でも「でもクソもねえんだよ！ささつと行きやがれ！」

雄二の怒号が響く。

「ごめん雄二、必ず根本を討ち取ってくるよ！」

僕はこの混雑の中、ただ一人Bクラスを目指して走り出した。

瑞希SIDE

私と美波ちゃんは今、Bクラスに捕虜として捕まっていたいます。

なんでも私たちは明久君たちを誘き出すために使うらしく、今すぐそのことを伝えたいのですが手首と足をロープで結ばれているため身動きすることができません。

そしてなにより――

「まあまあ、二人してそんなに睨み付けるなつて。なんなら俺をここで討つたつていいんだぜ？あんたならそれができるだろ、姫路さんよお？」

この根本というBクラスの代表が明久君の秘密を握っている限り、私たちはなにもできません……

「ははっ、そんなにあのバカが大切か？あんなバカが悩もうとも苦

しもうともいいじゃないか？」

「好き放題言つて、後で見てくださいよ！ボコボコにしてやるんだから！」

「酷いです！明久君のことをなにも知らないのに悪く言わないでください！」

私たち二人は根本君に敵意をむき出しにした目付きで睨み付けます。

「まったく、うるせえなあ！お前らは吉井に惚れてんのかよ」

「えっとそれは……」

「なつ、なに言つてんの吉井のことなんかなんとも……」

恥ずかしくなつて顔をあげることができません……

「はははっ、これは傑作だな。まさか二人ともビンゴとはな。だが、その恋も今日で終わりだ。なんたつて俺の女になるんだからな」

FクラスとBクラスが締結した『負けた方が勝った方』の言うことをなんでもきく『これを使って根本君は私たちを自分の彼女にしよう』というのです。

「なんでこんな酷いことするんですか！」

「なんでつて決まつてるだろ？俺の目的ははなつからお前ら二人だ。あんなクズどもの集まりの中でお前らみたいな華があったら摘みなくなるだろ？」

それに友香にはもう飽きたしなと付け加え、根本君はほくそ笑みま
す。

だけど、根本の狙いが私たちなら――

「お願いがあります」

「なんだ？」

「私がおとなしくしていますから美波ちゃんを解放してください」

「瑞希なに言ってるのよ！ウチのことなんていいからバカなことを
しないで！」

美波ちゃんが私のことを想って懸命に叫びますが、これしか私にで
きることはないんです……

「姫路がか……」

根本君は私を見定めるように眺めます。

「そうだな、もともと姫路が目的だしぐべえら！」

言いかけた根本君の顔に上履きが直撃します。見ると美波ちゃんの上履きが一つしかありません。

「しっかりしなさい瑞希！あんたは吉井のことを信じていないの！」

「明久君のことを信じる……」

「そうよ吉井のことを信じなさい！それに吉井だって瑞希が根本の彼女になって勝ったとしても喜ばないわよ！」

美波ちゃんの言葉が私の中で反芻されます。

明久君のことを信じる

私を助けてくれた明久のことを

いつも笑顔で私を励ましてくれる明久君を

なにより私の大好きな明久君のことを

私が明久君のことを信じる。信じなきゃいけないんです。

だって、明久君は約束を守ってくれる優しい人ですから

明久SIDE

あともう少しでBクラスだ。あともう少しで姫路さんと島田さんを助け出せる。

もう僕の後ろにはFクラスの生徒はいない。その代わりにBクラスの生徒もいない。僕がやるんだ。誰のためでもなく、僕自身のために！

バンッ！

勢いよくBクラスの扉を開ける。そこには手首と足をロープで縛られて動けないでいる姫路さんと島田さんがいた。

「明久君！」

「吉井！」

「なに、吉井だと！？」

二人の声に反応して根本が顔を押さえながら僕の方に振り返る。

「やあ根本君。随分と面白いことをしてくれてるじゃないか」

「くっ、こんな雑魚一人抑えられないとは使えない駒どもめ……」

忌々しく言い放つ根本に歩み寄る。だが、そのとき――

「俺が全ての部隊を攻撃にまわすと思ったか？」

「なっ！？」

教卓の影、掃除ロッカーから跳び出してきた二人の近衛兵に進路を塞がれてしまう。

まずい、Bクラス二人を相手にした後にはAクラス並の学力をもつ根本と闘うなんて無謀だ。

「「Bクラス山本（国谷）」が」

くそ、受けてたつしかないのか！？あともう一步だったのに……
そう覚悟を決め、口を開こうとした僕の前に二つの人影が立ちはだ

かる。

「その勝負、Dクラスの平賀源二が受けてたつ！」

「同じくDクラス清水美春が受けますわ」

「えっ……？」

思わず自分の目を疑う。なんでDクラスの人がFクラスとBクラスの試召戦争に参加してるんだ？

「お前らはDクラスだろ。なぜここにいるんだ！」

「なぜって、憂さ晴らしかな？」

平賀君が当然といったように答える。

「関係のないクラスは試召戦争に関わったらどうなるかわかってんのか！？」

「ええ、それなりに処罰なりを受けるでしょう」

そう、試召戦争をしていないクラスの生徒が関わることは反則だ。ならこの二人はどうして……

「だけど受けるのは僕たちだけだ」

「そう、美春たちは勝手に勝負を受けただけですもの」

どうして二人はこんなにもしっかりと立っていられるんだ。今の二

人の状況は補習では済まされない程のことをしてるというのに……

「こんな勝負無効だ！」

「もしかして敵前逃亡か？」

「ぐっ……」

そう、勝負を挑まれた、または挑んだのに戦闘を放棄したとみなされ、戦死扱いとなるのだ。

当然、地獄の補習を受けるなら格下の相手と闘う方がいいと思ったらしく近衛兵二人は臨戦態勢にはいる。

「吉井君、なにもたまたましてるんだい？僕たちは僕たちで憂さ晴らしをするから、君は君のやりたいことをやりたまえ」

平賀君が僕にだけきこえるような音量で言う。

なんで平賀君や清水さんが僕を助けてくれるかわからない。だけど、これで根本の所にたどり着けるんだ！

平賀君の好意を無駄にしないためにも礼は言わず、近衛兵の脇を通り抜ける。

「根本おおお！」

「ちい、Fクラスごときが俺に勝てると思うなよ、サモン！」

Bクラス根本恭二 日本史162点

両手に鎌を持ち、首からは数珠をさげた根本の召喚獣が現れる。

「サモン！」

Fクラス吉井明久 日本史76点

僕の召喚獣も幾何学模様と共に現れる。

点数差は約100点。さすがはBクラス代表だ。

だけどそれがなんだっていうんだ！

100点差があつたら倒せないのか！

100点差があつたら、姫路さんや島田さんを助けられないのか！

100点差があるからって、姫路さんを悲しませたやつを許せるわけないだろ！！！！

「「覚悟しろ、根本！」」

僕の声に誰かの声が重なる。だけど誰の声かなんて確認している暇はない。

ただ、目の前の敵に集中するだけだ！

召喚獣を真つ正面から突っ込ませる。

「ふつ、格上相手にバカ正直に突っ込んでくるなんてバカなやつめ」

「ああ、そうだ」

召喚獣を操作したまま静かに言う。

「僕はハガでどうしようもないやつだ。だけど――」

手を思いっきり握り、腹に力を込める。

「人を悲しませるようなやつには負けたくないんだよおおお！！」

不思議といつもより召喚獣に力が入っているのがわかった。
そして根本の召喚獣と斬り結んだ僕の召喚獣は、まるで点数差を感じさせない程の勢いで根本の召喚獣を吹き飛ばす。

Bクラス根本恭二 討死

「なっ……」

根本はあり得ないと言わんばかりに、その場にへたれこむ。
僕はそんな根本に近づき、胸ぐらを掴む。

「おい、姫路さんから取ったものを返せよ！」

自分でも驚くほど、どすの効いた低い声を出す。

「わっ、わかった。返すから……返すから、これ以上なにもしないでくれ……」

根本はなにをそんなに怯えているのかわからないが、姫路さんのものと思われる便箋を渡してくれたので床に叩きつけて解放してやる。

「はんっ、せいぜい床に寝転んで反省でもしてるんだな」

「あつ、明久君……？」

なぜだか姫路さんまでもが怯えたような目で僕を見ている。なぜだろう？

そうか、根本のやつが怖くてそれでまだ怯えているんだ。

「姫路さん、もう大丈夫だよ。根本はこの通り、なにもしないって言ってるから」

なるべく怖がらせないように優しく声をかける。

それでもまだ、姫路さんの目から恐怖の色が抜けていなかった。僕はそんな姫路さんに手を伸ばして――

「いやっ！」

「えっ……」

姫路さんが僕の手を拒んで後ろに下がる。

「どうして姫路さん……」

姫路さんが遠くに行ってしまう。僕の手を拒んで遠くに行ってしまう……

「今の明久君はいつもの明久君じゃありません」

いつもの僕じゃない？

なら姫路さんを怖がらせているのは僕なのか？

僕がいるから姫路さんは怖がっているの……

「いつもの明久君に戻ってください。いつもの優しい明久君に戻ってください！」

いつもの僕って言われたって、なにが違うのかわからない。だって、姫路さんを悲しませた根本に復讐をただけだ。そのなにかいけないんだろう。

わからない……

だけど、その答えを持つてるとしたら姫路さん以外はいない。だから、僕は姫路さんに近づいていく。

「明久君……」

姫路さんが怯えている。だけど、今度は姫路さんが後ろに下がることはなかった。

「（もしこれが記憶障害が原因なら私が……）」

姫路さんがなにかを呟くけど、今はそれ以上に早く安らぎが欲しかった。姫路さんがもっているであろう安らぎが欲しくて手を伸ばす。僕と姫路さんの手が触れあった時、僕の中のなにかが変わった気がした。

それと同時にさっきまで殺してやりたいほど憎かった根本への怒りも、ある程度沈下される。

「お帰りなさい、明久君」

「あつ、うん……ただいま」

なんでお帰りなさいなんて言われたかわからないけど、一応返事をしてみる。

「もう勝手にどこかに行っちゃいやすよ？」

「うん……」

姫路さんの目にはもう恐怖の色はなく、いつものように優しく僕に諭すように言う。

「あの、取り込み中悪いけど、ウチのこと忘れてない？」

僕のちょうど視界に入らない位置にいる島田さんが面白くなさそうに言う。

しまった、無視されれば誰だって怒るよね……

「ごめん、島田さん。別に忘れてた訳じゃないんだ」

すみません、本当は忘れてました……

「本当は忘れてたわよね！」

島田さんの目付きが怖い。なんかやばい、色々とやばい。

「すみません、なんでもするから許してください！」

土下座をしながら島田さんに謝る。ええい、周りの目は気になるけ

ど背に腹は代えられるか！

「なんでも？」

「はい、なんでも聞きますから許してください！」

「なら、ウチは吉井のことアキって呼んでいい？」

「えっ？」

島田さんの意外な要求に顔をあげる。

「ほら、瑞希だって坂本たちだって吉井のこと下の名前で呼んでるじゃない。だからね、ダメ？」

「島田さんがそれでいいっていうならいいけど……」

よかった、てつきりまた間接技をきめられるかと思っただよ……

「明久無事か！」

雄二が切羽詰まったように入ってくる。

「あつ、雄二。ほら、この通り根本君も倒したから僕たちの勝ちだよ」

姫路さんのロープを外しながら雄二に言う。ちなみに島田さんの方は清水さんが（色々と危ない顔で）ロープをほどこれていた。

「そうか、ならよかった。平賀もありがとな」

「なに、俺たちは自分たちの好きなように動いただけさ」

「ははっ、言うじゃねえか」

「そつちこそ、俺たちがこつ動くのを見越してあの時はなにもしなかったんだろ？」

「さてどうかな」

平賀君と雄二は笑いあいながら僕の方へ歩いてくる。

「姫路さん、大丈夫？」

姫路さんのロープをほどき終わり、体を支えながらたずねる。

「はい、特になにかされた訳ではありませんから。それに――」

「？」

姫路さんから、それに続く言葉が中々出てこない。

「明久、悪いが姫路を連れて教室に戻っててくれ。俺は根本をしばらくかなきゃならんからな」

「あつ、うん。姫路さん立てる？」

「申し訳ないんですけど、ロープで結ばれてたせいで足首が動かないんです……」

足を擦りながら言う姫路さんには本当に申し訳ないと思う。

全ては僕が原因なんだ……

振り分け試験当日のことを思い出す。あの日、僕があんなことをしなければ……

「なら掴まって」

だから、せめてもの償いに背中を向ける。姫路さんが僕の首に腕を回してくる。背中に当たる魅惑の柔らかさに我慢しながらも、姫路さんをおぶさる。

立ち去れ僕の煩惱よ

欲望を捨て理性も捨てて、本能に従ってうごいて、それじゃダメじゃないか！

ダメだ。僕の煩惱はちつとも立ち去ってくれそうにない。

「明久君、もしかして迷惑でしたか……？」

「そつ、そんなことないよ！」

せつかくの機会を逃してたまるものか！

こうなったら仕方ない。常日頃の僕の高い平常心をフルに活用するしかない！

「よつと！」

姫路さんをおぶさりながら動き始める。

「じゃあ雄二、お先に」

「ああ。姫路を頼んだぞ」

「うん、任せてよ」

僕はBクラスを出てFクラスへと向かった。

「やっぱりアキはウチのこと忘れてるじゃない……」

「まあまあ、島田もそんなに拗ねるなって。それに悪いが、今は二人だけにしてやってくれ」

「ウチもそこまで空気を読めくはないわよ」

くFクラスく

「ふう……」

Fクラスに戻り、姫路さんを下ろすと一息つく。

「あつ、明久君……ありがとうございます……」

姫路さんが顔を真っ赤にしながら言うのも無理もないだろう。というか、僕も相当顔が赤いに違いない。だって――

学園中の生徒に姫路さんをおぶつてるところを見られたんだよ！！

ちようど僕が廊下に出た時は下校時刻だったらしく、色々なクラス
の生徒に目撃されてしまっている。

事情を知っている人ならいざ知らず、無関係の人に好奇の目で見ら
れるのは非常に恥ずかしい。でも、姫路さんからしてみればあらぬ
噂がたつ可能性だってあるんだから申し訳ない事、この上ない。

「その、恥ずかしい思いさせちゃってごめんね」

「あつ、いえ…私は別に……」

恥ずかしくて目も合わせれない。どうしよう、なにか話題をつくら
ないと更に気まづくなるぞ……

そつだ、姫路さんの便箋を返そう。

そう思い、ポケットから姫路さんの便箋を取り出す。

「あつ……」

しかし、その便箋は僕の手から滑り落ち、途中で中身だけが出てし
まった。

「わっ！見ちゃダメです明久君！！」

姫路さんの声に速攻で目をそらす。便箋はちようど姫路さんのそば
に落ちたらしく、封筒に入れ直している紙擦れの音が聞こえる。た
だ――

『明』『好き』

という二文字がああ便箋に書いてあったのがちらつと見えた気がする。まるでラブレターのようなああ便箋に……

つて、そんなことあるわけないか

人間とは自分の都合のいいように考えがちな生き物だ。それも僕みたいなバカなら、頻度だつて多いだろう。

なにより、姫路さんが僕に恋心を抱くなんてこと事態に現実味がなさすぎる。

「そのう、明久君ありがとうございますね」

姫路さんが遠慮がちに言ってくる。便箋のお礼を言われてるのかな？

「あつ、いや……ほら偶然姫路さんの便箋らしきものが根本君のポケットから見えたからさ」

恥ずかしいので後ろを向きながら言つ。

「ふふつ、明久君は嘘が下手ですね」

「うつ、嘘なんてついてないよ」

やばい、さっきより火照ってきた……

「じゃあ……本当のこと言ってくれたら内容を見せてあげますよ」

「えっ………？」

思わず振り返ってしまった僕の時が止まる。
そこには便箋を大事そうに両手でもつ姫路さん。
なにかを期待するように頬を染め、こちらを見ている姫路さん。
まるで、僕の勘違いが現実、それもすぐ近くにあるのではないかと錯覚させる状況がそこにはあった。

「姫路さん……」

「はい……」

僕の意味とは無関係に姫路さんの名を呼ぶ。

「僕は……」

いったい僕はなにを言っているんだろう。僕に求められたのは事の真相のはずなのに。

姫路さんのそばに座り込んで目線を合わせる。

「僕は姫路さんのことを……」

「明久君……？」

たぶん僕は今、自分の想いを伝えようとしているんだろう。この幻想的な状況にいちろの望みをかけて……

「僕、吉井明久は姫路瑞希さんのことを……」

正直、成功するとは思えない。だけど、ここを逃したらもうチャン

スはない気がした。

この姫路さんへの想いが消えてしまいそうで怖かったんだ。

「ずっと昔から……」

ガラガラ

「ふう、危ねえ。弁当箱、忘れて帰る……って、もしかしてお邪魔でしたか……」

突然入ってきた須川君と目が合う。

「いや、そのこれは違うんだ!」

「そつ、そうです。違わないけど違うんです!」

「いや、俺たちFクラスはお前たちの仲には目をつむる気ではないんだ」

やばい、須川君がちつとも話を聞いていないし、妙なことを言うてる。

「おい、こら押すな!」

「お前こそ押すなよ!」

「って、うわあああ!」

なぜだか掃除ロッカーからも今井君、前川君、横溝君が出てきた。

「おい、こら！バレちまったじゃないか！」

「横溝が押すから悪いんだろ！」

「いや、押したのは今井だろ！」

「第一、前川がちゃんと二人の状況を方向してくれなかったのがいけないんだろ！」

今井君の問題発言に姫路さんと顔を見合わせる。

「もしかして今までのこと……」

「うん、見られたよね……」

恥ずかしいなんてもんじゃない。ここにいて自体に耐えれない！

「姫路さん！」

姫路さんの手を掴み、Fクラスをとびだす。

「待て！二人を追うぞ！」

「おう！」

「俺は旧校舎側行くから、横溝は二人を追ってくれ！」

くそ、隠れて見てただけじゃ飽き足らず、追いかけてくるなんて、とんでもない野次馬根性だ。

逃げる最中、何人もの生徒にすれ違う。ああ、また姫路さんに迷惑

がかかっていく……

でも、姫路さんを置いて行ったら横溝君たちに質問攻めにあってしまうだろうから置いて行くなんてことはできない。

「明久君」

「なに姫路さん」

走りながら姫路さんの方に顔を向ける。

「ありがとうございますね」

なんで、姫路さんはこんな状況で笑顔でお礼を言ってるんだ。ほら、周りの人が口々にひそひそ話してどんどん噂が広間っててるじゃないか……

「姫路さん、便箋のお礼ならさっき聞いたから後で」

「違いますよ。私が言ってるのは明久君が私たちのために一生懸命になってくれたことにです」

「一生懸命って、僕は当たり前のことをしただけで——」

「それが私には嬉しいんです」

なんで姫路さんは走ってて辛いはずなのに、そんなに楽しそうに笑うんだろう。

いや、笑ってるのは僕も同じか……

そう、いつの間にか僕も笑っていたんだ。なぜだかこの状況が幸せに感じられるほどに。

「いたぞ、吉井だ！」

だけど、そんな状況も長くは続かないわけで……
僕たちは前後を挟まれて教室に連行されてしまった。

（明久宅）

「ふう、今日は散々だったよ……」

「そうですか？ 私は楽しかったですよ」

夕飯を作りながら姫路さんが満面の笑みで言う。なんでも姫路さんは今日のお礼に夕飯を作ってくれるというのだ。
一人で食事をするのもアレだし、なにより姫路さんのご飯を一日に二度も食べれるなんて願ってもない朗報だ。

ちなみに教室に連行された後は正に地獄だった。僕と姫路さんだけを教室に残して、みんなが廊下や掃除ロッカーから覗いているなか「やり直せ」なんて言われたのだ。

姫路さんの名譽のためにも何をするわけでもなくじっとしていると、根本君との話を終えた雄二が戻ってきて、この茶番はお開きとなった。

その後に雄二に個人的に聞いた話なんだけど、Dクラス戦の後の平

賀君との戦後対談は要求をなにもしなかったらしい。
雄二いわく「平賀の良心に賭けてみた」とのことだ。

なんて危なっかしい作戦なんだろうかと呆れたが、同時に雄二の凄さも感じた気がした。

それにしても姫路さんは本当に楽しそうにご飯をつくるなあ……
きっと将来、姫路さんと結婚する人は幸せだろうなあ……

「はい、できましたよ明久君」

僕が考え事をしている間に姫路さんの料理ができたらしく、僕のいる居間のテーブルに運んできてくれた。

「うわあ、おいしそうだね」

姫路さんはつくってきてくれたのは、ほくほくの白米に、肉の入った野菜炒め、ジャガイモでつくったスープ（たしかビシソワーズだっけ？）だ。

「明久君のお口にあうといいんですけど……」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。だって姫路さんのお弁当だつてすごくおいしかったんだから」

大皿にある野菜炒めを自分と姫路さんの小皿に移しながら言う。

「それよりも姫路さんも座りなよ」

「失礼しますね」

姫路さんが僕の向かいに座ったのを確認し、手を合わせる。

「いただきます！」

まずは野菜炒めに手をつける僕を姫路さんは心配そうな目で見てくる。

「どうですか？」

「うん、すごくおいしいよ。これは僕の好物の中に野菜炒めが入っちゃうね」

「明久君は他にも好きなものがあるんですか？」

「うん、パエリアが好きなんだよ」

「パエリアですか……」

姫路さんが思案顔になる。

「いや、別につくってほしいとかって意味じゃないよ。あれはつくるのにコツがいるし」

「大丈夫です。今度、勉強しておきますから安心してください」

小さくガツポーズをとる姫路さん。こうなると姫路さんは引かない気質があるから今回は好意に甘えよう。

「じゃあお願いするよ。でも無理だけはしないでね」

「大丈夫ですよ。明久君は心配性なんですから」

そんなに僕って心配性だろうか？

僕からしてみれば姫路さんの方がよっぽど心配性な気がする。いや、姫路さんの場合は優しいだけなんだろうか？

はあ……

将来、姫路さんと結婚する人は本当に幸せだよ……

なんせ、こんな可愛くて、気が利いて、料理もできる。なによりこんなに他人に尽くす人なんて滅多にいないよ……

結婚っていえば、あのラブレターはどうしたんだろう？

「姫路さん、今更だけどあの手紙うまくいくといいね」

「あ……はいっ！頑張りますっ！」

満面の笑みで応える姫路さんに聞きたいことはある。だけど、冷静に考えれば僕の見間違いの可能性の方が遥かに高い。なら、いちいち自爆をする必要はないよね。

でも一つだけアドバイスぐらいしてもいいんじゃないだろうか。

「姫路さん、あくまでアドバイスだけど手紙よりも直接言った方がいいかもね」

「そ、そうですか？明久君はその方が好きですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ」

手紙は根本君のせいで嫌な記憶になっているだろうから、その方が

姫路さんにとってもいいだろう。

「本当ですか？今言ったこと、忘れないで下さいね？」

「え？あ、うん……」

なぜだか姫路さんはとても嬉しそうだ。姫路さんが嬉しそうだと僕までつい嬉しくなってくる。

それから僕たちは他愛ない話をしながら楽しい夕食を過ごした。

「じゃあ明久君、早く寝てくださいね」

「うん、なるべく早く寝るようにするよ」

正直言つて、今日は満身創痍だからすぐにでも寝れそうだが、自分の家に帰っていく姫路さんを見送ると寝室に直行する。

「ふう、疲れたあ……」

ベッドに倒れ込むように入る。

「まったくだ。今日はへとへとだな」

「うんうん。そうだよ——って、えええ！？今の声だれ！？」

辺りを見回すが誰も見当たらない。

「おいバカ。俺はここだ」

「ここって、どこだよ？」

「お前の頭の上だ」

「頭の上？」

頭の上に手を当てると何かに触れる。それを掴んで自分の前で広げる。

「よっ！」

そこには、なぜだか僕の召喚獣がいた……

第10問 クズと試召戦争と急展開（後書き）

明久の身に起こった変化。

そして突如として明久の前に現れた召喚獣。 いったい彼は何を巻き起こすのか！？

ちなみに異端審問会の面々は、自己紹介の時のこともあって明久と瑞希の仲をじゃましてきませんのでご留意を。

よろしかったら感想などをよろしくお願いします。

第11問 僕が消え君が生まれた日（前書き）

今回で、なぜ瑞希が明久君呼びか判明します。

第11問 僕が消え君が生まれた日

明久SIDE

「振り分け試験当日」

いける！これなら10問に1問は解ける！

って、ことは100問やったら10問正解、1000問やったら100問正解じゃないか！ならば――

僕は問題も見ずに回答用紙に次々と答えを書き込んでいく。1000問は無理だとしても100問を超える問題を解けば、DかCクラスくらいには入れるだろう。

今思えば、そんなバカなことを考えながら答えを書いていく僕の世界の隅に隣の席にいる姫路さんがはいる。

全体的にフワツとしていて、体は強くないけれど、今日はいつもにもましてふらふらとして頼りなさそうだった。休み時間になったら声でもかけようかな？

そう思っただけで回答用紙に視線を移そうとした瞬間、姫路さんの体が大きくぐらついた。

「姫路さん！」

ほぼ反射的に姫路さんを支えるように抱き抱える。その体は火照っていて、一目で熱があるのがわかった。そんな僕に試験官の先生が近づいてくる。

「テスト中の途中退席は無得点扱いとなるがいいか？」

「そんな！熱をだしているのにあんまりじゃないですか！」

「健康管理も試験のうちの一つだ」

無情に言い放つ試験官に腹がたつてくる。

「さあ吉井、お前も早く席に戻れ。今ならまだ——って、なにを
しているんだ！」

「なにか文句ありますか！僕は文月学園はじまって以来の最悪な生徒、観察処分者ですよ。そんな人間が成績優良者の答案が見れるんだったら、見ることにすらわからないんですか？」

僕は姫路さんの答案を手にとりながら言い放つ。

「吉井君……」

「姫路さん、無理しないで」

姫路さんを支えながらも試験官の方を見返せば、顔を真っ赤にして今にも沸点寸前というところだった。

「吉井、自分がやっていることがわかっているのか！」

よし、のってきた！

「ええ、わかってますよ。最低の生徒に相応しい最低な行動だつてことぐらいはね」

「ええい！もう、出てけ！お前も姫路も無得点だ」

「無得点で結構ですよ。人を想いやる気持ちがない人間なんかより僕にはこっちの方があってますから」

姫路さんをおぶさりながら教室を後にする。

僕は寝てしまった姫路さんを保険室のベッドに寝かせておくと、学園長室に出向いた。

コンコン

「試験中に誰だい？」

「吉井明久です」

扉を開け、学園長室に入る。ここからが正念場だ。

「あんた振り分け試験はどうしたのさ？」

「カンニングで途中退席させられてしまいました」

「で、そのカンニングしたあんたがなんの用だい？」

「はい。僕がカンニングした際にカンニングされてしまった姫路瑞希さんも一緒に退席されてしまったんです。だから、彼女だけでも後日、振り分け試験をやり直させてあげられないでしょうか？」

首を縦にふれクソババア

そう念じながら、こたえをまつ。

「だいたい状況はよめたよ。だけれど、それは無理な話だね」

「なっ、なんですか！彼女は一方的な被害者ですよ！」

なぜだ。なにがいけなかったんだ！？

「原因はあんただよ。考えてもみなよ。カンニングするようなズル賢いやつが、巻き込まれた人のためにここまでするかい？」

「うっ、それは……」

盲点だった……

そうだ、僕がカンニングするようやつなら人のために動くわけないじゃないか……

「姫路瑞希になにかあったか知らないけど、あんたは姫路を庇うためにカンニングしたってことかい？安い茶番だねえ」

僕の考えが完璧によまれてる……

これじゃあ、どうしようもないのか……

「まあ、そんなに落ち込まなくてもいいさね。案外、姫路にとっても、あんたにとってもいい結果だったのかもしれないよ」

「えっ？」

「さあ、もう帰った帰った。いつまでも間抜け面さらしてんじやないよ」

学園長の意味深な言葉に疑問を抱きながらも、僕は学園長室を追い出されてしまった。

「あつ、あき——吉井君」

保険室に戻ると、ベッドに寝かせておいた姫路さんが目を開けていた。

「姫路さん、体調はどう？」

「まだ頭がくらくらします」

「なら氷枕でも用意するよ」

今日は保険の先生はいないため、棚からカバーをとりだし冷凍庫の氷を詰める。

「姫路さんちよつとごめんね」

姫路さんの頭を持ち上げると、氷枕を下にしく。

「ひんやりして気持ちいいです」

「そう、ならよかったよ。じゃあ、僕はこれで」

姫路さんもカンニングしたやつとなんか、いたくないだろうから席を立つ。

「待ってください…吉井君」

だけれど、僕の足は一步目を踏み出す前に止まってしまっ

「どうしたの姫路さん？」

「その、私なんかのためにありがとうございました」

「なに言ってるの？僕は姫路さんの答案用紙をカンニングした挙げ句、姫路さんを道連れにしたんだよ？」

姫路さんに気を使わせまいと、自分に嘘をつく。

「そうやって私を気遣ってくれるんですね」

「違っつて。本当にそんなんじゃない……」

「ならどうして、私を支えてくれたんですか？」

「それは……」

今思い返せば、本当に穴だらけの作戦だった。しかも結局、なに一つうまくいかない最悪の作戦だったんだ。

「それにさっきまで学園長先生に私のことを掛け合っていてくれたんですよね？」

なぜこんなにも筒抜けなんだろう。でも、もう隠したって仕方ないじゃないか。

「だけれど、もう一度姫路さんに振り分け試験を受けさせることはできなくて、無得点扱いなんだって。ごめんね」

「吉井君が謝ることなんてありません。だって吉井君は私のために退席してくれて、私が振り分け試験をもう一度受けれるようにしてくれただけじゃないですか。だから、私の方こそごめんなさい」

「でも、あそこで僕が姫路さんをつれださなければ……」

「吉井君がやらなくても私は退席しましたよ。だから、吉井君が気にすることなんてなにもありません。それと——」

「それと？」

「そのう、吉井君のことを明久君って呼んでいいですか？ほら、私たち二人ともFクラスになるわけですし……」

「ええつとそれは……」

まさか姫路さんにまた明久君なんて呼ばれる日があるとは思ってもしなかったから、どう反応していいかわからないって……

「明久君？」

「はいっ!？」

思わず、反射的に返事をしてしまった。

「ふふっ、これで決まりですね。じゃあ、これからお願いしますね明久君」

「あつ、こちらこそよろしくね姫路さん」

こうして姫路さんは僕のことを明久君と呼ぶようになった。正確には明久君に呼び名が戻ったのだ。

これは僕と姫路さんだけが知る二人の秘密。振り分け試験の日にあったほんの小さな二人だけの秘密。

それから僕たちは保険室で他愛ない話に花を咲かせ、下校時刻に下校した。

そこからは知つての通り、僕は姫路さんを庇い、車にひかれるんだ。

「そうかあの時、君は生まれたんだね」

僕は目を開けて、右手に乗っている召喚獣に話しかける。

「まあ、俺の記憶があそこからあるんだからそうなんじゃねえの？」

腕捲りしながら素っ気なく応える僕の召喚獣。僕はこいつにあの日のことを見せてもらっていたんだ。

「じゃあ、もしかして僕は——」

「ああ、その通りだ。お前のなくしたものは俺の中に蓄積されている」

召喚獣の言葉が疑問を確信に変える。僕が今日一日感じてた様々な疑問。それが全てこの一つでおさまる。

僕は記憶を引き継がないんだ

第11問 僕が消え君が生まれた日（後書き）

召喚獣により、記憶障害に気づいた明久。彼はどうするのか!?

余談なんです、拙作を更新すると見てくださる方も多く（作者が勝手に思ってます）、評価をしてくださる方もいて大変嬉しいのですが、感想ももらえると嬉しいです。

感想が書きづらい構成なのでしょう？できればどのような点に留意すればよいか教えていただけるとありがたいです。

第12問 終戦始まる！（前書き）

キリトさん、きるぐまー1号さん、Dr・クロさん、感想ありがとうございます！

第12問 終戦始まる！

明久SIDE

Bクラス戦の翌日、僕、姫路さん、雄二、島田さん、秀吉、ムツツリー二の六人は宣戦布告をするためにAクラスに来ていた。

Aクラスは僕らのおんぼろクラスと違い、システムデスクに一人につき一台のPC、更にはおやつのためかお菓子やスイーツも置いてあった。

「本当にこれでわしらと同じ学費なんじゃろうか？」

秀吉が小首を傾げながら言う。

「さすがにAクラスとFクラスで学費が違っつて事はないから、同じなんじゃない」

そんな秀吉に応えるのは島田さんだ。

「……こっ、これは!？」

ムツツリー二が本棚の前で止まると、そこから動かなくなってしまう。

「どうしたのムツツリー二？」

「くっ、来るな！巻き込まれるぞ！」

いつにもなく親身に言うムツツリー二。相当、ハードなものがある

に違いない。

でも、よくよく考えてみればムツツリー二がそんなものを見て耐えられる訳がない。そう思ってムツツリー二の肩に手をおく。

「ムツツ——リー二……？」

僕がムツツリー二の肩に手をおいた瞬間、ムツツリー二は白眼をむいて倒れてしまった。しかも鼻血を流す暇も与えないほどの瞬殺だ。

「ムツツリー二！ムツツリー二、傷は浅いぞしつかりしろ！」

僕がいくらムツツリー二に呼び掛けても、起きることはない。一体、なにがムツツリー二をここまで追い詰めたんだ！？

「ムツツリー二。君の仇は僕が必ずとつてみせる——！？」

僕は言いかけた言葉を思わず吞み込んでしまった。なぜなら、僕の視界の先、すなわちさっきまでムツツリー二が見ていた本棚には小さな手鏡が置いてあったのだ。

しかも、その手鏡はまた他の場所にある手鏡を映し出し、またそれも他のものを映すといった具合になっていた。だが問題なのはそこじゃない。手鏡が映し出している先が姫路さんの足元だということだ。

あともう少しで姫路さんの……姫路さんのパン——

「ぐはあ！？」

意識した途端、僕の意識も持っていかれそうになったが、なんとか持ちこたえ、鼻血を2リットルほど出す程度の最小限の被害に抑えられた。

「あはははは、Fクラスの人ってほんと面白いね」

突然聞こえてきた元気な声に振り向くとそこには、緑のショートカットヘアのボーイッシュな女の子がいた。

「きつ、君がこんな卑劣な罠を……」

許さない。ムツツリー二の仇は今ここで僕がとる！

「卑劣な罠？なんのことかな？」

あくまでシラをきるつもりだな。

「とばけるな！君の仕掛けた罠のせいでムツツリー二は他界して、僕だって死の瀬戸際なんだぞ！」

「ますますなにを言ってるのかわからないよ……」

くっ、白々しい嘘を！

「……明久、そこまでにしろ」

「ムツツリー二！？」

立ち上がり、僕を右腕で静止する（僕の鼻血によって）ムツツリー二は血まみれだった……

「へえ……君がムツツリー二君なんだね。僕は工藤愛子だよ。よろしくね」

「……工藤愛子、聞いたことがある名だ。たしかお前がAクラスの保健No.1か……」

「AクラスNo.1なんだから学年No.1なんだけどね。君の噂も聞いているよ土屋康太君」

「なっ……」

ムツツリー二が驚くのも無理はない。なぜならムツツリー二の名は学園中に広まっけていても、ムツツリー二＝土屋康太ということを知っている人物は数少ないからだ。

「おい、明久、ムツツリー二Fクラスに帰るぞ！」

僕みたいな常識的な真っ当人には計り知れない静かな激闘は雄二の言葉により中断される。

「雄二、宣戦布告はどうしたの？」

「宣戦布告なら、俺と姫路で済ましといた」

「勝手にやっちゃってごめんなさいね」

うっ……

雄二の横で、見る者に癒しを与えるような姫路さんの笑顔と目がある。そんなものを見せられた状態で、あのブサイクと口喧嘩するなんて愚の骨頂だ。

本当なら雄二にとにかく言いたいところだけど、今日は姫路さんに免じて許してやろっ……

「あと、翔子との締結で試召戦争は5人の一対一で行うことになった。それと、負けたクラスは勝ったクラスの言うことを聞くことになったからな」

「なんでもって勝てる算段はあるの？」

「任せろ、俺に秘策がある。さっ、帰るぞ」

要件を伝えると雄二はささと動き出してしまふ。

「明久君も行きましょう？」

「うん。ムツツリー二も行くよ」

「……工藤愛子、この借りは必ず返す」

「僕だつて負けないからね。午後を楽しみにしてるよ」

この二人はまだ続きをやっていた……

「明久君、土屋君と愛子ちゃんになにかあったんですか？」

「まあ、二人にも色々あるんだよ……」

「色々ですか……？」

不思議そうに首を傾げる姫路さんにはかわいそうだけど、本当に色々あるんだから仕方ない。

「ムツツリー二には悪いけど長引きそうだから、僕たちも先に帰ってようか？」

「そうですね。土屋君には土屋君の事情がありますからね」

僕はAクラスにムツツリー二のみを残して出ていく。

「そういえば明久君、息が荒いですけどなにかあったんですか？」

Fクラスに帰る途中で姫路さんが聞いてくる。

幸いにも鼻血は勢いよく発射したため、僕には一滴も着いていないが息はまだ整っていない。

「ええと……日射病かな？」

「室内で、それも空調の効いているAクラスでは日射病にはなりませんよ……」

「いや、最近の日射病はタチが悪いんだよ」

「そうなんですか……？知りませんでした」

こんな苦し紛れの嘘でも、まともに受け止めてくれる辺り、姫路さんの純心さがうかがえる。将来的に悪いやつらに騙されないといいたいんだけど……

そういえば、ムツツリー二は立って手鏡を見ていて、僕は倒れたムツツリー二を支えながら手鏡を見たから見えたものが違うはずだよなあ……

一体、なにが見えたんだろう？まあ、姫路さんの足元に勝るものが

見たとは考えずらいけどな。あーあ、もう少し上が映ってればなあ……

「あつ、明久君！？だつ、大丈夫ですか！？」

「大丈夫つてなにが？」

一体、姫路さんはなにをそんなに慌てているのだろうか？

「明久君から鼻血が……それもたくさんの鼻血が出てます！」

「えっ……」

さすがに2リットルだった後での追い討ちには耐えられないらしく、僕は意識を手放して倒れてしまった。

く午後く

「只今からAクラスとFクラスの5対5の勝負を開始します」

Fクラス、Aクラスの生徒全員が入ってもなお、充分すぎる広さがあるAクラスの教室に高橋先生の声が響く。

あのあと雄二に聞いた話だと、科目の選択権はこちらが3で向こうが2らしい。格上であるAクラスにいったい、どどういう交渉をしたんだろう……

「明久君、もう大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。最近の日射病は本当にタチが悪くていけないよ」

「そうですね。私も日射病には気をつけなければなりませんね」

「そっ、そっだね……」

いくらなんでも鵜呑みしすぎではないだろうか？姫路さんには人を疑うということを知ってもらいたいものだ……

「では、両組の選手は前に」

「俺たちからは島田がいく」

「じゃあ、Aクラスからは私が行くわ」

島田さんの相手は——って、秀吉！？

「明久よ、勘違いしてるようじゃが、あれはわしの姉上じゃ」

「えっ、そうなの？」

「うむ、本当のことじゃ。顔が似ておるからよく間違われるがのう……」

どうやら秀吉にも秀吉なりの悩みはあるようだ。

「選択科目はそちらがどうぞ」

「じゃあお言葉に甘えて数学でいかせてもらっわ。サモン！」

Fクラス 島田美波 数学 168点

秀吉のお姉さんに科目の選択権を譲ってもらった島田さんの点数はFクラスの生徒とは思えないほど高かった。ただ……

「それでも数学の点数はBクラス並みなんだからね」

「確かにFクラスでそれは凄いわね。まあ、私はもちろん、サモン！」

Aクラス 木下優子 数学 277点

「うそ……」

「Aクラス並みだけどね」

勝負は一瞬にしてついた。もちろん、秀吉のお姉さんの勝ちで。

「勝者、木下優子」

「「「いえい——！」」」

Aクラス生徒の歓声を背に島田さんが落胆した様子で戻ってくる。

「ごめん、みんな……」

「なに気にするな。島田にはD、Bクラスの時に世話になったろ

「？」

「そうですよ美波ちゃん。私も美波ちゃんの方まで頑張りますから落ち込まないでください」

「次のムツリー二がなんとかしてくれるはずじゃし、気負いするでない」

「そうだよ。Bクラス並みじゃAクラスに勝てないなんてこともわからない島田さんだから仕方ないよ」

「みんなありがとう。それと——」

顔を上げてにつこりと笑う島田さんになぜだか恐怖を覚えた。

「あんたは一言多いのよ！」

「痛い！島田さんうではそっちに曲がるわけが（ボギッ！）あつ、曲がっちゃった……」

僕の腕があり得ない方向に曲がったのを確認すると島田さんは満足いったように離れていった。

あやつは鬼か？

「俺たちの二番手はムツリー二だ。頼めるな？」

僕の惨事には目もくれず雄二は淡々と進める。こいつも鬼か？

「……任せろ」

「ムツツリー二君が行くなら僕がでない訳にはいかないよね」

そう言っ出てきたのは僕とムツツリー二を卑劣な罠にはめた工藤という女の子だ。

「……やはり来たか、工藤愛子」

「ムツツリー二君との約束を破るわけにはいかないでしょ？」

「ふっ、威勢だけはいいな」

なんだろう。さっきからムツツリー二がRPGによくいるクールな敵役に見えてくる。

「そういえばムツツリー二君は理論派なんだってね。僕は実技派なんだよ」

「……卑怯な」（ぶしゃあああ）

たぶん、たどり着ける限りのところまで妄想したであろうムツツリー二が鼻血を大量噴射して自らの血の海に沈んだ。

「あれ、吉井君は平気なんだね」

「はははっ、僕はその程度じゃビクともしないよ」

うん。姫路さんのあの破壊力に比べたら言葉でなんと言われようともかわいいものだ。

「では、両者召喚を」

「……サモン」

システムの不具合なのか、ムッツリーニの召喚獣はまだ点数が表示されていない。

「じゃあいくよ、サモン！」

Aクラス工藤愛子 保健体育432点

432点！？

高いなんてもんじゃない。さすがはAクラスの保健体育No.1……
しかもその強さを証明するかのように大きな斧を持った工藤さんの
召喚獣は右腕に腕輪もつけていた。

「バイバイ、ムッツリーニ君」

工藤さんの召喚獣がムッツリーニの召喚獣に一瞬で肉薄する。その
時――

「……加速」

ムッツリーニの召喚獣が消え、工藤さんの召喚獣が倒れる。

Aクラス工藤愛子 討死

「えっ……」

工藤さんが呆気にとられるのも無理はない。なぜならムッツリーニ
の召喚獣が消えると共に工藤さんの召喚獣が戦死してしまったのだ

から。

「……加速終了」

ムツツリー二の呟きと共に召喚獣が現れる。いや、実際は見えるようになったただけなんだろう。

Fクラス土屋康太 保健体育534点

すごい……

保健体育だけで僕の総合科目に追い付きそうだ。

「勝者、Fクラス土屋康太」

口では冷静に言う高橋先生も少しばかりか動揺しているのがわかる。

「ムツツリー二、よくやってくれた」

「……これくらい当然」

いつも通りといったように戻ってくるムツツリー二は大物の風格すら漂わせていた。

「次は姫路、いけるか？」

「はいっ！」

雄二の頼みを受けて姫路さんが前に出る。その目はなにかを決心しているものだ。本当になにかのために、誰かのために本気になれる人のものだった。

「姫路君がいくなら僕の出番のようだね」

姫路さんの対戦相手は知的そうな顔立ちに、すらっと伸びた長身、正にできる人がかける眼鏡というふうに勉強家を絵に描いたような人だった。

「やはり来たか久保利光……」

「雄二、知ってるの？」

「ああ。久保利光、前回の振り分け試験で翔子に次ぐ人物だ」

「ってことは、学年2位……」

そんな強敵がまだ控えていたなんて……

「だが、その学年次席というのも姫路が途中退室で無得点扱いになったからという説もある」

「でも……」

「そうだ、それをさしおいても強敵であることには変わらない。あとは姫路がどれだけ頑張ったかだな」

「姫路さんが……」

なら心配はいらない。
なぜなら姫路さんは――

Fクラス姫路瑞希 総合科目 4651点

Aクラス久保利光 総合科目 3997点

誰よりも努力している人だから！

第12問 終戦始まる！（後書き）

次回ついにAクラス戦決着！

ちなみに瑞希の総合科目が原作と比べて遙かに高いのは、家庭科で
きるようになったからです。前々から思っていたのですが、家庭科
があつた悲慘さで翔子に匹敵するほどの学力がある。家庭科以外は瑞
希の方が上なんじゃないんですかね？

次回もよろしくお願いします

第13問 罪滅ぼし（前書き）

鍼灸院さん、感想ありがとうございます！

第13問 罪滅ぼし

明久SIDE

「しょ、勝者、Fクラス姫路瑞希」

いくら高橋先生といえどもFクラスに二連勝されたとあってか、動揺も目に見えるものとなってきた。

「いつたい、いつの間にこんな実力を……」

結果が信じられないと言うように久保君が言う。

「私、決めたんです」

それに対して姫路さんは毅然と一言、そう言った。

「決めた？」

「はい。頑張ってみようって決めたんです。私の好きなFクラスのために頑張ろうって」

「Fクラスが好き？」

久保君の疑問ももつともだ。Fクラスは姫路さんとは真逆の生徒ばかりで、特に僕なんて……

「暖かくて優しくて、なによりもみんな、誰かのために想って行動できるいい人ばかりです」

「姫路さん……」

僕はこういったことが苦手だ。いつもは怒られている立場で、それに慣れているから真正面から肯定されるとむず痒いものがある。たとえ、そこに僕が含まれていないとしても……

「でも、一番のきっかけは……私のために頑張ってくれている人の力に、その人に少しでも近づきたいって思ったからなんです」

なぜだか姫路さんは一度こちらを振り返ると笑いかけてきた。僕たちもそれにつられて笑い返す。

「そうか……」

そこまで決心を決めていた君に、学年次席の座で満足していた僕が負けるのは当然のことだね」

そう言う久保君は自軍の方へと足を向ける。しかし、その途中で立ち止まって

「その気持ち、いつか彼に届くといいね」

それだけを姫路さんに言っつて、また足を進めた。

「っつて、これは……その………違うんですけど違うんですっ!」

姫路さんの訴えは久保君に届くことはなかった……

それにしても、姫路さんのために頑張った人って誰だろう?あとでお礼を言いたいんだけどなあ。

「やりました明久君」

「ありがとね姫路さん」

こちらに戻ってくる姫路さんは笑顔だ。

「よくやってくれた、姫路」

「いえ、私にできるのはこれくらいですから」

姫路さんは謙遜して言うけど、本当はそうじゃない。

「そんなことないよ。姫路さんは試召戦争以外にも頑張ってるし、
なにより僕は姫路さんというの楽しいよ」

「そつ、そうなんですか／＼」

「あつ、うん……」

褒められたことに慣れていないのか、姫路さんは顔を赤くしてうつむいてしまう。

「では、四回戦目の対戦者は前に」

選抜メンバーで残っているのは僕と雄二だけだから、僕の出番だろう。ここで勝てばシステムデスクが……姫路さんに相応しい設備で勉強をさせてあげれるんだ！
拳をぎゅっと握りしめると前に出る。

「待て明久」

しかし、僕の進行通路は雄二の手により塞がれてしまった。

「雄二、僕の順番じゃないの？」

「いや、お前は最後だ」

そう言っていると雄二はAクラスの方へ向き直る。

「翔子！俺は今から出るからお前も出てこい！」

「……わかった」

雄二の叫び声ともれる程の大きさの声に応えたのは、黒いロングヘアーに女の子にしては長身で、おとなしそうな女の子だった。

「……雄二、今から大将戦やるの？」

「ああそうだ。ただし選択科目は歴史。それも小学生程度の上限ありでやってもらう」

高らかに宣言する雄二。これこそが雄二のたてた作戦。なんでも霧島さんは雄二の教えた嘘によって『大化の改新を625年』と覚えていたようなのだ。すなわち、この問題ができれば僕らの勝ちだ。でもなんで僕よりも先に雄二がいつちゃったんだろう？なるべく早く勝負を決めたかったのかな？

「では、準備をいたしますので別の部屋に移ってください」

高橋先生の指示に従い、雄二と霧島さんは別室へ移っていった。

〈数分後〉

席に座る二人の姿がモニターに映し出される。

「では、試験を開始してください」

二人が一斉にテストに取り掛かった。あの問題さえくれば……

雄二SIDE

翔子、悪いが俺はこのテストに全力をつくす。

小学生のテストだからってなめずに復習だってしてきた。

だから勝つのは俺たちだ！

そしてお前にきっぱりと俺を諦めさせる。

誰のためでもなく、俺自身の罪滅ぼしのために、お前を騙している俺自身のために！

そう決心した筈なのに、俺の手は止まってしまった。別に答えが分からないのではない。むしろ逆だ。

だけれど、この問題は……

『大化の改新のおこった年は？』

俺は頭の中にある一つの答えを書き込んだ。

第13問 罪滅ぼし（後書き）

前は今回でAクラス戦が終わるみたいなのを言っていました、
区切りがよかったのでここまでとさせていただきます。

次回もよろしくお願いします

第14問 終戦と罪の意識と1つの答え

明久SIDE

雄二と霧島さんがAクラスに戻ってくる。雄二の狙い通り、あの問題は出たから僕たちの勝利はほぼ確定だ。まず、スクリーンに霧島さんの点数が表示される。

Aクラス霧島翔子 97点

「「「よっしやあああ!」「」」

Fクラスの男子が歓声をあげる。けれども、となりにいる姫路さんの顔は曇っていた。

「どうしたの姫路さん?」

「あつ、いえ…なんでもないんです……」

いったい姫路さんはなにを悩んでいるんだろうか? そんな僕の心配を他所に雄二の点数が表示されようとしている。僕たちはそれを固唾を飲んで見守ることしかできない。

Fクラス坂本雄二 97点

「「「えっ……」」」

さっきまで、はしゃいでいたみんなが啞然としている。

「みんなすまない！」

雄二が頭を下げる。

「俺は翔子に教えた嘘で勝とうと思った。だけど、それは翔子を裏切り、あいつの努力を無駄にすることだと思ったなら答えが書けなかったんだ……」

スクリーンに二人の答案用紙が映し出される。そこには共に同じ場所に625年と書いてあり、そこにバツがついていた。

「これは俺の弱さが導いた結果だ。どんなバツでも甘んじて受けよう」

まったく僕の悪友はなにを言っているんだか……

「雄二、謝ることないんじゃないかな？だって雄二は自分のしてし

まったことにちゃんと向き合っているじゃないか。それって立派なことなんだから、雄二は弱くなんかないよ」

「明久……」

雄二は僕の名前を呼ぶと共に顔をあげる。

「それにまだ、僕が残っているじゃないか」

「まったく…明久のくせに言ってくれるじゃないか」

こんな状況でも憎まれ口を言う雄二。やっぱりこうじゃなきゃね。

「まっ、雄二には色々世話になってるしね。なにより、僕にとってもこの勝負負けるわけにはいかないんだ！」

僕はFクラスの集まりから出ていく。

「では、最終戦を開始します」

選択権は島田さんと雄二しか使っていないから、こちらが選べる。

「科目は歴史でお願いします」

「わかりました。では、両者召喚をしてください」

「Aクラス佐藤美穂いきます。サモン」

Aクラス佐藤美穂 歴史298点

僕の相手はメガネをかけたおとなしそうな女の子だ。

「Fクラス吉井明久いきます、サモン！」

Fクラス吉井明久 歴史165点

僕の召喚獣が召喚されると共に周りから色々な声があがる。

「なんだあの点数は！？」

「あいつ、本当にFクラスか！？」

「システムの不具合か！？」

「明久、お前いつの間にそんな点数に……」

雄二までも驚いている。まあ、僕があんな点数とつたら無理もないことだろう。だけど、僕は負けるわけにはいかないんだ！

「僕は今まで色々なものを失ってきたんだ」

だから今日の今という時のために一夜漬けをした。

「？」

佐藤さんは僕がなにを言っているか解らないと言う風に首をかしげる。

「僕を助けてくれた人のことも、支えてくれた人のことも、大切なはずの思い出もすべて……」

だから、今を生きている。それらを犠牲にしながらも。

「明久君…もしかして……」

おそらく姫路さんの考えはあっている。だけど、僕は振り向かずに話し続ける。

「失ったものは取り返せないかもしれないけど、僕はこれから生きていかなきゃいけないんだ！」

それらを犠牲にして多くの人に迷惑をかけたから。

「いいや、例え明日を紡げないとしても僕は前を見続けていくんだ！毎日を最高のものにするために！」

「まったく、一人でかつこつけんなよな」

僕の召喚獣がやれやれという風にこちらを向く。

「君だって負けられないのは一緒だろ？」

「まあな。さあ、いつちよいきますか主人！」
マスター

召喚獣が僕の意味とは別に木刀を構える。

「やっぱり僕に操作権はないの？」

「そつだな……まっ、主人が操作してくれても構わないが、危なかったら自分で動くからな」

「ありがとう。じゃあいくよ！」

「しくじるなよ！」

今度は僕の意味に従い、木刀を構える。

「戦闘開始！」

どうやら高橋先生も含めて、ほとんど人は僕の召喚獣のことをなにかの茶番だと思っっているらしく気にしていない。これって、僕が観察処分者だから変なやつと思われてるだけなんじゃ……

ガキーン！

「主人、ポケットとするな！」

いつの間にか迫っていた佐藤さんの召喚獣とつばぜっている、僕の召喚獣が叫ぶ。

僕は召喚獣の身体を操作し、つばぜり合いの状況から受け流すように横に木刀をずらす。そしてそのまま、木刀を先端で突くように突き出す。

ズズー

Aクラス佐藤美穂 歴史252点

突かれた反動で、佐藤さんの召喚獣が僅かに体勢を崩す。でもまだ仕掛けるには早い。

佐藤さんの召喚獣と一度距離をとる。

「不覚でした……」

佐藤さんの召喚獣は体勢を立て直すと、こちらの反撃を警戒してか守りに徹している。でも、召喚獣の扱いに慣れていない人に攻撃をよけるなんて芸当はできやしない。すなわち防御体勢とはただひたすらに攻撃を耐えることを意味する。なら――

「畳み掛けるよ！」

「あつたりまえだろ！」

召喚獣と僕の意味が合わさり、一つのものとなる。それは根本と闘った時にも感じたあの感覚。不思議と力を感じることができ、まるでもう一人の自分がいるかのような感覚。

いける！

「いけえええ！」

僕たちの声が重なり、木刀が佐藤さんの召喚獣に叩き込まれる。それは渾身の力となり、敵を打ち付け吹き飛ばす。

ずどおおおーん！！

佐藤さんの召喚獣は壁に激突する。

Aクラス佐藤美穂 歴史12点

「まだ微妙に残ってるな」

「でもあともう一息だよ」

そう、あと一発叩き込めば僕たちの勝ちなんだ。姫路さんにAクラスで設備で勉強してもらえるんだ。

だけど、その想いが早まったせいか僕たち二人は無策にも関わらず突っ込んでいってしまった。

壁に打ち付けられ、倒れている相手。そこに刺突の構えで突っ込んでいく僕の召喚獣。そして、そこに突きだされる相手の武器……

「なにっ……」

僕の召喚獣は自身のうみだした速さによって相手の武器に刺さってしまう。そして最悪なことに木刀はあと数ミリというところで届いていなかった。

Fクラス吉井明久 討死

「勝者、Aクラス佐藤美穂！」

「そっ、そんな……」

高橋先生の判定に僕はへたれこむ。

あと一歩だったのに……

あと一歩で姫路さんに笑ってもらえたのに……

「明久君」

柔らかな声と共に僕の肩に手がおかれる。

「ごめん、姫路さん……」

謝って許されるものじゃない。姫路さんは勝ったのに……
それも学年次席の久保君に主席の霧島さんに迫る、もしかしたら勝
るほどの点数で勝ったというのに……

「いいんですよ明久君。私は明久といると楽しいんですから」

「姫路さん……」

それなのに姫路さんは笑顔を向けてくれた。それも僕が言った言葉
に対応するかのよう。

「明久君は私なんかのために頑張ってくれたんですよ。だから私に
はそれだけで充分なんです」

そう言つて、姫路さんは僕の頭に手をのせる。不思議とそれに安ら
ぎを覚えてしまう。それになんだか……ねむ……たく……

雄二SIDE

姫路が倒れそうになった明久を抱き抱える。まったく、明久のやつは
……でも二人とも幸せそうだし、起こすのは酷か……
大方、徹夜したせいで寝てしまった明久に呆れながらも翔子の方へ
歩いていく。俺は俺ではじめをつけなきゃならないんだ。

「翔子、すまなかった!」

謝って許される訳じゃない。俺は翔子の好意を、俺を信じるというバカげた、それでいてむず痒くなるような気持ちを裏切ろうとしたんだから……

「……雄二、なにを謝っているの？」

それでもお前は知らないふりをしてくれるのか……

「翔子、もういいんだ。俺がお前に教えたことは嘘だったんだ……だから……だから——」

これ以上、俺に振り回されなくてくれ。そう言えたら、どんなにいいだろうか……

でも、俺の弱さはそれすらも許してくれないんだ。あれだけ表面で繕っていてもお前のことが好きだから。お前が俺を想ってくれてくれると同じくらいに好きだから……

「……そんなこと気にしてない。それよりも私にとっては雄二との約束の方が大事」

「翔子……」

なぜお前はそこまで俺を信じれるんだ。なぜお前はあんな約束を信じれるんだ……

「……それに雄二と同じことの方が嬉しいから問題ない」

そう言って笑いながらAクラスの集団に翔子は戻っていつてしまった。

俺はどういう言葉をかけてやればよかったんだろうな……
その答えはたぶん、今の俺には出すことはできない。

明久SIDE

「目が覚めましたか、明久君」

「姫路さん……」

保健室のベッドで寝ている僕を姫路さんが心配そうに見ている。その姿は夕陽に照らされていて、普段にも増してなんとというか――

「きれいだ……」

「あつ、明久君!？」

まずい、つい口に出てしまった!？どうしよう、なんとか言い訳を
考えないと……

「いや違うんだ。その夕陽がきれいだなあなんて思っちゃったりし
て。あははは……」

「そつ、そうですね。夕陽がとってもきれいですね」

いくら姫路さんでも、これが嘘なことくらいはわかっているはずだ。
ただ、僕にあわせてくれたのは僕の気持ちに応えられないからなの

だろう。僕を悲しませまいとしてくれたのだ。

「……………」

「……………」

どこかで感じたことのある気まずさがおとずれる。

「あの、姫路さん」

「あの、明久君」

二人の声が重なる。

「姫路さんからでいいよ」

「いえ、明久君の方からでいいですよ」

恥ずかしさで姫路さんと目をあわせれない。いったい、今姫路さんはどんな顔をしているんだろう。

それが気になって姫路さんの方を横目で見ようとしたら、同じく横目で見ようとしていたであろう姫路さんと目があってしまった。

僕は急いで目をそらすと姫路さんとは反対側、すなわち廊下の方を見る。そこには換気用の小窓があつて、そこから覗いているFクラス的面々がいて――

「なにしとんじゃ、ボケエエエ!!」

ベッドから飛び起きると即座に廊下へ向かう。

「やばっ、吉井にバレたぞ！」

「くそっ、いい雰囲気だったのに！」

「次はもつと見つかりにくいところから覗くべきだな」

好き勝手なことを口々に言う面々を必死に追いかけるが、スタート地点の差もあってか追いつく気配がない。

「待ってください明久君！」

後ろから姫路さんも息をきらしながらも追いかけてくる。

「姫路さんは教室に戻って。僕は須川たちに制裁を加えてやらな
いといけないから」

もし、この話がFクラス以外の生徒に伝わってしまったら姫路さんの評判に関わりかねない。Fクラスの、それも底辺に位置する僕なんかと端から見たらいい雰囲気に見えかねない状況になっていたのだから。

「待ってください明久君！明久の目がさめたらFクラスに来てほしいって、坂本君言ってたんです！」

「姫路さん、今はあいつのことなんかよりも優先するべきことがあるんだ！」

後ろを走っている姫路さんに向きながら走っていると突然なにかにぶつかる。

「つう……………」

進行方向に向き直り見上げるとそこには――

「あつ、雄二」

「よう明久。姫路に伝言を頼んでいたはずだが、すっぽかしてどこに行く気だ？」

「今は雄二なんかの用事よりも姫路さんの評判だよ！」

「お前、また姫路となにかやったな……………」

雄二が一種の哀れみを含んだ顔でやれやれといったふうにつ。

「はあはあ……………やっと追いつきました」

後ろから姫路さんが息も切れ切れにやってくる。

「あつ、姫路さんごめん」

「いえ…私が勝手に……………追いかけてきただけですから……………」

「でもそんなに疲れさせちゃってるからごめんね。その…姫路さんさえよければおぶろうか？」

今は下校時刻も過ぎてるから、人に見られる確率はほとんどないだろう。（須川たちは除く）

それに、こんなに疲れさせてしまった姫路さんをほうっておくことなんてできない。もともとは僕のせいなんだし……………」

「明久君は迷惑じゃないんですか？」

「迷惑なことなんかあるもんか。むしろ姫路さんの役にたてるなら僕はそれで嬉しいよ」

「／／／」

あれ？姫路さんが顔を赤くさせて下を向いちゃった。もしかして熱でもあるんじゃない？？なら急いで保健室に運ばないと！

「よつと！」

「ひゃあ！」

姫路さんをおぶると、姫路さんが小さな叫び声をあげる。

「明久、姫路、お前らは俺たちにみせつけてるのか？」

「？」

「？」

（つたく、二人してわかってねえのか。鈍感天然バカップルが！）

「まあいい。明久、姫路は熱なんかないからFクラスに行くぞ」

「えっ、姫路さん熱ないの？」

「あっ、はい。そのう、熱はありませんよ」

熱『は』ということは他が悪いに違いない。姫路さんは僕に心配をかけないようにとしてるのかもひれないけど、僕もそこまでは鈍くない。

（絶対に明久は勘違いしてやがるな……）

「じゃっ、雄二行こうか。どうせ今からじゃ須川君たちに追いつきそうにないし」

「そうだな。Aクラス戦のこと以外にもお前には聞きたいことがあるからな」

聞きたいこととは、おそらく召喚獣のことだろう。無論話すつもりだ。僕が今、知っていることを、覚えておくことをすべて……

僕は姫路さんを背負いながら、雄二と共にFクラスへと向かった。

第14問 終戦と罪の意識と1つの答え（後書き）

遂にAクラス戦が（半端なカタチで）決着つきました。次回は今回、不明瞭だった色々な部分を補足する回ですので原作にはない完全オ리지ナルとなります。

それと明久の召喚獣の名前ですが、中々決まらないのでなにか案のあります方、名前を応募します！妙案のある方はぜひともよろしくお願いします！

では、これからも拙作をよろしく願います

第15問 君の名前は明るい希望（前書き）

アスタリスクさん、NIGHTさん、感想ありがとうございます！
PVも50000を突破いたしました。

第15問 君の名前は明るい希望

明久SIDE

「おお、三人とも戻ってきたかのう」

「みんな待たせちゃってごめんね」

僕たち三人がFクラスに戻るとそこにはいつもの三人と霧島さんがいた。当然だ

が、姫路さんは教室の前でおろしている。

みんなの前では恥ずかしかったり、姫路さんに申し訳なかったりするが、一番の

理由は僕の理性がもたないということだ。あの自己主張の激しい柔らかな部分が

密着しているだけでも危ないというのに、歩く度に振動で押し付けられるようになるのだ。

「……明久チェンジ」

「そんなに僕の顔は危なかった!？」

ムツリーニの判定に不服を訴える僕の肩に雄二の手がおかれる。さすが僕の悪

友。僕をフォローしてくれるんだね。

「お前は素でツアウト、ツーストライクだ」

前言撤回、こいつに友情を求めた僕がバカだった。

「……雄二、あまり吉井をからかうとかわいそう。それに私たちは戦後対談をするべき」

「翔子ちゃんの言う通りですよ。それに明久君は……その……（かっこいいです）」

「わかってるって。そんなに急かすな。まずは円になって話し合いでもするか」

雄二の声で姫路さんがなにを言ったかよくわからなかったが、僕をフォローしようとしてくれたことは確かだ。そういう気遣いは素直に嬉しい。

「姫路さん、座ろうか？」

「そうですね」

僕たちは雄二に言われた通り円になって座る。畳ゆえにくつろげながら円になれるというのはFクラスの数少ない利点だろう。

「まずは戦後対談なわけだが、FクラスとAクラスは共に二勝二敗一分、すなわち引き分けになったわけだ」

「……学園長の特別裁定で両クラスとも三ヶ月間、試召戦争は禁止」

三ヶ月間延期かあ……

つてことは、姫路さんは少なからずあと三ヶ月間はこの環境で勉強しなきゃならないのか……

「そこで俺の提案なんだが、A F両クラス間で定期的に模擬試召戦争を行おうと思う」

「でも試召戦争は三ヶ月間、禁止なんじゃないの？」

「……あくまで模擬で設備は入れ換えないから問題ない」

なるほど、勝敗がどうあれ設備変更をしないということか。

「でも、それになんの意味があるのよ」

「まあ、お互いの士気の高め合いと試召戦争ができない不満の解消といったところだ」

「確かに雄二の狙い通りにFクラスには効果があるだろうけどAクラスへのメリツトは？」

「……私たちAクラスも場馴れしておく必要がある。それに「翔子ストープ！」

」

雄二が突然、霧島さんの言葉を遮るように大声をあげる。

「（雄二、言っちゃダメなの？）」

「（お願いだからめったなことは口にださないでくれ。俺のクラスの連中になにされるかわかったもんじゃない）」

「（よくわからないけどわかった。雄二が付き合ってくれって言ったことは黙っておく）」

「（だからそれを言うなって言ってるんだよ！）」

なにやら内緒話をしている雄二と霧島さんはなんだか楽しそうだった。なんとなくうか――

「二人ともお似合いだね」

「なっ、バカなに言ってるやがるんだ！」

「明久君の言う通りですよ。翔子ちゃんも坂本君もとっても楽しそうでしたから」

「……嬉しい」

「翔子も姫路もなに言ってるんだ！」

「ほれほれ雄二も落ち着くのだじゃ」

「そうよ、坂本が一番取り乱してるわよ」

「……照れ隠し」

秀吉たちに言われて雄二もようやく落ち着きを取り戻したらしく、深呼吸を一度いれている。

「話題を変えとするか」

こいつ逃げたな。

「次は明久、お前のことだ。Aクラス戦の時のお前を見るかぎりなにか知ってるよな？」

「うん……」

僕は昨晚、僕がおいてきたものを知ったんだ。

「その……どこまで知ってるんですか？」

隣から話しかけてくる姫路さんはとても心配そうな顔をしている。いったい僕は何度、僕の知らないところで姫路さんやみんなを心配させていたのだろう。

「僕が知っているのは振り分け試験当日の日の事と、僕の記憶が一日しかもたな

いつてことかな…」

「それは覚えているというのではないかのう？」

普通、自分の記憶を知っているとは言わないだろうから秀吉の疑問ももつともだ

ろう。ただ、僕の場合はそれで正しいんだ。

「ううん、知っているで正しいんだ……」

僕のことは僕の召喚獣に教えてもらったことだから。詳しい話は召喚獣に聞けた

ら早いんだけど、召喚フィールドがないからね」

「それなら心配いらないぞ」

「？」

ガラガラ

雄二の言葉と共に教室の扉が開く。そこから入ってきたのは色黒の肌、筋骨隆々の体、強面に角刈りの――

「なっ…なんで鉄人がここに…？」

「俺が試召戦争のために新しいFクラスの教師として呼んだ」

「なんてバカなことしてくれるんだ！これじゃあ毎日が鬼の補習じゃないか！」

「吉井、そんなに喜ぶな。お前には土日の特別授業を用意してや
てるから安心しろ」

さっ、最悪だ……

「西村先生、いきなりで悪いが召喚許可をもらいたい」

「学園長からのお許しもでていることだし、いいだろう」

鉄人が召喚フィールドをつくりだす。

「サモン！」

僕のかげ声と共に見た目は普通の召喚獣が現れる。

「ふう〜、やっとでれたあー」

召喚獣が僕の意味とは関係なしに背伸びをしている。

「吉井、これはどういうことだ？」

鉄人が僕の召喚獣を訝しげに見ながら言う。

「その、なんていうか僕の召喚獣は意思があるんです」

「意思があるだと？こっしちゃうられん。学園長に報告してくるか
ら勝手に帰るなよ」

「西村先生ちよつと待てくれ。先生がいなくなったら明久の召喚獣が消えちまうんだが…」

「ちょうど今、Eクラスに布施先生がいるから頼んでこよう」

そう言うのと鉄人は召喚許可を取り消すと教室を出ていく。そしてその五秒後にまた召喚フィールドが形成される。いくらEクラスが隣だといっても説得も含めて五秒は人間のできる業じゃない……

「明久、早く召喚しろ」

「あつうん、サモン！」

一度フィールドが消えたことによって消えた僕の召喚獣が再び現れた。

「短時間に何度も呼び出すなよな…」

「あつ、ごめん…」

なんというか、僕の召喚獣は僕に対して高圧的な部分がある気がする……

「そついえば明久君の召喚獣に名前は決まっていないますか？」

「普通に召喚獣とか君とかって呼んでるけど？」

「せっかく会話できるのにそれじゃあ不便だな。よし、今ここで名前を決めよう」

「

「変な名前にすんなよ……」

召喚獣は腕捲りをしながらちょこんと姫路さんと僕の間座る。

「うーん名前ねえ……」

「いきなり言われても思い付かんのじゃ」

島田さんと秀吉は考え中らしい。

「明久の召喚獣なんだからバカでどうだ？」

「雄二、それは僕への宣戦布告と受け取っていいのかな？」

「俺だってそんな名前は気に入らねえ」

僕の召喚獣もご立腹らしい。

「こつちには人間の何倍もの力がある召喚獣がついているんだよ。それでもやる

？」

「くっ…確かに分が悪いな。よし、この名前は没に」

こいつ、本気で僕の召喚獣にあんな名前をつけようと思っていたんだらうか？

次はムツツリー二がすつと手を挙げる。

「……ムツツリー二2世」

「勝手に後継者をつくらないでよ！」

「てめえの後継者なんかなるかよ！」

「バカな……」

本気でこんな名前で納得すると思っていたんだろうか……

「……じゃあカケルは？」

霧島さんが右手をちょこんと挙げて提案する。

「カケルか……」

いい名前だけどなんでカケルなの？」

「……召喚獣の『召』を同じ読みの私の『翔』にかえる。で、『翔』はカケルって読むから」

ここにきてようやく本当に真面目な意見がでてきてくれて助かった。このままじやボケ大会になりかねなかったしね……

「ねえ君はカケルって名前はどう？」

「却下」

「えっ、どうして？結構いい名前じゃないか」

僕が召喚獣を説得させようとするが、召喚獣は姫路さんのスカートをくいくいと

引っ張って気を引こうとしていた。要するに僕の話は無視しているわけだ。

「どうしたんですか？」

自分のスカートを引っ張っている召喚獣に気がついた姫路さんが召喚獣に話しかける。

「ねえねえ、姫路さんも僕の名前考えてよ」

なんか僕たちと話すときは随分と違う話し方だなあ……

「今考えていますから待っててくださいね」

「うんっ！」

フィードバックさえなければ、こいつを殴りたい。

「姫路さんが決めてくれる名前っ！姫路さんが決めてくれる僕の名前っ！」

嬉しそうに跳ね回る召喚獣は無邪気な子供そのままだった。ただし、姫路さんに
対してぶりっこなところ以外……

「そうですねえ……明久君の召喚獣の名前は『明るい希望』という意味で『明希（あき）』というのはどうですか？」

「うんっ、それにする。姫路さん、ありがとうねっ」

明希はさっきにも増して嬉しそうに跳ね回っている。

「確かに明久にとっては、なにかと知っているであろうこいつが『明るい希望』になるかもしれないな」

雄二の言う通りだ。明希は僕の知らないことをすべて知っている。これからどうなるかわからないけど、明希が僕にとってマイナスになることはないだろう。

でも明希って名前って字面だけ見ると、僕と姫路さんの子供みたいで恥ずかしいようなむず痒いような感じになる。ってダメだダメだ。せっかく姫路さんが考えてくれた名前なのに僕はなんて下心を抱いているんだ。

「おい明希、あんま跳び跳ねるな」

「跳び跳ねるくらい、いいだろ？」

明希は雄二の忠告を無視して未だに跳び跳ねている。

「ダメだこいつは……」

姫路、お前から明希に止まるように言ってくれ」

「あつ、はい。明希君、あんまり跳ね回ると危ないですよ」

「うんっ、わかった！」

あれだけ跳び跳ねていた明希は姫路さんの一言でおとなしくなった。

「姫路さんだっこ！」

だけど次なる願望丸出しで姫路さんに向かって両手をあげている。

「いいですよ」

「わーい」

姫路さんの手のひらに乗せてもらった明希は、ご満悦の様子だ。

「ウチだつて……」

島田さんが真面目な顔で姫路さんの方へ向かっていく。

「ほら明希、ウチの方にもきなさい」

「やだっ！ 姫路さんのところがいいっ！」

明希は差し出された島田さんの手から逃げるように姫路さんの腕を登っていく。

「なんというか姫路にぞっこんじゃのう」

「なんで瑞希だけそんなに馴つかれてるのよ」

「そんなこと言われましても……」

ほら明希君、他の人のところにもいきますよ？」

姫路さんが自分の肩まで登ってしまった明希を手のひらに乗せる。

「うう…姫路さんは僕のこと嫌いなのか？」

「嫌いなわけじゃありませんよ。ただ……」

上目遣いで訴える明希に姫路さんはたじたじだ。

「それにしても、なんで会ったばかりの姫路にここまでぞっこんなんだ？」

「会ったばかりじゃない。ずっと主人の^{マスター}中から見てきたしな」

雄二の疑問に明希は姫路さんの手から飛び降り、円の中心に立って説明を始める。

「俺の意識が明確に生まれたのは根本の野郎と闘う直前だけど、俺自身の記憶が事故のあった瞬間からあるんだから、その時俺が生まれたんじゃないのか」

「つてことは意識のないまま明久の中にいたってことか？」

「まあ、そうなるだろうな」

僕自身は明希のことについて昨晚に教えてもらっているから目新しい話ではない

。でも根本と闘った時に感じた、あの感覚は明希が生まれた証拠だったのかもしれない。

「そういえば聞き忘れておったが、お主は結局何者じゃ？」

「何者って言われても、明希としか答えようがないな。俺も主人も、俺が生まれ

た理由がわからないんだから」

そう、明希の正体は不明なところが多いのだ。一応、召喚獣としての機能は一通り揃ってはいるけど……

「その、明希君は明久君がなくなってしまったものをもってるんですよね？」

「うんっ！主人のなくしちゃった記憶は全部もってるよ。山に行ったことも海に行ったことも、どんどん料理が上手くなっていくことも全部覚えるよ」

僕の知らない、いや、忘れてしまった記憶を明希はもっている。僕にはそれが羨

ましいような、哀れのような気がした。だって、明希は自分のものじゃない記憶を背負って生きているのだから……

それにしても、明希の話し方は露骨過ぎる。あとで話しておかないとな……

「では結局、明久君自身はなにも変化がないってことですか……」

悲しそうに言う姫路さんはどれだけ優しいんだろう。ただの……そう、本当にただの友達でしかないはずの僕のことをこんなに心配してくれるなんて……

「あつ、それなら大丈夫だよ。主人にはその日、必要な記憶だけを共有して次の日に繰り越してるから」

「ってことは明久君は元通り生活できるってことですか!？」

「一部しか共有できないから元通りとはいかないけど、ある程度は改善されるはずだよ」

「ありがとうございます明希君!」

「えへへへ」

姫路さんに頭を撫でられて明希は嬉しそうに笑う。

「……でもどっという原理で共有してるの?」

「なんでも観察処分者に課せられるフィードバックを逆利用してや
つてるらしい
んだ。まあ、そのせいで感覚以外もお互いに共有するはめになっち
やっただけ
どね」

しかも、システムの一つである明希がシステムそのものを利用する
のだから驚き
ものだ。

「ってことは今明久は姫路に撫でられている感覚を楽しんでいるわ
けだな」

「えっ、あついやそんなつもりは……」

もともと感触はフィードバックするものだが、明希がきてからはそ
れが強くなっ
た。もちろん直接感じる訳ではないが、今までの二、三倍程は感じ
るようになった。
ている。

それを気にしないように我慢していたというのに、雄二はなんてこ
とを言ってく
れるんだ！おかげでさっきから頭に伝わる感触が気になって仕方な
いじゃないか
！

「……明久、本日二度目のチェンジ」

「うっ……」

今度は自分でも危ない顔をしている自覚があったから反論できない。

「明希、早く説明続けてよ」

自分の失態を隠したい気持ち半分、本当に説明を続けてほしい気持ち半分で明希に催促する。

「いやだ」

「明希君、明久君が困ってますからお願いできますか？」

「うんっ！」

こいつめ……

拳を握りしめながらも、不毛な結果にしかならないので殴ることはやめておく。

「で、どこまで話したんだっけ？」

明希が姫路さんの手から再び降りて話し始める。

「明久君に記憶の一部を共有できるところまでですよ」

「そうだったね。えっとまずは——」

ここからは僕の知っている話がしばらくの間続く。今までの話も含めて要約すると

明希が普通の召喚獣と違う部分は意識があって勝手に動き回るとい
うところだけ
。

共有できる記憶は明希が必要と判断してくれた記憶のみ。あまりに
も多くを共有
すると僕自身が危険らしい。（今現在は僕が記憶障害をわずらって
いることと、振
り分け試験当日に姫路さんを庇って病院送りになったということの
み）

記憶共有によってフィードバックが強化されており、その影響によ
り僕から明希
へのフィードバックも存在する。

明希が生まれた理由は不明。

あとは、明希自身は話していないけど極度の姫路さん主義であるとい
うことだ。

これはどう考えても矯正する必要がある。うん、絶対にだ。

「まあ、こんなところかな」

「なかなか面白いものじゃのう」

「そうか？」

明希は秀吉に対して興味ないというふうに応える。

「面白いというか神秘的なものを感じます」

「神秘的だなんて、それほどでもないよ」

「へえ、本当に喋ってるじゃないかい」

突然、教室に入ってきたババア（学園長）に明希がびっくりと肩を震わせる。

「なんだババアかよ。驚かせんなよ」

「あんたのデータ、今すぐにデリートしてやるのか!？」

ババアが明希を睨みながら不機嫌そうに言う。

「いいのか？俺は貴重な研究サンプルなんじゃないのか？」

「あのバカの召喚獣のくせに言うじゃないか」

「そんなことはどうでもいい。研究するねかしないのかどっちだ？俺だって自分の生まれた理由ぐらい知りたいから協力してやるぜ」

バカって言われた人には悪いけど僕も明希の出生は気になるから、明希の言う通りババアの言ったことなんてどうでもいい。

「研究するためにわざわざ出向いたんだから、研究させてもらうに決まってるさ」

ね。ただ、あんたの出生理由はわからないかもしれないよ」

「なに、わかれば儲けものとして考えるさ。それよりも今は時間がほしい」

「あんま急かすんじゃないよ。西村先生、召喚フィールドの維持を頼めるかい？」

「

「はいっ！では、ご一緒します学園長」

鉄人が直立の姿勢でババアと明希と共に教室を出ていった。

「なんかあつという間だったな……」

雄二が肩をすくめて言う。

「僕って明希が戻ってくるのを待っていないといけないのかな？」

「明希君も召喚獣ですから、その必要はないと思いますけど」

「なら、もう遅いし帰ろうか」

窓の方を見れば既に夕日が落ちかかっている。

「そつだな。俺も寄らなきゃならん所があるから帰るとするか」

雄二の声でみんなが帰り支度を始める。僕も自分のカバンをとろうと後ろに手を

伸ばす。あれ？やけに重いなあ……

「明久君、それ私のカバンです……」

姫路さんの言葉にハツとなって手に持っているものを見る。それは確かに僕のカバン。

カバンではなく姫路さんのカバンだった。

だけど、僕はそれを姫路さんに渡すことができなかった。カバンの隅からのぞいて

いるかわいらしい便箋のせいで。まるでラブレターのようなそれから目を離せ

なかったのだ。

だけど、僕はこれがなんなのか知っている。姫路さんが大事にしているラブレター

だ。根本にとられて困っていたラブレターだ。僕がちょっとしたアドバースを

だした、あのラブレターだ。

でも、これは明希から共有してもらった記憶じゃない。僕自身が覚えて

いること

なんだ。僕は記憶障害のはずなのに……

明希から共有してもらった訳でもない僕の記憶。これがなにを意味するのかはわ

からない。けれども、このことは誰にも言わない方がいい気がした。もちろん

明希にもだ。これ以上、僕のこととみんなを悩ませたくないから……

「ごめんね姫路さん。はい」

平静を繕いながら姫路さんにカバンを返す。

「ありがとうございますね明久君。はい、明久君のカバンですよ」

「あつ、ありがとう姫路さん」

姫路さんから僕のカバンを受け取り立ち上がる。周りを見回せば、みんな支度を終えているようだった。そのまま僕たちは誰ともなく教室を出て、家路につく。

く下校中く

「そういえば明希から聞いた話なんだけど、ここ最近は姫路さんが僕の面倒を看
てくれていたんだってね。ありがとう」

隣を歩く姫路さんにお礼を言う。僕と姫路さんの家はそう離れていないため、今
一緒にいるのは姫路さんだけだ。

「いえ、私が好きでやっていただけですから気にしないでいいんですよ」

姫路さんはそう言ってくれているけど、僕が姫路さんを庇ったことに罪の意識を
感じているに違いない。だけれども、その罪の意識が僕と姫路さん
を繋いでいて
くれるというならば、僕は……
それにあのラブレターのことだって、僕は姫路さんと繋がるための

道具として見

てるのかもしれない……

「どうしたんですか、明久君？」

「いや、なんでもないよ」

こういう時の姫路さんは僕の些細な変化を目ざとく見つけてくるから困る。なんとかしてごまかしきらないと。

「嘘をついてますね」

やっぱりバレた。

「なんのことだかさっぱりだよ」

通用しない嘘で取り繕って時間を稼ぐ。あともう少しで姫路さんと別れる交差点だ。あそこまでごまかしければ……

「じゃあ明久君、これ……知ってますよね？」

そう言っただけ姫路さんは、あのラブレターをカバンから取り出した。

「!？」

「やっぱり知っているんですね……」

姫路さんの顔が喜怒哀を両方含んだものになる。

「明久君はいつたい私を……私のこれのことをどこまで知っているんですか……」

ここで真実を話すべきなのか？

そうやって僕はまた、姫路さんに罪の意識を抱かせるのか？
また、新しい繋がりをつくるつもりなのか？

「一人で……一人で抱え込まないでください」

「姫路……さん……？」

いつの間にか僕の背中に姫路さんが手を回していた。姫路さんが今、どんな顔を
しているかわからないけど、声から泣いていることはわかる。それ
も、僕なんか
のために泣いてくれているのだ。

そんな状況にも関わらず、僕は隠し続けるのか？
例え、それが姫路さんと繋がる口実になるとしても話すべきなんじ
やないだろう
か。

いや、姫路さんにだからこそ話すべきなんじゃないだろうか。僕の
大切な人だか
らこそ嘘偽りなく接するべきなんじゃないだろうか。なに一つ偽り
なく接するべ
きなんじゃないだろうか。

「姫路さん、実を言うと僕——」

??? SIDE

「つてことはあいつは…」

「ああ、充分ありえることだね」

「なんとかする方法はないんですか」

「あることはある。ただし、君と一緒にいるお嬢ちゃんに協力してもらうかもしれないよ?」

「……私でできることならする」

「すまないな翔子」

第15問 君の名前は明るい希望（後書き）

これにて一巻分終了となりました。見返してみれば、原作には似ても似つかないものになっています……

特に試召戦争はほとんどがオリジナルになってしまっているという惨事に……

そんな状況の拙作にお付き合いいただきありがとうございます。ここで少し明希の設定を

（明希^{あき}）（名付け親は瑞希）

明久の召喚獣であり、自我をもつ。明久に記憶の提供をしている。ただ、共有できる記憶は明久の脳の状況により、ごく僅かである。

おそろしいほどまでに姫路さん主義であり、対応の差が露骨に現れている。

姫路さん >>> 俺 >>>>>>>>> 主人^{マスター} >>> その他

といった優先順位をもっている。

普段の一人称は『俺』であるが、対瑞希のときは『僕』である。出生理由は不明であるが、彼の性格と関係がある。

アスタリスクさん、お名前の提供ありがとうございました！

では、これから『バカとテストと失われゆく記憶』をよろしくお願いたします。ご意見、ご感想などありましたら、どのような内容でもぜひどうぞ！

特別問題 座談会（試召戦争編）（前書き）

今回の話は本編に全く関係ないばかりか、メタ発言、作者の話まで存在します。

それらに嫌悪感を覚える方は、今回をとばしてお読みいただいて結構です。

特別問題 座談会（試召戦争編）

唐「お気に入り登録50件突破の感謝と一章も終わった記念として座談会を開こうと思います。まずは自己紹介からどうぞ！」

明「本作で主人公をやらせてもらっている吉井明久です」

瑞「えっと…姫路瑞希です」

雄「坂本雄二だ」

唐「今回はこのメイン三人＋作者で座談会を行います」

瑞「そういえば明希君は参加しないんですか？」

唐「当初は明希も参加させる予定だったんだけど、一章の最後に出てきたわけだから二回目から参加してもらうよ」

明「明希が聞いたら暴言をはきそうだね…」

雄「ああ。あいつなら暴言ですまない気がするがな…」

唐「まあ、そこは気にしない方向で話を進めようか」

雄「といっても何を話すんだ？」

唐「そんなこと言われても決めてないしなあ…じゃあ、作者の知人から言われてることも話そうか？」

明「決まってないならそれでいいんじゃない…」

唐「じゃあ1つ目。明久が『それ日』の明久に似てる」

瑞「『それ日』って、バカテスのスピンオフ漫画、『それが僕らの日常』のことですか？」

唐「そうだよ。作者の書く話の明久は総じて『それ日』の明久に似てるらしいよ」

明「どんなところが？」

唐「姫路さんにぞっこんのところ」

明「なっ、なんてことを!？」

瑞「あっ、明久君!？」

明「ちっ、ちがうんだ姫路さん。これは誤解の正解の曲解であって、決してなにか間違いがあった訳じゃなくて…」

雄「おい、作者。確実にこうなるの分かっただけで言っただろ？」

唐「バレた？」

雄「大方、話を決めていないってのも嘘だろ？」

唐「そうだよ。だって、二人を弄りたかったし」

雄「まあ、作者のしたかったことは置いとくとしてだ。確かに、作

者の書く明久は他に類を見ないほど姫路に一途だな。なんか理由があるのか？」

唐「単純に明瑞（明久×瑞希）が好きだから」

雄「悪い。お前にまともな返答を求めた俺がバカだった……」

唐「なんと失敬な！」

雄「じゃあ、言うが今まで創作紛いをしたor手伝った理由は？」

唐「好きなCPカップリングがあつたから。ちなみに今までユリエス、リクつら、アルラン、に携わったことがあるよ」

雄「全部分かるやつなんかいないだろ……」

唐「もし分かる人がいたら相当、作者と気が合うということになるね」

雄「んな稀有な存在いるか！」

唐「まあまあ、世界は広いんだからどこかにはいるさ」

雄「ならいいんだけど……」

そっぴや、明久と姫路はどうした？」

唐「あそこ」（少し離れた場所を指差す）

明「———ということがあつたんだよ」

瑞「そうなんですか。面白そうですね」

雄「あいつら話の主旨が変わってないか？」

唐「あの二人だから仕方ないよ」

雄「じゃあ、作者に聞きたいことを聞いてから呼び戻すとするか」

唐「聞きたいこととな？」

雄「お前、『それ曰』持ってなかったよな……」

唐「2巻だけ持つてる」

雄「先日買ってきた本の中にあつたのか」

唐「友人に勧められたからね」

雄「で、なんで2巻だけなんだ？」

……いや、言わなくていい。なんとなく察しがついた」

唐「言わなくていいなら言わないよ」

雄「じゃあ呼び戻すとするか。おい、明久、姫路、戻ってこい！」

明「あつ、今いくよ」

瑞「すいません。今いきます」

く到着く

唐「はい、お二人さんお帰り」

明「ただいま」

瑞「ただいまでいいんでしょうか…？」

雄「次はなんの話題でいくんだ？」

唐「次はそっちで決めてよ」

明「なら今回これなかった明希の話は？」

唐「じゃあそれで」

雄「適当だな……」

明「明希って、他に類を見ないほど癖が強い性格してるけどなんで？」

唐「それは明希の出生理由に関係あるから話せないけど、他と被らないオリキャラがほしかったというのもあったかな」

雄「確かに、あの性格なら被ることはないだろうな」

唐「被らないぶん、受け入れられるかは心配なんだけどね」

明「それは否定できないよね……」

瑞「明希君、根はいい子だと思うんですけど…」

雄「まあ、姫路への実害は皆無だからな」

明「そのぶんだけ、僕らが危険なだけだね」

雄「召喚フィールドがなければ出てこれないっていうのがせめてもの救いだな」

唐「まあ、その救いも清涼祭が終わるまでだけだな」

明&雄「えっ!？」

「学力について」

明「そういえば作者の学力ってどれくらいなの？」

唐「商業高校だから進学校の文月学園と比べられないけど、英語以外は平均以上だよ」

瑞「英語が苦手なんですか？」

唐「どうも英語だけは理解がいかなくて平均点を5〜10点ほど下回っちゃったよね……」

雄「予習、復習を怠るからだな」

唐「お前には言われたくない」

明「はははっ、確かに雄二には言われたくないね」

雄「否定はしないが、ちょっと面かせやああ!!!!」

唐「自分の名言をこんなところで使うなあああ!!!!」

〈数分後〉

唐「ふう…酷い目にあつたあ……」

瑞「唐笠さんが坂本君をバカにするからですよ」

明「そうそう」

瑞「明久君もですよっ!!」

明「すいません…」

雄「まあ、これに懲りてしっかり予習、復習でもするんだな」

瑞「それは坂本君にも言えることですよ」

？「……雄二は常識を学ぶべき」

雄「げっ…翔子、なんでお前がここに……」

翔「……雄二のいる場所ならどこにでも行く」

唐「霧島さん、雄二が霧島さんと話したいことがあるってさ」

翔「……嬉しい。雄二と一緒に老後の計画をたてる」

雄「ちょっと待て翔子！付き合ってもない俺らが老後のどういう―
目があああ！！！」（目潰しされて霧島さんに引きずられていく）

明「じゃあ、座談会はこれにてお開きで」

瑞「坂本君はほっとくんですか！？」

唐「あれが二人の愛情表現だからいいんだよ」

瑞「そう…なんですか？」

明「大丈夫だからお開きにしようか」

瑞「そうですね」

唐「あつ、そうだ。はいっ、今日座談会に参加してくれたお礼」

明&瑞「夏祭りペア招待券？」

唐「まあ、じきに本編で行くことになるから持つておいてよ」

明「なんというメタ発言……」

唐「気にしたら負けだぜ。」

まっ、気を取り直して、これにて座談会を終了します」

瑞「お付き合いいただきありがとうございました」

明「できる範囲で応えるみたいだから、やってほしい議題があったらリクエストしてみてね」

特別問題 座談会（試召戦争編）（後書き）

ということで第1回座談会終了です。いかがだったでしょうか？
基本的に語りたいことを語っただけですので、特になにかってことは
はないと思うんですけどね…

作中でも言いました悩みとして、皆さんは明希のことをどうお考え
でしょうか？

いい、悪いだけでよいですから意見をもらえるとありがたいです。

第16問 僕と祭りとウエディングドレス（前書き）

総合評価ポイントが200を越えました！
みなさん、ありがとうございます！

第16問 僕と祭りとウエディングドレス

くバカテスト2く

『あなたが今、欲しいものはなんですか？』

く姫路瑞希の答えく
想い出

く先生からく
なんでしょうか。ただのよい回答に見えますが、深い意味がある気がします。

く吉井明久の答えく
なくしてしまったもの

く先生からく
Fクラスはなんだか重くないですか！？

く土屋康太の答えく
後継者

く先生からく
なにの！？

く明希の答えく

姫路さんとの時間

「先生から」

そついうことは本人に——って、あなた誰ですか!?

明久SIDE

「で、清涼祭の出し物のわけだが何がいいと思う?」

雄二が教卓に立ちながらみんなに呼び掛ける。雄二がこんなにやる気なのには理由があつて、霧島さんとの売上勝負を引き受けてしまったかららしいのだ。

雄二曰く、負けたらなにされるかわからないとのこと。そんなに怖いなら勝負を引き受けなければよかったのに……

「おつ、ムツツリー二なんだ?」

雄二にさされて手を挙げたムツツリー二が立ち上がる。

「……とうさ……ぬすみど……アダル……写真館」

どうして写真館よりも先にヤバイ単語を連発したんだと言われれば、ムツツリー二だからとしかいうしかない。

「明久、写真館だ。書いとけ」

雄二に促されて板書き係りを（強制的に）任された僕は黒板に書く。

『写真館』

「次は横溝か。なんだ？」

「メイド喫茶は使い古されてそうだから、ウェディング喫茶なんてどうだ？」

ウェディングかあ……

純白の衣装に身を包んだ姫路さんはさぞかしかわいだろうなあ……
なんというか清楚感がアップして普段よりかわいらしさが際立つ
と思う。

ウェディングドレスといえばタキシードだね。ウェディングドレス
とタキシード、姫路さんと僕かあ……

で、成功したあかつきには、僕と姫路さんは教会へ直行してめでたく
ゴールインというわけか。これはなんとしても成功させなきゃね。

「おい、明久。妄想にふけてないで書け」

「はいはい」と

雄二に幸せな人生計画を邪魔されたのを不服に思いながらも黒板に
書く。

『ウェディング喫茶（男子はタキシード）』

「欲望丸出しにしてるんじゃないか！」

「タキシードくらい着たっていいじゃないか！」

「お前の場合、狙いが見え見えなんだよ！」

「じゃあ言ってみなよ」

僕の考えが雄二ごときによめると思うなよ。

「言ってもいいんだな。この大勢の前で？」

「ごめんなさい」

どうやら雄二は僕の考えがよめていたらしい。さすがは元神童……

「次は須川か」

「中華喫茶なんてのはどうだ？」

中華喫茶かあ……

中華喫茶といえばチャイナドレスだね。個人的にチャイナドレスは好きだけど、対応するものを着てもないっていうのが弱点なんだよなあ……

『中華喫茶』

ガラガラガラガラ

「どうだ、催しは決まったか？」

僕が黒板に書き終わるのとほぼ同時に鉄人が教室入ってくる。本来ならばFクラスの担任は福原先生なのだが、雄二がAクラスにリベ

ンジするためにFクラスの担任になってもらうように頼み込んだらしいのだ。

おかげで毎週土曜日は地獄の補習と思いきや、鉄人の授業は思いの外わかりやすいと評判なのだ。というのも、僕自身は隣の姫路さんに教えてもらいながら授業を進めているので、いまいち実感がわかなかったりする。

あと時々、ムツツリーニがこちらを撮っている気がするのは気のせいだろうか？

「今のところはこの三つですね」

「もう受理までに時間がないんだし、この中から決めるように」

鉄人の指示を受けた雄二がみんなの方に向き直る。

「ということで、この中から多数決をとる。異論はないか？」

「……異論なし……」

Fクラスの大多数を占める雄二を含めた野郎共がニヤニヤした顔でこちらを見ている。なんだろう悪寒が……

「じゃあまずウェディング喫茶がいいやつは手をあげろ！」

「はー……それだああ……！！……」

僕が手をあげるまでもなく、男子の満場一致でウェディング喫茶に決定した。

こいつら、なにかたくらんでるな……

「しかし、ウエディング喫茶っていつでもどこから用意するんだ？」

「それなら演劇部の物を借りてくるとしよう」

そう言つて秀吉がそそくさと教室を出ていつてしまった。

「じゃあ、次に料理内容がどうする？」

「まずは無難にコーヒー辺りじゃないかな」

「パスタなんかもいいんじゃないか？」

「ここは豪勢に七面鳥だな」

「ウエディングなんだからケーキは必要だろ」

僕の意見に引き続き、みんなが次々と意見をあげていく。僕は急いでそれを黒板に書いていくが、とても間に合いそうにない。

「やっぱりサラダ類も必要じゃないか？」

「なら Dressing も必要だな」

「飲み物は洒落てシャンパンとかどうだ？」

「麦茶とかも用意しようぜ」

「スープ系も必要だろ？」

「唐揚げとかもあつたらいいな」

えっと…サラダにシャンパンに……

「ああ！もう、みんな言うの早すぎだよ！」

「みんな、明久が書ききれないから一旦意見を出すのをやめてくれ」

雄二が手を叩きながら、みんなを止めてくれる。

えっと確か………

「ごめん雄二、なにを書いていいか忘れちゃった…」

「まったく、お前ってやつは…」

みんな、すまないが自分のあげた意見をもう一度言い直してくれ」

「「「……………」」」

雄二がそう呼び掛けるが誰一人として反応しない。もしかして……

「お前ら、忘れたのか…？」

Fクラスの男子全員が首を縦に振る。要するにこいつらはその場の思い付きで言いたいことを言っていただけなのだ。

「あもう、一応記録ならとってありますよ？」

姫路さんが遠慮がちに右手をあげて言う。

メモをとってあるなんてさすが姫路さんだ。気が利いているなあ。

「助かるよ。ありがとね姫路さん」

「ちょっと待っててくださいね」

そう言って姫路さんが自分の席か僕の方に向かってくる。

「えっと…まずはコーヒーにパスタ、七面鳥、ケーキですね」

「うんうん、コーヒーにパスタ、七面鳥、ケーキだね」

姫路さんに言われた通りに書いていく。

『コーヒー・パスタ・七面鳥・ケーキ』

「次はサラダにドレッシング、シャンパン、麦茶、スープ、唐揚げです」

「サラダにドレッシング、シャンパン、麦茶、スープ、唐揚げと」

『サラダ・ドレッシング・シャンパン・麦茶・スープ・唐揚げ』

「姫路さんありがとう。おかげでなんとかかなりそうだよ」

「いえ、明久君も頑張ってくださいね」

そう言って姫路さんは自分の席に戻っていく。

「明久、共同作業ご苦労だった。あとは俺がやるからお前も席に戻っていいぞ」

「うん。任せたよ雄二」

雄二の許可がでたので、僕も自分の席に戻る。

ガラガラガラガラ

「お待たせなのじゃ」

僕が席につくのとほぼ同時に秀吉が戻ってきた。その手にはシルクのウェディングドレスとタキシードがそれぞれ一着ずつ持っている。

「すまぬのう。演劇で使う分しかないから、一着ずつしかないのじゃ」(棒)

「ああ、それは残念だな。じゃあ、誰がいいか多数決で決めようぜ」(棒)

まずい…

雄二ならまだしも、秀吉までもがわざとらしい棒読みをしている。これは細心の注意をはらわなければ、僕の人生計画は水の泡となってしまうだろう。

「じゃあ、まずはウェディングドレスを着るやつだがどうする？」(棒)

「姫路さんがいいと思います」(棒)

「姫路さんでいいんじゃないかな」(棒)

「姫路さんしかないと思います」(棒)

「……同意」(棒)

すごい棒読みのオンパレードだ。ムツツリー二までもが参加してるとなると、男子でこの状況を理解していないのは僕だけなのか!?

「って、ことだ。姫路、やってくれるか?」

「私なんかでいいんですか…?」

恥ずかしそうにもじもじする姫路さんはなんともいじらしい。

「いいもなにも、みんなが推薦してるんだからいいに決まってるよ。頑張ってね姫路さん」

「はいっ、頑張ります!」

うんうん、やっぱり花嫁姿は姫路さんのような笑顔が明るい人が似合うと思う。

……はっ!?

まさか、みんなで姫路さんのウェディング姿を狙ってるんじゃない……
そうはさせるか! 幸せになるのは僕だ!!

「えーと、次はタキシードを着るやつだが立候補制にしようと思う」

「当然、俺がやるべきだろ」(棒)

「調子にのるなよ須川。ここは俺に決まってるだろ?」(棒)

「横溝こそ冗談はよせよ。俺にやらせとけって」(棒)

みんなが次々に立候補してしまっている。このままじゃ、僕が立候補する前に締め切られかねない。でも、それは逆にいえば、僕が立候補しても目立たないということじゃないだろうか。それなら僕は意を決して手をあげる。

「僕も立候補するよ」

そう僕が言った瞬間、みんなが僕の方に向き直り邪悪な笑みを浮かべていた。その様は正に「かかったなバカが」と言わんばかりだ…

「じゃあ、そろそろ締め切るぞ。須川に横溝、福村、それに明久の中からみんなが選んでくれ」

雄二の呼び掛けにみんなが相談を始める。内容はおそらく誰に投票するかというものだろう。

なにやら、僕の知らないところで作戦が立てられているらしいけど、今はそんなことよりもいかにこの勝負に勝つかだ。作戦の内容は気になるけど、幸せのためにはなにかを犠牲にしなきゃならないんだ！

「取り込み中すまぬのじゃが、このタキシードでは須川と福村はサイズがあわぬのじゃ」(棒)

「そつ、そんな…」(棒)

「俺の幸せな家庭が…」(棒)

秀吉の言葉に泣き崩れる二人。こんなにまでなつて棒読みだという

ことを考えると、もしかして棒読みが流行っているのだろうか？

じゃあ、僕が警戒してたのも結局は杞憂ってことじゃないか。警戒して損したよ……

「あつ、そうだ。坂本わりい、よくよく考えたら俺、タキシードアレルギーなんだよ」(棒)

えっ横溝君、なにタキシードアレルギーって？

「そうかタキシードアレルギーか。それじゃあしょうがないな」(棒)

雄二も知ってるの!?

「うむ。タキシードアレルギー、あれは恐ろしいものじゃから」(棒)

秀吉まで!?

ねえ、嘘だよね!?!嘘って言ってよ!

「……最悪、死に至る」(棒)

タキシードアレルギーこわっ!

なんなんだよタキシードアレルギーって!

タキシードがそんなに危ないものなら花婿に着せないであげてよ!

「まあ、というわけだ。残ったのは明久だけだから任せたぞ」

「えっ……?」

雄一の言っていることがよく解らない。えーと、整理すると――

須川
↓
サイズがあわない

横溝↓恐怖のタキシードアレルギー

福村
↓
サイズがあわない

僕
↓
幸せの切符ゲット！！

「……って、ことは僕が花婿姿で姫路さんが花嫁姿！？」

今すぐ飛び上がりたい衝動をぐつと堪えて冷静になつてみる。

[illegible]

もしかして、僕って踊らされてた……？

そうだ、冷静になって考えてみればすぐにわかったことじゃないか！
Fクラスの連中はどういう訳だか僕と姫路さんの仲をみて楽しむ、

とんでもない野次馬どもじゃなかったか……
ということは、またなんらかの計画を練っているに違いない。これは警戒しなければ……

「よろしく願いますね、明久君」

「よっ、よろしくね。姫路さん」

突然、横からかけられた声に多少驚きながらも姫路さんに言葉を返す。

まっ、いいか。姫路さんのウェディング姿が見られて、セットで僕がタキシードを着れるのなら多少のことは目をつぶろう。
こうして僕らの清涼祭が幕を開けた。

第16問 僕と祭りとウエディングドレス（後書き）

原作とは違いウエディング喫茶をやることとなった明久たち。
次回もよろしくお願いします！

第17問 僕と大会と記念写真（前書き）

NIGHTさん、吹き抜ける風さん、アスタリスクさん、感想あり
がとつございました！

第17問 僕と大会と記念写真

明久SIDE

天使がいる……

いや、天使なんか例えてしまっただけは僕の眼前にいる人物に申し訳ない。

「どっ……どうですか？」

しかもその人物は上目遣いで僕に感想をたずねてきているのだ。

………そうか、僕は夢を見ているんだ。だから、目の前にはウエディングドレスを着た姫路さんがいるのか。夢ならなにを言ってもいいよね。

「うん、すごくきれいだよ……その……」

だけど、夢と違っていても中々言葉が喉に詰まってしまいでてこない。

「（明久よ、自分をつねってみるのじゃ）」

「あっ、うん」

突然耳打ちしてきた秀吉に言われた通りに、僕の頬をつねってみる。

「いたっ！」

あまりにも強くつねり過ぎてしまったため、痛みで声をあげてしま
う。なんで夢なのに痛みを感じるだろう？

「（これでわかったかの？今、お主は夢を見ている訳ではないのじ
ゃ）」

「（秀吉、なに言ってるのさ。姫路さんが僕にウェディング姿の感
想を聞いてくるわけじゃないか）」

そんなこと天地がひっくり返してもありえないことだろう。いや、
雄二がババアを口説くと同じくらいありえないかもしれない。

「（氣を確かに持つのじゃ。お主らはウェディング喫茶でのペアだ
ということをお忘れしたかのう？）」

「（……………言われてみればそんな氣もするよ…
…）」

「（そんな氣ではなく、その通りなのじゃが…）」

秀吉のいう通り、これは僕の夢でも勘違いでもなく現実なのだろう。
って、ことはだ。僕と姫路さんは結婚したのかあ……

「……………記念に一枚」

ムツツリーニがカメラを持って、僕と姫路さんを撮りたがっている。
さすがムツツリーニ。結婚記念写真なんて氣が利くじゃないか。

「姫路さん、せっかくだから一枚撮ってもらおうよ」

「そうですね。記念に一枚、お願いしますね土屋君」

「……並んで」

ムツツリーニの指示を受けて僕は姫路さんの横に並ぶ。

「……もうちょっと近くに」

「こうかな／＼」

「いつ、いつですか／＼」

僕と姫路さんはお互いににじりあう様に近付いていく。はつきり言
つて、すごく恥ずかしい。下手したら身体がぶつかりかねないし、
かといって恥ずかしくて姫路さんの方を見る余裕もない。

かしやつ！

ムツツリーニのカメラからフラッシュがたかれ、眩しさで思わず目
をつぶってしまう。

「……撮れた」

ムツツリーニは満足そうに撮れた写真の記録を眺めている。

「ムツツリーニ、現像できたら僕にも一枚ちょうだいね」

「私も一枚欲しいです」

「……わかった」

ムツツリーニはそう言つと次の目標があるのか、素早く教室を出ていった。

「ごほごほ…」

ムツツリーニがあまりにも早く動きすぎたせいで舞い上がったほこりで姫路さんがむせている。僕たちFクラスはAクラスとの試召戦争で引き分けだったので、設備ランクの引き下げということはなかったが、それでもFクラスの環境はお世辞にもいいとはいえずらい。このままでは姫路さんの様に身体の弱い人は勉強どころではないだろう。

「なんとかしなきゃだよなあ…」

「なら、なんとかしてみるか？」

誰に言うでもなく呟いた僕の一言に雄二が問いかけてくる。

「なんとかしてみるって、いい案でもあるの？」

「ああ、案ならある。考えてみる、喫茶店であげた売上はどこにく？」

喫茶店というと僕たちが行うウェディング喫茶のことだろう。

「普通に学園側が徴収しちゃうんじゃないの？」

「俺たちが自腹で用意して利益をあげたのか？」

僕たちが自腹で喫茶店を経営する。それは見方を変えれば、喫茶店に投資しているのと同じだ。なら――

「そうか、利益額は僕たちが使っていいんだ！」

「そういうことだ」

「でも、あの学園長が許してくれるかな？」

「だから、今から学園長の所に行くんだ。着いてこい」

「うんっ！」

「……賞品の……として隠し……」

「……こそ……勝手に……如月ハイランドに……」

学園長室の前まで来ると、中で誰かが言い争っているのが聞こえてきた。

「雄二、誰かが中で話してるみたいだよ」

「なら無駄足にならなかっただけなによりだな」

そう言って雄二は再び足を進める。話していたとしても、用件だけ

は伝えておこうという魂胆だろうか？

コンコン

「失礼しまーす」

ノックもそうそうに雄二がドアを開けて中に入る。

「ノックの返事も待たないなんて失礼なガキどもだねえ」

不機嫌そうに言うのは、この文月学園を牛耳り、僕らに劣悪な環境で勉強を強いる学園長ことクソババアだ。

「とんだ邪魔がはいりましたね。これでは話もできませんので、私はこれで失礼します」

そう言っただけの横をすぎていったのは教頭の竹原先生だ。クールな目付きで一部の女子に人気があるって聞いたことがあるけど、姫路さんも竹原先生みたいな人が好みなのかなあ…

「で、なんの用だい？」

話を邪魔されたのに学園長はあまり怒っていないようだ。案外、寛大だったりするんだらうか？

「本日は設備の修繕の申し立てをしに参りました」

律儀に言うのは雄二だ。さすが元神童というだけあって礼儀は心得ているみたいだ。

「突然なんだっていうんだい」

「はい。私たちのFクラスは最低限の設備だけは揃っていますが、土器をつくる時代から生きていた学園長ならいざ知らず、身体の弱い一部の生徒にとっては健康面で支障をきたす原因になりかねません」

少しボロがでた雄二に苦笑しながらも僕も続けて言う。

「ですから最低限、身体の弱い生徒でも勉学に励めるように設備の改善をしてほしいんです」

姫路さんの学園生活が掛かっているんだから慎重に言葉は選ばないとな…

「話はわかった。だけれど無理な話だね」

「どうしてですか！」

つい声を荒げて叫んでしまう。

「どうしてもなにもないよ。その身体の弱い生徒って誰だい？それがわからないのに承諾できるわけじゃないじゃないかい」

「それは……」

ここで姫路さんの名前をあげてしまっているのだろうか？もしあげれば、設備の改善は果たされるだろう。だけれど、その事を知った姫路さんはどうなる？

また、僕の時みたいに自分に責任を感じてしまっんじゃないだろう

か？

「はあ……」

また、あの子のためかい？あんたも好きだねえ」

「べつ、別に姫路さんのためって訳じゃないですよ！」

っ！！

言ってしまったてから慌てて口を塞ぐがもう遅い。

「ほらみなよ、やっぱり姫路瑞希のためじゃないさね」

「それは……」

どうしよう……

このままじゃ、また姫路さんに重荷をかせることになってしまう。
救いを求めて雄二の方を向くが、首を横に振るだけだった。

「なにもそんなに困った顔することないじゃないか。別にあんたからの本音を聞ければ考えてやらんこともないよ。もちろん、姫路瑞希には秘密にしといてやるさね」

「えっ……？」

姫路さんに秘密にしてくれるだって？

なら、設備を修繕しても姫路さんは気を使っことなく学園生活をおくれるってことだ。

「私だって生徒の事情くらい理解してるつもりさ。さあ、どうするんだい？」

どうするもこうするもない。僕の恥くらいで姫路さんが笑って暮らせるなら、いくらでも恥をかいてやるさ。

「学園長先生、姫路瑞希さんが勉強に励めるよう設備の向上をお願いします！」

学園長の座っている机の前に土下座しながら言う。

「ああ、あんたの言いたいことはわかった。ただし、清涼祭で行われる召喚獣大会であんたらのどちらかが優勝するんだ。いいね？」

「はいっ！必ず優勝してみせます！」

僕は立ち上がり、雄二の方に握手を求めるように手を差し出す。

「よろしくね、雄二」

「悪い明久。俺はお前とはパートナーになれない」

だけど、雄二は僕の手を掴んではくれなかった。

「俺は翔子とパートナーを組んでいるんだ」

「どうして？」

「知ってるか？この召喚獣大会の優勝景品の一つとして如月ハイランドの招待券がある。それを翔子が欲しいと言っからお前とはパートナーになれない」

如月ハイランド。それはつい先日、オープンした遊園地のことだ。雄二の話からすれば霧島さんとパートナーになって優勝を目指すということだろう。

「うんわかったよ。でも朝はあんなに霧島さんのこと怖がってたのによくパートナーになったね」

「お前、翔子に逆らったらどうなるかわかってないだろ……？」

そう言う雄二は恐怖からかガクガクと震えていた。相当、怖いことがあったに違いない。

「ごめん……なんかもう頑張ってね雄二……」

「できれば負けたいが、全力をださないと翔子に……」

なんというか雄二があわれだ。

「ガキども、結局こつちの話はのむのかのまないのかどつちだい？」

「当然やりますよ」

「俺はもとから出る予定だったからな」

「じゃあ、決まりだよ。せいぜい頑張って優勝するんだね。あと優勝したらすぐにここに来なよ」

「はい」

目的を果たした僕たちは学園長室をあとする。

あーあ、パートナー誰にしようかなあ……

美波SIDE

「はあ……」

「島田よ、そんなにため息ついてどうしたのじゃ？」

教室の窓から外を眺めてるウチに声かけられる。

「あつ、木下……」

振り向けばそこには缶のお茶を持った木下がいた。

「一つどうじゃ？」

「ありがとう。もらっとくわ」

木下から缶を受けとる。

「で、なにをそんなに悩んでおったのじゃ？」

「うっん。なんでもないの」

吉井と瑞希の関係に悩んでいるなんて知れたら恥ずかしすぎるわ……

「お主も気苦労が絶えんのう。明久のことじゃろ？」

「別に吉井のことなんて……」

「そうよ、ウチとした約束は覚えてなくせに瑞希との約束は覚えてる吉井なんて大嫌いよ！」

「そんなに意地をはるでない。わしでよかつたら相談にのるぞ？」

「……………」

「わしはみんなが楽しくすごせるようにしてほしいのじゃ」

木下の手がウチの手に重ねられる。

「もちろん、島田にも楽しくすごせるようにしてほしいのじゃ。だから話してくれんかのう？」

優しく重ねられた木下の手と言葉はウチの心まで温めてくれるようだった。

木下になら話してもいいかしら。なぜだかそう思えるほどに……

「ウチね、吉井のことで悩んでいるの。うつん、正確に言えば吉井と瑞希の関係で悩んでいるの」

「うむ。具体的にはどのようなことなのじゃ？」

「ほら、なんとなくかあの二人って、いつもお互いを探しあっているって感じじゃない？だから、それが羨ましくて……」

本当はこんな恥ずかしい話をする気なんてないけど、ここで逃げたらウチは一生逃げて生きていく気がする。そんなのは嫌だから、ウチはちゃんと向かい合わなきゃいけないのよ！

「確かにあの二人は事件のこともあつてか、よく一緒におるのう」

やっぱり木下もそう感じてたんだ…

「だが、別に島田のことを避けているわけでもあるまい」

「だけれどもウチだつて吉井と……」

「ペアになりたかつたかの？」

「！？」

なんでそれを……」

まさかウチが吉井と喫茶店のペアになりたいことがバレているなんて思わなかった。

「あのウェディングドレスの選考の時、お主はなにも喋らなかつたであろう。いつもは元気なお主が喋らない。それだけで理由としては充分じゃ」

そう、あの時、ウチには名乗り出る勇気がなかつた。みんなが瑞希を推しているのという理由もあつたけど、なによりも吉井が嬉しそうにしてたから言い出せなかつた……

名乗り出て吉井に嫌な顔をされるのが嫌だつた……

「なんで瑞希ばかり推されるのかしら……」

「うむ……」

それは島田にはちとばかり酷な話になるが聞きたいかの？」

「うん…」

「ならばここでは話しづらいし、屋上にでも来てくれるかの？」

「屋上へ」

「ではまず何から話せばいいかの？」

「じゃあ、瑞希が推された理由からでいいかしら」

屋上に来たウチらはなるべく人目につかないように隅の方に座り込んだ。

「その話をするにはまず島田に知っておいてもらわねば困ることがあるのう」

「知っておいてもらわないと困ること？」

「うむ。島田は異端審問会というものは知っておるか？」

「うん」

異端審問会。ウチも人づてに聞いた話だけど、カップルの仲を引き裂こうとする集団らしい。

でも瑞希が推された理由となにが関係あるのかしら？

「実を言つと須川たち、Fクラス男子のほとんどがその異端審問会の面子なのじゃ」

「うそ…」

とてもそうは思えない。だつて――

「嘘でしょ？」

だつて、須川たちはまるで吉井と瑞希の仲を――」

「うむ。応援しておる。しかし、須川たちが異端審問会というのも事実じゃ」

木下の言っていることの意味がわからない。だつて異端審問会は男女の仲を引き裂こうとする筈なのに、吉井と瑞希の仲を応援してるなんておかしすぎる。

「そして異端審問会は男女の仲を引き裂こうとする集団じゃ」

ますます木下の言っていることがわからない。

「だが、異端審問会は明久と姫路の仲には目をつぶっておる。いや、むしろ応援しておると言つた方が正しいの」

「なんで吉井と瑞希だけ？」

男女がイチヤつくのが嫌だというなら、あの二人だって例外ではないはずだ。

「島田は自己紹介の時のことを覚えてるかの？」

「うん……」

あの時、吉井が記憶障害を患わっていることを初めてしつた。そして、大人しそうな印象を受けた瑞希の必死な姿も……

「あの時、明久のやったことがクラス中に知れた。それと同時にクラス中の明久に対する印象はガラリと変わった。一人の女の子を我が身を犠牲にして護った英雄としてな」

「ウチもそれはすごいと思うわ。普通、咄嗟にできることじゃないからね」

でも、これでは吉井と瑞希の仲を応援する理由にはならない気がする。

「まあ、それであれじゃ。明久の男気というのかの？それに感化された須川たちは二人をくつつけようと野次馬になったわけじゃ」

「うーん……
よくわからないわ。それって相手は瑞希じゃなくてもいいんじゃないかしら？」

「その、なんとなくか察してほしいのじゃ。わしの口からはうまく言えそうにないからの」

なんとも歯切れの悪い木下の言葉を多少疑問に思いながらも話を続ける。

「ってことは、吉井の行動に感化された異端審問会は見逃してるってこと？」

「大方はそれであっておるのじゃ」

よくはわからないけど、なにも知らないよりは前進した気がする。あくまで、なにも知らないよりはだけど……

「他になにを話せばいいかの？」

「ううん、もういいわ。ありがとう木下」

「なんじゃ、もういいのかの？」

「うん。今のウチにはこれだけで充分よ」

知りたいことはまだまだあるけど、なぜだかこれ以上踏み込んだら知りたくないことまで知ってしまう気がした。だから、今はこれだけでいい。少しでもウチの気が晴れたからそれだけで。そうだ、木下になにかお礼をしなきゃね。

「木下、今日のお礼に明日お弁当を作ってきてあげるわ」

「えっ……？」

突然のことに驚いている木下を他所にウチは出口へと走っていき、振りかえる。

「木下、早くしないとおいでくわよ!」

いまだにほうけている木下に一言そう言っで、ウチはFクラスへと戻っていった。

第17問 僕と大会と記念写真（後書き）

明久のパートナーは誰になるのか！？予想通りのあの人？それとも……？

次回もよろしく願います。

第18問 僕と料理と負けられない理由（前書き）

アスタリスクさん、感想ありがとうございました

第18問 僕と料理と負けられない理由

明久SIDE

「結局は雄二が優勝すればいいんだよね」

今は学園長室からFクラスに戻る途中だ。

「ああ、そういうことになるな。だけど俺はできれば優勝したくない……」

「なんでさ!」

「優勝賞品の一つ、如月ハイランドの招待券。あれは招待券で来た客を無理やり結婚させるという噂があつてだな。もし優勝してしまえば俺は翔子と……」

あつ、また雄二が震えだした。霧島さんはあんな大人しそうなのに、いったい何をされたんだろうか？

「じゃあ、決勝で僕とあたつて負ければ？」

「さっきも言ったが、本気をださないと翔子に……
第一、お前はまだパートナーすら決まっていらないか」

そっぴいえばそつだつた……

「できれば翔子を倒せるやつ。例えば姫路とかと組んでくれると嬉

しいんだがな」

姫路さんとかあ…

確かに姫路さんならば霧島さんと渡り合えるだろうし、ウエディング喫茶の宣伝にもなるからいいかもしれない。

「確かにいいかもしれないけど、姫路さんが僕なんかのパートナーになってくれるかなあ……」

「明久、そういうのを世間一般的には杞憂って言っただぞ」

「なに言ってるのさ雄二。杞憂ってのはいらぬ心配のことを言うんだよ」

「だから杞憂だって言っただよ」

雄二がなにを言っているのかさっぱりわからない。

「まっ、姫路に頼んでみろって。それに優勝すれば一緒に遊園地だぞ？」

「かつ、からかわないでよ！」

一緒に遊園地だなんて、僕がよくても姫路さんがいいわけじゃないじゃないか。

「おっ、ちょうどいいところに姫路がいるな」

雄二に言われて前を向くと、確かにそこには姫路さんがいた。廊下のロッカーからなにかを取り出しているみたいだ。

「ほら、行つていって！」

「うおっとー！」

雄二に背中を平手で押され、よろけながら姫路さんの方へ行く。

「あつ、明久君！？」

「やつ、やあ姫路さん」

よろけながら自分の方へ向かってくる人がいたら誰だって驚くものだろう。

「その、姫路さん、少し時間もらってもいいかな？」

「はいっ！私もちょうど明久君に話したいことがありましたから」

姫路さんが僕に話したいこと？
いつたいなんだろうか？

「じゃあ、姫路さんから話してよ。僕の方は急ぎの用事じゃないからさ」

「はい。では……」

姫路さんが一呼吸いれる。そんなに緊張する内容なんだろうか？

「明久君、私と一緒に召喚獣大会にでてください！」

深々と下げた頭からふんわりと髪が弾む。

.....えっ？

姫路さんが僕とパートナーになりたいって？

「あのう...やっぱり迷惑だったでしょうか...？」

目を潤ませて、お辞儀の角度から見つめてくる姫路さんの破壊力は抜群だ。

「いや、そのお.....姫路さんは僕なんかで迷惑じゃないの？」

正直、僕が姫路さんに頼み込む分には違和感がないけど、姫路さんが僕に頼み込むというのは非常に違和感がある。なんせ、姫路さんの方には僕でなければいけない理由がないのだから。

「私は明久君とでたいです...」

「えっ.....？」

いや、まてまて！

これは僕が勝手に自分の都合のいいように解釈してるだけだ。冷静になって考えるんだ。

目の前には目を潤ませている女の子↓その女の子は自分と一緒に大に出たいと言っている↓自分でなければいけない理由がない。むしろ自分じゃない方がいい↓それでも自分と出たいと言っ↓チャンス！？

「姫路さん、ぼ「させるかあああ！..」ぐはあああ！」

言いかけてたところで、突然後方から走ってきた雄二から跳び蹴りをくらって床に突っ伏してしまう。

「大丈夫ですか明久君!？」

姫路さんが倒れた僕を支えてくれる。

「すまん明久。足が滑って蹴りがはいつちまった」

悪びれる様子もなくしれつと言う雄二を怨めしそうに睨むと、『お前だけ幸せになろうたってそうはいかねえ』と目で訴えてきた。こいつだけは許せない……

「明久君、どこか痛むところがありますか？」

姫路さんが心配そうにたずねてくる。手加減してくれたのか、雄二の蹴りは大事に至るほどの威力ではなかったので外傷的には問題ない。

ただ、さっきから柔らかいなが腕に当たっていて――

「あつ、明久君!？」

意識を手放すなか、思う。

前にも似たような気絶の仕方しなかったっけ？

「んっ……」

僕が目覚ますと、そこは教室だった。周りを見渡せば、みんな装飾等の作業をしている。

僕が寝ていた場所には白い布が敷いてある。姫路さんが敷いてくれたのかな？

「明久よ、目が覚めたのじゃな」

「あっ、秀吉」

僕が目覚まして一番はじめに話しかけてきたのは秀吉だ。手には結婚式の雰囲気を出すためのものなのか白いカーテンが握られていた。

「今は見ての通り、教室内の装飾じゃ」

「僕もなにか手伝おうか？」

「うむ。明久には飾りつけよりも厨房班にまわってほしいのじゃが」

「でも厨房班なら姫路さんもいるし心配ないんじゃないの？」

そう、姫路さんの料理はどれも軒並み美味しいのだ。だから姫路さんに任せておけば厨房班は大丈夫だと思うんだけどなあ……

「それが、その姫路が問題なのじゃ」

「???」

「まあ、とにかく行ってくれんかの?」

「うん…秀吉がそんなに言うなら行ってくるよ」

立ち上がり、そのまま厨房班のいる家庭科室へと向かう。

「あつ、吉井!」

家庭科室へと向かう途中、島田さんに呼び止められる。

「なに 島田さん?」

「その吉井に知つてほしいことがあるの」

「知つてほしいこと?」

やけに神妙になって話す島田さんに違和感を感じながらも聞き返す。

「うん。実は——」

がらがら

家庭科室の扉を開けるとそこには倒れている雄二がいた。なんか痙攣してる……

「明久……今の姫路……は……危険だ」

雄二はそれだけを言うつと泡をふきながら白目になり、完全に床に突っ伏してしまった。それにしても姫路さんが危険？ いったいどういうことだろうか？

「吉井、そこをどけ！」

倒れた雄二に気をとられていた僕は前方から担架で運ばれてくる須川に気づけなかった。声をかけられてとっさによけるさなか横目で須川君を見る。その姿は雄二と同じく泡をふき、白目をむいていた。

いったいこの家庭科室でなにがおきているんだ……

意を決して奥へと足を進める。そこには薄いピンクのかわいらしいエプロンをつけている姫路さんとFクラスの男子がいた。男子のうち、何人かは倒れている……

「あつ、明久君」

「姫路さん、調子はどう？」

「うーん、あんまりうまくいってないみたいです……」

姫路さんがしゅんとした様に言う。もしかして雄二や須川君は姫路さんの被害者なんだろうか？

「はははっ、なに言ってるんだよ姫路さん。この胡麻団子とってもおいし——ぶばあああ」

あつ、横溝君が泡をふいて倒れた。たぶん、姫路さんに気をつかって美味しいと言おうとしたんだろう……

でもこれでわかったことがある。この事件の犯人は姫路さんだ……

「大丈夫ですか横溝君！？」

「横溝は美味しすぎて気絶しただけだから気にしないでいいよ」

倒れた横溝君に駆け寄ろうとした姫路さんを止めるように今井君が言う。今井君ナイスフォロー！

「（吉井、よく来てくれた。お願いだから姫路さんをなんとかしてくれ）」

「（その前に姫路になにしたのさ）」

姫路さんに気づかれない様に福村君と僕は小声で話をする。

「（なにもしてないさ。胡麻団子をつくりはじめたらこの惨事なんだよ）」

たぶん、僕の知らないところで大勢の人が犠牲になったのだろう。それだけの犠牲をだしながらも姫路さんを傷つけまいと嘘をつき続

けてくれたみんなには感謝しなきゃだな。

「（じゃあ、さっきまであった胡麻団子は姫路さんが作ったやつなの？）」「

「（しんじれないかもしれないけどそうだ。なんか一つもらって見たらどうだ？）」「

姫路さんの料理に限ってそんなことはないという信じたい心と、雄二と須川君、横溝君の仲間入りする可能性がある恐怖が僕の中で入り交じる。

でも、料理は客に出す以上、ことの真相を確かめる必要がある。その気持ちで僕の背中を後押ししてくれた。

「姫路さん、僕にも一つ胡麻団子を貰えるかな？」

「胡麻団子はさっきの横溝君の分で最後だったんですけど、明久君の時間が許すなら作れますよ？」

「うん。じゃあ、待ってるからよろしくね」

「はいっ！」

そう言うとき姫路さんは早速作業に取りかかった。見たところ、おかしなところもないし手際も良い。

これであんな風になるとは思えないんだけどなあ……

「数分後」

「はいっ、できましたよ明久君♪」

姫路さんが胡麻団子が六つ乗った皿を僕の方に持ってきてくれる。

「ありがとね姫路さん」

見たところ至って普通の胡麻団子だ。

「いただきます」

僕が胡麻団子を口に運ぶのをみんなが緊張した面持ちで見ているのが後方から伝わってくる。そんななか、僕は胡麻団子を一口口の中にいれる。

口に胡麻団子を入れた瞬間、胡麻のこっばしさとあんこの甘さが口全体に広がる。

「うんっ。美味しいよ姫路さん」

やっぱり姫路さんの料理が不味いなんてなにかの間違いだったのだ。

「姫路さん、もう一個もらっていい？」

「はいっ！好きなだけ食べていいですよ」

姫路さんからの許可がでたので、胡麻団子をもう一つ拝借する。

ん、何度食べても美味しいなあ…

「（おい、無理するなよ。吉井まで逝っちまったら俺たちは頼るものがないんだからさ）」

「（なに言ってるのさ福村君。この胡麻団子、すごく美味しいよ）」

「（ヤバイ、吉井の味覚がおかしくなってる……）」

どうやら福村君はさっきの惨事のせいで本当に美味しいという可能性を考えられないらしい。

「（疑うなら福村君も一つもらいなよ。本当に美味しいからさ）」

「（本当だろうな？）」

「（味は僕が保証するって）」

正直、僕の取り分が減るのはいただけないが、姫路さんにあらぬ汚名を被せたままの方がもっと嫌だ。

「（吉井がそこまで言うなら…）姫路さん、俺も一つもらってもいいですか？」

「どうぞ、まだまだ材料もありますから皆さんも気にせず食べていいですよ」

「じゃあ、いただきます…」

福村君が恐る恐る胡麻団子を一かじりする。その瞬間、福村君の顔

が美味しいものを食べた時独特のとろんとした顔になった。
うん、正直、男のこういう顔を見るにたえないね。

「これすごいまいっすよ！」

「なに、そんなにうまいのか！俺にもよこせ！」

「じゃあ、俺も」

「最後までーらいつと」

福村君に続くようにみんなが次々と取っていき、あっという間に皿の上から胡麻団子が姿を消した。

胡麻団子を食べているみんなは満足そうだ。よかったあ、これで姫路さんの汚名は晴れたようなものだ。

「（いやあ、それにしてもうまいな）」

「（さっきまでの須川たちを殺めてた料理とはとても思えん。これが愛の力かあ……）」

えっ……？

まさかこの展開は……

「（愛する夫のために頑張る嫁ってか？くうく、たまらないねえ）」

「（まあ、さすが我らがFクラスの誇るカップルだな）」

まずい、これはいつものパターンだ！

「姫路さん、そういえば装飾で手伝ってほしいところがあるんだ！」
そう言つて、片付けの準備をしようとしている姫路さんの手を掴んで走り出す。

「あつ、明久君！？まだ片付けが終わってないんですけど！」

「福村君、片付けは頼んだよ！」

振り向き、福村君に叫ぶ。

とにかく今は一刻も早く家庭科室からでなければならぬ。なんせ、あのパターンはまた僕と姫路さんで遊ぶ気だからだ。これ以上姫路さんに迷惑をかければ今度こそ嫌われかねない……
それだけはなんとしてでも避けなければ……

「教室」

がらがら

「ぜえぜえ……た……ただいま……」

教室に滑り込むようにはいった時には、もう息も切れ切れだった。

「明久よ、そんなに急いでどうしたのじゃ？」

「またみんなの悪い癖だよ……」

「お主らも大変じゃのう……」

「???」

唯一、姫路さんだけは事の事情を理解していないようだ。姫路さんに天然気質があつて助かったというべきなんだろうか？

「……タキシード」

ムツツリーニが呟く。

タキシード？

タキシードを着ているといえば、このクラスでは僕くらいなものだろう。

………
まずい、タキシード着たまんまだった…

考えてみればどこでも着替えた記憶がないのだから当たり前だろう。

「ごめん、秀吉。演劇部で使うタキシードをずっと着てて」

「わしは構わぬのじゃが。のう、ムツツリーニ？」

「……後の楽しみ」

二人はいつたい何を言っているんだろうか？

別にタキシードの形状が変わるわけもないのに後の楽しみだなんて
おかしいにも程がある。

「まあ、いいや。とにかく着替えてくるね」

そう言つて、男子更衣室に着替えをしに行く。

く 帰り道く

「雄二、じゃあね」

「坂本君、また明日」

「おう、明久に姫路もまたな」

雄二と別れて、姫路さんと二人つきりになる。隣を歩く姫路さんの笑顔はいつもとなにも変わらない。

でも、その笑顔の下にある悲しみを僕は知ってしまった。今日、家庭科室に行く途中に島田さんが言った言葉が頭から離れない。

「ねえ姫路さん、今日言つてた召喚獣大会のことだけど、一緒にでようか？」

「えっ？明久君は私なんかでいいんですか？」

「僕も元々でる予定だったし、姫路さんとでてみたいよ」

「じゃあ、一緒にいきましょう。ありがとうございますね明久君」

そう言つて笑いかけてくれる姫路さんを見て再度決心する。

姫路さんを転校なんてさせない

第18問 僕と料理と負けられない理由（後書き）

ある程度の方が想像していたと思いますが、明久のパートナーは瑞希となりました。

次回もよろしく願います

第19問 僕と記憶と喫茶店（前書き）

PV80000突破！

ご愛読ありがとうございました。

PS・後半部分を大きく修正しましたのでよろしかったらご一読ください

第19問 僕と記憶と喫茶店

明久SIDE

「さてと、毎日御恒例の記憶共有といきますか」

「うん。願いますよ」

僕の召喚獣である明希が僕の額に向けて手をかざす。そこから淡い光が放たれ、僕の中の記憶が確固たるものとなっていく。

この記憶の共有は眠りにつく前に毎日、明希がやってくれることだ。これをしなければ僕は今日の記憶を明日に引き継げない。しかも記憶共有をできるのも一部のため、ほとんどの事は忘れてしまうのだ。けれど、明希がくる前はなに一つ記憶を引き継げなかった。いや、自分に記憶障害があること自体、気づいていなかったんだ。

「終わったぜ」

明希に言われて目を開ける。いつものことながら体には何一つとして異常はない。

「ありがとね。それにしても明希はなんで僕の家なら出てこれるんだろうね？」

「さあな。出れるんだから出れるんだろ？」

明希は興味ないという風に言うが、これはすごい大問題だ。普通、召喚獣は召喚フィールドが無ければ出てこれない。それは明希にと

っても同じことだ。なのに、明希はなぜだか僕の家の中だけは自由に出てくることができるのだ。

まあ、そのおかげで楽に記憶共有ができてる訳なんだけどね…

「近々、召喚獣大会もあるんだろ？俺はもう寝るぜ」

そう言うとき明希はこちらの話も聞かずに消えてしまった。おそらく召喚獣たちが普段いる世界（？）のような場所にも戻ったのだろう。

僕もすることないし、そろそろ寝ようかな？

………やっぱり少し勉強しよう。それで少しでも姫路さんの足手まといにならないようにしないと。

そう思い勉強机に参考書を広げる。はっきり言えば勉強は大っ嫌いだ。だけれど、僕が我慢することで姫路さんが転校してしまう可能性が少しでも減るというなら勉強だってなんだってやってやるさ。

「ったく、お前には呆れるよ」

急に頭上から声が聞こえてくる。

「よつと！」

「明希！？どうしたのさ、寝るんじゃないの？」

なんと声の主は召喚獣の世界に帰ったと思った明希だった。

「マスター主人が頑張ってるつてのに俺だけ寝てられるかよ。それに今回は姫路さんの転校がかかってるからな」

たぶん、明希の動いた理由の9割は後者だ。

だけれど、明希が僕のことを頑張ってるって評価してくれたのは素直に嬉しい。いつもはぶっくらばうな奴だけど、ちゃんと見てくれるんだなあ……

「教えてやるからささっと参考書の21ページを開け」

「えっ？明希って勉強教えられるの？」

「少なからず主人よりはできるな」

なにが悲しくて僕は自分の召喚獣にまでバカ扱いされなければなら
ないんだろう……

「で、ここはこうなってこうなるわけだ」

「うんうん」

前言撤回、明希はかなり頭がよかった…

「清涼祭当日」

「って、ことで清涼祭始めるぜ！」

「『『いえーい！』』」

生徒会長の固い挨拶を全て省いた開始の合図に各クラスから歓声があがる。みんな、この日を待ちわびていたんだなあ…

でも待ちわびていたのは僕も同じことだ。今日の召喚獣大会、なんとしてでも勝つ！

「明久君、私たちは一回戦の一番最後ですから喫茶店にいつてましようか？」

「うん、そうだね」

いつも通り振る舞う姫路さんの笑顔は儚く、脆く、それでいて惹き付けられるものがあつた。僕は一度も姫路さん自身から転校の話は聞いていない。島田さんから聞いたことがあるだけだ。

それは僕に隠そうとしているのか、はたまた話す必要性を感じてもらえていないだけなのかは僕にはわからない。そしてその不安からか結局、僕自身からもその話題について触れることはなかった。

だから、せめて僕のできる精一杯を……

〈Fクラス〉

「明久、これを4番テーブルに持っていつてくれ」

雄二から注文品の乗ったトレイを受け取り、4番テーブルを目指す。結局、厨房係はなぜだか色々と料理が作れるムツリー二（たぶん、ウェイター目当てで色々な所を回ってた）と須川君が中心となつてやることとなった。

で、僕と姫路さんは主にホール班で手が空いたら厨房も手伝うといった具合だ。ちなみに雄二からは姫路さんを厨房に連れてくるなら僕も一緒にきてくれと指示を受けている。まったく、雄二も心配性だなあ。この前のは何かの間違えだつて証明されたのに。

「注文をお待たせしました」

指定された4番テーブルにコーヒーと胡麻団子をタキシードが汚れないようにそつと置いていく。店内を見渡せば、中々の盛況のようだった。この分なら設備の入れ替え分くらいは稼げるかな？

「ねえウェイターさん、結構かつこいいよね。あとで私たち案内してくれない？」

「あつえーと……申し訳ないのですが、僕はお仕事を立て込んでいます……」

4番テーブルにいる客の突然の申し込みに多少慌てながらも、しっかりと対応する。

「あははは冗談だつて。君にはもう花嫁さんがいるもんね」

「花嫁……ですか？」

「ほらほらあそこにいるじゃない」

相手が指差した方を見ると、そこには接客をしている姫路さんがいた。ん？

相手は確か… Aクラス戦の時に姫路さんと戦った久保君だったかな？それにしても姫路さんも久保君も楽しそうに話してるなあ……

やっぱり姫路さんも知的な人が好みなんだろうか？

はあ…… どうせ僕なんて……

「あれ？もしかして花嫁さんとられちゃって落ち込んでるの？」

「別にそんなんじゃないやありませんって。第一、その…僕と姫路さんは…そんな関係じゃ……」

「そうかな？私は結構お似合いだと思うよ。ほら頑張れ！ファイトだよ」

お客のお姉さんが僕を励ますように背中を叩く。

『キンコンカンコーン

試験召喚獣大会に参加しますFブロックの方は至急、お集まりください』

Fブロックといえば僕と姫路さんが参加するブロックだ。

「申し訳ありませんが、ただいまの放送ではいりました大会に出場いたしますので、僕は失礼いたします」

「そうかあ、もうちょっとウェイターさんと話したかったけどしょうがないね。花嫁ちゃんと一緒に大会、頑張ってたね」

「応援ありがとうございます」

姫路さんもさっきの放送で動き出したようだし、着替えのために一度厨房に戻ろう。

瑞希SIDE

「お待たせしましたご注文の唐揚げです」

「ありがとうございます姫路君」

名前を呼ばれたのに驚き顔を上げると学年次席の久保君がいました。

「久保君はAクラスの作業はいいんですか？」

「僕たちのクラスの開店は10時からだからそれまでは各々自由行動さ」

翔子ちゃんも坂本君と売上勝負をしているのになぜ開店が遅いのでしょうか？

「それより姫路君、あっちの調子はどうだい？」

「あっち…ですか？」

なにを言っているのかわからない私をくんでくれたのか久保君が小

指でなにかを指し始めました。その方向を目で追うと、トレイに胡麻団子とコーヒーをのせて運んでいる明久君がいました。

「だから吉井君との関係に進展はあったかって聞いてるんだよ」

「はわっ、違いますよ。私と明久君はそういうのじゃなくて……」

「隠そうとしても無駄だよ。あの日の君を見れば誰だってわかるさ」

「あう……」

そういえばそうでした……

久保君にはAクラス戦の時になぜだか私の気持ちがバレていたんです……

「まあ、隠しても無駄ってことで教えてくれるかな？」

「うう……そんなこと言われましても何も進展なんてありませんよ……」

……

「そうなんだ……」（これは驚いた。どちらとも一歩も動いていないのか……）

第一、私が明久君とそんな夢の様な関係になれるわけないんです……落胆しながらも明久君の方を横目で見ると、若い活発そうな女性と楽しそうに話していました。やっぱり明久君も活発な女性が好きなんだでしょうか……？
どうせ私なんて……

「まあ、そんなに落胆することないんじゃないかな。二人の新婚姿

はとってもお似合いだよ」

「新婚って…私と明久君のことですか？」

「君たち以外に誰がいるっていうんだい？」

からかっているのか久保君はとても楽しそうでした。

でも、ただの仮初めでも明久君とお揃いの衣装…

それも女の子なら誰でも憧れる花嫁の衣装を明久君と対になって着れる。それだけで私はとても幸せです。

例え叶わない願いだとしても、いつの日か本当のこの情景にたてたのなら私は…

『キンコンカンコーン

試験召喚獣大会に参加しますFブロックの方は至急、お集まりください』

「あっ！私はこれにでないといけませんから失礼しますね」

「うちの代表もでるらしいけど頑張ってね」

「はいっ！応援ありがとうございますね」

明久君の方を見れば動き出そうとしていたので、厨房に遠い席にいる私は先に動くことにしました。

明久SIDE

「ただいまー」

「今戻りました」

厨房の手前で姫路さんと合流した僕は制服が置いてある控え室へ向かう。

「おつ、明久に姫路か。お勤めご苦労さん」

「……おかげで盛況」

控え室に向かう途中で厨房でなにやら作業をしていた雄二とムツツリー二が話しかけてくる。

「盛況って言っても僕はただウェイターをやっていただけだからさ……」

「私もウェイトレスをやっていただけですし……」

「そんなことはないぞ。二人とも結構評判いいしな」

「……売上上々」

たぶんムツツリー二はまた写真を裏で取り引きしていたのだろう。と、なると姫路さんのウェディング姿の写真でも売ってるのかな？ 本人に許可もなく売買するなんて実にいかがわしいことだ。これは後で売ってもらうしかないな。きつと明希も喜ぶにちがいない。

「そついえば雄二、一回戦はどうだったのさ」

「俺が動く前に翔子が全滅させた……」

「そうなんだ…がつ、頑張つてね……」

「おつ……」

すごい、さっきまで活き活きとしていた雄二がこの話題に変えたただけで、まるで生気を吸いとられたようになって……

「さてと、僕たちは制服に着替えなきゃだからそろそろ行かせてもらつよ」

「いや、明久と姫路はそのままの姿ででくれ。その方が宣伝になる」

確かに雄二の言うことには一理ある。

それに宣伝になれば客が増える↓客が増えれば利益が増える↓利益が増えれば設備が改善できる⇨姫路さんが転校せざるおえない理由の内の一つであるFクラスの設備問題を解決できるということだ。
うん、確かに悪くはないかもしれない。ただ――

「僕はそれでもいいけど、姫路さんはウェディングドレスのまま大会にでて恥ずかしいくない？」

「恥ずかしいと言ったら嘘になりますけど私、がんばりますっ！」

正直なところ、姫路さんは恥ずかしがり屋だと思っていたけど、案

外芯が通っていて度胸があるのかもしれない。いや、ただ単にみんなのために頑張りたいだけなのかもしれない。

姫路さんの真意は僕にはわからないけど、その努力を無駄にしないためにも大会で優勝しなきゃいけない。そして姫路さんのお父さんを見返してやるんだ！

「なら二人とも頼んだぞ」

「……更なる利益」

もしかしてムツツリー二は服が破れるなどのラッキーイベントを期待しているのだろうか？召喚獣同士が戦う大会だからそんなことはないのになあ…

いや、僕個人的には見てみたいけどね。

「じゃあ姫路さん、そろそろ行こうか」

「はいっ！行きましょう明久君」

僕と姫路さんは並んで大会の会場へと向かう。

僕の隣を歩く姫路さんの顔は今日もいつもと変わりなかった…

第19問 僕と記憶と喫茶店（後書き）

次回、ついに試験召喚大会開幕！

さて、久保君はいつ壊しましょうかね？なかなか踏ん切りがつきません…

修正したあれは後ほど他の時にやりますのでご了承を

第20問 僕と姫路さんの広まった噂（前書き）

今回は異端審問会の面々が増大！？な話です。

第20問 僕と姫路さんの広まった噂

明久SIDE

「えー、今から試験召喚大会第1回戦を開始します」

司会を勤める男子生徒が言う。3回戦までは一般公開されないというのにやけにギャラリーが多いなあ…

他のクラスみんなはそんなに暇なんだろうか？

「まずは赤ブロックBクラス岩下律子菊入真由美ペアご入場を！」

「頑張ろうね律子」

「うん」

僕たちとは反対側の立ち台に二組の女子生徒が現れる。んー、どこかで見た気がするんだけどどこだっけ？

「では、召喚してください」

「「サモン！」」

お馴染みの魔方陣から二匹の似通った召喚獣が出てくる。特徴的には姫路さんの召喚獣の装備を簡素にしたような感じだ。

Bクラス岩下律子 数学179点

Bクラス菊入真由美 数学163点

さすがBクラスだけとあって中々の点数だ。力になれないとしても、姫路さんの足を引っ張らないようにしないと。

「皆さん大変長らくお待たせしました。本日はこの二人のために来た方も多いのではないのでしょうか？対する青ブロックは我らが文月学園の誇る二人！Fクラス吉井明久、姫路瑞希ペアです！」

「『『『いーーーーーい！！』『』『』』」

なんだか観客がすごく沸き立っている。待機場所からは司会者が何を言っているかよくわからないけど、なにかみんなが喜ぶようなことでもあったのだろうか？

「行こうか姫路さん」

「はいっ！がんばりましょうね明久君」

僕たち二人も立ち台の階段を登る。

「二人ともがんばれー！」

「絶対優勝しろよー！」

「二人ともお幸せにー！」

なんだか途中でおかしな言葉が聞こえた気がしたけど、応援してくれた観客席の方に手を振り返す。

「なんと本日の吉井明久、姫路瑞希ペアは新婚姿でご登場です！」

司会の男子生徒は立ち台に立った僕たちの説明でもしてくれるようだ。ついでに喫茶店の宣伝もしてくれると嬉しいんだけどなあ。

「これは普段から廊下で手をひき合い愛の逃避行、公然の目の前でおんぶといちゃついている二人も遂にゴールインということでしょうか!？」

「えっ!？」

「ふえっ!？」

僕と姫路さんが突然の司会者の暴露に驚くが司会者は止まる気はないようだ。

「遂にあの二人もゴールインとは今、私は非常に感動しています！」

「ちょっと待つてよ!これは僕たちがクラスで経営しているウェディング喫茶の衣装なんだ！」

立ち台の上から必死に司会者に弁明する。ふと隣を見ればショックからか姫路さんはショート寸前になっていた。

「なんと二人の結婚記念にFクラスで喫茶店を開いたようです!これは是非とも行かなければなりませんね！」

「どういつ話の聞き方したらそうなるのさ！」

たぶん、この司会者は僕の話なんか聞く気がないんだろう。

「あの二人の結婚記念だ！？」

「こりゃあ、この後行くしかないな」

「俺、全種類注文して持ち帰るかな」

「カメラは絶対に必要だろ」

「まあ、落ち着けつて。まずは二人の初めての共同作業を見ようぜ」
観客が口々に言いたいことを言っている。どうしてこんなにも噂が
広まってるんだ！？一度落ち着いて今までやってきたことを考えて
みる。

Bクラス戦のあとに足がつってしまった姫路さんをおぶってFクラ
スに帰った。

そのあとに須川たちに見せ物にされかねない状況になったので姫路
さんの手をひいて廊下に逃げ出した。

そして、それらを行った時間帯はホームルーム終了時間と被ってい
るため、廊下には様々な生徒がいる。

要するに学園中に噂が広まるには充分すぎたってことか……
言われてみればそうだね。だって目撃者が多すぎたんだもの…
どうしよう…今度こそ姫路さんに嫌われかねないよ……

「吉井さん、優勝についてなにか意気込みはありますか？」

こちらの気も知らない司会者がのんきにたずねてくる。ここはこれ以上噂が広まらないように当たり障りのない答えにしなければだ。

「絶対に優勝したいです」

「皆様聞きましたでしょうか！吉井さんは絶対に優勝したいのとこの！すなわち二人で如月ハイランドに行きたいということです！！」

「ひゅーひゅー」

「新婚早々お熱いねえ」

「よっ、我らの代表！」

なんでこの司会者はこんなにも曲解して考えられるんだ！？
それに観客も観客だ。なんでみんな揃ってFクラスの野次馬化して
るんだ！？

確かに姫路さんに行きたくないと言えば嘘にはなるけど、それとこ
れは別問題だ。

「では、岩下さんも優勝にむけてなにか一言を」

司会者が対岸の女の子にマイクを向ける。

「二人の邪魔したくないので、私たち棄権していいですか？」

「ちょっとなに言ってるのさ！ちゃんと闘おうよ！」

「おーと、ここで吉井選手が棄権を拒否しました！そんなにまでして二人の愛の力を見せつけたいのか、この野郎！」

もう、この司会者を止めれる気がしない…

「いいぞ吉井！」

「男をみせてやれ！」

「絶対勝てよー！」

観客も止めれる気がしない……

「では、のろけも終わったことですしお二方召喚を」

うん。もうこの司会者の言っていることを気にしたら負けだと思う。そう割り切って、隣でショート寸前の姫路さんに耳打ちする。

「（姫路さん、これはドツキリの一種だから気にしないでいいよ）」

「（ドツキリ…ですか？）」

「（うん、ドツキリ。こうやって僕らを混乱させる相手の策略なんだ）」

ごめん、岩下さん、菊入さん…

「（そうだったんですか。ならそれに惑わされないようにしなきゃですね）」

よしっ、姫路さんがショート状態から回復してきたぞ。

「（うん、そういうことだから召喚しようか）」

「（はいっ！）」

「「サモン！」」

魔方陣から僕と姫路さんの召喚獣が現れる。ちなみに明希に今日になるべく喋らないようにと釘をさしているから基本的には喋らないはずだ。

Fクラス吉井明久 数学96点

Fクラス姫路瑞希 数学447点

「明久君、前より点数上がってますね」

「うん、この日のために明希に教えてもらったんだ。けど姫路さんに比べたらまだまだだよ」

「そんなことはありませんよ。明久がとても頑張ってくれたのがわかりますよ」

「そう言う姫路さんだって前より点数上がってるじゃないか」

そう、たしか前に明希に聞いた時は姫路さんの数学の点数は400点台初頭と言っていた。元の点数が低く、伸び代のある僕と違い、学年トップクラスの点数をここまで上げるのは容易ではないはずだ。

「私、どうしても勝ちたいんです」

「えっ？」

「勝つて、みんなと、明久君ともっと一緒にいたいですから」

姫路さんのその目には決意が宿っていた。あのAクラスと闘った時のように…

「明久君なら私がなにを言っているかわかりますよね？」

「うん…」

あえて明確になにを知っているかは答えない。

「そうやっていつも私をさりげなく、知らないふりをして助けてくれるんですね」

僕自身は知らないふりをするつもりなんか……いや、知らないふりをしていたんだ。いつも真っ正面からの気持ちを向けるのがこわかったから。拒まれたらと思うとこわくて、いつも気づかれないようにと行動していた。

僕が姫路さんを笑顔にできなくてもいい。

僕に笑顔を向けてくれなくてもいい。

ただ、姫路さんが笑ってさえいてくれればそれでよかったんだ。

僕はそんな臆病で卑怯なやつだから…

「姫路さん…」

姫路さんの手が僕の手と重なる。

「がんばりましょう。明久君」

「うんっ！がんばろうか姫路さん」

今はこの距離でいい。いつか想いを伝えられるその時までには精一杯足掻いてみせるさ。

「では、試合を開始します。両者ともよろしいですか？」

「」「」「はい！」「」「」

「試合開始！」

開始の合図と共に相手の召喚獣は歩幅を合わせて突っ込んでくる。中々息があっているようだ。だけれど――

「姫路さん！」

「はいっ！」

合図を受けた姫路さんが召喚獣を明希の後ろについて走らせる。

明希は僅かに前に出ていた菊入さんの召喚獣と斬り結ぶと、すぐに後ろに受け流した。そして明希の後ろにでスタンバイしていた姫路さんの召喚獣に斬られ菊入さんの召喚獣の点数は0となり、戦死する。

「真由美！」

「あちゃーミスっちゃった。ごめん律子」

「私が真由美の分まで頑張るから安心して」

仲間の戦死にも取り乱すことなく岩下さんの召喚獣が突っ込んでくる。

僕は明希を左右に散るように操作して攪乱する。

「ちょこまかとすばしっこいわね」

岩下さんが明希に攻撃を当てようと躍起になっているところに手筈どおり、姫路さんの召喚獣が接近して大剣が振り下ろされる。もちろん一撃で戦死だ。

「勝者青ブロック吉井、姫路ペア！」

「「「「いえーい！」「」」」」

雄二SIDE

「……以上が二人の様子」

ムツツリー二がビデオカメラをしまいながら言う。俺たちは試合会場に仕掛けてあるムツツリー二の隠しカメラから試合を見ていたのだ。

「それにしても明久も姫路もやりおるのう」

「当たり前だろ？あいつらのコンビは最強だ」

「最強って坂本はなにか根拠があるの？」

「ああ、ある。考えてみる明久の利点と弱点を」

疑問に首をかしげる島田に疑問で返す。

「吉井の弱点っていったら点数が低いことよね」

「強みは召喚獣の操作がうまいことじゃな」

島田と秀吉がお互いに確認しあうように言う。

「なら姫路はどうだ？」

「瑞希は総じて点数が高いことが強みよね」

「弱点と言える程でもないが、明久に比べれば召喚獣の操作で見劣りするのう」

「……相互扶助」

ムツツリー二の回答にうなずく。

「その通りだ。明久と姫路はお互いの弱点を補うことができる。例えば普段の明久の戦闘スタイルは召喚獣の操作が上手いことを活かしたヒット&ウェイが主流だ。しかしこれでは明久の点数の問題から与えられるダメージはごく僅か。だが、攻撃の手が姫路に変わることにより一度の攪乱で決着を付けることができる」

「でもそれなら瑞希じゃなくても点数の高い人なら誰でもいいんじゃないの？」

島田も差を感じてか少し不機嫌になっている。

「確かに今の試合くらいなら他の点数の高いやつでもこと足りただろうな。だが、二人の真の強みは——っと、これは言うべきじゃないな」

「なんじゃ雄二よ、もったえぶらずに教えてくれないじゃろうに」

「たまにはみんなも自分で考えるんだな」

「……薄情」

「なんとも言え」

そう言い捨ててさっきの試合のことを思い出す。

例えばだ、明久が押される場合は相手の手数が多く避けきれないときだ。しかし姫路がいれば、その圧倒的な突破力により解決できる。逆に姫路が押される場合は明久のように技術に長ける者を相手にしたときや、翔子のように実力が均衡している者と対峙したときだろう。しかし前者においてはこの学園内で明久を越えられる者はおらず、後者においても明久に攪乱されている間に姫路にやられてしまう。明久を相手にしないという手もあるが、持ち前の召喚獣操作の上手さで足を掛けられたりしてしまい、その隙に姫路にやられてしまうだろう。

そして何よりも、明久と姫路の真の強みは表面じゃない。あいつらの中にある。お互いがお互いのために精一杯なところに。

常にお互いを気にかけているから互いに互いを庇おうと、助けようとする。それはあいつら二人にとつては何よりも大きなことだ。たぶん、1+1じゃ割りきれないものがそこにはある。理解できるものじゃない。それがあいつらだけの強さなんだ。

心と心のつながり。お互いが互いのために。それは似た者同士の二人だからこそだろう。どちらかのピンチには必ずどちらかが現れる。そして相手のために自分の限界を越えていくんだ。だからあいつら二人は負けない。互いがそこにいるから。それだけで理由として充分だ。

最強と対峙するってか。面白いじゃねえか。見せてやるよ明久、俺の本気をな

第20問 僕と姫路さんの広まった噂（後書き）

明久と瑞希の試合を見て燃える雄二。

そして学園中に広まった二人の野次馬！もはや野次馬同好会！？
よろしかったら感想評価のほどよろしくお願いします。

第21問 僕と常夏と向き合う想い（前書き）

お気に入り件数90 & a m p ; ユニーク100000 & a m p ; 総合
点数300突破を一挙に達成いたしました！

拙作の様な下手の横好きで作ったものにおつきあいいただき、あり
がとうございます！

第21問 僕と常夏と向き合う想い

明久SIDE

「ただいまー」

「今戻りました」

姫路さんと共に裏口から厨房にはいる。

「おお、明久に姫路よ、大奮闘じゃったな」

なぜだかウェディングドレスを着ている秀吉が盛り付けをしながら言う。

姫路さんは島田さんを見つけたのか、厨房の奥へと向かっていった。

「いやあ、それほどでもないよ」

「謙遜することないぞ。俺も本気をだしたくなっただけ」

楽しそうに笑う雄二を見てやっぱりかと思う。常々感じていることだが、どうも雄二は極端に逆境に燃えるタイプようだ。

「じゃあ僕も本気をださなきゃだね」

「明久の本気なんて恐くともないけどな」

「生憎、僕にも負けられない理由があるからただじゃひかないよ」

そう、負ける訳にはいかないんだ。絶対に。

「まっ、お前の大好きな姫路のためだからな」

「うん」

「おっ、珍しく否定しないんだな。それだけのことがお前にあったってことか。なに、俺もなにがあつたか聞くほど無粋じゃねえよ」

いつもながら雄二は勘が冴えてる。それでいて踏み込んでこないのはありがたいことだ。ありがたいことだけ――

「雄二、秀吉、ムツツリー二聞いてほしいことがあるんだ」

周りの三人を見回せば、みんなこくりとうなずいてくれた。

「僕は今まで正面から向き合おうとしなかった。隠れて、隠して、偽り続けながらも、ある人のためになるならそれでいいと思っていた。

だけど、本当は違った。僕はその人に真っ直ぐに向き合うのが怖かつただけなんだ。否定されるのが、拒絶されるのがたまらなく恐くて逃げていたんだ。

でも今日、気づいたんだ。このままじゃ、いつまで経っても近づけないって。むしろ僕から離れていつちゃうんじゃないかって恐怖に似たものも感じた。だから、少しずつだけど、ほんの小さな歩幅だけど、歩み寄ってみようって決めたんだ。いつか届くまで、何度も、何歩も、いつまでも。

これはその第一歩だから、みんなに聞いてほしかったんだ」

言ってしまった。言っている間は夢中でなにを言っているかいまい

ち解っていなかったけど、これでもう僕の思いから僕自身が目を背けることはできない。

「明久、お前の思いはよくわかった」

「わしらもできうる限りバックアップするのじゃ」

「……失敗を恐れるな」

「みんな…ありがとう……」

みんなの言葉が胸に染みる。だけれど、これは僕に対する一種の枷だ。

もう目を背けることも偽ることもできないという枷だ。

この枷が僕から外れた時、僕は笑っていられるだろうか？
そばに君はいてくれるだろうか？

それは誰にもわからない。いや、君だけが答えを知っているんだね。
僕は厨房の奥にいるただ一人を見つめ、決心する。

もう逃げたりしない。

（数分後）

「それにしても中々の繁盛具合だよね」

一緒にサラダを作っている雄二に言う。

「確かに結構な売れ行きだ。これもお前と姫路の宣伝効果だな」

「からかわないでよ。姫路さんとはかく、僕なんか宣伝にならないよ」

ちなみに今のホール班は姫路さん、島田さん、秀吉の三人だ。二人の分のウェディングドレスはムッツリー二がさつき高速で作り上げていた。

つくづく自分の欲望に忠実なやつだなあ……

「あの観客を見ても本当にそう思うか？」

「うっ……」

試合前のことを思い出して言葉に詰まる。

「なんでFクラスのみんな以外の生徒もあんな風になっちゃったんだろ……」

「お前、自分のしてきたことわかってるよな？」

「うん。わかってはいるけどさ、このままじゃ姫路さんに嫌われちゃうよ」

原因なんてわかりきっている。学園中に噂が広まるほどの人数に見られているのだから。だけど、噂になるとしてもなぜあんな行為に

でているのが解らない。

「安心しろ、姫路はそんなことでお前のことを嫌いになったりしないからな」

「だとしても、みんなして質^{たち}が悪いよ……」

「まあ、人間は元来首を突っ込みたがる生き物だから諦めろ」

「そんなぁ……」

「いったい僕はどうしたら、あの野次馬達から逃れることができるんだろうか……」

「（口が割けても須川達が布教活動をしてるなんて言えないな……）」

「ん？雄二、なにか言った？」

「あつ、いや、なんでもないぞ」

怪しい。この上なく怪しいけどここで騒ぎをおこす訳にもいかないから、大人しく引き下がることにする。

「おい、どういふことだ責任者呼べ！責任者！」

突然、ホールの方からガラの悪そうな声が響いてくる。

「雄二！」

「ああ、わかってる」

僕と雄二は作りかけのサラダを残し、厨房を出ていく。

「マジで汚ねえ机だな。これが食事をだす机かよ!」

坊主頭の生徒がクロスで隠していた長机に文句を言っている。

一応、白のクロスで体裁を取り繕っていたものだが、Fクラスにある長机なのだから衛生的に良いものとは言いづらい。

「すみません。今、新しいものを用意しているところですので少々お待ちください」

見かねた姫路さんが坊主頭の生徒に謝罪をしている。『今すぐ用意する』と言わなかったのは姫路さんなりの配慮だろう。

「へえ、姉ちゃん中々可愛いじゃねえか。俺と遊ぼうぜ」

坊主頭が姫路さんの手を強引に掴む。

「はっ、離してください!」

姫路さんが振りほどこうとするが坊主頭は下卑た笑いを浮かべるだけで離す気はないらしい。あいつめ…

「明久、あとは俺に任せていってこい」

雄二が僕の肩に右手をおきながら言う。

「でも……」

ここで坊主頭を殴れば店の営業に大きく支障をきたすだろう。

「うそ偽りなく向き合っただろ？」

なら、お前がやりたい様に姫路を護ればいい。いけ、明久！」

「雄二……ありがとう」

雄二がどんな作戦をたてているかわからないが、今僕にできることは――

「姫路さんを離せえええ！！」

坊主頭の所に走り、おもいつきり拳を叩き込む。

「じぶお！？」

坊主頭が不様にも壁に叩きつけられるのびる。僕は姫路さんを庇うように前に出ると、坊主頭の連れのモヒカンを睨み付ける。

「てめえ、客にむかってなにしやがる！」

「おや、なにかご不満でもありませんか？」

雄二が腕を鳴らしながらやってくる。

「不満もなにも夏川がぶっ飛ばされたんだよ！」

あの坊主頭は夏川と言っのか。

「すいませんが、こちらの花嫁には先約がありますので気安く触らな

いでいただけますか？」

「あぁん、先約だと！？」

「ええ、そちらのタキシードを着た花婿が先約済みですのでご引き取り願えますか？」

雄二、なに言ってるんだよ！

このままだとモヒカンが僕に殴りかかってかねないよ！？

「ふざけんじゃねえよ！そんな理屈でぶっ飛ばされたてたまるかよ！」

「ふざける？本店においでの皆様、聞きましたでしょうか？このモヒカンは二人の関係を邪魔するようでございますが、いかなさいますしょうか？」

雄二が店内中に響き渡る程の大きさで言う。

「はぁ、てめえいつたいなに、っていたっ！」

あつ、客席からモヒカンにフォークが投げつけられた。

「なにしゃがる！」

「それはこっちの台詞だ！」

「そうだ、てめえこそ二人の邪魔してんじゃねえよニワトリ野郎が！」

「邪魔なんだよ出てきやがれ！」

「ほんと、ああいう奴って最低ね」

「食事が不味くなるわ」

「……でーてけ！でーてけ！！」

店内中からモヒカンへと避難が集まる。

ここに来ている人は、時間の関係からも僕と姫路さんの試合を見ていた人たちがほとんどだろう。すなわち、野次馬ながらも僕と姫路さんの仲を応援してくれている人たちで埋めつくされているのだ。雄二は最初からそれをわかっていて僕に突っ込ませてくれたのだろう。

「ちっ、ガタガタうるせえ客だ！もとはと言えばてめえのせいだぞ！」

逆ギレしたモヒカンが殴りかかってくる。

僕自身、腕つぶしは対して良くはない。だけど――

「ほんと、あんたたちみたいな客は迷惑なんだよ！！」

姿勢を低くして、相手の拳をかわす。

そのままがら空きになった鳩尾に思いつきり拳を叩き込む。

バタッ

「えっ………？」

ありえない方向から聞こえてくる誰かが倒れる音。

僕がその方向、僕の後ろを向くとそこには倒れてる姫路さんがいた。

「姫路さん！」

すぐに駆け寄り抱き抱える。見れば、頬が腫れていた。

おそらく、僕のよけたモヒカンの攻撃が当たってしまったのだろう。

僕がよけさえしなければ……

「明久…君、私は大丈夫です…から……気にしないでください」

「気にしないなんてできるわけじゃないか！」

できるわけない。僕のせいで姫路さんを傷つけているのに見過ごすことなんて…

「てめえ、よくもやりやがったな！」

いつの間にか起き上がった坊主頭の夏川が殴りかかってくる。

まずい、姫路さんを抱き抱えてるから避けることも、反撃することもできない！

雄二も、のびているモヒカンを教室からだしている最中だから援護は期待できそうにない。とにかく姫路さんだけは護ろうと、姫路さんを庇うように強く抱きしめる。

「さっきから邪魔なんだよ！！」

「ふぐお！？」

だけれど、僕に夏川の攻撃が届くことはなかった。

「主人、よく姫路さんを護ってくれたな」
マスター

聞き覚えのある声に顔をあげる。そこには僕たちの前に凜と立つ明希がいた。

「明希、召喚フィールドもないのにどうして…」

「んなこん知るかよ。それに今はこのクズの始末が先だろ？」

本当に明希はわからないことだらけだ。
だけど、このピンチの状況ででてくれたのは願ってもないことだ。

「明希ありがとう」

「礼なんているかよ。俺たちは一心同体だ。
それよりも主人はきっちり姫路さんを護つとけよ」

そう言うとも明希は夏川へと飛びかかっていった。
いや、もうそれは虐殺じゃないかってほどの惨劇だったよ……
人の何倍もの力がある召喚獣が弱ってる相手に対して、本気で殴る蹴る、木刀での滅多打ちなどの暴行を加えているんだからさ……
少し、同情したくもなかったよ…

「数分後」

「ちくしょう、おぼえてるよ！」

数分間にもわたる明希の一方的な虐殺がようやく終了した瞬間に夏川は一目散に逃げ帰っていった。

「ちっ、まだ逃げるだけの体力が残ってたか」

明希も明希でこんな物騒なことを言っている。

普通、足を引きずりながら涙目で逃げていく人にそんなこと言えるか？

「うっ……」

明希が急にふらふらしはじめた。

「明希君大丈夫ですか！？」

「うん、大丈夫。どうやら召喚フィールドもないのに長くいすぎたみたい……」

悪いけど、もう戻るね」

こんな時にまで姫路さんに対する口調を律儀に守って、明希は召喚獣の世界へと帰っていった。結局、明希がなんででてこれたのかわからずじまいだったなあ…

「皆様、当店の催しはいかがだったでしょうか？」

いつの間にか雄二がマイクを持って演説を始めている。

「当店のメインでございます二人とその召喚獣の活躍は中々のものではなかったでしょうか？」

雄二のやつ、今までのことを全て催して片付けるつもりだな…

確かにその方が店の評判にも差し障りが少ないだろうけどそううまくいくかな？

「よつ、大将いいもん見せてくれたね」

「中々おもしろかったぜ」

「いいスパイスになったわ」

意外にみんな騙されているよう——ん？

よくよく見たら、誉めてくれてるのって観客席にいた人ばかりじゃないか！？

……………そうか。

みんなが誉めてくれる事によって疑っている人にもこれが本当に催しなんだって信じ込ませようとしてるんだ。

事実、効果があるようで、どこからも疑いの声はあがっていない。にして、この団結力はただ者じゃないよね…

これを敵にまわしてと思うと涙がでてきそうだよ……

「明久、姫路、いつまでも抱き合っていないでみんなに挨拶でもしたらどうだ」

「なつ、なんてこと言つのさ！？」

「はわわ！？こつ、これは違うんです！」

雄二の爆弾発言により僕と姫路さんは離れ、互いに背中合わせになる。

「こんな初な二人ですが、これからどうぞよろしくお願いいたします！」

雄二が深々と礼をして演説という名の取り繕いが終了した。

「いやあ、いいもん見せてもらっただな」

「吉井って案外強かったんだな」

「バカ言え、あれは愛する彼女を護るために出した力だぞ」

「そういうのってロマンチックよね」

「そうだな。やっぱり二人は——」

「『『『文月学園代表カップルだな（よね）』』』」

なんだろう段々耐性がついてきたのか、はたまた雄二たちに暴露したせいなのかわからないけど以前のように取り乱さなくなった気がする。

「姫路さん、そろそろ次の試合の時間だし行こうか？」

「そつ、そうですね」

姫路さんは元から恥ずかしがり屋ということもあってか、まだ慣れ

てはいないようだ。僕はそんな姫路さんの手を掴み、歩きだす。

「姫路さん、絶対に優勝してみせるよ」

「明久君…」

一つ、僕の枷が外れた気がした。

これからも一つずつでいいから外していこうと思う。

時には新たな枷が付くこともあるだろうし、回り道をすることもあるかもしれない。だけど、必ずすべてを取り払っていつか想いを伝えようと思う。

今は君のためになりたいと伝えるだけでも手一杯だけど、いつかは君に――

「よしっ、ベストショット撮ったぞ！」

「なに！？俺にも見せてくれ！」

「みんな、吉井が珍しく堂々としている今のうちに撮るんだ！」

「」「」「おうつ！」「」「」

「なんでそうなるのさ！」

さすがに耐えきれなくなった僕は一目散に会場へ向けて走りだしながら思う。

どうして格好よく締めさせてくれないんだよ！

第21問 僕と常夏と向き合う想い（後書き）

前回書き忘れていましたが、19問を少しばかり加筆修正いたしました。

地味に重要(?)な部分が削られてますのでお時間がありましたら一読ください。

では、次回もよろしくお願いします！

第22問 僕とあいつとあいつの彼女！？

明久SIDE

「さあ、はじまりました第2海戦！」

司会者が高らかに宣言する。次はどんな爆弾発言を用意してることやら……

「まずは赤ブロック、Bクラス根本恭二、Cクラス小山友香ペア！」

根本恭二…

忘れもしないその名前。

姫路さんの大事なラブレターを使って脅しをかけたばかりか、姫路さんと島田さんを入質にまでとった卑怯なやつの名前だ。

これは僕自身が自力で覚えていられた数少ない記憶のうちの一つ。理由はわからない。だけど、明希に記憶共有をしてもらっていないのに覚えているのだから、僕自身が覚えていた他ならない。

「続きまして青ブロック——」

さあ、なんて言ってくる。今の僕はそうそう取り乱さないぞ。

「Fクラス吉井明久、同じくFクラス姫路瑞希ペアです！」

あれ？

意外に普通だった…

若干、拍子抜けしながらも壇上へ向けて階段を昇る。

「さて、ここで皆様にビックなお知らせがあります。

なんとFクラスのウェディング喫茶にて二人の写真を50枚も収録したメモリアルブックが販売しているとのことですよ！」

「「「ぬああんだってえええ！？」」「」」

観客が訳のわからない驚き方をしている。

というか、たぶん僕と姫路さんが誰よりも驚いていると思う。

だって、許可した覚えもなければ撮られた覚えもないよ！！

さて、姫路さんがどれだけ動揺してるか確かめるために横目で見てみる。

「二人って、いったい誰でしょうね？」

「あはははっ、だっ、誰だろうね……」

前言撤回。

姫路さんは自分が撮られているとは露程も考えていないようだ。もはや、天然を通り越して文脈を読んでいない気がする……

「更にただいまはいりました情報によると二人の最新ベストショットも販売とのこと。どちらも数には限りがありますのでお早めにごうぞー！

お求めはムツツリ商会まで！」

ムツツリニイイー！！！！！！

あいつめ……

『……記念に一枚』

『……上々の売上』

って、そういうことだったの!?
でも待てよ。50枚も撮られたっけ?

……あっ!

そういえば土日の補習の時にムツツリー二がこちらをよく撮ってたっけなあ。
てつきり姫路さんを撮ってたと思ってたら、僕たち二人を撮ってたんだ……

「数に限りがあるだど!?!」

「これを逃したら一生後悔するぞ!」

「こうなりや大人買いだな」

「よしっ、俺が買ってくるからお前はこのビデオカメラで録画しとけ」

「任せとけ。ちゃんと俺の分も買ってこいよ!」

なにが『……失敗を恐れるな』だ!
もうなんか戻れないところまで失敗してる気がするよ!!

「では宣伝も済みましたし、両者召喚「待ってくれ司会者」

根本が司会者の言葉を急に遮り司会者からマイクを受け取ると一呼吸いれる。

まさかまた卑怯な手を使う気なんじゃ…

「吉井に姫路、俺はお前らにすまないことをした」

根本は突然、土下座を شدした。まさか、あの時のことを謝罪する気なのか？

「正直、俺の言葉なんて聞く気もないと思う。

だけどこれだけは言っておきたいんだ。俺は正々堂々お前らと闘いたい。

あんなことした人間が言えた言葉じゃないってことくらいはわかってる。

だけれど俺はもう誓ったんだ。正々堂々とまっすぐに生きるって。ただ、それだけを言いたかったんだ」

いったい根本になにがあつて、どういう心境の変化をもたらしたのかわからない。だけれど、許してしまつていいのだろうか？

姫路さんをあんなにも苦しめた人間をそうやすやすと…

「いいじゃないですか」

「えっ？」

小さく、僕にしか聞こえない程度に姫路さんが言う。

「人は変わるんです。

誰かと関わって、誰かに関わって、変わっていきけるんです。

それは素晴らしいことだと思っんです。だから、許してあげましよう？」

誰かと関わって、誰かに関わってか……

僕は姫路さんと関わって色々なことに気づけた。色々なものをもらった。

だけど僕はなにかをしてあげただろうか？

なにか姫路さんに変化を与えられただろうか？

たぶん答えはNOじゃないかと思う。

だけど、僕に言う姫路さんの目は僕を映していた。

まるで僕が姫路さんに変化を与えたのだと言わんばかりに……

「根本君、正々堂々勝負しよう」

「吉井…許してくれるのか……？」

根本は涙がつたう顔をあげて言う。

人前で泣くなんで、本当に悪いと思っていたんだろう。

「違うよ、姫路さんが許してくれたんだ。正直、僕はまだ根本君を許しきれていない。だから許してくれたのは僕じゃなくて姫路さんなんだ」

「そうか……」

ありがとな姫路。あんな酷いことをした俺を許してくれて。

それと吉井、今はまだお前に許してもらえないかもしれない。だけど、いつかお前にも信用してもらえるように俺はがんばろうと思う」

「うん」

まさか根本がここまで真剣に考えているなんて思ってもみなかった。案外、根はいいやつなのかもしれない。

「だから今は一組の相手として戦ってほしい」

「のぞむところだよ」

「お互い、がんばりましょうね」

お互いに対岸にいるため、握手はできないができる状況なら握手をしていたのだろう。

「なんと感動的な展開なのでしょうか！

あの学園中で卑怯と噂になっていた根本恭二すらも我らが二人は改心させたのです。これはカップル対決に目が離せませんねえ」

「カップル対決…？」

僕と姫路さんは周りのみんながカップルだと勝手に思い込んでいるけど、それではカップル対決にはならないだろう。

「あつ、もしかして吉井は俺と友香が付き合ってるの知らなかったか？」

「ええ！？

知らないよそんなこと！今、初めて聞いたよ！！」

根本の突然の発言に驚きを隠せない。

「なによ、私が恭二の彼女じゃいけないわけ？」

「いや、そういうわけじゃなくてさ……」

確か雄二の話だと、根本を女装させて写真を撮ったって話だよなあ……
小山さんもよくそんな人と付き合ってるよね……

「本当はこの試合のあと、恭二と別れようと思ったの」

「ゆっ、友香！？」

そりゃそうだよ。誰も女装趣味の人とは付き合いたくないと思うよ。

「だけどね、さっきの恭二見てたら見直しちゃった。
だって、私の大好きな会ったばかりの恭二だったから」

そう言う小山さんの顔はとても懐かしそうな、楽しそうな笑顔だった。

「友香……」

ごめん。俺、間違ってたんだよな」

「いいのよ。また二人でやり直していきましょ？」

二人はいいカップルになるんじゃないかな。

たぶん、なんだかんだ言ってもお互いにお互いが必要なんだと思う。

「では、仕切り直しまして両者召喚を」

「『『『サモン！』』』」

それぞれの魔方陣からそれぞれの召喚獣が現れる。今回の科目は英語だ。

Bクラス根本恭二 英語202点

Cクラス小山友香 英語155点

根本英語が得意科目なのかAクラスの中堅程の点数がある。

Fクラス吉井明久 英語52点

Fクラス姫路瑞希 英語409点

対する僕らは総合点数では勝っているが、はっきり言って僕が雑魚同然だ。

「ごめん姫路さん。英語まではカバーしきれなかったんだ」

そう、明希に教えてもらうにも日数的に限界があって英語にはほとんど手をつけていないのだ。

「私がフォローしますから大丈夫ですよ。
だから私が危ない時には助けてくださいね」

「うつ、うん…」

姫路さんの笑顔に少しドキツとしながらも返事をする。
姫路さんが危なくなるなんてないと思うんだけどなあ……

「試合開始！」

「友香！」

「恭二！」

根本と小山さんの召喚獣が一行で走り出す。どうやら二人の狙いは僕らしい。

ガキイイイン

根本の召喚獣と明希が斬り結ぶ。

「友香今だ！」

根本の指示を受けて小山さんの召喚獣が跳びあがる。

このまま僕の後ろをとる作戦か？

「させません！」

空中で姫路さんと小山さんの召喚獣が斬り結ぶが、点数の差が歴然としているため、あっさりと小山さんの召喚獣が押しきれ地面に叩きつけられてしまう。

Cクラス小山友香 英語87点

「明久君、今助けます！」

姫路さんの召喚獣が加勢にやってくる。根本も一対二では分が悪い

と踏んだのか、明希を力ずくで押しきり小山さんの召喚獣のそばへと距離をとった。

「友香大丈夫か？」

「ええ、まだいけるわ」

たぶん、これが本来あるべき根本恭二なのだろう。

まっすぐに生き、思いやりのある人間。

もしかしたら彼を変えてしまうような出来事になにかあったのかも
しれない。

僕にはそれがなんなのかわからないし、あつたかどうかわからない。
い。

だけどいつまでも過去のことにとらわれていちゃいけないんだと思
う。

僕も、その例外ではないのかもしれないのだから……

「友香、悪いけど吉井を頼めるか？」

「私はそれでいいけど、恭二一人で姫路を相手にするなんて無理よ」

「大丈夫だ」

根本の召喚獣が走り出す。

「友香：この試合に勝つたらお前に伝えたいことがある」

「恭二！」

そう言う根本の召喚獣は一直線に姫路さんの召喚獣へと向かって

いった。

ここで僕が根本の召喚獣に足払いなどをかければ簡単に倒せるだろう。だけど、それは決意をみせた根本への裏切りとなってしまふ。だから僕は…明希は根本のために明希を抑えようとやってくる小山さんの召喚獣を見据え、構える。

互いに斬り結ぶ、その瞬間に木刀で下から上へとなぎ払う。

小山さんの獲物は宙を舞い、落ちていく。ちょうど姫路さんにやられたばかりの根本の召喚獣に寄り添うように…

第23問 僕とあの子と不思議な人（前書き）

アニメ2期は何巻で締めにするんでしょうね？

できれば6巻の内容はやってほしいです。じゃないと姫路さんの見せ場が…

第23問 僕とあの子と不思議な人

明久SIDE

「ただいま——って、凄い並んでるね…」

裏口から厨房に入る時も思った事だが店内がごった返しになっていた。

「本当にたくさんのお客さんがいますね」

姫路さんもあまりの盛況ぶりに驚いている。

これならCクラスぐらいの設備分は稼げるかな？

「おお、明久に姫路よ、よく戻ったのじゃ。店内はごった返しになっておるから二人も手伝ってくれんかのう？」

「手伝うのはいいんだけど、雄二は？」

そう、厨房やホールを見渡してもどこにもいないのだ。

「雄二なら手洗いに「帰ったぞ」「噂をすればなんとやらじゃな」

秀吉の言う通り雄二が裏口から入ってきた。

「雄二お帰り。ん？その小さな女の子はだれ？」

見ると雄二が小学生と思われる女の子と手を繋いでいる。女の子の

特徴はツインテールに小柄な体躯。どちらかと言えば姫路さんや霧島さんタイプではなく、島田さんや工藤さんタイプである。小さな女の子を連れ回ってるなんて、もしかしてこいつはそっちの気質があるんじゃない……

「あつ、バカなお兄ちゃんです!」

突然、雄二のそばにいた女の子が僕の鳩尾に頭突きをかましてきた。

「???」

僕は小学生の知り合いなんていないはずだぞ!?

「あつ、葉月ちゃんじゃないですか」

「ここにちはです、きれいなお姉ちゃん」

「こんにちは葉月ちゃん」

どうやら姫路さんとは知り合いのようだ。でも僕に小学生の知り合いなんて……

「あつ!あの時のぬいぐるみの子か!」

「ぬいぐるみの子じゃなくて葉月です」

「はははっ、ごめんね葉月ちゃん」

小さいながらも自尊心はしっかりとしているようだ。

「なんだ明久に姫路、お前らはちびっこの知り合いだったのか」

「一年の時、ちょっとね」

「私も一年の時に少し」

へえ…姫路さんも一年の時に葉月ちゃんと知り合ったのか。

そういえばあの日は姫路さんを帰り道で見かけたんだったよな。それに葉月ちゃんが持っていた小さなぬいぐるみのこともわからずじまいだし…

「ふう、木下あんたも——って、葉月!？」

「あつ、お姉ちゃん!」

ホールからやってきた島田さんに葉月ちゃんが抱きつく。

……………お姉ちゃん？

「島田さん、その子って…」

「ええ、うちの妹よ」

よくよく見てみれば、島田さんとの共通点は多々見られた。

「葉月、どうやってここに來たの？」

「葉月が『バカなお兄ちゃんはどこですか』って聞き回っていたら、あそこのでっかいお兄ちゃんが案内してくれたです」

そう言っ葉月ちゃんが雄二を指さす。

よかった、僕の悪友はまだ犯罪者にはなっていなかったようだ。

「そういえば葉月、ここに来るまでにすごいものを見たです」

「すごいもの？」

「はいっ！坊主頭とニワトリ頭の二人がきれいなお姉ちゃんがたくさんいる所で『中華喫茶は汚いから行かない方がいい』って騒いであら、周りのみんなが怖い顔してその二人をボコボコにしてたです！」

「そつ、そうなんだ…」

「そつ、そうなんですね…」

僕と姫路さんはただ乾いた笑いを浮かべるしかない。なぜなら、夏川とモヒカンを袋叩きにしていた人たちの台詞が目に見えているからだ。たぶん、二人は営業妨害をしようとしたのだろけど、あの団結力を前には自殺行為に等しいだろう……

「まさしく天罰ってやつだな」

「いいきみよ」

「あやつらのような性悪は一度、痛い目を見るべきなのじゃ」

「……自業自得」

そうそう自業自得……

「って、ムツツリー二！」

「……どうした」

「どうしたじゃないよ！ムツツリー二にみっちりと話したい事があるんだよ！」

「……わかった。控え室で話を聞こう」

姫路さんに聞かれる事を危惧したのかムツツリー二は控え室での話し合いを提案してきた。僕自身もできれば姫路さんに聞かれたくない話だから好都合だろう。

（数分後）

「ご注文を——あつ、また来てくれたんですね」

目の前にいる女性に言う。この人は今日の朝早くからも来店してくれた人だ。

ちなみにムツツリー二との話し合いは姫路さんの転校阻止の資金稼ぎということで折り合いがついている。

「ええ。花婿君の样子がちょっと気になっちゃったからね」

「はははっ、僕の様子なんて見てもおもしろくありませんよ」

なぜだかわからないけど、この人とは話しやすい。

「そんなことないわよ。それよりも花婿君もふっきれたようですよ。よかったわ」

「ふっきれた？」

「ええ。花婿君は花婿君なりに花嫁ちゃんへの気持ちにケジメをつけたんでしょう？」

「そう思いますか？」

「だって前来た時よりも花婿君、表情が明るいかからね」

そんなに変わったのだろうか？

確かに僕自身、姫路さんへの気持ちに一種のケジメをつけた。

正確に言えばケジメと言うよりは覚悟を決めたに近いのだろうけど……

「で、どうなの？」

「どうって、なにがですか？」

どうもこの人の話は唐突すぎる。まるで僕の姉さんのようだ。

「だから、花嫁ちゃんには気持ちを伝えられそう？」

「んー……」

たぶん、今すぐには無理だと思います。僕自身、まだまだ考えなきゃいけないことがありますし、なによりまだ怖いんです……

いくらケジメをつけたところで、姫路さんに否定されたらと思うと

……」

そう、結局僕がいくらケジメをつけようと、いくら変わろうと、姫路さんに否定されればそれまでだ。たぶん、今の関係にすら戻れなくなってしまうだろう…

「花婿君も大変ねえ。」

だったら私が花嫁ちゃんと近づける魔法をかけてあげようか？」

「魔法…？」

「ええ。でも普通にかけるだけじゃつまらないから、そうねえ……そうだ、花婿君たちがあの大会に優勝して、花嫁ちゃんを花婿君の家にエスコートできたら魔法をかけてあげるよ」

ええと、つまり条件を要約すると…

試験召喚大会に優勝する。

そのまま姫路さんを僕の家へとお持ち帰り！？

「むっ、無理ですよ！」

「そんなに緊張することないじゃない。

よく夕飯だって一緒に食べてるんだからさ」

「それとこれは別問題ですよ！」

確かに、あれ以来も姫路さんが僕の家に来て夕飯を作ってくれたことは何度かあった。（もちろん明希は大喜び）

だけれど、それは僕が誘った訳ではなく、姫路さんの好意からなの

だ。

僕自身が自主的に姫路さん連れ込むなんてできるわけがない。

「まあ、いいわ。もし、花婿君にそれができたらとびっきりの魔法をかけてあげる。じゃあ、私はもう行くから」

いつの間にか注文していたサラダを食べ終えていた女性が立ち上がる。

「あつ、待ってください！」

「なにかしら？」

「名前、教えてもらってもいいですか？」

「あら、浮気かしら？」

そう僕をからかう様にクスツと笑う。

「そんなんじゃありませんよ。ただ、またどこかで会う気がして」

「そう、なら鈴^{りん}って事にしておいてちょうだい」

「鈴さんですね」

はぐらかされている感じがしないでもないが、一応これで呼び名が決まった。

「じゃつ、花婿君またね」

そう言つて鈴さんは会計を済まし、店を出ていった。

「ありがとうございます」

ポンッ

頭を下げる僕の肩に手が置かれる。

「どつ、どうしたの須川君、みんな…？」

振り向けばどす黒い笑みを浮かべた雄二、ムツツリー二、秀吉を除いたFクラスの野郎どもがいた。要するには野次馬軍団に囲まれたわけだ。

「『『『吉井、少し控え室で話し合いたいことがあるんだが？』』』」

「

「次の試合もあるから、なるべく早く終わってね」

逃げようと思つて逃げ切れる相手ではないため、大人しく観念する。

「『『『早く終わるかどうかは吉井しだいだな』』』」

「いやだああー！」

僕の叫びもむなしく、控え室へと連行されてしまった。
なにがあつたかは言わなくてもわかるだろう。

一般的に差し障りのない範囲で言つとしたら、「お前には生涯を共にする相手がいながらなにしょんじゃボケエエエ！」とか言われながらボコられた。

とだけ言っておこう。というか、これ以上は説明させないでほしい。

第24問 僕と追憶とあの日の約束

明久SIDE

「相手の方、いつまでも来ないですね」

隣に立つ姫路さんが不安そうに言う。

「そうだね。だけど――」

「だけど、どうしたんですか？」

「いや、なんでもないよ」

「そう…なんですか？」

対戦名簿に書かれている『高城』という名前。
どこかで聞いたことがある気がする。

あくまで僕の直感にすぎないけど、このまま高城なる人物とは対戦しない方がいい気がしてきた。もっとも、大会規定によりあと3分以内に相手が来なければ僕らの不戦勝だけど。

いったい高城って誰なんだ？

僕とはどういう関係があったんだ？

これは記憶を失ってるんじゃないかと、ただ単に忘れてるだけなんだから思い出せるはずだ。思い出せるはずなのに、なにもわからない

……

それどころか、まるで記憶を失ったかのように思い出せないんだ。

いったい、僕はどうしちゃったんだろう…？

??? SIDE

「で、首尾はどうだ？」

物陰から、まるで気配を感じさせずそいつは出てきた。いつも俺たちはこの場所で情報提供をしている。だけどそれも今日までだ。

「悪いが、お前とはもう協力できない」

「ほう…」

俺に刃向かって一人のお前が無事でいられると思ってるのか？」

ム力つく野郎だ。

責任転嫁するつもりじゃないが、もとはと言えば俺はこいつのせいで……

「一人、そいつは違うな。」

俺は今まで見過ごしていたんだ。いつも側にいてくれて俺を支えてくれた——の存在を。あまりにも共にいるのが普通すぎて気づかなかった。

俺はもう一人じゃない。だから、俺とお前の縁もこれっきりだ」

「生意気なことを言ってんじゃねえぞ！

情報まで提供してやったのに無様にも負けた野郎が偉そうなんだよ
！」

いつもの冷静さを失い怒号をとばしてきたあいつに内心驚くが、平静を装う。

「お前も勝てないよ。誰も信じることも、関わることもできないお前じゃあいつには…あいつらには勝てない」

「てめえ、まさかあいつ側につくなんて言わねえだろうな！？」

「お生憎俺もそこまでできたやつじゃないさ。ただ、これだけは言っておく。

俺はもうお前の仲間なんかじゃない。

お前が俺の周りに危害を加えるというなら、俺が全力で護る。——
——がそうしているように俺も俺のすべてを賭けて——を護りとお
してみせる」

「——の名前を口に出すなって言っただろ！」

「ぐほっ！」

突然殴りかかってきたあいつの拳をもろに受ける。

前々から思っていたがこいつは——の事を相当毛嫌いしているな。

「いいのか？」

痛む脇腹を抑えながらもあいつの目をしっかりと見据える。

「そんなに大声あげたら他の人が来ちまうぜ」

「ぐっ…」

まあいい。俺を裏切ったことを後悔させてやるからな」

そう言っであいつは俺から離れていった。

負けるなよ——

明久SIDE

「結局、不戦勝になっちゃったね」

あれから対戦相手が来ることはなく、3分後に僕らの不戦勝が決まった。

今はその帰り道だ。

「そうですね。そういえば、対戦相手は誰だったんですか？」

対戦名簿は一組に一枚しか配られていないため、姫路さんは相手の名前を知らないのだ。

「ごめん、落としちゃってわからないんだ」

嘘だ。本当は高城と小暮という名字の生徒だった。二年で聞いたことのない名字だから、もしかしたら三年なのかもしれない。（一年はこの時期では召喚獣の操作を習っていないため除外）

でも、そんなこと以前に高城という名前が妙に引っ掛かった。

もしかしたら姫路さんになんらかの関係があるかもしれないから今回は伏せておこう。少なからず良い意味で関係はないはずだから……

「姫路さん、先に戻ってて。ちょっと手洗いに行ってくるからさ」

「はい、じゃあ先に戻ってますね」

いったん姫路さんと別れるとトイレに向かう。

（数分後）

「明久よ、大変じゃ！」

トイレから出たところで秀吉がウェディングドレス姿のまま走ってきていた。

「どうしたのさ秀吉!？」

ウェディングドレスのまま走る回るなんてよほどのことがあったのだろう。

「ウェイトレスが誘拐されたのじゃー!」

「誘拐!？」

さすがにあのモヒカンと夏川でも誘拐などしないだろう。と、思いたい…

「秀吉、二人の居場所は？」

「今、ムツツリー二が教室で調べておる。雄二も一緒じゃ。わしは雄二から頼まれた伝言を学園長に届けなければいかんから行くぞ?」

「うん、ありがとう秀吉」

僕と秀吉は互いに逆の方向へと走りだす。

僕が姫路さんから目を離さなければこんなことには……

（厨房）

「雄二、ムツツリー二!」

裏口を勢いよく開けて厨房に入る。
ウェイトレス不在のためか、正面入口には休業中の看板も下がっている。

「明久か、ちょうどいいところに来た。いくぞ!」

「行くってどこに行くのさ!？」

「お前のお姫様を助けに行くんだよ。ムッツリーニのおかげで場所がわれたからな」

「……これくらい一般教養」

盗聴機類をしまいながらムッツリーニが言う。

だけれど雄二の様子がいつもと違う気がした。どこか焦っているような感じが…

もしかして!？

「雄二、もしかして霧島さ」言うな!！」

雄二の怒号に冷や汗をかく。怒ってる…

いつもは冷静な雄二が怒ってる……

たぶん、その矛先は誰でもなく自分自身に向けられたものだ。自分のせいでという思いが渦巻いて、雄二を苛立たせているだろう。

「行こう。悪者の退治にね」

「ああ、目一杯こらしめてやるぜ」

「……裏方は任せろ」

僕たちは教室を飛び出すと、目的の場所へと向かった。

「ここか…」

ムツツリー二に案内されてやって来たのは近くのカラオケボックスだ。話によればパーティールームに三人は連れ込まれているらしい。

「明久、あえてあらかじめ言うておく。お前はお前の想うように行動しろ。」

躊躇やためらいは一切いらぬ。お前にしかできないことをやるんだ」

「うん、わかってるさ。雄二もたまにはそうしていいんじゃないかな？」

「そうだな。いっちょ、暴れてみますか」

雄二とげんこつをぶつけ合い笑う。

必ず後悔させてやる

「そろそろ時間だ。いくぞ明久」

雄二と共にカラオケボックスへと入店する。

ムツツリー二は裏から回る作戦のため、今ここにはいない。

『嬢ちゃんたちかわいいねえ』

『ちょっと気安く触らないでよ』

『……いやっ!』

『その… 私たちを解放してください』

『それは嬢ちゃんたちの頑張りしだいかな?』

扉の奥から下劣な笑い声が聞こえてくる。

こいつら、好き勝手しやがって……

「失礼いたします」

店員に変装したムツツリー二が反対側の扉から入っていく。部屋にいる全員の注意がムツツリー二の方へとそれる。

今だ!!

ボタン!!

「くらえええ!」

扉を勢いよく蹴り開け、手近にいるチンピラの股を蹴りあげる。

「ぐおっ!?!」

その一発だけでチンピラはのびてしまった。だけどあと六人いる。

「明久君!」

「吉井！」

奥の席で縮こまっている三人と目があう。

「ほう…てめえが吉井か」

こいつは僕の事を知ってるのか！？

「てめえ、よくもシンジぐお！？」

注意のそれた僕に殴りかかろうとしたチンピラに雄二がおもいつき
り拳をくらわす。これで残り五人。

「てめえらよくもウエイトレス誘拐してくれたな！」

腕を鳴らしながら雄二が叫ぶように言う。

「あいつが坂本だ！」

「あの悪鬼羅刹と呼ばれた坂本だと！？」

「かまうこたあねえ。三人でやれば関係ねえだろ」

僕を無視して三人のチンピラが雄二に殴りかかりにいく。いくら雄
二でも……

「三人ごときで今の俺を抑えられると思うなよ！」

雄二はのびているチンピラの手首を掴むと手短にいる相手に投げつ
ける。

「うわぁ!?!」

「明久!お前は姫路たちを救出しろ!」

「うん、わかった!」

たぶん、今の雄二ならめったなことがなければ負けることはないだろう。

殴りあう(たぶん一方的に殴っている)音を背に姫路さんたちの近くにいるチンピラに殴りかかる。

「おっと!そんなひどいパンチ当たるかよ」

チンピラは僕の拳を避けるとそのまま足を後ろに振り上げる。

「明久君!」

「「吉井!」」

まずい、さっきパンチを外したばかりだからよけるだけの体勢が整ってない!

「くたばれ——」

「……くたばるのはお前」

蹴りが繰り出される瞬間、チンピラの背後にまわっていたムツツリ一二が灰皿でチンピラの脳天を強打した。

まさかチンピラも自分がくたばるなんて思ってもみなかっただろう。

あとは僕の事を知っているらしい、あのチンピラだけだ。

「ムツツリー二は脱出経路を確保しておいて」

「……わかった」

そう言うムツツリー二は安全に出られる通路を確保するためにいったん部屋から出ていった。

「お友達がなくなっちゃったけどいいのか吉井？」

チンピラがこちらを挑発するように言ってくる。ここで挑発にのっちゃだめだ。

「お前らは自分のしてることがわかってるのか！」

「わかってるに決まってるだろ？」

当然だが悪いなんてちつとも思っちゃいねえぜ」

「そうか…」

拳におもいつきり力をこめる。

「なら僕も今からすることを悪いなんて思わない」

拳を引き、狙いを定める。

「はあ？」

てめえなんか俺に勝てる訳ないだろうが！」

交差する二つの拳。

互いの狙いはたがわず命中した。相手の胸と僕の顔に。僕はあまりの衝撃にその場に倒れてしまう。薄れゆく視界のなか、チンピラが僕の方へと歩いてくる。

「はんつ、大したこたあねえな。ああん？」

チンピラが革靴で頭を踏んでくる。

「ぐっ……」

踏まれる度にずきずきと頭が軋むように痛む。

視界が徐々に薄らいでいく。このままいけば気絶どころでは済まないだろう。

起き上がるうとしても力がでない。相手の力に押し勝つことができないんだ。

なんて情けないんだろう…

雄二は三対一でも果敢に挑んでいき、今も奮闘中だというのに僕は一人に対してもこのざまだ。僕が姫路さんを護るなんておこがましすぎたんだろうか。

「明久君を離してください!!」

姫路さんがチンピラに向かって灰皿を投げつける。

ダメだ、そんなことしちゃ…

「痛てえじゃねえか!」

「きゃあ！」

ガシャーーン

チンピラに突き飛ばされ姫路さんはテーブルを巻き込みながらとばされる。

『私が危ない時には助けてくださいね』

根本との勝負のとき、姫路さんが言った一言が脳裏によみがえる。

「許さない……」

「あん？吉井、誰をゆぶお！？」

すばやく起き上がり、顔面に拳をくれてやる。

正直、もう長くは立っていられない。いや、今すでに体力の限界を越えているんだと思う。だけど、僕がどうなるうとも約束は果たしてみせる。

バカでも約束くらい守ることはできるから。

それくらいしかしてあげられないから、僕は負ける訳にはいかないんだ！

「うおおおお！！」

「調子のんなよ！」

すぐに体勢を立て直し、繰り出されるチンピラの拳。

「邪魔なんだよ！」

それを身体を横に傾けてよけ、その反動で殴る。

「ぐっ！？」

与えられるダメージはこちらが受けるダメージと比べれば少ないものだが、決して0ではない。

「まだまだあ！」

「うおっ！？」

相手が体勢を立て直す前にもう一発くれてやる。

「くらえ！」

「がつ！？」

更にもう一発。さすがに堪えてきたのか、チンピラも肩で息をしている。

「まだだ！」

「ぐへっ！」

お次は体勢が崩れてて、顔面が近いのを利用し蹴りをいれる。

不思議と気分が高揚してきているのが自分でもわかった。それは姫路さんを護っていることでヒーローになれたという高揚感なのからか、それとも別のものからきているのかはわからない。

「おいおい、さっきまでの威勢はどうしちゃったんだよ？」

肘で鳩尾に攻撃をいれた後に更に蹴りあげる。

「ぐっ……」

さすがのチンピラも体力の限界がきたのか倒れこんだ。

「ははは、情けねえな。おら、立ってみろよ」

襟元を掴みながら挑発する。

「やめろ…やめてくれ…」

「やめてくれだって？」

「さんざんやっておいてそりゃねえだろ」

「ひいつ！」

僕が睨んだだけで他人が怯えるとは中々気分がすつきりする。

「でも助けてやってもいいぜ？」

「わかった。なんでもするから許してくれ！」

「そうか…」

安堵するチンピラに笑顔を向ける。

「じゃあ、死ね」

掴んだ襟元を勢いよく振り下げ、チンピラを叩きつける。
そのまま、僕がされたように頭を踏みつける。

「約束が…ちが…」

「違わねえだろ？」

「お前がなんでもするつつたから痛みつけてるんだろっが」

更に足に力をこめる。

「安心しろ。すぐに痛みも「明久君！」」

突然姫路さんに呼ばれ、動きが止まる。

「明久君、もうやめてあげてください」

姫路さんがこちらに歩いてくる。

「もうこれ以上、明久君が人を痛みつけているところを見たくありません」

姫路さんの顔には涙が伝っていた。

「明久君がこんな心ない人たちと同じになるのは嫌です」

姫路さんが僕の手をとる。

「だから、もうやめましょう?」

「うん…」

チンピラの頭から足を離す。不思議とさっきまでの高揚感は薄れていた。

「野郎共撤収だ!」

足を離れた瞬間、チンピラは血相を変えて逃げていった。

「『アニキ、待ってください!』」

ご丁寧にものびていた他のチンピラも逃げていった。

「俺たちも帰るぞ」

霧島さんを背負った雄二が言う。美波はムツツリー二が支えている。

「そうだね。いつまでもここにいる意味もないし帰ろうか」

僕も姫路さんを背負うとカラオケボックスを後にした。

「ふう…姫路さん、怪我は…ないわけないよね…」

帰り道、背負っている姫路さんにたずねる。

いまさら背負ったぐらいで広まる噂もないし、気にすることはないだろう。

「ちょっとしたかすり傷ですから心配いりませんよ」

健気に笑う姫路さんを見て胸が痛む。

「でも僕なんかのせいで…」

「それは明久君にも言えることです。

明久君は何度も私を助けてくれたじゃないですか」

「僕は僕が好きでやってるからいいんだよ」

「なら私も好きでやってるからいいんです」

姫路さんはそう言いながらイタズラっぽく笑う。

「でもさ、僕は約束もしてるんだし…」

「約束なら私もしてるんですよ？」

「えっ？」

「明久君は覚えてないかもしれませんが私も約束したんです」

それは僕の失った記憶の中にあるんだろうか？

「明久君が明久君であるようにって」

「それってどうい「ほら、もう学校に着きましたよ」

そう言つと姫路さんは僕の肩からおりる。

「私、着替えなきゃいけませんから先に行ってますね」

そう言つやいなや、姫路さんは校舎に向けて走って行ってしまった。

「あっ…」

結局、『僕が僕でいられるように』ってなんだったんだろう？

なんだか意味深な感じのする言葉だけど、僕の中にその記憶はない。

僕が僕でいられるようにか……

雄二SIDE

俺たちが厨房に戻ると姫路は着替え終わっていた。

「姫路、ちよつと時間あるか？」

「次の試合が始まるまででしたらいいですよ」

「そうか、助かる。あの手の話だから控え室で話すぞ」

「はい」

俺と姫路は控え室に向かう。今日の明久の豹変ぶりに、異様な強さ。

俺の予想が正しければ明久は……

第24問 僕と追憶とあの日の約束（後書き）

拙作での高城の役割はすでに決まっています。

原作ではどのようなキャラになるかわかりませんが…

次回もよろしく願います！

第25問 僕と好敵手（ライバル）と準決勝（前書き）

クロさん、KKKさん、アルベルナさん、感想ありがとうございます！

第25問 僕と好敵手（ライバル）と準決勝

明久SIDE

「さあ、始めました準決勝戦！」

誘拐事件の後、しばらくして準決勝戦が始まった。
もう一組の準決勝は僕たちが誘拐犯を凝らしめている間に行われたらしい。

「本日最後の試合の組み合わせはこの二組です！」

決勝戦は明日にやるため、今日の試合はこれが最後だ。

「赤ブロック、底辺と最上位の異色チーム。Fクラス坂本雄二& A
クラス霧島翔子ペア！」

司会者に促されて壇上に雄二と霧島さんがあがる。

「続きまして青ブロック、今大会でもラブパワーを存分に魅せつけてくれている我らが代表。Fクラス吉井明久& Fクラス姫路瑞希ペア！」

「『『『いえええーい』』』」

三回戦からは一般公開をしている関係もあつてか、観客が引き締めあっていた。

にしても、一般の観客も多くなって生徒の比率が相対的に低くなっ

てるはずなのに僕たちの時だけ相変わらずの盛り上がりようだ……それを疑問に思い、観客席の方を見れば須川君たちが大きな旗を振っていた。

なになに『愛し合う二人に栄光を』って、はあ……

相変わらずの須川君たちから目をそむけ、反対側の観客席を見ればムツリー二がなにかを販売していた。しかも、そこを中心に僕たちへの傍迷惑な声援が聞こえてくる。

要するにムツリー二は僕と姫路さんの写真を一般の客にも売っているのだ。

しかし、なぜ僕たちの写真を買ったくらいで須川君たちの仲間入りにしてるのかわからない。世の中は不条理だ……

しかし、幸いにも姫路さんは緊張からか周りの状況が目に入っていないようだ。

「姫路さん、ここが正念場だよ。がんばろう」

「はいっ！」

姫路さんの元気な返事を聞いて若干安堵する。少なからず、今は誘拐未遂のことは頭に入らないようだ。壇上に登りながらこれからのことを考える。

おそらく雄二は本気をだしてくる。それは霧島さんうんぬんではなく、雄二自身が楽しみたいからだろう。

僕より点数の高い雄二、姫路さんよりも順位の高い霧島さん。単純に考えれば勝てる相手じゃない。

だけど……だからといって退くわけにはいかない。

「明久、お前の全力を見せてみる！」

「ああ。雄二こそ手を抜かないでよね！」

互いの視線から火花を散らす。

「……瑞希には悪いけど、優勝はもう」

「そうはさせません！」

私にも勝たないといけない理由があるんです！」

普段の柔らかな印象とは真逆の目付きをした姫路さんを見て今一度決心を固める。姫路さんだって転校したくないと思ってくれているんだ。

決して僕といたいかそんなんじゃないけど、僕もその他大勢の中にくらいいは入れているはずだから……姫路さんの願いを叶えてあげたいから――

「僕は…僕たちは絶対に負けたりしない」

誰に言うわけでもなく、自分に言い聞かせるように言う。

「では、両者召喚を」

司会者の指示を受けてみんなが身構える。これが実質上の決勝戦になるだろう。

「」「」「サモンー！」「」「」

Fクラス坂本雄二 総合科目1547点

Aクラス霧島翔子 総合科目4673点

さすが霧島さんだ。4000点代、それも後半となれば苦戦は必須だろう。

雄二も振り分け試験時よりも格段に成長している。だけどそれは僕も同じだ！

Fクラス吉井明久 総合科目1283点

Fクラス姫路瑞希 総合科目4664点

「なに、明久が1000点越えに姫路も翔子とほぼ互角だと!？」

さすがの雄二も驚きを隠せないでいる。

「雄二、僕だっていつまでも変わらない訳じゃないんだ。

いや、むしろ変わっていかなくやいけないんだ。僕自身のためにも僕の大事な人のためにも!」

「そうか…そうだな。

お前はいつだって大事なやつのために一生懸命だ。自己保身のためには絶対にだせないような力を発揮するからな。その力の大きさ、俺は侮っちゃいけないぜ。

かかってこい明久!」

正直、雄二がここまで僕を評価してくれているなんて思わなかった。だけど、雄二が僕のことをどう思っているように僕の変わりはない。

姫路さんのために勝つ。
ただ、それだけだ。

「さあ、注目のライバル対決です。試合開始！」

試合開始の合図と共に雄二と霧島さんの召喚獣は左右に別れる。

「明久、先手はもらうぜ！」

別れた方向からして雄二の担当は僕だろう。

しかし、雄二のことだから真っ正直に突っ込んでくるとは思えない。どうでる！？

明希も雄二を警戒してか終始目でおっている。

「姫路さん、霧島さんの相手がきつくなったら下がってね」

「はいっ！」

姫路さんの了承を確認して明希を雄二の召喚獣の方へと向かわせる。雄二になにか策があるなら、それを潰すまでだ。

「俺と真っ向勝負か？」

「いい度胸じゃねえか明久！」

互いに得物を構え、一撃必殺の構えをとる。

雄二の召喚獣と明希が交差するその瞬間、雄二は口元をにやけさせる。

「かかったな明久。翔子、今だ！」

「！？」

明希と雄二の召喚獣がぶつかり合う直前に、二人の間に霧島さんの召喚獣が割ってはいいる。雄二の召喚獣に狙いを定めていた明希は当然のこと、あまりにも奇抜な作戦のため僕も反応が遅れてしまう。当然、その隙を霧島さんが見逃す筈もなく、明希の得物は大きく宙をまい、明久自身もその場に倒れこんでしまう。

Fクラス吉井明久 討死

最初に二手に別れたのは狙いがそれぞれ違うと思わせるため。本当の二人の狙いは最初から僕だったんだ。

「さすがだね雄二…」

フィードバックで痛む体を押さえ、言う。

「まさか…僕と同じことを考えてるなんて思わなかったよ」

「なにっ!？」

雄二が驚いて召喚獣に注意を向けるがもう遅い。すでに、雄二の召喚獣は姫路さんの召喚獣にやられているのだから。

Fクラス坂本雄二 討死

まさか雄二たちと作戦が被るとは思わなかった。事前に姫路さんと打ち合わせた作戦はこうだ。

僕たちも最初から雄二に狙いを定めながらも僕だけが突っ込み、姫路さんは待ち構える体勢をとる。そして、僕と雄二がぶつかる瞬間に姫路さんが雄二を仕留めるといった具合だ。

二人とも回り込んだ方向が反対だったため、姫路さんと霧島さんの

召喚獣がぶつかり合うことはなかったのだ。

「すみません明久君。

本当は明久君を助けるべきだったんでしょうけど、できませんでした……」

「大丈夫だよ姫路さん。もともとこういう作戦なんだから気にしないで。

それよりも今は霧島さんと戦うことだけに集中して」

点数だけで見れば僅かに姫路さんが劣っている。どちらも召喚獣の操作になれていない場合、その僅かな差が致命的な差となる。

そう、召喚獣の操作に慣れていないのなら……

「いきます！」

「……負けない！」

二人の召喚獣がぶつかり合う。点数に差があるといっても誤差の範囲だ。一方的に姫路さんが押されるということはない。

ガチッ！

ガチャ！

ガキイイン！

押しきることができないと判断すると互いに小さく合計しながらせめぎあっている。しかし、姫路さんの召喚獣の武器が大剣というこ

ともあつてか攻撃のが半歩遅い。

「姫路さん、いったん距離をとって！」

「はいっ！」

姫路さんの召喚獣がバックステップで距離をとる。

「させるな翔子！」

「うんっ！」

それを追うように霧島さんの召喚獣が突っ込んでくる。

「今だ！」

僕の合図と共に姫路さんの召喚獣の腕輪が光りだす。常時ならともかく、敵を追っているときなら熱線の広大な射程範囲から逃れることはできない。

「うっ……」

回避行動をとりながらの熱線。これだけの芸当を姫路さんができるようになったのも雄二が提案した模擬試召戦争のおかげだ。常に要所で活躍する姫路さんに対して、霧島さんは代表という立場もあつて場馴れはしていない。

それ故、技術面なら霧島さんよりも姫路さんは上手なのだ。

Aクラス霧島翔子 総合科目2970点

さすがに一発で仕留めることはできないか……

「翔子すまない。俺の判断ミスだ」

「……これくらい大丈夫。雄二は気にしないで」

現時点では姫路さんが勝っているが、これ以上の小細工は通用しないだろう。

それに雄二がなにか奇策を用いてくる可能性も充分にある。

「姫路さん、これからは深追いせず本当に狙える時だけ狙っていい」

「坂本君がなにか関係してるんですか？」

「うん。雄二のことだからすべての手を晒してるとは考えづらいんだ」

「わかりました。慎重にいきますね」

雄二SIDE

明久がやられた後は姫路のアドバイスにまわるのは計算済みだ。元々は俺もアドバイスにまわる気なんてなかったが、過ぎたことを気にしても仕方ない。それよりもどうやって明久を出し抜くかな。

「翔子、慎重にいけよ。明久が突拍子もない作戦を用意してる可能性もある」

「……………わかった」

さあ、どうでる明久。

……………ん？

見ると、明久も姫路になにかを耳打ちしてきた。明久の困惑した顔からして作戦の実行のアドバイスではないだろう。となると、なんだ？

さすがに公然の面前で恋色沙汰は……………あいつらならありえるな。互いのことになると思うと周りが見えなくなる。まったく……いいんだか、悪いんだか……

つと、そんなことを考えてる場合じゃないな。明久がなにを考えているかだ。

……………まさかとは思うが、こちらの奇策に警戒してるのか？

もしそうなら好都合だ。お生憎だが、こちらの策は尽きている。だが、相手が勘違いをしているなら利用しない理由がない。

「翔子、一回だけ姫路に仕掛けるふりをしてくれ。あくまでふりだぞ」

「……………わかった」

俺の指示を受けて翔子が召喚獣を突っ込ませる。

それに対して姫路は一步早めに回避行動をとり、形だけの攻撃をかわす。

これでわかった。明久たちは俺にまだ策が残っていると勘違いして

いる。

この勝負、もらった！

第26問 俺と好敵手（ライバル）と準決勝（前書き）

今回は少し短めですがどうぞ！

第26問 俺と好敵手（ライバル）と準決勝

明久SIDE

おかしい。今の霧島さんの攻撃は大振り過ぎた気がする。

いくら召喚獣の操作に慣れていないとしても不自然すぎる。まるで避けられるために攻撃したみたいだ。

しかし、そんな攻撃になんの意味がある？

人間相手ならまだしも召喚獣には体力の消耗の概念は存在しないから違う。

雄二、なにを狙っているんだ…？

「姫路さん、気をつけて。どんな手でくるかわからない」

「はい…」

姫路さんはそう言いながら、もう何度目かになる回避をする。

やはり、大振りに繰り出される霧島さんの攻撃。一步早く避ける姫路さん。これでは埒があかない。

「姫路さん、一度仕掛けよう」

「大丈夫なんですか？」

「いや、あくまで仕掛けるだけで追撃はしない。一度、攻撃するだけだ」

「わかりました」

霧島さんの召喚獣が再度、攻撃を仕掛けてくる。

「今だ姫路さん！」

「はいっ！」

刀を大振りに振り上げた霧島さんの召喚獣の懐に姫路さんの召喚獣が入り込む。そして、そのままの勢いで大剣を突き刺すべく構える。しかし、あれ程大きく振り上げていたのにも関わらず霧島さんの召喚獣は素早く距離をとる。当然ながら姫路さんの攻撃は失敗に終わる。

なるほど、攻撃よりも回避を優先しているというわけか。

と、なると初めから攻撃を当てるつもりはない。

あくまでも攻撃の姿勢を見せることに主軸をおいているのか？

でも、それになんの意味がある？

おそらく雄二がなんらかの策に……そうか！

雄二は策なんかありやしないんだ！

だから、こちらを出方をうかがいながらも牽制できる攻撃のフリを繰り返してきているんだ。

「姫路さん、早めにしとめよう」

雄二が僕にも策がないことを気づく前に…

「勝負にでるんですか？」

「うん。大丈夫、絶対勝てるから」

「わかりました。私、明久君を信じてますから」

そう言いながら姫路さんは召喚獣をトップスピードで走らせる。
僕の見立てが正しければそろそろ……

雄二SIDE

ちっ、明久の野郎勝負にでてきたか。
なにか策があるのか、それとも硬直状態に痺れをきらしたか？
いや、策があるんだろう。

あいつにとっては人生がかかっている勝負だ。
それを自分から棒に振るうほどのバカじゃない。

「翔子、迎え撃て！」

「うんっ！」

翔子の召喚獣が姫路を迎え撃つために飛び出す。

「！？」

翔子に言うってから明久の目を見て驚くがもう遅い。
あいつの目は勝利を確信していた。
揺るぎない勝利をあいつのために、姫路のためにも。

悪い翔子……

たぶんこの勝負、俺たちの負けだ。

お前の行きたがった所にも連れて行ってやれない俺を許してくれ。
お前に迷惑ばかりかけている身勝手な俺を許してくれ。
昔から引きずっている胸の内すら話せない俺を許してくれ、翔子……

翔子と姫路の召喚獣が斬り結んだ瞬間、翔子の召喚獣の頭上に何か
が降ってきた。

あれは………明希の木刀……

そうか、明希が翔子の召喚獣にやられた時にとばされてたもんな。
いや、わざと手放したに近いのか……
この瞬間に訪れる姫路のために。不確定な可能性しかないのに迷わ
ずか……

翔子の召喚獣に木刀が直撃する。それにより、一瞬怯む召喚獣。
ダメージは僅か23点だが充分だ。

姫路が渾身の一撃を放つための時間稼ぎには……

「勝者、吉井明久&姫路瑞希ペア！」

司会者の言葉も早々に壇上を降りる。正直、翔子に合わせる顔もな
い。

「………雄二」

だけど、お前はなにも疑わず俺についてくる。
なにも知らず俺についてくる。

俺はどうすればいい？

こんなにも俺の事を好いてくれる相手になにをしてやればいい？
なにをしてやれば……どんな言葉をかけてやればお前は喜ぶんだ？

「すまない……翔子」

ただ、そう言うしかなかった。

「……ううん、私は平気。

だって、雄二が私と一緒に頑張ってくれた。それがとても嬉しいから」

「翔子……」

なにか少し、ほんの少しだけど吹っ切れた気がした。

翔子…お前がいてくれてよかったよ

そんなことは死んでも言ってやらないが、これくらいは言わせてほしい。

「ありがとな翔子」

「???」

わからなくていいんだ。

まだ俺はお前に正直な気持ちをはせる程の勇気もないから。だけど、なにかお礼くらいはしてやろう。

そうだな、自腹で連れてってやるか。如月ハイランドに…

第26問 俺と好敵手（ライバル）と準決勝（後書き）

どうしよう…

雄二が真つ当人すぎる…

こいつ、本当に雄二か？

と、書いた本人まで疑問に思っています。

まあ、タグにみんな結構まともとありますし気にしないようにしましょう。

では、次回もよろしく願います！

第27問 僕と常夏と黒金の腕輪

明久SIDE

「明久、ちょっとこい」

「ん？なに雄二？」

喫茶店の片付けをしている最中に雄二に呼ばれて振り向く。
作業中に呼ぶ程なのだから重要な用事なのだろう。

「お前、姫路たちを誘拐したチンピラの顔覚えてるか？」

「姫路さんたちを誘拐したチンピラの顔？
そんなの忘れるわけが……」

「忘れたんだな」

「うん……」

おかしい……

あんなにも憎いと思ったやつなのに顔すら思い出せないなんて……

「じゃあ、お前がどうやって最後のチンピラを倒したか覚えているか？」

「えっと……最初のチンピラは股間を蹴り上げて、次がムッツリーニが倒してくれた。最後は……」

あれ？

またここだけ覚えてないや…

「（やっぱり、そういうことか…）」

「雄二、どうしたの？」

なにかを呟いた雄二に疑問をもち、たずねる。

「いや、なんでもない。片付けの続きやるぞ」

そう言つて、雄二は厨房の片付けへと戻っていった。

「なんでもないならいいや」

正直な話、雄二だけに構っていて片付けを疎かにする訳にもいかな
いので話早々に片付けを再開する。

それにしても、なんで記憶が部分的に抜けてるんだらう…

「……吉井」

「なにつて、霧島さん！？どうしたの？」

いつのまにか僕の横にいた霧島さんにびっくりしながらも対応する。

「……雄二に話がある。吉井と瑞希も来て」

「うん。姫路さんは厨房の片付けをやってるし、雄二もさっき厨房
にいったから行こうか」

「……わかった」

く 厨房 く

「雄二ー！奥さんが来たよ！」

厨房に入るやいなや、大声で雄二を呼ぶ。

「誰が翔子の夫だ！」

なぜだか控え室から出てきた雄二が叫ぶ。

「いや、誰も霧島さんなんて言っていないよ。ぷぷつ、自覚あるんだね」

「……自覚もなにも私は雄二のお嫁さん」

「明久、てめえ…」

そつちがその気ならこつちにも考えがあるからな。

姫路ー！明久からデーあぐぐぐぐ」

なにやら雄二が、僕の人生にピリオドを打ちかねないことを言い出そうとしたので、咄嗟に口を抑える。

「坂本君、明久君がどうかしたんですか？」

片付けということもあつてウェディングドレスから制服に着替えてしまっている姫路さんも奥からやって来た。

正直な話、とても惜しいことだ。できれば下校中でもウェディングドレスを……間違いなく変な噂が流れるだろう。須川たちの手によつて……

「姫路さん、なんでもないんだ。それより霧島さん、用事つてなに？」

変なことを口走らないように雄二の口を押さえながら話題をふる。

「……うん。みんなにこれを見てほしい」

そう言つて、霧島さんはビデオカメラを取り出す。

「……愛子が面白がつて撮つてた」

愛子つて言えば僕とムツツリー二を死の瀬戸際まで追い詰めた工藤さんのことだね。あの人は本当になにやつてるんだろう……

「翔子、なんだこれは……」

いつのまにか僕の手から逃れていた雄二が映像を見ながら言う。

僕も気になつて覗き込むと、そこには二人組の男子生徒がリンチ……いや、虐殺されている映像が流れていた。

「なにこれ……」

「……巻き戻すの忘れてた」

そうだよ。いきなりこんなもの見せられても困るだけだもん……
ほっと安堵していると、雄二がいきなり霧島さんの腕を掴みだした。

「……雄二、嬉しい」

頬を染めながら言う霧島さんとは対照的に、雄二は険しい顔つきをしている。

「翔子、巻き戻しのボタンはどれだかわかってるな？」

いったい雄二はなにを言っているのやら……
そんなの僕だってわかるよ。

「……わかってる。ここを押す」

そう言つて、霧島さんは赤いドクロマークのボタンを指差す。

「ちつともわかってねえじゃねえか!!」

どう考えてもこれから巻き戻しは想像できないだろ!!」

雄二の叫びももつともだ。

まさか霧島さんがここまで機械音痴だとは思わなかった……

「……輪廻転生で生き返る。そこから転じてやり直すって意味の巻き戻し」

「そんなわけあるか!!」

ある意味すごい解釈だ。

さすが、頭のいい人は考えることが違う。

「巻き戻しはこのボタンを押すんだ」

雄二がビデオカメラを持ちながら霧島さんに説明している。手馴れているところを見ると、前にも似たようなことがあったのだろう。

「結局、あのドクロのボタンはなんだったんでしょうね？」

「さあ？」

少なからず、いいことがおきるとは考えづらいよ……」

「ですよね……」

本当になんのためにあんなボタンが付いているんだろう……

「明久、姫路、巻き戻しが完了したぞ」

呆れている僕と姫路さんに作業を完了させた雄二が呼び掛けてくる。僕と姫路さんも画面に食い入るように見つめる。

映し出されているのはAクラスのメイド喫茶のようだ。

「あつ、誰が入ってきたよ」

「常夏コンビだな」

「常夏？」

雄二の意味不明な言葉に首を傾げる。

「ああ、明久は知らないんだっとな。
モヒカンが常村、ご存じ坊主が夏川。そんで二人の頭文字を合わせ
て常夏だ」

まさか当の本人はこんな風に呼ばれてるなんて思ってもないだろう…
でも――

「そんなこと考えられるなんて暇なやつだね」

「殴るぞ」

雄二が拳を握りしめて睨んでくる。

「……雄二、暴力はダメ」

「明久君も坂本君を貶しちやいけません。
坂本君はみんなが覚えやすいように考えてくれたんですよ」

「「ごめんなさい」」

どうも僕らは女性陣に弱い気がする。
確かに僕も悪かっただろうけど、雄二がみんなのことを考えて常夏
と名付けたというところだけは否定したい。

「おい明久、画面に集中しろ」

「あつ、ごめんごめん」

再び画面に集中する。

常夏コンビは部屋の中心部に近い席を陣取ると、テーブルに足を掛

けながら深々と椅子に腰かけた。

『あー、やっぱAクラスの喫茶店の方がいいな』

モヒカンの常村がわざと大きな声で言う。

『まったくだぜ。Fクラスのウェディング喫茶なんてきたねえしな』

あまりにも大きな常夏の話し声のせいで、周りの幾人かの客がざわめきたっている。あいつら、どこまで僕たちの邪魔をすれば気が済むんだ！

『飯は不味いしきたねえしで最悪だな』

『それにウェイターの野郎だってどべらしええ！？』

なにか僕と悪口を言おうとした夏川がものすごい勢いで壁に叩きつけられる。（本日2回目）

「てめえ、なにしやがる！」

常村が夏川をぶっ飛ばした生徒に掴みかかる。

「なにしやがるはこっちの台詞だ！」

お前ら、どこの料理が不味いつて？どこが汚いつて？で、ウェイターになんか文句あるのか！？」

誰だかも知らない生徒が僕たちのために怒ってくれている…

文月学園にはこんなにも優しい人がいたのか…

最近、周りからある意味で陰湿な嫌がらせを受けていたので思わず

感動してしまった。

『はんっ、そんなのFクラぐぼるばあ！？』

次は別の生徒が常村を殴り飛ばす。

『もう我慢ならねえ！』

『俺もだ！』

『Fクラスのウェディング喫茶のどこが悪いんだよ！』

次々と生徒が立ち上がって常夏を取り囲む。

その中にはFクラスの生徒は誰一人としていない。

それなのに彼らは僕たちのために――

『『『吉井と姫路さんの邪魔してんじゃねえー！！！！』』』

一斉にみんなが常夏を踏んだり殴ったり、掴みあげて叩き落としたりと袋叩きに始めた。

うん、やっぱり文月学園の生徒は私利私欲で動いてるみたいだ。

少しでも期待した僕がバカだったと思うよ……本当に……

僕が呆れていると騒ぎを聞き付けてか執事服姿の久保君がやって来た。

『これはなんの騒ぎだい？』

久保君の声に一人の生徒が振り向く。

『これは久保軍師。私たちは数刻前に我ら、異端審問会に対する反

逆者を発見いたしましたので処分をくだしている所存でございます』

久保軍師？

なんのことだろうか？

それに異端審問会って男女の仲を引き裂く会じゃなかったっけ！？

『具体的にはどのようなことをしたんだね？』

さすが、久保君は冷静だなあ…

『はい。あそこの変態髪型二人組はFクラスおよび、我らが全力でサポートしております二人の悪口『死刑』』

ちつとも冷静じゃなかった…

というかなに…久保君もそっち側の人間なの？

僕には味方はいないの！？

『具体的には体育館裏で油を染み込ませた十字架に貼り付け、下から火で炙る。その後、髪型でどちらか判断がつかなくなったら腕と足を拘束して船越女史にプレゼントしてあげよう。ちなみに身ぐるみはちゃんと剥いでおくんだよ』

そう言つて笑顔で去っていく鬼…

まさか久保君があんなに残忍な性格だとは思わなかった…

『さあ、立ち上がれ下衆どもが！』

何人かの男子生徒が瀕死状態（もう死んでるかも…）の常夏を担いでAクラスを出ていった。ここからが本当の地獄だ…

「……ビデオはここで終了。」

ちなみに利光がお客になにか吹き込んでいたから評判は大丈夫」

恐るべし久保君…

「翔子、なんでこれを俺たちに見せに来たんだ？」

雄二の疑問ももつともだ。はっきり言っ僕たちにこれといった収穫はない。

「……愛子から反応が気になるから見せてほしいって頼まれた」

本当に工藤さんはなにを考えているんだろう…

ますます彼女がわからなくなった…

もしかして僕たちが真性のDSだとも思っているのだろうか？
当然だが僕たちにはそんな趣味はないし、姫路さんに至っては怖かったのか頭を抱えてうつむいてしまっている。

小動物みたいでかわいい…

「つたく、いつまで私を待たせるんだい」

姫路さんに見とれていた僕の後ろからしわがれた老婆の声が聞こえてきた。

振り向けば、なぜだかババアが控え室から顔を覗かせている。

姫路さんみたいなかawaii人ならまだしも、ババアがやると恐怖絵面だ…

「ああ、すまねえなババア。今からそっちに行くよ」

そう言っ雄二はババアのいる控え室に入っていった。

「いたい、なんの話があるんだろう？」

「なんでも坂本君は学園長先生と優勝景品の一つである黒金の腕輪について話があるらしいですよ」

僕の疑問に姫路さんが助け船をだしてくれる。

「そうなんだ…」

なぜだろう。とても嫌な予感がする。黒金の腕輪…

明日、試合が始まる前に雄二に聞いてみよう。

覚えておくためにも夜、明希に頼んでおかないといけないな。そう考え、帰り支度を始める。

「姫路さん、帰ろうか」

「はいっ」

第28問 僕と奇数といつかの言葉（前書き）

きるぐまーさん、感想ありがとうございました！

第28問 僕と奇数といつかの言葉

明久SIDE

「みんなおはよ…」

「おはようございます…」

姫路さんと共にくまのはった目下をこすりながら、教室に入る。

「よう明久に姫路…って、二人ともすごいくまだな…」

「ごめん、昨日徹夜だったからさ…」

今日が決勝戦ということもあって、昨日は徹夜で姫路さんと明希に勉強を教えてもらっていたのだ。

「そうか…」

試合が始まるのは午後だから寝たらどうだ？」

「でもお店の方もありますし…」

姫路さんも眠たそうに目をこすりながら言う。

「大丈夫よ。店の方はウチらでなんとかしとくからさ」

「うむ、わしらに任しとくのじゃ」

「……今は休養が必要」

島田さんに秀吉、ムツツリー二も勧めてくる。

「じゃあ休ませてもらうよ…」

本来なら断るべきなのだろうが、今は眠気に勝てそうにない。

「では、みんなお願いしますね…」

姫路さんもみんなの厚意に甘えるようだ。

さて、どこで寝ようかな？

なるべく人が来ない場所…例えば屋上とかかな。

（屋上）

どうしてこうなった！？

なんでこうなった！？

なんで僕の腕を枕にして姫路さんは寝てるんだ！？

顔が近いし、柔らかいものが当たってる。

なにより僕の理性がやばい！

落ち着け僕…

落ち着いて素数を数えるんだ。 1…3…5…7…9…11…13…

『そりゃ奇数だ』

なにキスだって！？

おのれ…僕の中の悪魔はそうやって僕を不幸のドン底に陥れるつもりだな。

『誰もキスだなんて言っただけだよ』

お前の言うことなんて信じられるか！

僕だって男なんだぞ。その気になれば眠ってる女の子の唇を奪うくらい……

『奪うくらい、なんだよ？』

うっ、奪うくらい……

寝てる姫路さんにキスするくらい……

『できないんだろ？諦めろよ』

うん……

でも君も人が悪いよ。僕の理性がとびそうになっている時にキスだなんて。

『俺は奇数って言ったんだけどな……』

あつ、そうなんだ……

緊張して損したよ……

………って、あれは素数じゃないの？

『ああ。あれは奇数だぞ……』

そうなんだ……

『そんなんで午後大丈夫かよ…』

あははは…善処するよ。

『さて、もう寝るぞ』

そうだね。

心を平静に保って平常心でいれば大丈夫だよ。

『寝込みを襲いましょう』

て、天使！？

出てきたと思ったら急になにを言い出すのさ！

『だって、こんなチャンスめったにないよ。さあ、勇気を振り絞って！』

そんな勇気いらないよ！

そんなことしたら姫路さんに嫌われちゃうじゃないか！

『嫌われはしないと思うが、寝込みを襲うのは賛成できねえな』

いや、嫌われちゃうからね！

『まったく意気地無しだなあ』

『人としての倫理に欠けてるだけだろうが！』

悪魔の言う通りだよ！

………って、なんで悪魔が正論言ってるんだろ…

『雄二だって想うように行動しろって言ってたでしょ!』

『どう考えてもそういう意味じゃねえよ! バカ!』

『誰がバカだ!』

『お前だ!』

『なにおー! やるか!?!』

『やってやるぜ!』

えっ?

ちよつとなに喧嘩始めてるのさ!

って、お互いに頭突きをかますなああ!!

〔正午〕

「ただいま…」

結局、天使と悪魔が互いに頭突きをしあったせいで僕は気絶してしまった。

一応、そのおかげで睡眠はとれたのだが、頭がじんじんと痛い…

「今、戻りましたよ」

僕とは対照的に睡眠をとって元気な姫路さん。
彼女は僕を起こしてくれたのだから僕より早く起きていたんだろうけど、起きた時にびっくりしなかったのだろうか？
というか、なんで姫路さんは僕の腕で寝てたんだっけ？
確か……

〈数時間前〉

「明久君はどこで休憩しますか？」

廊下を歩いている僕に隣を歩く姫路さんがたずねてくる。

「やっぱり屋上かな？」

あそこなら他の人の邪魔にならないだろうしね」

さすがに教室で寝ててはみんなの邪魔になってしまう。

「そうですね。私も屋上で休憩してもいいですか？」

「えっ……？」

姫路さんと同じ場所で二人つきり……

しかも今日は清涼祭だから、屋上に来る人なんていない。

「迷惑でしたか……？」

「ち、ちつともぜんぜん迷惑じゃないよ」

「ありがとうございますね、明久君」

別にお礼を言われる様なことはしてないんだけどなあ…

って、そんなことより、もしかしたらなにかラッキーイベントがおきるかもしれない。気を引き締めていなくちゃ！

ガチャ

屋上の扉を開け、敷居をまたぐ。

「きゃあ！」

「姫路さん！」

敷居につまずいてバランスを崩した姫路さんをとつさに支える。

「っと、うわあ！」（バタンッ！）

しかし、衝撃を殺しきれずに僕まで転倒してしまった。

しかも姫路さんは倒れたというのにすやすやと寝息をたててしまっているのだ。教えてもらった僕だって疲れているのだから、教えてくれた姫路さんはもっと疲れているだろう。

自信過剰かもしれないけど、僕の腕を枕にして寝ている姫路さんの寝顔は幸せそうだったから起こすのとはばかられた。

だから今はこのままでいい。僕が姫路さんの小さな幸せでも護れるのなら…

それから僕も少しだけ眠りについて後に起きて、混乱してたんだっ
た…

く現在く

「じゃあ私は美波ちゃんとお話してきますね」

そう言つて去つていく姫路さんの後ろ姿を見て思う。もしかして僕は姫路さんに男として認識されていないのだろうか？

だから安心して寝ちゃったし、起きた時にもなにも思われなかったんだらうか？

だとしたら相当ショックな話だ。

確かに信頼されてはいるのかもしれないが、なんというか腑に落ちない部分がある。

「よう、明久。売上貢献ありがとうございます」

独りでに落ち込んでいるところに雄二がやって来る。

「売上貢献？」

「……これ」

そう言つてムツツリー二はアルバムを見せてくる。
なになに『夢の中で会いましょう』？

「なにこれ？」

「……見てみるといい」

ムツツリー二からアルバムを受けとると、中身を開く。

その中には僕と姫路さんの寝ている写真（だいたいが個別に撮られている）が大量にあった。

もちろん、さっきの屋上のやつも収録済みだ…

「またこのパターンかあああ！！」

開いている窓からおもいきりアルバムを投げ捨てる。

「……もつたいない」

「もつたいないなんてことないよ！！」

ムツツリー二には肖像権という言葉を教えた方がいいかもしれない。

「まあ明久、そんなに怒るな。結構利益あげてるんだぜ？」

「いくら利益が上がったって——」

そこまで言って気づく。

利益があがれば、その分だけ設備を良くできる。

設備が良ければ良いほど、姫路さんの転校する確率は下がるだろう。

「しょうがないなあ…

で、どれだけの利益額が出たの？」

「……これ」

ムツツリー二から集計表が手渡される。

清涼祭限定写真集（完売） ￥5000×500 計250000

緊急生産新婚写真集（完売）	¥ 6 0 0 × 3 0 0	計 1 8 0 0 0 0
夢の中で会いましょう（完売）	¥ 1 0 0 × 4 0 0	計 4 0 0 0 0
合計	4 7 0 0 0 0	

高校生が一日＋半日で稼ぐレベルの額じゃない。

大人でも犯罪でも犯さない限り、こうはいかないだろう……

いや、実際は肖像権侵害で立派な犯罪なんだけどね……

「……群がるアリ」

ムツツリー二が窓の外を見てポツリと呟く。

「急にどうしたのさ」

疑問に思いながら、窓の外をしてみる。

そこにはムツツリー二の言う通り、たくさんの人がそれはアリのように群がっていた。

「なにあれ……」

「明久がさつき投げたやつに群がってるんだろ？」

生産ロットが100冊と希少品だからな」

僕がさつき投げたもの『夢の中で会いましょう』（ムツツリ商会発行）

もうやだ、この学校……

「明久、へこんでるところ悪いがお前に話がある」

「なに…?」

へこんでるのがわかってるなら下手な事は言わないでほしい。

「優勝商品の腕輪だが、それは使用せずにババアに渡してくれ」

腕輪と言えば、昨日雄二がババアと話していたやつだ。

今朝に聞こうと思っていたのだが、すっかり忘れていたんだった。

「なんで使っちゃいけないのさ」

優勝商品なのだから、一回でいいから使ってみたいものだ。

「使わないで持ってきてくれれば、ムツツリー二の売上分も設備向上にまわしていいって話だぞ？」

「よし、使わずにババアに渡そう」

肖像権を無視してあげた売上でも姫路さんのために使えるというなら話は別だ。腕輪と姫路さん、どちらをとるかなんて聞くまでもないんだし。

「それと決勝の相手は例の常夏コンビだからな」

「そうなんだ。三年生なのによくそんな暇があったねえ…」

受験勉強などはしないのだろうか？

「まっ、その事には大方めどがついてるがな」

「えっ、そうなの？」

「ああ。昨日、秀吉に持っけていかせた手紙の後すぐにババアからコンタクトがあつたからな。

それで聞いたんだが、あいつらが優勝して腕輪を使えば推薦書を教頭に書いてもらえるらしい。教頭はババアの失脚を企んでるから万々歳ってわけだ」

秀吉に持っけていかせた手紙というのは、あの誘拐事件のときのやつだろう。

それにしても常夏も教頭もそんなことを企んでいたなんて許せない。

「明久、見た目がバカでも本気でかかれよ」

「もちろん。そのために徹夜までしてきたんだからさ」

相手が常夏ならばちょうどいい。

もう僕らの邪魔ができないようになしてやる。

「明久君、そろそろ試合が始まりますよ」

「あっ、姫路さん」

いつの間にか戻ってきていた姫路さんの方に振り向く。

「って、ことだから雄二にムツツリー二、行ってくるね」

「頑張れよ!」

「……応援してる」

「当然、優勝してくるよ」

二人の激励を受けて気を入れ直す。

「姫路さん、行こうか」

「はいっ！がんばりましょうね」

姫路さんと共に厨房を出て試合会場を目指す。

〈試合会場〉

決勝戦と言うことだけあって観客は超満員だ。
観客からの熱気に包まれながら僕の闘うべき相手が壇上に登ってくるのを待つ。

「赤ブロック、3年Aクラス常村勇作&夏川俊平ペア！」

常村と夏川…

雄二の言っていた通りだ。

「明久君、あの二人って…」

姫路さんが怯えたように言う。

接客中にあんなことをされればトラウマにもなるだろう。

「大丈夫。姫路さんは僕が護るから」

姫路さんの小さな手をぎゅっと握る。

「明久君……」

本当は僕が護られるになるんだろうけど、少しでも姫路さんの不安を拭いさつてあげればそれでいい。

「安心して。バカでも約束ぐらいは守るからさ」

笑顔で姫路さんに笑いかける。

「明久君、もう大丈夫です。」

私には明久君がいますから平気です」

そう言つて笑顔を返してくれる姫路さんを見て安心する。

だけど、あんなことを言われると少し恥ずかしい気もする。

恥ずかしいと言えば、今日は野次がちつとも飛んでこないなあ。

疑問に思い、周りを見渡せばみんな固唾をのんで見守っていた。

カタツカタツカタツカタ

常夏コンビが壇上に登ってくる。

確か、あっちの坊主が夏川で、もう片方の坊主が……って、あれ？
モヒカンの常村がいない……

「司会者さん、夏川が二人に増えてまーす」

手を上げて司会者に抗議する。

「本当ですね。モヒカンの常村選手がおらず、坊主の夏川選手が二人に増えています。」

「いったい、どのようなマジックを使っただんですか？」

司会者が夏川Bにマイクを向ける。

「ふざけんじゃねえ！」

俺は常村だ！常村勇作だ！！」

マイクをぶんどり、自称常村である夏川Bが叫ぶ。

「整形ですか？」

司会者がサブマイクを取りだし、たずねる。

「誰が髪型だけの整形なんかするか！！」

昨日、覆面の集団に十字架に貼り付けられて燃やされたんだよ！！」

あつ、久保君（鬼）が異端審問会のみんなに命令していたやつだ。
まさか本当にやるとは思わなかったよ……

「どうやら常村選手は相当の妄想壁のようです」

「誰が妄想壁だ！」

「今のご時世、それも文化祭中にそんな事があるわけないじゃない

ですか」

司会者の言うことも、もっともだが文月学園にその常識は通用しない。

「嘘じゃねえんだって！

本当にあったことだし、あの後なんて……」

常村もどきがぶるぶると震えだした。

確か、久保君の言った通りだとあの二人は船越先生に差し出されているはずだ。

良かったね、数学の成績は上がったはずだよ…

「えー、いつまでも妄想変質者と話していてもしょうがないので目の保養のためにも、吉井&姫路ペアにも伺ってみましょう」

この司会者は昨日と同じノリだった…

「ずばり、優勝する自信はありますか？」

司会者からマイクが手渡される。

「はい絶対に勝つてみせます」

なるべく司会者に変なことを言われないように無難な言葉を選ぶ。

「はんつ、二年のそれもFクラスなんかが俺たちに勝てるわけないだろ？」

本物の夏川が挑発するように言う。

「確かに学年最底辺のFクラスとAクラスの対決ですが、先生方はどう思いますか？」

司会者が鉄人と高橋先生にマイクを向ける。

「単純に考えればFクラスコンビに勝ち目はないが、なにかのために一生懸命になれるやつの強さを実感するいい機会になるかもしれないなあ」

そう言つて鉄人は一度、僕の方を見る。

「そうですね。しかし特記すべき部分はFクラスが決勝まで不正もなしに勝ち上がってきたことでしょう。

これはFクラスに対する認識を改める必要があるかもしれませんね」

もし、姫路さんのお父さんがこの会場にいれば今の高橋先生の言葉は効果絶大だろう。

「お二人ともありがとうございました。

では、そろそろメインイベントといきましょう。両者召喚を」

司会者の合図を受けて、姫路さんの手を再度握り直す。

「『『『サモン！』『』『』」

姫路さんと繋いだ手を振り上げ、召喚獣を召喚する。

Aクラス常村勇作 日本史209点

Aクラス夏川俊平 日本史197点

向こうの装備はオードソックスな剣と鎧だが、高得点らしく質はかなりのものだ。

「どうした、俺たちの点数を見て腰がひけたか？」

「無理もねえな。Fクラスじゃ、その嬢ちゃん以外からは見れない点数だからな」

二人が下卑た笑い声をあげる。

確かにこいつらの点数は立派だ。

僕では届かなかった点数かもしれない。

だけど、それだからといって僕たちの一度きりの高校二年生の文化祭を……来年はAクラスに行ってしまうであろう姫路さんとの文化祭をめちゃくちゃにしたいわけがない！

自分たちが楽に進学したいためにこんなことをするやつらのせいで、姫路さんの転校を阻止できないなんてバカげてる。

「前にある人が言ったんだ」

「晒し者から逃げる方法でも教えてくれたのか？」

Aクラスとの試召戦争の時に姫路さんが言った言葉が脳裏に蘇る。

「『自分のために頑張ってくれる人の力に、その人に少しでも近づきたい。そう想えばがんばれる』って」

「（その言葉…）」

そう呟いた姫路さんがはつとなつたように僕の方を見る。
僕はそれにただ笑い返すだけだ。

「はぁ？なに言つてんだ？」

たぶん、こいつらなんかには一生わからないだろう。

わかつてほしくもない。こんな最低なやつらに姫路さんがくれた大切な言葉の意味を。

「僕も最近、心からそう思つた」

ディスプレイに僕たちの点数が表示される。

Fクラス 姫路瑞希 日本史372点

Fクラス 吉井明久 日本史304点

「「なつ……」」

常夏が二人とも啞然としている。

ありがとう……姫路さん、明希。

二人の気持ちを無駄にしないためにも――

「あんたらは小細工なしでぶっ飛ばしてやる!!」

第28問 僕と奇数といつかの言葉（後書き）

ついに清涼祭編も佳境！？

次回もよろしくお願いします！

第29問 僕と決勝といつものお礼

明久SIDE

「お前…試召戦争の時は100点もなかったくせに！」

夏川の召喚獣の攻撃を楽によけると明希は攻撃の体勢に入る。

「実際、1週間前ぐらいはその程度でしたよ」

そこから蹴りのフェイントを入れ、相手をこけさせる。

「だけど、僕は…僕たちは負けるわけにはいかないんだ!!」

相手の足が地面に着く前に木刀で斬り払う。

ずどおおおーん!!

これが僕と明希で考えた共同攻撃。

回避や足掛けといった小技は僕が担当し、相手にダメージを与えることを主軸にした攻撃は明希自身が受け持つ。

これは中々利に叶った行動だ。

主な理由としては、普段から僕の戦い方は小技中心だからやり慣れている。そして明希は直に相手との間合いがわかるため、大きな一撃も当てやすい。

「夏川！」

夏川の召喚獣が飛ばされたことにより常村の注意がそれる。

「隙あります！」

召喚獣の身の丈以上もある大剣が常村の召喚獣に叩きつけられる。

「なにっ!？」

自身の召喚獣までもが飛ばされたことに常村が驚く。

「ちっ夏川、例の作戦でいくぞ！」

「おうよ！」

常夏コンビの召喚獣が同時に走り出す。中々のコンビネーションだ。走っている方向からして二人の狙いは姫路さんの召喚獣……

「そんな見せかけが通用するとは思わないことですね！」

木刀をブーメランの要領で常村の召喚獣の右端へと投げる。しかし、それは悠々とかわされてしまう。

「つと、お前こそそんな攻撃が当たると「常村止まれ！」

ゴッーーン！

常村は木刀を避けようと左端、すなわち夏川の召喚獣の方へと避けようとしたのだが、夏川の召喚獣も本来の狙いである明希の方へと軌道を切り替えたため、二人してぶつかったのだ。

Aクラス常村勇作 日本史109点

Aクラス夏川俊平 日本史115点

今のも合わせて相手は残り半分といったところだろう。

「なめたマネしやがつて…」

格下のFクラスに一発も与えられないどころか、一方的に押されていることにいらつく夏川。

「こうなりゃ、奥の手だ」

奥の手…？

400点に至っていないのだから腕輪の能力は使えないはずだ。だとすると僕たち2年生が知らないような裏技的なものがあるのだろうか？

「経験の差つてやつを教えてやるよ！」

そう言つて、夏川はじりじりとフィールドの隅へと召喚獣を移動させていく。

僕に今できることは、その一挙一動も見逃さないようにすることだ。

「くらいやがれ…！」

大袈裟な声と共に召喚獣ではなく、夏川自身が動く。

はつとなつて夏川の方を向くがもう遅い。

夏川は僕に向かって砂を投げた後なのだから。

避けられるだけの時間もないし、目をつぶつて少しでも砂が目に入

らない様にするしかない。

「明久君！」

しかし、僕は目をつぶれなかった。つぶろつとした瞬間に姫路さんが僕の前に僕を庇うように立ちはだかったから…

「姫路さん！」

とつさに繋いだ手を引き寄せる。

「きゃあ！」

しかし、当然のように僕と姫路さんはバランスを崩してしまう。

「共倒れとは好都合だぜ」

気配で常夏の召喚獣が迫ってくるのがわかる。
だけど、僕も姫路さんも自身の召喚獣の位置がわからないため、動かすことができない。

「これで終わりだぜ！」

夏川の召喚獣が明希を一撃で仕留めるために獲物を大上段に振りかぶる。

だけど――

「姫路さんを護りたいと想ってるのは僕だけじゃないんだ！」

悔しいけど、今回は任せたよ…

「まっ、そういつこった」

そう言うのと明希はがら空きになった相手の懷に潜り込み、喉に木刀を突き刺す。

「なにっ!？」

Aクラス夏川俊平 討死

明希はそのまま姫路さんの召喚獣を狙っている常村の召喚獣の方へと向かっていく。

「よける常村!」

「つと、うわぁ!？」

夏川のおかげで常村は間一髪といった具合で明希の攻撃をよける。だけど、操作にそれ程慣れていないやつが攻撃中に回避行動なんかをとれば、バランスを保てるわけがない。

案の定、常村の召喚獣はバランスを崩し、その場に尻餅をついてしまっ。

「チェックメイトだ」

無防備な常村の召喚獣に明希の木刀が突き刺さる。

Aクラス常村勇作 討死

「なっ……」

信じられないといった具合に常村が膝をつく。

「優勝はFクラス吉井&姫路ペアで決定だ!」

「「「「「いえーい!」」」」」

司会者の宣言に観客たちが沸き立つ。

「姫路さん、はいっ」

僕も立ち上がると姫路さんに手を差し出す。

「ありがとうございます」

姫路さんは僕の手をとると立ち上がる。

「僕たち勝ったんだね…」

いまいち実感がわかない。

「そうですね…」

と言っても、明久君と明希君のおかげですけど」

「そんなことないよ。僕は——」

姫路さんがいたからがんばれたんだ。

「明久君がどうしたんですか?」

そう当然の反応が返ってくる。
いつもなら適当にごまかすが、この時の僕はどうかしていたんだろう。

「僕は姫路さんがいたからがんばれたんだ」

「ふえ！？」

姫路さんがすごく驚いているのがわかる。

だけど、僕は不思議とこの状況になんの戸惑いも感じていなかった。

「今回の大会も試召戦争の時も僕は姫路さんから多くのものをもらった」

そう、僕一人では…いや、姫路さん以外とは決して手に入れられないものを…

「だから、少しでもそのお礼がしたいんだ」

ここで一度深呼吸をいれる。

「だから今日、僕の家に来てくれないかな？」

僕はただ姫路さんの返事を待つ。

その時間は僕にはとても長く感じられたが、本当は一秒も経っていないのかもしれない。

「はい。と言いたいところですけど無理です」

やっぱりか……

ある程度予想していた答えに消沈する。

「私だって明久君からたくさんのものをもらっただけですよ」

柔らかに優しい姫路さんの声はさつきと矛盾していることを言っている気がする。

「ですから、私だけがお礼をもらっただけなんです。私も明久君にたくさんお礼したいです」

えっ…？

もしかして…

「なので、私の家にも来てくれますか？」

「いいの…？」

「いいもなにも明久君が来てくれないなら私も行きません」

ちよつとだけムスツとした様に姫路さんが言う。

ここは姫路さんの厚意に甘えよう。

「じゃあ、今度行かせてもらおうね。」

でも、今日は僕の家に来てもらってもいいかな？」

「はいっ！よろしく願いいたしますね」

そう言っただけ姫路さんは満面の笑顔で笑う。

まるで僕の家に来るのが楽しみだというように…

今まで何度か来ているはずなのに、なんでこんなに嬉しそうなん

だろう？

わからないけど、姫路さんが喜んでいてくれるなら『お礼』はできそうだ。

「こほんっ！」

司会者がわざとらしく咳払いをいれる。

………まずい……

まだ試合会場だということを忘れてた……

「えー、いちやつくのは構いませんが、いやむしろもっとやれ。優勝商品の受理がありますので少しいいですか？」

「「は、はい……」」

僕と姫路さんはただ顔を赤らめ、うつむきながらこたえるしかなかった。

N O S I D E

二人の生徒が屋上への階段を登っている。

「ちくしょう、まさかあんなやつらに負けるとは思わなかったぜ」

「まあ、そんなに悔しがんなよ。」

俺たちには坂本とババアが話していたやつの録音があるんだからよ」

「それもそうだな。」

これを屋上の放送機材から流せばババアは終わりで俺たちも楽に進学できるしな」

「それにあいつら二人はのろけてやがるから邪魔するやつもいねえ。俺たちの勝ちだ！」

「へえ…」

そいつはおもしろそうなことかかんがえてんじゃねえか」

ある人物が屋上への扉に立ち塞がるように物陰から出てくる。

「てめえはBクラスの！？」

「ああ、2年Bクラスの根本恭二だ」

「なら話が早い、ささつとそこどけよ」

相手がわかれると安堵したように二人の内、一人が言う。

「おっと、どいてもいいがお前らと教頭の密会の話を校内放送で流すぜ？」

そう言つて根本は録音機を見せびらかす。

「てめえ、こつち側の人間じゃなかったのか！？」

「もとはそつち側だったさ。いや、今でも俺は真っ当な人間には程遠い。」

だけど、あいつの…あいつらのまっすぐな想いだけは邪魔させないんだよ！」

根本は今まで出したこともないような大きな声で叫ぶ。

それは文系に分類されるような彼が、悪の部類に入る二人を威圧するほどに。

「ぐっ…」

な、なめるなよ。俺たちに喧嘩で勝てると思ってんのか！」

「勝てる…」

わけないことくらいはわかってるさ。

だけど、生憎俺はAクラスの方々の様に賢くないんでね。あいつと同じように自分がやりたいようにしか行動できないんだよ！」

それは彼なりの恩返し。

もう一度、自分に他人を信じることを…仲間の大切さを教えてくれたバカな彼らへの彼なりの恩返し。

「いきがってんじゃねえぞ！」

「ぐほっ！」

根本に拳がクリーンヒットする。

だけれど彼は揺らぐこともなく立ち続ける。

「邪魔なんだよ！」

「ぐっ…」

根本の唇から血が出るが、歯を食いしばって耐える。

「いい加減に倒れやがれ！」バシッ

「なに！？」

根本に殴りかかろうとした拳は後方から腕を捕まれたことにより止められてしまう。

「誰だてめえら！」

二人組は後ろからやってきた数十名を睨み付ける。

「誰って、そこで大切なものを護っているやつの友達だけど？」

「友達だあ？」

こいつにそんなやつがいるわけないだろ」

バカにしたように笑われるが、根本自身も心当たりがなかった。それも今まで散々なことをしてきたのだから当然の報いだろ。

（今さら、俺を友達なんて呼ぶやつなんて…）

そう思いながらも根本は顔をあげる。

しかし根本の予想に反し、そこには見慣れたクラスメイトがいた。

「お前ら…」

「助けに来たぜ代表」

クラスメイトは誰一人として嫌な顔一つせずに根本に笑いかける。

「岩下と菊入は先生を呼んできてくれ。野郎は代表を援護するぞ」

「「「「おー！」」」」

岩下と菊入と呼ばれた女子は階下へと走り、残りは根本を守るように取り囲む。

「先輩方、もうあなたたちにはなにもできませんよ」

「ちくしょう…おぼえてろよ！」

そう言い捨てると、二人組は逃げるように階下へと走っていった。

「お前ら、どうしてここに…？」

「なに言ってるんだよ。友達のピンチに駆けつけるのは当然のことだろ？」

「だけど俺は今まで散々なことをお前らに…」

「そんなの、もう昔の話だろ？」

今のあんたは昔と違うんだ。なら、俺たちがあんたがを忌み嫌う必要なんてない。これからは仲良くしていこうぜ？」

差し出された手を根本は掴む。

「ああ、まだ至らないところもあるかもしれないが、よろしく頼むな」

第30問 僕と後夜祭と流れ星（前書き）

水龍さん、黒炉さん感想ありがとうございます！

第30問 僕と後夜祭と流れ星

明久SIDE

「あつ、雄二！」

後夜祭が始まる10分前くらいに、ようやく雄二を見つけることができた。

「よう明久。ババアの所にはもう行ったか？」

「行ったには行ったんだけど、立て込んでから後夜祭の後にしろだつてさ」

あのババアめ、人がせつかく言いつけを守ってやったのに…

「そうか…」

そついや、もう姫路には後夜祭の約束取り付けてきたんだろうな？」

「取り付けてるわけないじゃん…」

僕が姫路さんとダンスだなんて寝言は寝てから言っしてほしいものだよ」

どついう風に解釈したら、バカで不細工で甲斐性無しの僕が姫路さんとダンスの約束を取り付けれるのか教えてほしいものだ。

「じゃあお前もバカは休み休み言っただな」

「？」

雄二がなにを言いたいのかわからない。
だけれど、なぜけななされてる気がするの？

「まあ、お前のそれは今に始まったことじゃないしいいか…
それよりも、俺になにか用があつて呼び止めたんじゃないのか？」

そう言えばそうだった。

雄二が変なことを言い出すから危うく忘れるところだったよ。

「そうそう雄二、これあげるよ」

そう言つてポケットから如月ハイランドの招待券を取り出す。

「明久、お前…」

「霧島さんを連れてつてあげなよ」

これは僕なんかが私利のために使つていいものじゃないんだ。

「でも、お前だつて姫路と行きたいんだろ？」

「行きたくないと言えは嘘になるよ。」

「ただ、姫路さんと僕がそんな所に行つても釣り合わない。
それに、僕のこの気持ちはいつか自分で直接伝えたいんだ」

「そう、姫路さんが誰かにするのと同じように…」

「本当にいいんだな？」

「うん。霧島さんを喜ばせてあげなよ」

雄二が僕の手からチケットを受けとる。

「ありがとな、明久」

「どういたしまして」

瑞希SIDE

「……瑞希」

突然呼び止められたので振り向くと翔子ちゃんがいきました。

「あつ、翔子ちゃん。どうしたんですか？」

「……瑞希は吉井と後夜祭に出ないの？」

明久君と後夜祭…

「いいんですよ。」

明久君と私なんかよりもいい人を誘っているはずですから…」

自分で言っておいてなんですが、惨めな気持ちになってきました…
大会中の勢いのまま思いきって誘えば良かったです…

「……二人して不器用」

「？」

翔子ちゃんがなにを言っているのかわかりません…

「……そんな瑞希に耳寄り情報。

試験召喚獣大会にでたペアは絶対に後夜祭にペアで出ないとダメ」

「ふえ！？」

つて、ことは私は明久君と……

「……吉井はこのこと知らない筈だから瑞希が誘ってあげないとダメ」

「で、でも……」

もし断られてしまったら…

「……もしペアで出られないと男子の方が酷い目にあう」

「あ、明久君が酷い目に……」

「うん。だから吉井を助けれるのは瑞希だけ」

明久君を助ける…

いつも私を助けてくれる明久君を…

「わ、わかりました！」

「ありがとうございますね翔子ちゃん！」

私は明久君を早く見つけるために走りだします。
後夜祭開始まであと7分…

翔子SIDE

「……二人とも鈍感すぎて困る」

過ぎ去っていった瑞希の背中を見ながらポツリと呟く。
あんな嘘までつかないと二人は動かないだなんて世話がやける…

「よう、翔子！」

雄二の声！

「……雄二、どうしたの？」

振り返りながらこたえる。

「お前、こんな所でなにやってたんだ？」

「……鈍感な二人の背中を押してた」

やっていたことをありのままに話す。

「奇遇だな。」

俺もさつきバカで鈍感なやつの中を押してきたばかりだ。これのお礼にな」

そう言つてチケットをヒラヒラさせながら翔子に見せる。

「……雄二……」

涙が溢れてきているのがわかる。

もう行けないと思つていた如月ハイランドのチケット……私が雄二と行きたかつた如月ハイランドのチケット……

「雄二大好き！」

「こ、こら翔子離れろ！」

雄二が振りほどこうとするが、離れる気なんて毛頭ない。

「まあ、今日くらいはいいか……」

雄二もやつと素直になつたみたい。

「つと、そろそろ後夜祭の時間だな」

雄二が腕時計を見ながらわざとらしく言う。

「残念なことに俺はいまだにペアがないという孤独の身。どこかでペアができていない女子はいないもんかなあ……」

チラッと横目で私の方を見る雄二。

「……実を言うと私もペアがない。
どこかにペアがない雄二がいてくれると助かる」

「俺は名指しかよ……」

呆れたという風に言われてしまうが、雄二もまんざらでもないようだ。

「……私は雄二と踊りたい」

「今日くらいは翔子の頼みを聞いてやるか」

そう言って差し出された手を私は掴む。

「よろしくな翔子」

「うんっ！」

明久SIDE

まずい！

後夜祭が始まるまで後4分しかない！
早く姫路さんを見つけないとせつかくの優勝がなかったことになっ

てしまう！

なんで雄二もこんな重要なこと早く言ってくれなかったんだよ！

さかのぼ
「遡ること数分前」

「そうだ明久、チケットのお礼と言ってはなんだがいいことを教えてやる」

もったいぶったように雄二が言う。

「なに？」

「実を言つとだな、優勝したペアが後夜祭に出ないと優勝は取り消しらしいぞ」

優勝が取り消される…？

「ま、まさか！？」

「ああ、お前と姫路のペアで後夜祭にでなきゃ優勝は取り消し。設備は買い直せなくなつて姫路は転校しちまうつてわけだ」

「そ、そんな…」

「いったい僕はどうすればいいんだ…」

「ここまで来てみすみす姫路さんを転校させてしまうのか…？」

「お前だつて大好きな姫路が転校しちまうのは嫌だろ？
なら、今すぐ姫路を探して約束を取り付けてこい」

「で、でも姫路さんが僕なんかと…」

「大丈夫だ。俺が保証してやるから行ってこい」

雄二のこの自信がどこからくるかわからないが、今は雄二を信じるしかない。

「雄二、信じてるからね」

「ああ、行ってこい明久」

雄二の声を背中に受けて僕は走り出す。
早く、姫路さんを見つけないと！

く現在く

廊下の角を曲がるとちょうど姫路さんも向こう側から走ってきていた。

「姫路さん！」

「あつ！明久君！」

姫路さんの前で立ち止まる。

「はあはあ…探したよ、姫路さん…」

「はあはあ…わ、私も探しましたよ明久君…」

姫路さんも僕を探していてくれたのならちようどいい。

「で、姫路さん用事はなに？」

「あ、明久君の方から先でいいですよ」

本来なら姫路さんを優先すべきなのだろうけど、今はそんな悠長なことを言っていられない。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ。

あの…なにも言わず僕と後夜祭に出てくれないかな？」

「えっ！？」

姫路さんの驚いた顔を見るのは今日二度目だ。

「やっぱり、僕なんかとじゃ嫌だよね…」

ああ…どうしよう！？

このままじゃ姫路さんの転校が確定しちゃうよ！

「嫌なんかじゃありません！」

「えっ！？」

今度は僕が驚く番だ。

「私は明久君と一緒に後夜祭に出たいです…」

さつきとは対照的に細かい声で言う姫路さん。

「本当に…僕なんかでいいの…？」

信じられない。姫路さんが僕の誘いを受けてくれるだなんて…

「はい。明久君の方こそ私なんかでいいんですか…？」

いいもなにも、優勝取り消しの件がなくても僕は姫路さんと後夜祭に出たいのだから当然OKだ。

「当然だよ。じゃあ、よろしくね姫路さん」

「はい。こちらこそお願いしますね明久君」

差し出された僕の手を姫路さんが掴む。

〈後夜祭〉

「互いを想い合う男女がつどる後夜祭、ついに開幕だ！」

「『『『いえーい！』』』」

試験召喚獣大会の時と同じ司会者の掛け声に参加者たちの歓声があ

がる。

「ちなみに僕にはそんな相手はいないんですよ〜」

「「「「あははは…」「」「」

司会者の自虐ネタにみんなが乾いた笑みを浮かべる。

実際、ここにいる人は僕と姫路さんを除いてカップルばかりだろう。そこでこの自虐ネタはいかなものかと思う。

「まあ、独り身の戯れ言はおいとしまして後夜祭を楽しんでいこうぜ！」

「「「「いえーい！」「」「」

再び周りが沸き立つ。

早く司会者にもいい相手が見つかるといいね…

ちゃんちゃらちゃちゃちゃんちゃらちゃちゃちゃっちゃちゃ
やちゃー♪

馴染みのあるリズムが流れてくる。

「って、なんでラジオ体操のリズムなのさ！」

思わず叫んでしまった…

普通、こういう時の音楽は軽快なものではないだろうか？
いや、たしかにラジオ体操のリズムも軽快ではあるけどさ…

「明久君は踊らないんですか？」

手を繋いだ姫路さんが不思議そうにたずねてくる。

「姫路さん、普通ラジオ体操のリズムで焚き火を囲って踊ったりしないよ…」

「でも皆さん、楽しそうに踊ってますよ？」

「えっ…」

周りを見回してみればたしかに多くのカップルがダンスには似つかわしくないリズムでも懸命に踊っていた。
しかし、その中にも僕と同じようにこの状況に啞然としている人物が一人…

「雄二ー！霧島さーん！」

姫路さんの手を引きながら二人の所に走っていく。

「よう明久に姫路」

「こんばんは翔子ちゃん、坂本君」

「……こんばんは」

珍しく雄二が手枷を付けられていない。
うまい具合に言いくるめたのだろうか？

「雄二たちも参加してたんだね」

「まあな。」

それにしても、なんでこいつらはラジオ体操のリズムで踊れるんだ？」

ここに同志が一人いた。

「……好きな人とならどんなことをしても楽しい」

「そ、そうですよ！」

相変わらず霧島さんの発言は的を射ているようで明後日の方向を向いている…

そして姫路さんも変なふうに関調しないでいてもらいたいものだ。

「……だから雄二、早く私と踊る」

「あいだだだだ！！」

わかった！踊ってやるから一回手を離せ翔子！」

「……わかった」

そう言っで離れた手と別の方の手を握る霧島さん。
相変わらず積極的だなあ…

「明久君、私たちも踊りませんか？」

「そ、そうだね。踊ろっか」

ダンスなんてものはわからないけど、周りの見よう見まね姫路さんをエスコートする。

なるべく足を踏まないように、バランスを崩さないように……
それでいて、相手のことを考えて先導していくというのは中々難しい……

「明久君、お上手ですね」

姫路さんがリズムをとりながら言う。

「そ、そうかな？」

僕自身は足を踏んじやいそうで気が気じゃないんだけど……」

「もう、明久君はロマンチックさの欠片もありません！」

なぜだか姫路さんがご機嫌斜めになってしまった。

なにか僕は悪いことを言っただろうか？

不機嫌の理由はわからないが、僕に否があるのだろう。なんとかしなきゃなあ……

とそこで、ちょうどいいタイミングに曲がターンの伴奏へと差し掛かる。

できるかどうかかわからないけど、勇気を振り絞って握った手を高く上げ、ターンの体勢をつくりあげる。

くるっ！

姫路さんは、いつの間にか変わっていた優雅な曲調に引けをとらないほど素晴らしいターンを決める。

不思議と一度大きなことに成功すると自信がでてくるもので、段々と余裕がでてくる。

くるっ！

姫路さんが再びターンを決める。僕はただ先導するだけだが、それでも楽しい。

姫路さんと同じ場所で同じ時を共有しているという事実がなによりも幸せだった。

「楽しいですね、明久君」

「うん、とっても楽しいよ」

姫路さんも同じ想いを共有しているという事実がより一層僕を高揚させていく。

この時間が永遠に続けばいい

この時間が終わることなく続けばいい

いつまでも姫路さんと共にいられば…

僕は…いや、僕たちはほんの少しだけど僕の願った時間を延長させることができた。

今はまだ姫路さんは同じ想いを抱いていない。

だけれど、いつの日か本当の意味で隣を歩ける日がきてほしいと思う。

しかし、それを願うことしか僕にはできない。

そう、あの夜空から流れ落ちる一筋の光に…

第30問 僕と後夜祭と流れ星（後書き）

清涼祭編も残すところ後1〜2話となりました。
これからもよろしく願います。

第31問 僕とお義父さんとオレンジジュース（前書き）

青龍さん、SHINさん、墮落者断さん、感想ありがとうございます！

第31問 僕とお義父さんとオレンジジュース

明久SIDE

曲が一旦終了し、休憩時間にはいる。

「ふう… ちょっと飲み物とってくるね」

「それなら私も行きますよ」

「いいよ。二人分なら僕一人で充分だからさ」

僕のがままで一緒に後夜祭に出てもらっているのだ。これ以上、姫路さんに迷惑をかけるわけにもいかない。

なにより、姫路さんは体力があまりないのだからダンスの後には休憩が必要なはずだ。

「じゃっ、行ってくるからここで待っててね！」

多少強引にしないと姫路さんは折れない時があるので、そのまま走り出す。

「えーと、ジュース、ジュース…」

無料でジュースが貰える場所があるのだが、その場所を見事に見失ってしまった。

「ちよつといいかね？」

いきなり肩に手をのせられ、声をかけられる。

ビクツとしながらも振り向くと、そこには大人の男性がいた。

ビシツとした営業職の人が着るスーツを着ているあたり、教師ではないだろう。

「すまないが、君が吉井明久君であっているかね」

「あつ、はい……」

なんでこの人は僕の名前を知っているん……須川たちのせいで来校者にも知れわたっているんだった……

「そうか、君が明久君か……」

スーツの男性が僕を品定めするようにまじまじと見る。

「あの、失礼ですがどちら様でしょうか？」

もしかしたら不審者の可能性も否めない。

「いや、大した者ではないんだ」

自分の素性を隠すとはますます怪しい……

「ところで、みず——いや、君と一緒に大会に出ていた娘はどう

「いった関係だい？」

「なんで僕と姫路さんの関係なんかを聞いてくるんだろうか？
なにか姫路さんと関係のある人なのだろうか？」

「ただの仲良くしてもらってるクラスメイトですよ」

「僕の気持ちまで赤の他人に話す必要はない。
そう考え、深くは語らないようにする。」

「なにか特別な感情は抱いていないということかね？」

「なっ…そ、それは…」

「隠そうとしていたことの核心をつかれ狼狽えてしまう。」

「そうか、そういうことか…」

「君になら瑞希を任せてもいいかもしれないね」

「えっ…？」

「今この人は『瑞希を任せてもいい』と言わなかったただだろうか？
瑞希とは当然だが姫路さんの名前である。」

「でも、なんでこの人がそんなことを……もしかして!？」

「あっ、お父さん!」

「聞き慣れた声が僕の疑問を確証へと変えていく。」

「おう、瑞希じゃないか」

スーツの男性が手を振っている方向を見ると、姫路さんが走ってきていた。

ということは、この人は姫路さんの……

「あれ？明久君はお父さんと知り合いだったんですか？」

僕たちの所にたどり着いた姫路さんが不思議そうにたずねてくる。

「いや、今さっきばったり会ってね」（余分なこと言わないでくださいよ！）

姫路さんのお父さんに目で訴えかける。

「そうなんだよ。」

父さんは道に迷ってそこにいる吉井君に道を聞いていたのさ」

姫路さんのお父さんナイスフォロー！

なんとかこれで危機は脱せそうだ。

「って、ことは今さっき知り合ったんですか？」

「う、うん……」

ごめん姫路さん。世の中には嘘も必要な時があるんだ…

「そういえば瑞希。転校の件だが——」

お父さんが一度僕の方を向く。

「はい…」

真剣な面持ちの姫路さん親子。

いくら僕たちが優勝して設備を買い換えたとしても、姫路さんのお父さんが了承してくれなければなににもならないのだ。

「あの話はなしにしようと思う」

「「本当ですか！」」

喜びのあまり、姫路さんと声が被る。

「Fクラスだからといって見下していた父さんが悪かった。

Fクラスだって充分素晴らしいんだ。人間は学力だけじゃない。

そしてなによりも瑞希はFクラスにいたいんだろ？」

「はいっ！」

重荷がとれた姫路さんの笑顔はとても輝いていた。

この笑顔だけで僕の苦勞がすべて無かったことになってしまつくらいに。

「吉井君、これからも瑞希を頼むよ」

「任せてくださいお父さん！」

いったいなにを任されるかわからないし、僕が姫路さんのお世話になる方だと思っけれど了承する。

「それと私のことはお義父さんと呼んでくれて構わないよ」

「えっ？お父さんって呼びましたよね？」

もしかして聞こえなかったのだろうか？

「だからお父さんではなくお義父さんだと言っているだろう？」

「お父さん…ですよね？」

姫路さんのお父さんと僕のニュアンスが微妙に違う気がするが誤差の範囲だろう。

「まあ、今はいいとするか。」

いずれ、君は私のことをお義父さんと呼ぶことになるのだろうかからね」

「？」

姫路さんのお父さんがなにを言っているかますますわからない…
つと、そんなことより一つ聞いておかなきゃいけないことがあったんだっただ。

「あの、お父さんは少しお時間ありますか？」

「そうだな…あまり長居はできないが少しぐらいなら構わないよ」

これは好都合だ。

「じゃあ、少しあちらで男同士の話でもいかがですか？」

「いいだろう。」

瑞希、三人分の飲み物をとってきてくれないか？」

うん、姫路さんのお父さんは中々機転の利く人だと思う。

「はいっ！」

姫路さんがなにを疑うこともなく、飲み物をとりに走っていった。
あつ、僕が向かおうとしていた方向と逆方向だ……

「で、話とはなんだい？」

かわいい跡取りの話とあつてだから大概は許容してあげるよ」

僕はかわいくもなければ、どこかの跡取りになる予定もない。
というか話す内容が内容だけに、さすがに二つ返事で了承してもら
えるとは思えない。

「えっと、ですね…」

僕は姫路さんに日頃お世話になっているわけです。そして、今回の
試験召喚獣大会でも姫路さんのおかげで優勝できました」

ここからどう切り出そうか？

建前は並べてみたけどいったいどうすればいいんだ！？

ええい、こうなりや自棄だ！！

「要するに姫路さんにお礼をしたいので僕の家を招待してもいいで
すか！」

あれ？

僕はなんでこんなことを大声で叫んでいるんだろう…

いくらなんでも緊張しすぎというものではないだろうか？

「別に構わないよ」

「ええええ！？」

なんでこの人はかわいい一人娘をバカで不細工で甲斐性なしの僕みたいになやつに任せられるんだ！？
自分で言うのもなんだけど、普通は拳骨の200や300発ほどもらっても文句はいえないと思う。

「ただし、一つだけ条件がある」

「条件…ですか…」

やっぱりあるのか。

なんだか少しだけ安心した気もする。

「その条件とは…」

「条件とは……」

僕と姫路さんのお父さんの間に重苦しい空気が流れる。

「隙あらば既成じ「アウトオオオ！」」

僕の鍛えぬかれた危険察知能力が瞬時に反応して制止の言葉をいれる。

「なに言ってるんですか！実の娘ですよ、実の娘！！」

「吉井君こそ、なに言っているんだい？
いわば親公認でイチヤイチヤできるんだよ？」

「そういう問題じゃありませんよ！」

まったく、なんで僕の周りにはネジが数十本単位で抜けている人ばかりなのだろうか…

「はははっ

冗談だからあまり深くは気にしないでくれ。ちっ」

「今この人『ちっ』って舌打ちしたよ！

実の娘のピンチが過ぎ去ったら舌打ちしたよ！」

もしかしたら姫路さんのお父さんは須川たちよりも質たちが悪いかもしれない……

「まあ、ここまでの冗談はおいといてだ。

本当に吉井君の家に行くことは何も構わない。

第一、春休みなんて君の家にそれは入りびたってるかのごとく行っていたのだから、今さらどうということもないだろう」

春休み…

僕の記憶から完全に消えてしまっている空白の時間…

明希の力を借りても過ぎ去ってしまった記憶は取り戻せない。

あくまで、その日の記憶の一部だけを明日に引き継ぐだけなのだから…

「もしかしてタブーだったりしたかい？」

「いえ、これも僕が乗り越えていかなきゃいけないものなんです。ですから気にしないでいてくれて構いませんよ」

そう、いつかは嫌でもこの問題と直面する時がくるだろう。

その時までには僕は僕なりの答えを出しておかなければならない。僕が僕自身であるために……

「だとしても傷口を抉るようなことをしてしまつてすまなかつた」

「いえ、本当に気にしなくて構いませんよ」

今さらどう足掻いても変わる事実ではないのだ。姫路さんのお父さんに否があるわけではない。

「そう言ってもらえると助かるよ。っと、飲み物をとりに行つてくれた瑞希には悪いが、そろそろ時間だ。私はおいとまさせてもらうよ」

「あつ、はい。今日はありがとうございました」

「こちらこそいいものを見せてもらったよ。

吉井君、また会おう。あと、瑞希もよろしく頼むよ」

そう言いながら手を振つて、姫路さんのお父さんは校門の方へと向かつていつてしまった。

僕もそれに笑顔で手を振り返す。

「明久君、お待たせしました。

あれ？私のお父さんはどこに行つちやつたんですか？」

振り向けば姫路さんがオレンジジュースの入ったコップをトレイにのせていた。

「お父さんなら、たった今用事があるらしくて帰っちゃったよ」

「そうなんですか…」

姫路さんが残念そうに言う。

やはり、親子で話したいことも山ほどあったのだろう。

「姫路さん、僕はいいから今日は家に帰ってお父さんと話してくれ
ば？」

たまに帰ってきたお父さんと話すことの方が僕のお礼なんかより大事な筈だ。

「明久君、なにか勘違いしているみたいですけど、お父さんはほぼ毎日帰ってきていますよ？」

「えっ…」

勝手に見た目から出張三昧で、ほとんど家に帰ってこれない人だと思ってた…

「ですから今日は明久君のお邪魔させてもらいますね」

「うん！ちゃんとお礼するから期待しててね」

僕の当初の目的が達成されるのは嬉しいのだが、疑問が一つ残る。

じゃあ、姫路さんはなんで残念そうにしていたのだろうか？

まさか僕のことをお父さんに紹介したかったとか……はないか…

「そういえばオレンジジュースが一つ余ってしまえますけど、どうします？」

姫路さんのお父さんが帰ってしまった事により、一つ余りがでてしまったのだ。

「僕と姫路さんで半分ずつにすればいいんじゃないかな？」

「そ、そうですね」

なにを姫路さんはそんなに緊張しているのだろうか？

「では、いただきます」

そう言うと姫路さんは両手で紙コップを囲い、中身を飲み干す。

僕もそれにつられるように紙コップを一つ手に持つと、中身を口の中に流し込む。

「あつ、明久君の分です」

いつの間にか二杯目に差し掛かっていた姫路さんは半分だけ飲んだコップを僕に両手で差し出してくる。

「ありがとう姫路さん」

自分の飲みかけをトレイに置くと、姫路さんから紙コップを受けとる。

見ると、中身は半分より少し多かった。

差分はちょうど、僕が飲みかけていたのと同じくらいの量だ。

「はい、姫路さん」

さっきトレイに置いた分を姫路さんに差し出す。

「くれるんですか？」

「うん。姫路さんがくれたのは半分より少し多かったからあげるよ」

「あ、ありがとうございます！」

姫路さんはすごく嬉しそうに紙コップを受けとる。

ジュースをもらえただけで喜ぶなんて案外子供っぽい部分もあるんだなあ…

みんなが知らない姫路さんの一面を知ることができて少し得した気分だ。

そう思いながら僕も姫路さんからもらった分を飲む。

オレンジ独特の甘さと酸味がいい具合に混ざっていておいしい。

だけれど、僕が飲んでいたオレンジジュースよりも少しだけ甘い気がする。

それがまた程よい具合で癖になりそうだ。

オレンジジュースって、こんなにおいしいものだったんだ…

「おいしいですね」

「そうだね」

姫路さんが今飲んでるのは僕が飲んでいたやつだから甘さはこちらよりも控えめな筈なのに、とてもおいしいものを飲んでいるように笑っている。

「姫路さん、こっちの方が甘いから飲んでみなよ」

なるべくなら姫路さんにおいしい方を飲んでほしいと思い手渡す。

「そうなんですか？」

姫路さんは元の自分の紙コップを受けとると、それを傾ける。

「ふぁ……」

本当においしいですね。でも、こちらもおいしいんですよ」

そう言って姫路さんは、元の僕の分を手渡してくる。

半心疑問に思いながらもコップを傾けてみると、たしかにさっきまで僕が飲んでいたのよりも甘かった。

「本当だ。すごく甘くておいしいね」

「こっちもおいしいですよ。また交換してみます？」

「うん」

再度、互いの分を交換して飲む。

そうすると、なぜだかさっきよりもまた甘くなっていた。

おかしいなぁ……

これではどちらが甘いかわからない。

「姫路さん、もう一度交換しよ?」

なるべく姫路さんにおいしい方を飲んでもらいたいと思い、提案する。

「は、はい!」

交換して飲んでみるが、結果は変わらずこちらの方が甘かった。

残りもあと僅かだが、その少量だけでもと思いまた交換する。

結局、コップの中身が無くなるまでそれは続いた。

結果から言えば、どちらが甘いかは不明瞭なまま。

姫路さんからもらう度に段々と甘くなっていき、それでいて酸味が消えることもなかったのだから。

『ピンポンパポーン

ただ今より後夜祭ダンスイベントの後半の部を始めます。

出場なさるペアはお早めに焚き火の近くにお集まりください』

ちょうどいいタイミングで放送が流れる。

「姫路さん、行こうか?」

「はい、行きましょう。明久君」

僕たちは互いに手を取り合い立ち上がる。
まるでそれが当たり前であるかのように…

第31問 僕とお義父さんとオレンジジュース（後書き）

清涼祭編は次回＋座談会で終了となります。

第32問 僕と制約解除と魔法の意味（前書き）

墮落者断さん、感想ありがとうございました！

第32問 僕と制約解除と魔法の意味

明久SIDE

「失礼しまーす」

後夜祭も終わったので約束通り、ババアの所に訪れる。

「ノックぐらいしなよ、クソガキ」

入室早々、人を罵倒するのが教育者のやることだろうか？

いささか疑問だが、廊下で姫路さんを待たせているため文句は言わないことにしておこう。

「これが約束の腕輪ですよ」

ババアの机に優勝商品である2種類の腕輪を置く。

「でも、これってなになんですか？」

一応、効力ぐらいは知っておいてもよいだろうと思いたずねる。

「こっちが一人で召喚獣を2匹だせる腕輪。

で、こっちが教師なしでも召喚フィールドが作り出せる腕輪さね。

だけれど、残念なことに調整中だから低得点のやつにしか扱えないんだよ」

たしかに便利なものだが、低得点者にしか使えないのではあまり意

味がない。

第一、僕が前者の腕輪を使えば明希がどうなるかわからないし、後者にしても僕にとってはあまり意味のないものだ。

「じゃあ、代替景品はないんですか？」

さすがに、少しおこがましかもしれないが試召戦争で少しでも役に立つ物は貰っておきたいものだ。

「ある訳ない、と言いたところだが、今回はあんたらに世話になったことだし特別にあげるさね」

腐っても教育者。ババアでも教育者といったところだろうか。

「一つ目は召喚フィールドを作りだせる方の腕輪をやるよ。坂本程度の点数なら不具合は起こさないだろうし、あいつならうまく使うだろうよ」

そう言つて腕輪を一つ僕に手渡してくれた。
たしかに雄二はこういうのを使うのは得意そうだ。

「間違つても、あんたや姫路瑞希が使うんじゃないよ」

「姫路さんはともかく、なんで僕もなんですか？」

姫路さんは唯一、Fクラスで学年平均を越えているのだから当たり前だが、僕まで名指しされた意味がわからない。

「理由として二つ。

一つ目はあんたの召喚獣はイレギュラーでどういった不具合をおこ

すかわからないから。二つ目はあんたが学年の平均以上に達してるからだよ」

「えっ…？」

誰が平均以上に達してるって…？

「はあ…」

学力と中身は伴うもんじゃないようだねえ…

あんたにもわかりやすくいえば、今のあんたは総じて平均並の点数をとっている。それでいて日本史があ点数なんだから、平均なんて越えて当たり前だろ？」

「……………なるほど！」

要するに僕はもうバカじゃないって訳ですね」

「そういう発想がバカだって言うんだよ」

「なっ…」

まさか平均点を越えてもバカ扱いされるとは思ってもみなかった…

「まあ、あんたのバカさ加減はおいとくとして、二つ目の代替品の話なんだが、あんたの召喚獣に少し自由を与えてやろうと思う」

明希に自由…？

ババアは知らないと思うけど今でも明希はかなり自由奔放に生きていると思う。

「自由って言っても、あんたの考えてる自由とは違うよ」

考えが読まれた!?

「召喚獣っていうのは召喚フィールドがなければ存在できないだろう？だから、その制約を外す…いや、常にあの小生意気な召喚獣の周りに薄い召喚フィールドを張ってやるってことさね」

「それって明希がどんな所でも出てこれるってことですよね!？」

冗談じゃない。

昨日だって勝手に出てきてるところを考えると、明希はある程度自分の意思で出てくることが出来るはずだ。

それに召喚フィールドの制約が無くなってしまえば一日中だって出ているだろう。姫路さんに会うために……

そうなれば僕と姫路さんの数少ない憩いの時間すらも奪われてしまうことになりかねない。

とてもじゃないが、そんなのはありがた迷惑以外のなにものでもない。

「その件については慎んでお断りしますよクソババア」

「ちつとも慎めてないじゃないかね!？」

せつかく人が誠意を込めて言ったのになんて言い種だろうか。

「でも、いいのかい？」

この話の内容をあいづが聞いてたら、あんたに協力してくれなくなるかもよ?」

「うっ……」

悔しいけどババアの言う通りだ。

もし僕がここで断れば最悪、明希は記憶共有すら破棄しかねない。それも姫路さんと過ごせる時間がかかっているのだから、確率は相当高い筈だ。

「わかりましたよ…」

そのありがた迷惑な代替品ももらっていきます…」

「あからさまに嫌な顔するんじゃないよ。それに今すぐって訳じゃないさ。」

そうだねえ…大体強化合宿ぐらいには調整が済んでるだろうよ」

強化合宿というのは学力向上にAからFまで合同で行う勉強会の様なものだ。

まあ、何はともあれ僕の悩みの種がまた一つ増えたわけだ……

（下校中）

「すごいですね！これで明希君ともたくさんお話できます」

帰り道、明希の事を話してあげたら姫路さんは嬉しそうだ。

「う、うん…」

姫路さんには悪いが僕はあまり気のいい話ではない。

普段から明希と接するにしてお癖が強すぎる性格をしているからだ。

「そつえば姫路さん、僕が後夜祭に誘った時に言いたかったことがあったみたいけどなにかな？」

僕の用事は姫路さんを誘うことだったが、姫路さんからは聞けずじまいなのだ。

「そ、それはですね…わ、私の用事というのは…」

姫路さんの顔が段々と赤くなっていく。

もしかして体調が悪かったりするのだろうか？

「そ、そんなことより明久君、本当にありがとうございました」

深々と頭を下げる姫路さん。

はつきり言ってここまで不自然な切り返しは見たことがない。

「急にありがとうだなんてどうしたの？」

「だって明久君は私が転校をしなくてもいいように試験召喚大会に出してくれたんですよね？」

「ち、違うよ…」

あの…ほら、たまたまだよ。僕は転校の話だって知らないんだしさ」

まさかあの不自然な切り返しから、ここまでの発言に繋げるとは思わなかった。

「前に言いましたけど明久君は嘘が下手ですよ。」

だって、お父さんが転校を取り消してくれた時に明久君も私と一緒に驚いていたじゃないですか」

「えっと、それは…」

続く言葉が思いつかない…

それに、今度は僕の顔が赤くなっているだろうから姫路さんと顔を合わせることもできないし、よわったなあ…

「そ、その話はおいといて早く僕の家に行こうよ!」

そう言つて、僕は逃げるように走り出す。

「待つてください明久君!」

姫路さんも後ろから追いかけてくるのがわかるから、あまり離れ過ぎないよう速さを調整しながら走る。

だけれど、立ち止まって言える訳ない。

姫路さんのためなら、なんだってやれるだなんて…

〈数分後〉

今、僕はすごく後悔している。

こんなことなら一直線に家に向かうんじゃないかと…

姫路さんにお礼をしたいからといって家に呼ぶんじゃないかと…

「明久君、入らないんですか？」

「いや、ちよつとね……」

玄関のドアを開かないように押さえつけながら作り笑いを浮かべる。

（逝ること数秒前）

「ふう……やつと着いた……」

自分の家の壁に手をつきながら一息いれる。

姫路さんとの距離は50メートル程だからそろそろ階段を登っていくだろう。

せつかくだから少し脅かそうかな？

そう思い、ポケットから鍵を取り出し差し込む。

カチャカチャ

「あれ？」

なぜだか鍵が空いているのだ。まさか今朝閉め忘れたのだろうか？
いや、今朝は姫路さんと共に出てきたからそんなことはないはず……
疑問に思いながらもドアを開けるとそこには――

「おかえりなさいアキく――」

「人違いです」

ばたんっ！

勢いよくドアを閉めると、すぐに鍵もかけドアを手で押さえつける。
なんでだ！？

なんでこのタイミングで僕の家姉さんがいるんだああ！！

く現在く

ごんごん

「明久君、中に誰かいるみたいですよ」

「気のせいじゃないかな」

姫路さんを家にあげようとしてる事が知れたら僕の命はないも同然だ。

なんとかしてこの状況を脱しなければいけない。

「やつぱり、今日は姫路さんの家に——」

ここまで言いかけて気づく。それこそ自滅行為なのだ…

姉さんには僕が今ここにいることを知っているのだから言い訳は聞かない。なにより僕にはもう姫路さんのお父さんを相手にするだけの気力は残っていない。

『アキくん、なぜ開けてくれないのですか？

姉さんを家の中に閉じ込めて楽しい年頃なんですか？』

実の姉を閉じ込めなくなる年頃とは何歳くらいなんだろうか…
僕には皆目検討がつかない。

なにより、冷や汗が半端なくでているはずだ。

姫路さんが変に勘ぐって嫌われでもしたらどうしよう…

「明久君、お姉さんが帰ってきてるみたいですよ」

案外、普通の反応だった…

「う、うん。そうだね…」

もうここは腹をくくるしかないだろう。

そして姉さんにこっぴどくしかられよう…

僕にとつては姫路さんへのお礼の方が大事だから逃げる事なんてできないのだから…

「ただいま…」

「お邪魔します」

姫路さんと共に家に入ると案の定、姉さんが待ち構えていた。

「ち、違っんだ姉さん！

これには深いわけがあつて、決してやましい気持ちはこれっぽっちも——」

「アキくんはなにをそんなに慌てているのですか？」

「えっ…？」

だって姉さんは前、不純異性交遊は禁止だって…」

そう、これは僕が独り暮らしを始める際に姉さんが僕に課した条件。

「別に姉さんはえっと…」

「あつ、姫路瑞希です。」

いつも明久君にはお世話になっています」

姫路さんの名前がわからない姉さんに姫路さんが挨拶をする。

「瑞希さん、いつもうちのアキくんがお世話になっています」

ぺこりと頭を下げる様はまるで普通のいい姉のようだ。

あくまで、ここだけを見ればの話だが…

「それで、姉さんは瑞希さんの事をアキくんを騙すような人だとは思ってません。」

姉さんはアキくんがバカで不細工で甲斐性無しですから、アキくんに近いってくる女の子はアキくんを騙そうとしていると思ってそれを言っただけですよ。」

それとも瑞希さんとは不純な関係だということですか？」

「そ、そんなことあるわけじゃないか！」

僕が姫路さんと不純な関係な訳ない。

いや、そもそも純粹とか不純とかの問題の前に付き合っすらいない。

「なら、姉さんは瑞希さんを信用してるからとやかく言いませんよ。それに——」

「それに？」

「花婿君と花嫁ちゃんの邪魔するわけにもいかないしね」

「へっ…？」

いきなり口調の変わった姉さんに啞然となる。
というか、このしゃべり方どこかで…

「あっ！もっ、もしかして…」

「アキくん正解です」

そう言つて姉さんはバックからカツラといつもとは違う服等を取り出す。

それはどれも、あのお客さん（19 & 23 問参照）が身に付けていたものだつた。

「じゃあ魔法つていうのも…」

「はい、姉さんが瑞希さんとの関係を認めてあげるといふことです」

まさか姉さんがあそこまで変装が上手いとは思わなかった…

第一、なんで僕は気づけなかったのだろうか…

悔しいような悲しいような気がするが、姉さんが姫路さんといても見逃してくれるというのは吉報だ。

「それにしても姉さん、よく姫路さんと初対面なのに許すね…」

正直、死も覚悟していたんだから驚きものだ。

「たしかに会うのは初めてですけど、面識はありますよ」

「えっ!？」

「私が明久君の記憶の状況をお姉さんに連絡していましたから」

「そうなんだ…」

なんだか僕の知らないところで二人が知り合いになっていた…

「じゃあ、このタイミングで帰ってきた理由は？」

「アキくんの事が心配でしたので仕事を前倒しにしてやってきました」

「明久君のこと、大事に思っているんですね」

「ええ、大切な弟ですから」

海外で仕事をしているのにわざわざ来てくれるだなんて、本当に心配してくれてたんだなあ…

普段は破天荒な人だけれど、そういった気遣いがちょっぴり嬉しいかったりする。

「まあ、いつまでも玄関で話し込んでないであらうよ。僕がご飯作るからさ」

「アキくんが作るとなるとパエリアですか？」

「そうだね。ちょうど材料もあるしパエリアにするよ」

「明久君のパエリアですか。楽しみですね」

「あははは、あまり期待されても困るよ」

その日の食事は正に家族団欒といった具合に楽しかった。

姉さんからの外国の話。僕と姫路さんの学校生活の話。

あと、姫路さんが前にした僕にパエリアを作ってくれるという約束を覚えてくれていたのには驚きだった。

飽きることもなく、そんな会話は続く。

その中で僕は口に出すわけでもなく、願い想う。

いつか、本当に姫路さんが家族になってくれれば毎日がこんなに楽しいのにな

第32問 僕と制約解除と魔法の意味（後書き）

今回で清涼祭編の本編は終了となります。

次回は座談会。その次は拙作の特徴でもあるあの話をやる予定です。

特別問第2 座談会（清涼祭編）（前書き）

墮落者断さん、黒炉さん、 a d f s f a f さん、感想ありがとうございました！

前回の座談会に引き続き、メタ発言やパロネタなどが普通に出てくるのでそういったものに嫌悪感を抱かれる方はプラウザバックをお願いします。

ちなみに見なくても本編になんの支障ありませんので。

特別問第2 座談会（清涼祭編）

唐「つて、ことで清涼祭編も終了したことだし座談会でも開くか」

希「明希だ。当然だが名字なんかないからな」

美「ハロハロー、島田美波です」

秀「木下秀吉じゃ。よろしく頼むぞ」

唐「前は主要三人＋αでしたが、今回はどういった集まりで？」

希美秀「「作者に文句があるんだよ（のよ）（のじゃ）！」「」」

唐「なんと、三人して文句とは！？」

して、どういうふうに文句があるのかね？」

希「まずは俺からだ。

どうしてもっと俺と姫路さんの絡みをふや——」

唐「知らん」

希「てめえ、人が話してる最中に知らんとはいいい度胸じゃねえか？」

唐「お前こそ作者に逆らおういい度胸だな？」

希「どっちが上なのかわからせてやるぜ！」

唐「そりゃ、こっちの台詞だ!」

秀「しばらくお待ちくださいなのじゃ」

美「まったく、なにやってるのかしら…」

〈数分後〉

希「はんつ、口ほどにもねえな!」

唐「くそう…」

なぜ作者である俺が負けるのだ…」

希「俺の名前は、ある高名な方からもらった名だからお前」
ごときの
手中に収まらねえんだよ」

美「あんたの名前は瑞希からもらったんでしょ…」

希「そりゃ作中の話だ。

俺の名前の原案は別作者さんからもらってるんだよ」

秀「にして、その者の名は?」

唐「さすがに俺」
ごときがこのふざけた場で話す訳にもいかないので
パスで…」

美「ふーん、まあいいわ。

それよりウチと木下の文句も聞いてくれるかしら？」

唐「も、もちろん……」（目付きが怒つとる……）

美秀「出番が少ないのよ（じゃ）！」

唐「いや、それはね……」

俺の文才の無さから招いた事態だから言い訳もできません……でも、それはムツツリー二にだって言えるんじゃないかな？」

美「土屋は元々口数が少ないからいいのよ！」

秀「それにムツツリー二は原作とは違った個性的な動きをしておるから目立っておるのじゃ！」

唐「た、たしかに……」

美「しかもウチはまだ言いたいことがあるのよ！」

唐「まだあるのか……」

美「なんで瑞希は最初から『明久君』呼びなのにウチはいつまで経っても『アキ』呼び変わらないのよ！」

希「呼んだか？」

美「あんたのことじゃないわよ……」

唐「と、まあ、こついう事態になるからだ」

美「でも活字なら判断つくでしょ！」

唐「活字ならとかメタ発言するなよ……」

美「大丈夫よ。だって前書きにその旨は綴ってあるからね。」（こきこき）

唐「っつけながら腕をこきこき言わせるな……
笑顔と相まって余計に怖いからさ……」

美「じゃあ、吉井がウチのことを『美波』呼びになるのは？」

唐「そういうのは自分でやってください」

美「やっても吉井の記憶に残らないでしょ！」

唐「そこは明希に頼んでください」

美「もう、いいわよ。ウチはウチで頑張るから……」

秀「（フラグを立てた身としてなにか言うべきなのじゃろうか……？）
」

希（フラグとかメタ発言多すぎだろ……）

く作中の雰囲気についてく

秀「そういえば、試召戦争編と清涼祭編では作中の雰囲気随分と違うのう」

美「そうね。試召戦争編はどちらかと言わなくても重苦しい雰囲気だったけど、清涼祭は試召戦争編と比べると明るいわよね」

唐「それは明希がいることによって記憶の心配が減ったからじゃないかな？」

希「俺のおかげってわけだな」

唐「いや、君のせいで随分と厄介事も増えてるからね…」

希「主人も随分と厄介事引ッ提げてるけどな」
マスター

唐「自分のことを棚に上げるなよ…」

秀「まあ、それはともかくじゃ。

これから、この作品はどういった感じで進むのじゃ？」

唐「まずは強化合宿に入る前に閑話かんわが入るな。

で、強化合宿編はおそらく今まで誰もやっていないであろう話構成にする予定だけど？」

美「今でも充分他作者様の作品からズレてるわよ…」

唐「充分自覚してる」

希「やっぱり俺と姫路さんの絡みを——」

唐「お前はいつぺん黙れ！

というか、それ以外言うことはないのか！」

希「ないな」

秀「即答じゃな」

希「俺は姫路さんのために生きている！」

唐「んなこん自信満々で言われても……」

美「たぶん明希の性格は最後まで一貫してそうよね……」

唐「たぶんと言うより絶対だと思う……」

秀「クセが強すぎじゃ……」

（強化合宿編について）

美「強化合宿編は具体的にどんなことをする予定なの？」

唐「ある二人がとても怖がる内容」

秀「なんか容易に想像できてしまうのじゃ……」

唐「それと強化合宿編限定のオリキャラがでてる」

希「俺はレギュラーオリキャラだけどな」

唐「正直言つて君よりもそっちのオリキャラの方が動かしやすい」

希「言っただろ、てめえの手中に収まるようなやつじゃねえって」

唐「それ、ここで言うんだ…」

美「もしかしてと思うけどウチと瑞希が嫌いなアレじゃ…」

唐「さてどうかなあ？」

美「いやいやいやいや！」

今すぐ内容変えて！本当にウチはアレ無理なんだからやめて！」

唐「しかし、怖がる女の子というのは男側からしてみると可愛いものだ」

秀「いち男としてそれには賛成じゃ」

希（なにげに男アピールしやがった…）

美「ちょっと木下までなに言ってるのよ！」

唐「焦つてるところ悪いが、幽霊は出てこないぞ？」

美「そ、そうなの…？」

つて、別にウチは幽霊なんて怖くないわよ！」

唐「そうなんだ？」

なら美波の肩に白い手が――」

美「いやあああ――！」

唐「乗ってない」

美「殺すわ」

秀「まあまあ、二人とも落ち着くのじゃ」

唐「そういう秀吉の肩にも――」

秀「わしは幽霊なぞ怖くないぞ？」

唐「いや、秀吉の姉さんの手が――」

秀「いやじゃあああ――！」

姉上だけは勘弁してほしいのじゃあああ――！」

唐「乗ってない」

秀「島田よ、こやつを殺らんか？」

美「その意見にはウチも賛成よ」

希「まあまあ、落ち着けて。ほんと、お前らって落ち着きないな」

唐「まあ、そう言う明希の――」

希「残念ながら俺はこの女達みたいに怖いもんなかねえぜ？」

秀「わしは男じゃと言つておろつに」

唐「いや、明希宛に姫路さんから手紙を預かつてある」

希「なに！？早く見せろ！」

秀わかつておつたがスルーされたのじゃ…

唐「えつとなになに…」

『明希君へ』

あんまりにも暴言をはくので少し黙ってください♪」だよ

希「ひ、姫路さんに嫌われた…」（ズーン）

美「あんたしつかりしなさいよ。瑞希があんなこと言つわけないでしょ？」

秀「そうじゃぞ。大方、こやつで作つた紛い物であろう」

希「でも本当に俺のことが嫌いだったら…」

美「だとしてもあんた宛なら吉井に渡すでしょ？」

希「そう言われてみりゃそうだな」

唐「あつ、バレた…」

希「クソ作者め。覚悟はできてるんだろうな？」

美「ウチらとたっぷり死合いましょう？」

唐（なにうえ某ナマハゲ風…？）

秀「わしらの恨みの深さを知るがいいのじゃ」

唐「秀吉はそんなキャラじゃないよね！？」

秀「お主はわしを怒らせ過ぎた…」

ついでに言つと島田の言つ通り、前書きに書いてあるからいくらパロつてもOKじゃ」

唐「くっ…こうなつたら…逃げる…！」

希美秀「逃がすか（さんのじゃ）…！」

唐「はい、逃げながら最後に強化合宿編にでてくるオリキャラを一部紹介！」

（境内院 美娘）

名前からわかるとおり巫女である。

ちよつとしたことから明久たちと交流をもつことになり、瑞希に迫るほどのどこか抜けちゃっている人。

それにしても、巫女さんがでてくるのに幽霊がでてこないとはおかしい話である。

（名前未定）

合宿先で出会うことになる謎の少女。明久のことを『吉井様』と呼ぶ。

今時には珍しく着物を着ており、性格は明るい部類に入る。

頭に着けている髪飾りを大変大事にしており、明希が暴言をはかない数少ない内の一人。

唐「んじゃ、この先は強化合宿編に入ってから！」

希「これからもよろしく頼むな」

美「ここがおかしいとか、こうした方がいいとかの意見もどんどん言ってやってね」

秀「もちろん、感想もお待ちしてるのじゃ」

特別問第2 座談会（清涼祭編）（後書き）

今回も作者の戯れ言につきあってくださりありがとうございました！
さて、名前の決まっていけないオリキャラですが今のところあわゆき淡雪、ひと一
つゆめ みやび夢、雅の3案があります。

どれがいいか意見をくれるとうれしいです。

もちろん、皆様が考えてくださる名前なども募集しますのでよろ
しく願います！

閑話1 これが我らの日常（前書き）

墮落者断さん、SHINさん、黒炉さん、則次 火焰さん、感想& アンケート投票ありがとうございます。

PV200,000、ユニーク20,000を突破いたしました！

お読みになってくださる皆様には本当に感謝の念が尽きません。

これからも拙作をよろしくお願いいたします。

閑話1 これが我らの日常

?SIDE

今日はみなさんに我が異端審問会の素晴らしい活動の一部を紹介しようと思う。

～朝～

我々異端審問会の朝は、各々の武器を研ぐ事から始まる。

私、須川亮の武器はこの『断罪の鎌』である。

そこ、厨二臭いと言わないように。

この鎌は今まで数々の異端者の血を吸ってきた謂わば私の相棒である。

しかし最近是人を傷付けるためではなく、大切なものを護るために使われることが多くなった。

その方が『断罪の鎌』も夢見がいいであろう。

「ふう…飯でも食うか」

『断罪の鎌』を研ぎ終えた俺は朝食のために階下へ――

「っと、忘れるところだった」

最近、異端審問会にできた新たな決まりを遂行しなければな

ぱんっぱんっ！

ある写真立ての前で正座をし、手を合わせる。

「いい加減くつつけドちくしょおお！！」

朝っぱらから近所迷惑だと思っ方もあるかもしれないが心配はいらない。

この付近は全住民が異端審問会に加入しているのだからな。

「見ててもやややするんじゃああ！！」

「どれだけの人の期待背負ってると思ってるんだ！！」

「でも、その甘酸っぱい距離感がまた堪らない！！」

俺の声にこだまする様に様々な方角から声が聞こえてくる。

ちなみに掛け声はなんでもOKだ。

我が異端審問会が神聖と認める二人に対する思いを叫んでくれればそれでいい。

「学校」

「集合！」

俺の号令により古参のメンバーが集まる。

この古参メンバーとは異端審問会が布教活動を始めの前から俺と共に異端者狩りをしていた者たちのことだ。

「では、今日の報告を久保軍師から話してもらおう」

「はい」

そう言つて一人の男子生徒が俺の隣に来る。

久保利光。成績は学年3位、男子では1位という頭脳明晰なガリ勉君だ。

本来なら彼のような古参ではないメンバーはこの場にいることも許されない。

しかし彼は別だ。

その優れた頭脳と異常なまでの執着心により我らが神の情報を集めてきてくれているのだ。

基本、古参にしか階級は与えられないが彼のように優れたメンバーには階級が与えられる。ちなみに

会長↓將軍↓軍師↓部隊長↓一級審問官↓二級審問官↓歩兵^{ポーン}

といった具合に区分けされているのだ。

はいそこ、色々入り交じってるとか言わない！

まあ、なにはともあれ我らの学校での朝は空き教室での集会から始まる。

く午前く

基本、午前中は我ら異端審問会が動くことはない。

異端者がいれば別の話だが、午前中は我らの神は両者とも勉学に励んでいるため活動内容はそれを事細かに記録するだけだ。

ちなみにその仕事はムツツリー二将軍が担当している。

彼は写真技術をさることながら、手記の早さも尋常ではない。

その彼の功績もあつて清涼祭では見事、二人のメモリアルブックを販売することができた。

当然だが即完売であつたしまた我らの同志が増えたのは言うまでもないだろう。

しかも二人は清涼祭を経てまた一步前進してくれたようだ。

うんうん、努力が報われるというのは嬉しいものだな。

く午後く

我々の活動は午後からが本領だ。

まずは忌々しいカップルが集まりそうな場所へと赴く。

あつ、ちなみにこの時に屋上へ立ち入る必要がないのは諸君らもわかつていると思うが一応言っておこう。

「会長、グランドの木陰でCクラスの藤本とDクラスの宮木さんが弁当と一緒に食べています！」

「く苦労、横溝二級審問官」

横溝からの報告を受けて腰をあげる。

「野郎共、出撃の準備だああ！！！」

「くくくイエサーイエス！！！！」

古参メンバーが各々の武器を持ち出し現場へと走る。

基本、異端者狩りは古参メンバーのみで行われる。

異端者狩りには固い結束が必要なため、新規加入者をおいそれと戦

場へと放り込むことはできんだよ。

もちろん、入隊試験に合格すれば君も異端者狩りに参加できるからどしどし受けてみてくれ。

しかも今なら、二級審問官の称号付きでもらえるというサービスを実施しているぞ！

「会長、こちらが現場です」

おっと、諸君らに説明している間に現場に着いたようだ。

「では、早速だが異端者狩りを開始するぞ！」

「『異端者には死を！』『異端者には死を！』『異端者には死を！』」

掛け声と共に藤本を取り囲む。

「うわっ、なんおまつちよ！？」

見事異端者を確保した我々は異端者をFクラスへと運び、十字架に縛り付ける。

「異端者、藤本圭作。なにか言い残すことはあるか？」

「ちょっと待てよ！これはなんなんだ！？ここはどこなんだよ！？」

異端者が見苦しくもがいている。

「我らは異端審問会。学園内の風紀を乱す輩を肅正する団体だ」

「俺がなにしたって言うんだよ!？」

「しらばっくれるな!!」

貴様の罪状は既にあがっているんだぞ。

まず第一、貴様はDクラスの宮木さんと二人つきりでした。

第二、それでも飽きたらぬ被告はお弁当の中の卵焼きに手を出す。

第三、卵焼きに味をしめた被告はあろうことかエビフライにまで手をだす——」

そこからは淡々と罪状を読み上げていく作業が始まる。

これは中々しんどいものだが、私がここで放棄してしまえば学園内の風紀は更に乱れてしまうだろう。

そのところ、ご理解願いたい。

「——以上、十三個が被告藤本圭作の罪である。異論はないな?」

「ありまくりじゃ!」

なぜ自分の彼女と弁当を食ってはいかん!?

それに罪状のほとんどが弁当の中身を食ったことについてじゃねえかよ!」

やれやれ聞き分けのないやつだ。

「では被告の訴えと罪状を照合し、みな意見を聞こうではないか?」

「『『異端者には死を!!』』」

「ということで死刑が確定した」

「判決はやっ!?!」

判決がでたというのにまだ足掻くのか…

「まったく男なら最期くら」須川会長、ムツツリー二將軍から緊急指令です!」

「なに!?!」

ムツツリー二將軍は無闇やたらに緊急指令をだすような輩ではない。

ということはそれだけ重要なことが起きているわけだ。

「二人が急接近。至急、屋上に集まれとのことですよ!」

「よし、皆の衆行くぞ!」

こうしちゃいられない。事は一刻を争う事態だぞ!

「しかし会長、藤本被告はどうするのですか!?!」

「んなもん、放置しとけ!逃げたけりゃ勝手に逃げるだろうよ」

「それもそうですね」

「ちょっと待て!

せめて十字架の拘束を解いてから出てってくれ!」

後ろから異端者の叫びが聞こえるが気にすることはないだろう。

く屋上前の扉く

んでもって我らは屋上へと続く扉の前にやって来たわけだ。

我ら異端審問会が唯一許している神聖な二人、吉井と姫路さん+その他の取り巻きはよく屋上で昼食をとっている。

そして姫路さんが吉井に弁当を振る舞っているまでは週に2、3回
見ることだからさして珍しくはない。

だが、今日は弁当の盛り付けが違った。

ムツリーニ將軍から得た情報ではなんと今日は白米にあのピンク
の甘いやつでハートマークが描いてあるというのだ。

こっそりと屋上へ続く扉から様子を伺う。

するとどうだろう。あの吉井が恥ずかしがりもせずに食べているで
はないか!

「会長、どんな感じですか?」

「吉井が恥ずかし気もなく食べてる……」

「マジですか!？」

「しー、声がでかいぞ」

顔の前に人差し指を立てて福村を黙らせる。

「よし、順番に見ていこう」

「……はいつ!」「……」

「だから声がでかい……」

若干呆れながらも一度扉の前から離れることにする。

それにしてもハートマークの入った弁当を食べるとは吉井も遂にやつてくれたか……

ここまで長い道のりだった。

我ら異端審問会は鈍感な二人をくつつけるために日夜苦勞を重ねてきたのだが、遂に苦勞が報われる時がきたか。

今まで様々なことをやってきたな……

いい雰囲気になっている二人を陰ながら（掃除ロッカーから）見守ったこともあった……

恥ずかしがって逃げる吉井を取っ捕まえてやり直しをさせたこともあった……

二人に新婚気分を味あわせてやろうと思ってクラスぐるみで画策したこともあった…

どれもこれも今となってはいい思い出だ。

いかん、感動のあまり涙が…

「うつつ…会長、遂にやりましたね」

「ああ、やったな今川…」

お互いに嬉し涙を流しながら手を握りあう。

「……………どうした？」

気づくとムツツリー二将軍がこちらを不思議そうに眺めていた。

「いや、二人が遂にゴールインしたと思うと涙がな……………」

周りを見れば各々が嬉し涙を流したり、喜びあっていたりしていた。

「さあ、ムツツリー二将軍も一緒にこの感動を味わおうではないか」

「……………勘違いしているようだが言っておくが、あれは姫路の母が夫のために作った弁当」

ムツツリー二将軍の発言によりその場が凍りつく。

「なっ、なんだって…？」

「……それを間違えて姫路が持ってきてしまつて明久が食べてるだけ」

なっ…

ということはぬか喜びだったということなのか!?

我らは幸せを逃してしまったというのか!?

だが、俺はこれしきのことでは挫けぬ!

「ふっ…

みんな、落ち込むことはない!

逆に考えるんだ!これからも二人を応援していけるといふ幸せがある!」

「そうだ会長の言う通りだ!」

「俺たちには希望がある!」

「異端審問会万歳!明久と姫路さん万歳!」

どうやらみんなも元気を取り戻してくれたみたいだ。

そつ、我らは二人がいる限り滅びることはない!我らは不滅なのだ!

さあ、みんなも異端審問会に入ってみないか?

今ならなんと入会費無料だ!

お申し込みの方は2年F組須川亮、または090-
。 □ × - ●
まで！

みんなの参加待ってるぜ！

シュー

DVDレコーダーから出てきたDVDを手にとる。

「雄二、なにこれ…？」

「須川が異端審問会のメンバーを増やすために作った勧誘動画だな」
今までの映像と一緒に見ていた雄二がのんきに言う。

「そう意味じゃなくて、なんで異端審問会の勧誘動画なのに後半は僕と姫路さんのことだらけなのさ！」

もつと普通の活動（異端者狩り）を強調するべきだと思っるのは僕だけだろうか？

「んなもん俺が知るか。
でも安心しろ。須川いわく、その効果は使う前の1・5倍程度らしいからな」

「ちつとも安心できないよ！
使う前からあの異常な感染率なんだから、その1・5倍って相当なものだよ！？」

「そう言われてみればそうだな」

こいつは自分のことじゃないと本当にのんきなやつだ。

「これ割ってもいいよね？」

「偶然拾ったもんだし構わんだろ」

バリイイン！

拾ってきた雄二の了承も得たので恨みを込めておもいつき叩き割る。

「まっ、複製だから須川にとってもなんの痛手にもならないがな」

「最悪だ…」

僕の苦勞だらけの日常はまだ続きそうである…

閑話 1 これが我らの日常（後書き）

今回は一風変わって須川たちのお話でした。

原作の異端審問会とは似ても似つかないものですが皆様に楽しんでいただければ幸いです。

あわなかった方はすいません。

これも拙作のギャグ要素として目を瞑っていただければと。

前回のアンケートは強化合宿編が始まるまでを期間とさせていただきますので意見がありましたら是非とも投票していただきたいと思います。
では、次回もよろしく願いいたします！

閑話 2 俺の幸せはお前の不幸（前書き）

きるぐまー1号さん、感想ありがとうございました。

題名がどこぞのガキ大将みたいですが読んでいただければ分かるか
と思います。

閑話2 俺の幸せはお前の不幸

雄二SIDE

「……着いた」

「ああ……」

俺と翔子は今、如月ハイランドの入り口にいる。

ここをくぐったら最期、俺は如月ハイランドの企み通り、翔子と婚約を結ばされてしまうだろう。どうにかして翔子の気をそらせないものだろうか？

「翔子、前お前が欲しがっ「いない」

くそっ…

今のこいつには目の前のことしか見えちゃいねえ。

どうすればこの状況を脱せられる？

俺は救いを求めて辺りを見回すと入り口で見知った顔を見かける。
あれは明久と姫路じゃないか。

「……雄二が見ていいのは私だけ」

「ぐああああ！！目が目が抉るな翔子おお！！！！」

少し目を離したぐらいでチヨキで俺の目を抉るのはいかなものだ
ろうか？

つと、そんなことより明久と姫路がいるなら好都合だ。

悪いが利用させてもらっぜ？

「翔子、行くぞ…」

「……うん」

痛む目を押さえながらも僅かな視界を頼りに入り口へと向かう。

「プレミアムチケットでのご入場ですね。

ただいま、記念撮影のキャンペーンを実施していますので是非ともどうぞ」

入り口にいる係員が笑顔で言ってくるが、そんなのはありがた迷惑だ。

「けっこ「んしますので是非ともお願い」

おかしい…

俺は結構ですと言って断るつもりだったのになぜだか真逆の方向に進んでいる…

「では、お二方ともこちらへどうぞ」

呆然としている俺を他所に着々と作業が進められていく。

「じゃあ、二人とも笑ってください。はい、撮りますよ」

カシャッ

即席のカメラらしく写真がカメラから出てくる。

「記念に額縁に入れておきましたのでお二方ともどうぞ」

そう言つて係員は俺と翔子に額縁に入つた写真を手渡してきた。

どれどれ…

見れば翔子はいつものように俺の腕に抱きついて幸せそうな顔をしていた。

正直言つて、顔を赤らめながらも幸せそうにしている翔子はかわいいと思う。

だけど、翔子にそういつた感情を抱けば抱くほど俺の中の罪悪感は大きくなつていく…

俺が昔犯した罪が消えることもなく付きまとう。

俺にとつてなによりも、誰よりも大切な人ともに…

「くだらねえ。いくぞ翔子」

「……うん…」

たぶん、お前は俺の感想を期待していたんだろうが俺はその期待にはこたえられない。

一度でも許してしまえば、認めてしまえばお前は余計に俺に固執してしまう。

それはお前にとって不幸なことだ。

勘違いから始まつたお前の不幸を、無駄な時間を余計に増やしてしまっただけだ。

『ならどうして明久からチケットを受け取つたんだ？』

あれはその時の場の空気で…

『違うな。お前はただ翔子とここに来たかっただけだ』

違う！

俺は決してそんなことは…

『本当に違うと言い切れるのか？』

そうだ。

俺は翔子の不幸なんて望んでない！

『ああ、確かに翔子の不幸は望んでないだろうよ。だけれど、それはお前がお前自身の幸せを望んでないという証拠にはならない』

なにが言いたいんだ！

『お前の言っていることは矛盾しているんだよ。お前の言い分からすれば、お前自身の幸せは翔子の不幸ってことになる』

俺の幸せが翔子の不幸だと…？

『ああ、見てみるよその写真を。お前の真実がそこにある』

自分自身の中の俺を達観している俺に言われた通りに写真に目を移す。

なっ…

そんな…バカなことは…

そこには翔子に抱きつかれ、嬉しそうに顔を赤らめ笑っている俺が写っていた。

『なっ？』

俺の言った通り、お前は今の状況に幸せを感じている。そしてお前は今の翔子の状況を不幸だと言った。

これが何を意味するかわかるな？』

俺の幸せと翔子の幸せは共有できない…？

『そういうことだ』

はんっ、ならちようどいいじゃないか。

いつも俺に付きまといてくる迷惑な翔子を俺の幸せのために追い払えるんだろ？

俺にとっては願ったり叶ったりじゃねえか。

『そうやってまた自分に嘘をつくんだな。』

お前は弱いよ。目の前の現実ですら目を向けられないお前は誰よりも…』

うるさい！少しは黙ってろ！

『ほら、そうやって目をそらす。逃げるんだお前は…』

自分の都合の悪いことからはなにもかも目を背け、考えようと思わない』

逃げてなんかいない！

これは俺が俺なりに出したこたえなんだ！

『確かにそのこたえを出した時はそれで良かっただろうよ。でも今は違う。』

お前は昔のお前とは違うものを、決定的に違うものをもってしまったからな』

やめろ！やめてくれ！

これ以上俺を苦しめないでくれ！

『苦しいか？』

苦しいなら助けを求めればいい。

もしかしたら昔のお前のように誰かが助けてくれるかもしれないぞ？』

昔の俺…

自分のために翔子を助けることさえ戸惑っていたあの頃の…

「たす…け…てくれ」

「雄二！」

助けを求めて伸ばした手は誰かによって受け止められた。

その安堵からなのか、はたまた別のなにかのなのか解らないが涙が止めどなく溢れてくる。

「……雄二、どうして泣いてるの？」

うつ向きながら涙を流す俺を翔子が覗き込んでくる。

「ごめん翔子…」

「ただ、しばらくそっとしておいてくれないか…」

「うん…」

「なにかしてほしいことがあったら言ってね。」

「私にできることならなんでもするから」

「ありがとな…」

翔子への罪悪感と自分の気持ちに葛藤をもったままベンチに座る。

「俺はどうすればいいんだろうか…？」

「あいつの言った通り、俺は逃げているだけなんだろうか…？」

「俺が翔子を幸せにしてやることはできないのだろうか…？」

「お客様、ご気分が優れないのですか？」

突然の声に顔をあげると係員と思われる人物がこちらを心配そうに見ていた。

「いや、気分が悪い訳じゃない。気にしないでくれ」

「左様でございますか。」

「ならば我が如月ハイランドが誇るお化け屋敷などはいかがですか？」

「一々聞いてくるところがこの上なく怪しいが他に行くあてもない。」

「お化け屋敷だってよ。どうする翔子？」

「……私は行きたい」

「そうか…」

「すまないが、そのお化け屋敷に案内してもらってもいいか？」

「ええ、ご案内致しますよ」

「お化け屋敷前」

「……これ、大事なものだから持ってた」

「はい、わかりました」

係員が翔子から小さな包み受けとる。

「そういえば今日の翔子の持ち物はアレだけだな。いったい何が入っているのだろうか？」

「ではご入場を」

「ああ」

係員に進められてお化け屋敷に入場する。

中は薄暗く、正にお化け屋敷という感じだが、これといった仕掛けがあるわけでもない。どれも平凡な子供だまし程度のものばかりだ。

ガシャーン

「怖い」

どこかで物が崩れた音がすると翔子が腕に抱きついてきた。

「離れる翔子。お前はこの程度で怖がる達じゃねえだろ」

そう言つて無理やり腕を振りほどく。

翔子はいかにも残念といった具合に落ち込むが俺には関係のないことだ。

『そう言つてまた見栄をはる。偽りで自分を塗り固める。そんな事をしてお前は楽しいかい？嬉しいかい？それでいいと思つてゐるのか？』

またお前か。

いい加減にしろ。俺はこれ以上翔子に迷惑をかけるわけにはいかないんだ。

『はいはい、わかりましたよ』

ちつ、気分の悪いやつだ。自分の中の自分なのに無性に腹がたつてくる。

『——こり——じの——む——おおき——』

どこからか不吉な言葉が聞こえてくる。

「……これ雄二の声」

耳をすましてみれば確かに翔子の言つ通り俺の声だった。

『翔子より姫路の方が好みだな。胸もでかいし』

はあ？

俺はこんなこと言った覚えないぞ？

「雄二、どういうこと」

やばい…

今は事の真意より目の前の脅威からどうやって逃げるかが先だ。

「ちよつ、待て翔子！あれは俺じゃない！」

「許さない」

くそっ…

ちつともこつちの話なんか聞いちゃいない。

……………いや、待てよ。ここで俺が翔子よりも姫路の方が好きときっぱり言ってやれば、翔子は俺を諦めるんじゃないだろうか？

『ならばいいじゃないか？』

お前は翔子の幸せと自分の幸せ、どっちをとるんだ？』

これは俺の問題だ。お前が口出しするな。

『つたく、頑固者も大概にするんだな』

大きなお世話だ。

ガシャン！

ようやくあいつを追い払ったところで何かが落ちてくる音がした。見てみると翔子の目の前には釘バットがぶら下げられており、翔子がそれを手に持つ。

「待て翔子！早まるうわあああ！？」

釘バットをすんでのとこでかわして思う。

だめだ、もう大人しく逃げるしかない！

俺は覚悟を決めて一目散に出口に向かって走っていく。

ん？

誰か前から走ってくる。ちょうどよかった。これで助けて――

「ゆうじいいい！！」

つて、明久かよ！？

しかもなんか怒ってないか！？

仕方ない、翔子が明久、どちらの方が突破しづらいか考えるまでもない。

「そこどけや、あきひさあああ！」

明久を押し倒す勢いでタックルを決めようとする。

しかし、俺の狙いはひらりとかわした明久によって外れることとなる。

「つと、うわあ！？」

当然、狙いの外れた俺はバランスを崩し、床と接吻をするはめになつてしまう。

「雄二、まさか君が裏切り者だとは思わなかったよ」

明久の野郎、本当に俺が姫路のこと好きだと思ってやがる…
それだけの行動力があるならささと姫路に告ってこいバカが。

「雄二には教育が必要」

翔子はどす黒いオーラを纏い、釘バットで臨戦体勢に入っている…
たぶん、俺の命はここまでなんだろう…

「では、新郎のご登場です」

あれからどうにかして翔子と明久を説得した俺は今度はなぜだかス
ペシャルランチと称したウェディング体験に参加させられていた。
当然のごとくタキシードまで着せられている……

ちなみに明久と姫路は姫路の父さんが手に入れた割引券でやって来
たらしい。

「新郎のご説明——は面倒なので省きます」

渋々出てきてやったのにこの待遇はいかなものだろうか。

「続きまして新婦のご入場です」

司会者のコールと共に向かいからウェディング姿の翔子が現れる。

綺麗だ…

そんな本音が口から漏れそうになるのを必死に堪える。

「……嬉しい」

女子の中では比較的長身である翔子も俺を見る際は見上げるかたちとなる。

「ずっと夢だったから」

その上目遣いと今の姿に思わず理性を奪われそうになるのぐつと堪える。

「雄二のお嫁さんになるのが私の夢だったから…」

だから…だからこそ俺は踏み止まることができた。

翔子の純粋な想いを俺が受け取っていいわけがないのだから。

「ちよつとぉー、マジでありえないんですけど」

突然観客席からあがった頭の悪そうな声に振り向く。

そこにはいかにも頭の悪そうなカップルがいた。

よく騒ぎ立て催しをダメにするタイプのやつらだ。

「なんでそんなコーコーセーがウェディングなんかやってんの？
マジでありえないんですけど」

「いえ、こちらの二人は結婚を前提に付き合っていて…」

おい司会者、そんな根も葉もないこと言うな。

「私たちも結婚前提に付き合ってるんだけど？」

そんなコーコーサーよりも私らにやらせなよ。その方が盛り上がる
って」

「しかし、そのお二方はプレミアムチケットを…」

「あぁん、お客様の言うことを聞けねえって言うのか？」

今度は男の方だ。

まったく、ちつとは周りの迷惑も考えろよな。

明久や姫路だって翔子のために我慢して観客席で大人しくしてるんだからよ。

「第一、お嫁さんになるのが夢とか笑っちゃうよね」

「まったくだな。キャラ作りですかっとな」

「私、お嫁さんになるのが夢なの」

「がははは、似てる似てる」

まったく、呆れる野郎共だ。

「翔子気にするこ——翔子？」

振り向けばさっきまでいたはずの翔子がない。

ただそこには花嫁が頭に乗せる純白の布が落ちていただけだった。

「翔子……」

「雄二！」

「坂本君！」

自失していた俺の元に明久と姫路が走ってくる。

「とにかく霧島さんを手分けして探さなきゃ！」

「すいません。私たちが目を離さなければ……」

「いいんだ、明久や姫路のせいじゃない……」

そう、これはあいつを護ってやれなかった俺のせい。

あいつから目を離した俺のせい。

翔子にまっすぐに向き合わなかった俺に責任があるのだから……

（数分後）

「雄二、そっちはどう？」

「さあな」

内心を隠し、素っ気なくこたえる。

「私の方にもいませんでした…」

「案外もう帰ったのかもな。」

俺も用事があることだし、そろそろ帰るとするかな」

そう言い、明久と姫路に背を向けて歩き出す。

俺の真意がわかってか知らずか、二人とも俺を止めることはなかった。

「にしても傑作だったな」

角から探していた人物の声が聞こえてくる。

「そうそう、しかも泣いて逃げるとかチョーウケルんですけど」

翔子のやつ、泣いていたのか…

「おい、ちょっと待てよ」

曲がり角に立ちふさがるように立つ。

「ああ？なんださっきのやつじゃん。俺らになんかよつ？」

「もしかして花嫁の復讐とかあ？」

あんなキモい夢とかマジでありえないんですけど」

確かに翔子の夢は間違ってる。

あいつは不幸な思い違いで俺に…俺なんか好意を抱いてしまったんだから。

だけど、間違ってるのはその想いの向く方向だ。

決して翔子の夢や想いは間違っていない。

況してや他人が…なにも知らない赤の他人がバカにしていいいものなんかじゃない

だから俺はこいつらを許さねえ。

翔子の純粋な想いを…俺の幸せを踏みにじったこいつらを決して…

拳をおもいつき握りしめる。

「ちょっと、そこまでツラかせやああ!!」

「翔子」

如月ハイランドに近い土手で座っていた翔子に後ろから声をかける。

「雄二……」

今まで泣いていたのだろう。まだ頬に涙がつたっていた。
俺は翔子の横に座ると、今まで翔子の見ていた夕日の映っている川の方を向く。

「すまなかったな。せつかくのタキシードぼろぼろにしちまった」

「うっん、雄二が私のために頑張ってくれた証拠だから嬉しい」

水面に翔子の笑顔が映る。

「やれやれ、お見通しって訳か……」

「だけど、俺だってお前のことわかってるんだぜ？」

「？」

「弁当食つぞ」

翔子がわきに抱えている今日、たった一つの持ち物を指さす。

「雄二は私のお弁当でいいの？」

「いいも何も腹が減ってしょうがないんだ。早くくれ」

「素直じゃない」

口を尖らせながらも翔子は弁当を開けてくれた。

「どうぞ、雄二」

俺に向けられた笑顔は水面に映った笑顔よりも何倍も輝いていた。

「うまいな」

俺が建前を忘れて本音を言ってしまう程に…

「翔子も食べてみるよ」

「雄二にあーんしてほしい」

「ばっ、バカ言え。誰がそんなことするか」

だけど翔子は目を瞑り、口をあけ俺が食べさせてくれるのを待っている。

つたく、本当になんでもお見通しなのな…

「仕方ないな。ほらよ」

弁当箱からエビフライを摘まんで翔子に食わせてやる。

「おいしい。雄二が食べさせてくれるならなんでもおいしい」

本当に翔子はなにを言ってるんだか…

そこからはなにを話すわけでもなく、ただ互いに沈む夕日を眺めながら弁当を食べ続けた。

「ねえ、雄二。私の夢って変？」

弁当を食べ終わると翔子が唐突にたずねてくる。

「変じゃねえよ。お前の夢は胸をはっていいほど素晴らしいもんだ」

「だけどあのカップルが…」

「そんなの気にすることない。俺が保証してやる。

お前の夢は誰にも、どんな夢にも劣らない最高のもんだって。ただ、想いの方向を修正する必要があるがな」

感極まったのか翔子は下を向いて両手をブルブルとさせ始めた。

「やつぱり私、なにも間違っていなかった！」

涙を含んだ笑顔つて、こんなにも素晴らしいものなのか…
間近にある翔子の笑顔を見てそう思う。

ん？間近に…？

「ぷはあ…」

翔子の顔が離れていく。

「しょ、翔子お前…」

あまりにも唐突すぎて思考が回らない。

「雄二、帰ろ？」

翔子に手を引かれながら、漠然と考える。

俺と翔子の幸せが共有できないって？

上等じゃねえか。

なら、その不幸を感じられないくらいに翔子を幸せにしてやればいい。

俺といる時は幸せしか感じない程に全力で。

だから翔子、もう少し待っていてくれ。

俺がお前を幸せにできるその時まで…

閑話2 俺の幸せはお前の不幸（後書き）

こんな素直な奴は雄二じゃないとが面越しに思った人は正常です。
作者が正常ではないだけなのでご心配はいりません。

さて、次回から強化合宿編にはいる予定です。アンケートは日曜
の終わりまでを期日とさせていただきます。

今のところは一夢と淡雪が同着ですのでフルネームで『一夢 淡雪』
なんてのはどうだろうかなんて考えてたりしてます。
では、次回もよろしく願います！

第33問 僕と未来予知とかわった巫女さん（前書き）

アスタリスクさん、感想ありがとうございました！

第33問 僕と未来予知とかわった巫女さん

明久SIDE

清々しい朝だ。雲一つない晴天。初夏を思わせる輝く太陽。

こんな素晴らしい朝に姫路さんと登校できればなおよいのだが、生憎そうはいかない。そう都合よく道端で出会えるものではないのだ。

あれから姉さんはしばらく僕の家に住むこととなった。

実質的にまだ一度も被害にはあっていないのは不幸中の幸いと言っべきか。

そもそも姉さんは姫路さんの出入りを許可しているので被害にあうこともないのだが…

「きゃあ!？」

「うわつと!？」

曲がり角から急に飛び出てきた人影にぶつかってしまった。

「つたたた…君、大丈夫？」

僕とぶつかってしまつて尻餅をついてしまつてゐる女の子に話しかける。

姿は赤と白の典型的な巫女服に黒く長い髪をお団子にしているものだ。

出るところは姫路さんや姉さん程ではないが霧島さん並にはある。

「あいてて、うん私は大丈夫だよ」

妙に間抜けした声に拍子抜けしてしまうが大丈夫そうだなによりだ。

「ん？ んん！？」

いきなり女の子が僕の方に急接近してきた。

「あの…僕の顔になにかついてますか…？」

「んにゃ、なにもついてないよ。ただ、憑かれてはいるけどね」

憑かれてる？

憑かれてるってなにに？

普通は幽霊とかだろうけど、憑かれるようなことをした覚えはない。

「とり憑かれるようなことをした覚えはないんですが…」

「そー言われても内側から憑かれてるんだよ」

いったい内側以外のどこにとり憑くというのだ…

「まあ、お祓いしたかったら神社に来てよ。私の神社だから安くしとくよ」

僕と同じ年くらいなのに自分の神社をもっているのか…

だてに巫女服を着て歩き回っているわけじゃないということだね。

「今からは仕事があるけど、地図を渡すから…えーと地図地図…」

なんか勝手に話を進めて地図を探しだしたが、一つ言いたいことが

ある。

「ねえ、首に下げている財布から見えてる紙が地図じゃないの？」

「あつ、ほんとだ！ちょっと待っててね……はいっ！」

女の子は紐を首から外して財布を僕に渡す。

「じゃあ、私は急いでるからまたね！」

手を振って走り去っていく女の子を見送っ……ちゃダメじゃないか！？

「ちょっと待つてよ！」

僕も走って必死に追い止める。

よかった、向こうも気づいて止まってくれたみたいだ。

「そつだつた名前教えてなかったね」
私は^{けいだいいん}境内院^{みご}美娘だよ。よろしくね」

「吉井明久です。こちらこそよろしく願いします」

「んじゃ、今度こそバイバーイ」

「うん、またね」

……また、向こうの雰囲気のにせられてしま
った……

キンコンカーコン♪

おっと、HR開始10分前のチャイムがなってる。急がなくちゃ！
しょうがない、この財布は放課後にでも届けてあげよう。

前から遅刻はする方ではなかったが最近はやけに寝起きがよい
ため、HR開始5分前には着席しているのが日課となっている。

これも一重に姫路さんの席が隣でなるべく多く話したいという願
望からの行為なのだが、結果的には僕のためになっているのかもしれない。

勉強の方も姫路さんが熱心に教えてくれるため、概ね順調だ。

ヒラッ

靴箱を開けると一通の封筒が落ちてくる。

『吉井様へ』

まさか！？

こっ、これはラブレター！？

しかし、ここで僕の直感が叫ぶ。

違う。これはラブレターなんかじゃない。

おそらく中身は脅迫状で、僕のあられもない姿が同封されている
だろう。

そして雄二も霧島さんに偽の録音で脅されてムツツリー二に頼るだ
ろう。

んでムツツリー二が僕を脅した犯人と霧島さんに録音を渡した犯人

が同一人物だと突き止める。

で、強化合宿中に僕たちは言われもない盗撮の罪で女子たちに責められて、こうなったら覗いてやろうじゃないかってノリになってそれを阻止せんとする教師陣＋女子と三回に渡って死闘を繰り広げるだろう。

ちなみに犯人は（尻に火傷の痕がある）清水さんってオチに違いない。

うん、我ながら中々の名推理だと思う。

さてと、脅迫状とわかったなら隠れて開ける必要もない。堂々と開けるとするか。

『吉井様へ

私はいつも貴方を見ていました。

貴方の優しさ、強さ、なによりも側にいてくれる…それが私にとってなにもものにもかえがたい幸せなのです。

強化合宿の五日目の夜、宿泊施設前のベンチで貴方を待っています』

へっ…？

これってラブレター…？

まっ、まさか僕に限ってそんなことあるわけがないよ。

第一、僕は差出人が誰かも……………雄二辺りの悪戯か…

あいつめ、僕がモテないからってからかうなんて酷いやつだ！

「よお、明久。朝から難しそうな顔してどうした？」

でたな、諸悪の根元こと坂本雄二。

「雄二、こういう陰湿な嫌がらせはやめてくれないかな」

ラブレターをヒラヒラさせながら雄二に見せる。

「なんだそれは？」

「えっ…」

咄嗟にラブレターを隠そうとするが時すでに遅し。

僕の手にあったものは雄二に略奪されてしまっていた。

「なるほどな。」

明久、安心していいぞ。これは女子が書いたものだ」

なぜだかこいつは勝手に鑑定を始めていた。ありえん…

「どうしてそんなことがわかるのさ」

「まず文字が女のものだ。」

そして統計学的に『あなた』を漢字で書くのは女子の方が多い。

それに悪戯が目的ならば、比較的暇な二日目や三日目を指定する筈だからな」

雄二の意外な特技発見。

「そうなんだ。行った方がいいかな？」

「それはお前次第だろ。」

あと、間違ってもこの手紙のことを姫路や島田に知られるんじゃないぞ」

「うん、わかったよ」

たしかに島田さんに知られたら僕はどんな折檻を受けるかわからない…

だけど、なぜ姫路さんにも知られたらいけないんだろうか？

キンコンカーコン♪

「げっ、開始五分前のチャイムだ。急ぐぞ明久！」

「うん！」

今日のはのんびり姫路さんと話す時間はなさそうだな。そんなことを考えながら僕と雄二は教室を目指した。

第33問 僕と未来予知とかわった巫女さん（後書き）

座談会で予告していた境内院美娘登場です。少しばかりプロフィールを

〈境内院美娘〉

性別 女

身長 152cm

体重 本人の希望により黙秘

好物 だし巻き卵

とある神社で巫女をやっている少女であり、家庭の事情から学校には通っていない。

どんな相手でも分け隔てなく接してるように見えて何も考えてなかったりする。

髪の色は黒であり、仕事るとき以外はおろしている。

巫女としての力量は確かなのだが……？

第34問 僕と買い出しと温かな手（前書き）

S H I Nさん、d・c・2隊長さん、感想ありがとうございます！

第34問 僕と買い出しと温かな手

明久SIDE

「はあ…」

今日は朝から色々大変だったなあ…」

「なにかあったんですか？」

六時間目の授業が終了し、一息つく僕に姫路さんが話しかけてくる。

「いや、今日の朝ちょっとね…」

登校中は変な巫女さんに出会った、財布は僕に渡したまんまにしてくわ、まさかのラブレターでてんやわんやなのだ。

だけど、姫路さんがこの事を知ったらなにかしら手伝おうとするだろう。

それでは姫路さんに悪いし、ラブレターの事はできれば知られたくない。

「朝…ですか？」

「うん…」

だけど、大したことじゃないから気にしないで」

「そうですよね…」

大したことなんかじゃないですよね…」

ん？

なんで姫路さんはどことなく悲しい顔をしているのだろう？

「どうしたの姫路さん？どこか具合でも悪いの？」

「あつ、いえ…なんでもないんです。本当に…なんでも…」

姫路さんはこう言っているけどなにかある筈だ。僕には言えないなにかが…

そう、例えばラブレターの送り主は姫路さんであるとか。

……………いや、そんなことあるわけないか。

仮に姫路さんが書いたとすれば贈り名は『吉井様へ』ではなく『明久君へ』になるはずなのだから。第一、姫路さんが僕に好意を抱くという事自体ありえない。

「全員席につけ！」

HRをやるために鉄人が教室に入ってくる。相変わらずでかい声だなあ…

「今から強化合宿のしおりを配る。

各自熟読し、自分の必要なものは用意しておくように」

そう言って鉄人は各列の先頭にしおりを配っていく。

「あつ悪い、吉井のぶんないわ」

僕の前にいる福村君が言う。鉄人のやつ、配る冊数を間違えたな…

「て「西村先生と呼べ！」

なんという反応力…

普通『て』の一言で言いたいことがわかるやつはいない筈だ。
例えば『鉄。28号』の可能性だってあるのに…

「西村先生、僕のしおりがないんですが？」

しようなないので渋々と西村先生と呼ぶことにする。

「ん？おかしいな。

俺は人数分ちゃんと印刷してきた筈だぞ？」

さすがに鉄人がミスしたとは考えづらい。なら、なんで僕の分がないんだ？

僕にしおりが渡らなくて得する人なんて一人も――

「しようなないな吉井、姫路に見せてもらえ」

いた…

一人どころかこのクラスのやつらのほとんどが得する…

僕の分がなければ自ずと隣席である姫路さんに見せてもらうことになるだろう。

それは野次馬共からしてみればかつこうのエサだ。

事実、僕の列の先頭である須川がこちらを見てにやけている。
たぶん、こいつが僕の分を持っているに違いない…

「姫路さん、しおりを見せてもらってもいいかな？」

別に姫路さんに見せてもらうのが嫌な訳でないし、むしろ嬉しかっ

たりするので須川たちの思惑にのせられてみる。

「は、はい」

姫路さんはなにをそんなに緊張しているのだろうか？

ことんっ

そんな木と木がぶつかり合うような音がした。

「その…こうした方が見やすいですね…？」

見れば姫路さんが自分のちゃぶ台を僕のちゃぶ台とくっつけていた。更に、それにあわせて姫路さん自身も僕に急接近してくるのだから理性は崩壊寸前だ。

「まずしおりの3ページの持ち物を確認しておけ」

なになに持ち物は……

着替えると、勉強道具、それに体育着に姫路さんの甘い香りが僕の鼻腔をくすぐって……

……

……

……

……

「――以上で強化合宿の説明を終了する」

はっ！？

やばい、あまりの夢心地につい微睡んでしまっていた…
持ち物すらまともに把握してないぞ…

「明久君、西村先生の話、聞き逃してましたよね？」

「うん…」

「ごめんね、せっかく姫路さんがしおり見せてくれたのに…」

「なんとも情けないことだ。」

「姫路さんの厚意をまさか自分で無駄にしまっただけで…」

「いいんですよ。」

「そんなことより、明久君はしおりもないんですから一緒に準備しま

せんか？」

「姫路さんはそれでいいの？」

「いいと言つか、むしろそっちの方が…」

姫路さんの声が段々と小さくなっていき聞き取れなくなってくる。
なぜだか姫路さんはこういったことがたまにあるが、そんなに言いにくいことなんだろうか？

「じゃあ、よろしくね姫路さん」

「こちらこそよろしくお願いしますね明久君」

別に姫路さんに見せてもらわなくても須川から取り返したり、雄二から借りるという手もあるが今回は姫路さんの厚意に甘えよう。

「合宿は明後日ですから早速、今日の帰りに買い出しに行きましょう」
「う」

「えっ…今日はちよつと…」

「なにか用事でもあるんですか？」

境内院さんに財布を返す予定だっただなんて言える筈がない。

「う、うん…」

だからさ、買い出しは明日でもいいかな？」

「でも明日はゲリラ豪雨の予報がでてますよ？」

ゲリラ豪雨の予報ってどんな予報だ…

「そつ、そうなんだ…」

でも、確かに今朝のニュースで明日は大雨だと言っていたなあ…
そんな大雨の中、姫路さんを付き合わせるのは悪いから今日買い出しに行くしかない。それに境内院さんの所に行くのはそのあとでもいいだろう。

「わかったよ。今日の帰りに買い出しに行こうか？」

「はいっ！」

誰かと買い物に行くのが嬉しいのか姫路さんはとても笑顔だった。
後夜祭のオレンジジュースの件でも思ったが、案外姫路さんは子供っぽいところがあったりする。

「そついえば確か今日は冷凍食品が特売日だったなあ…」

「そうなんですか？」

「うん。今まで一人暮らしだったから特売日については詳しいんだ」
あまり自慢にはならないが僕の数少ない特技の内の一つである。

「でも、あまり冷凍食品ばかり食べていては体に悪いですよ」

「そつだよね…」

だけど、金銭的にも時間的にも冷凍食品以外の弁当がきつかったり

するんだ…」

「そうなんですか…」

なら、私ので良かったら明久君の朝と夕のご飯も作ってきますよ」

できれば手放して喜びたい状況だが、そうもいかない。

「それはいいよ。」

姫路さんには姫路さんの生活があるんだし、僕は姫路さんにお弁当をもらえるだけで充分嬉しいよ」

そう、僕にはそれだけで充分なのだ。過剰な期待はしない。

そうしてしまえば、今の関係にさえ戻れなくなってしまういそうだから…」

「私には私の生活……」

そうですよね。いらないお節介をやいてしまってますいません」

姫路さんも姫路さんなりに思うところがあるのか、なにやら思案顔になってしまった。

「姫路さんが謝ることじゃないよ。それより、早く買い出しに行こうか？」

「そうですね。今日、雨が降ってくるとも限りませんから早く行きましょう」

「睦月スーパー」

放課後、僕と姫路さんは近所にある睦月スーパーに来ていた。姫路さんと僕の家が近いということもあって姫路さんもよく来るよ。うだ。

「えっと…」

「買わなきゃいけないのは雨具と飯盒炊飯用の容器ですね」

姫路さんがしおりを見ながら教えてくれる。

「なら5番レーンと13番レーンだね」

目的も決まったので僕たちは目的地へと進んでいく。

「あっ！」

「明久君見てください！これかわいくないですか」

姫路さんが容器売り場の近くにある箸売り場の前で目を輝かせていた。

見るとそこにはウサギの模様のはいった箸が売られていたのだ。ウサギの髪飾りといい、姫路さんはウサギが好きなのだろうか？

「買ってあげるよ」

「い、いですよ…明久君に悪いですし…」

「いって。」

今日の買い出しに付き合ってくれたお礼でことで買わせてよ」

本来なら姫路さんは僕に付き合う義理はないのだ。

ならばせめてなにか姫路さんのためになることをするのが普通ではないだろうか。というのは建前で本当は姫路さんの喜ぶ顔が見たかったりするだけだ。

「ね、僕にこのウサギの箸買わせてよ。きっと姫路さんに似合うと思うよ」

「なら…お願いしてもいいですか？」

姫路さんもやっと折れてくれたようだ。

「もちろん」

「ありがとうございますね、明久君」

嬉しそうに笑う姫路さんにはにかみながら笑い返す。

「初だね」

突然のどこかで聞いたことのある声に振り向く。

「境内院さん！？」

「いやあ、今朝方ぶりだねヨ・シークン」

誰だ、そのどこぞの政治家のような人物は…

「あの、すみませんがどちら様ですか？」

境内院さん知らない姫路さんがおずおずとたずねる。

「私？」

私は境内院美娘だよ。よろしくね。」

「姫路瑞希といいます。よろしく願いしますね。
ところで明久君とはいったいどういった関係なんですか？」

「今朝ばったり道でぶつかったただだよ？
大丈夫、安心して。別に私はみずちゃんの邪魔する気なんかないからさ。」

邪魔って、いつたいたなんのことだろうか？

まさか買い物の邪魔をするわけでもあるまいし…

「みずちゃん…？」

「そう、瑞希ちゃんだからみずちゃんだよ。」

境内院さんは勝手に呼び名を決めたりするのが好きなのだろうか？
まあ、なんというか相変わらずマイペースな人である…

「そついえば境内院さん、今朝の忘れ物だよ。」

カバンから境内院さんの財布を取り出す。

「んにゃ、それはよつちゃんにあげるよ。」

次はよつちゃんに呼び名が変わった…

「つて、さすがに財布なんて貰えないよ！」

「いいから、いいから、開けてみなよ」

「開ける？」

「そうそう、財布の小銭入れをパカッとね」

若干の罪悪感にかられながらも境内院さんに言われた通り、小銭入れを開ける。

そこには硬貨は一切入っておらず、一枚の紙が折り畳んで入っていた。

「魔除けのお札だよ。」

よっちゃんも憑かれてるからその保険としてあげるよ」

それはありがたい。ありがたいのだが…

「さすがにタダで貰うわけにはいかないよ」

「そう？」

なら、お代として500円くらい貰おうかな？」

500円かあ…

学生としては決して安い額ではないが、僕に憑いているのが悪霊だったりしたら嫌だ。

「はい、500円」

自分の財布から500円を取り出し、境内院さんに手渡す。

「ありがとね」

ふう…これで、なんとか一週間はもつよ…」

「「えっ…」」

境内院さんのとんでもない発言に姫路さんと声を合わせて驚いてしまふ。

「もしかして美娘ちゃんは500円で一週間暮らしてるんですか？」

「うん。」

今日みたいな冷凍食品の特売日に買いだめしといて毎食一つずつ食すんだよ」

以前の僕にも退けをとらない程の食生活だ…

よくそれで霧島さん並に成長したものだ。

となると、島田さんは僕らが思いもよらない様な貧相な食生活を送っているに違いない…

「なんとというか壮絶ですね…」

今度なにか料理を作ってあげましょうか？」

「みずちゃんは優しいね…」

だけど私は巫女だから人様の世話になっちゃダメなんだよ…」

そう言う境内院さんはとても悲しそうだ。

彼女の様な性格なら本当は色んな人と出会い、関わりたい筈なのに

家業でそれもままならないのだろう。

「そうなんですか……」

対する姫路さんもすごく悲しそうだ。

どうにかして境内院さんのためになるようなことはできないだろうか？

.....

「そうだ！

境内院さん、僕らと友達になろうよ。そうすれば僕も姫路さんも境内院さんにご馳走してあげれるよ。

だって、友達にはそういう遠慮はいらないでしょ？」

「それは名案ですね。

私たちと友達になりましょ、美娘ちゃん」

姫路さんもこの案に賛成してくれるようだ。

「でも、それじゃあご飯のために友達になるみたいで悪いよう……」

「だ、か、ら、友達にそういった気遣いはいらんだってば」

「そうですよ。

美娘ちゃんは今もう私たちの友達ですから気遣いなんていらないます。

それとも、私たちと友達では嫌ですか？」

「ち、違うよ！

ただ、私のこと友達って言うてくれるのは嬉しいけど…嬉しいんだけど…」

なにか昔にあったのか境内院さんは言いづらそうな様子だ。

「なんで境内院さんが渋ってるかわからないけど、境内院さんが友達になりたいなら今はそれでいいんじゃないかな？」

そう、いつまでも過去を引きづっていてもなにも変わらないんだ。なにかのきっかけで少しずつでも変わっていかなきやいけないんだ。もう、過ぎ去ったものを取り戻すことはできないのだから…

「うん…」

そうだよ。よろしくねよっちゃん、みずちゃん」

「はい、よろしく願いしますね美娘ちゃん」

「じゃあ、今日はさっそく僕の家においでよ。」

姫路さんと境内院さんにご馳走するからさ」

姉さんは今日、仕事で帰ってこないのでも境内院さんがいても問題ないだろう。

「なら私も手伝いますよ」

姫路さんの料理が食べられるなんて思わぬ朗報だ。これは僕も退けをとらないようにしないとだね。

「私は料理なんてしたことないんだ…役に立てなくてごめんね」

「だから気にしないでいいって。

じゃあ、早く買い出しを終らせて家に行こうか？」

「そうですね。まだ買わなきゃいけないものもありますから早くしましょう」

「数時間後」

「じゃあまたね。境内院さん」

「よかったら今度は私の家にも来てくださいね」

僕の家での食事を終え、その後に色々と雑談していたら8時を過ぎていたので境内院さんを見送り出す。

「うん。今日はたくさんご馳走になったよ。ありがとう」

手を振りながら帰っていく境内院さんは笑顔だった。

「満足してくれたようでよかったですね」

姫路さんの言う通り、境内院さんに満足してもらえたようだなにやりだ。

「うん、本当によかったよ。それに僕もすごく嬉しかったしね」

「なにがですか？」

姫路さんの思わぬ発言に思わず転けそうになる。

「なにつて…」

姫路さんがパエリアを作ってくれたことだよ」

作ってくれると約束はしていたが、まさかこんなに早く覚えてくれるとは思わなかったのだから驚きだ。

そしてなにより、完成度が尋常じゃなかった。

それは何年も前から作っている僕ですらうなる程に。

だけど、そういったことの一つ一つが僕にとっては不安なんだ…

姫路さんは優しいから僕みたいなやつでも喜ぶなら、それを率先してやってくれる。それは嬉しいことなんだけど、同時に僕を不安にさせる。

いつか僕に疲れてしまっんじゃないか…

いつか僕なんかと関わりたくないと思われてしまっんじゃないか…

いつか…僕の知らない遠いところ……そう、僕の手の届かない遠いどこかに行ってしまういそうで…

それが怖くてしょうがないんだ。

僕の日常から君がいなくなる、その一つの事柄が僕にとってはなによりも…

「明久君、いつまでも外にいと風邪をひきますよ」

姫路さんは僕の手を握ると優しく笑いかけてくる。

「うん…」

夜風で冷えきった僕の手は温かな手に包まれ、何物にも代えがたい幸せを感じていた…

第34問 僕と買い出しと温かな手（後書き）

どついう訳だか最近、パソコンの回線状況がおかしいです…

今回も苦肉の策として携帯からあげている始末です…

それはさておき、アンケートの結果ですが、なんと全て同着1位という状況になってしまいました。

ですので、再度アンケートを取り直したいと思います。

よろしかったらアンケートのמידいいので書き込んでやってください。

では、次回もよろしくお願いします！

第35問 僕と心理テストと現地集合（前書き）

S H I Nさん、きるぐまー1号さん、感想ありがとうございます！
ネット回線の復旧にはしばらく掛かりそうです…

今回は心理テストがあるので、皆さんやってみてはいかがでしょう
か？

第35問 僕と心理テストと現地集合

明久SIDE

初夏の日差しに照らされ、僕、姫路さん、雄二、島田さん、ムッツリー二、秀吉のいつもの六人は電車を待っていた。

「まさか現地集合だなんて思わなかったよ…」

しおりを見て知ったのだが、いくらなんでもおざなりすぎではないだろうか…

「まあ、そんなことを今さら愚痴ってもしょうがないだろ」

「そうですね。それよりも今の状況を楽しみましょう」

「そうじゃのう。」

わしらはFクラスゆえにお金はかけてもらえんのだから諦めるしかないのじゃ」

「木下の言う通りよ。それにルートは自分で決められるんだからいいでしょ」

「……清貧」

どうやら僕以外のメンバーはこの状況をそこまで苦としていないようだ。

無論、僕としてもこの状況は嬉しいのだが、できれば姫路さんと二人っきりで…

つと、それはさすがに高望みをしすぎというものだろう。
ただどせめて、向かいが隣の席にはなれたらいいな。

「おい明久、置いてくぞ」

いつの間にか来ていた電車乗り込んでいた雄二が言う。

「あつ、今行くよ!」

僕は手荷物を拾い上げると電車に乗り込んでいった。

く電車内く

電車に乗り込んだ僕たちは運よく三人ずつ向かいで座れる席を見つけ、座っている。僕の正面には姫路さん、その隣には島田さん、秀吉と座っており、僕の隣には雄二、ムッツリー二が座っている。

「景色がきれいですね」

車窓から外を眺める姫路さんが楽しそうに言う。

どうやら合宿先はかなりの田舎らしく、既に田畑等の風景が広がっていた。

「確かにきれいだね。ここならのびのびと遊べそうだから安心したよ」

「遊びに来た訳じゃないんだから、しっかり勉強だつてするのよ」

痛いところを島田さんにつかれてしまった…

「わかってるって…」

とは言ってみたものも、現地に着いたら勉強どころではないだろう。なんとか鉄人たちの目を掻い潜って脱出しなければ…

「明久君、勉強中に抜け出しちゃダメですよ」

うつ…

姫路さんに考えてることが完全にバレてる…

「明久、一人で抜け駆けなんて許さないぞ？」

「……その話、一枚かませろ」

なぜ雄二とムッツリー二は便乗してきたんだ…
今の話の下り的には僕が謝る場面だよね！？

「もう、坂本君に土屋君もダメですよ。

私もできる限りはサポートしますから勉強してください！」

姫路さんのワンツーマン授業…

教師服を着た姫路さんが僕個人に手取り足取りの指導…

遊んでる場合じゃない！これはなんとしても個人レッスンをうけなければ！

「もちろん僕は真面目に勉強するよ」

右手でガッツポーズをとりながら高らかに宣言する。

「そのいきですよ明久君」

「不純じゃ……」

嬉しそうな姫路さんに対して秀吉は不満そうだった。

〈数分後〉

「そういえばウチ、おもしろいものを持ってきたのよ」

そう言いながら島田さんが嬉々として一冊の本を取り出す。

「それはなんの本じゃ？」

「なんでも深層心理の本らしいわよ」

「面白そうですね。みんなでやりませんか？」

楽しそうにしている姫路さんには悪いが僕はあんまり乗り気にはなれない。

もし、これで僕の気持ちが姫路さんにバレたりすれば一大事だからだ。

ここは柔らかく断っておこう。

「悪いが、俺とムッツリーニはパスだ」

「……秘密主義」

たしかにムツツリー二はバレてしまつとまずいことが色々とあるだろう。

今さらな気もしないではないけど…

しかし、二人が断つたことにより僕もこれに便乗するというかたちでいけば姫路さんをさほど傷つけないで済む。

「そうですか…」

坂本君と土屋君はやらないんですね…」

うつ…

姫路さんの悲しそうな顔を見ると言い出しづらい…

「明久君は…やってくれますか…?」

「うん、もちろんだよ」

結局はすんなりと了承してしまつた…

だけど僕がうまくごまかせばいいだけの話だ。

姫路さんの悲しそうな顔を見続けることなんて僕にはできないのだから…

「じゃあ参加者は瑞希に吉井、木下でいいわね?」

「なにうえわしが自然に入っておるのじゃ!?」

「だって女子で秀吉だ」それ以上は言わせんのじゃああー!」

秀吉が目一杯に叫ぶ。

運よく、この車両に乗ってるのが僕たちだけでよかった…

「まあ、吉井のバカはほつといて木下はやるの?」

「やるのじゃ。」

ここでわしの演技力を披露してみなをぎゃふんと言わしてみせようぞ」

たぶん今時ぎゃふんと言う人なんていないんじゃないだろうか…

そんな定番的な突っ込みをこらえる僕を他所に島田さんが本をめくっていく。

「じゃあ、これにしましょう。」

あなたは今、鳥になっています。どこまでも果てしない大空を飛んでいくと、ある一つの場所にたどり着きました。果たしてその場所
は?」

鳥になつて行きたい場所?

鳥といえば自由なイメージがあるから、きっと自分が一番行きたい所がわかる心理テストなんだろう。

「僕は学校かな」

これで僕の勉強嫌いでバカというイメージともおさらばだ。

それに学校は姫路さんと関われる数少ない場所の内の一つだからね。

「私も文月学園ですね」

「わしはカーニバルじゃな」

姫路さんは勉強が得意だし、学校にいる時はとても楽しそうだから予想通りだ。

秀吉はなぜカーニバルにしたのだろうか？

秀吉ならば演劇場とか選ぶと思ったのに…

「えーと、今あげた場所はあなたが建前をつくって行きたがってる場所です。

本当のあなたの目的はその場所のもつ側面以外の付属的な部分にあります」

裏をかいいたつもりが墓穴を掘った気しかない……

「どう、みんなあつてる？」

島田さん、お願いだからこれ以上僕の穴を深めないで！

「私は、その…あ、あつてます…」

「わしもあつておる…」

恥ずかしそうにもじもじする姫路さんと落胆する秀吉。
どうやら二人には僕の目的はバレていないようだ。

一先ずは危険回避といったところだろう。

「で、吉井はどうなの？」

島田さん、君は僕の身を破滅させたいのか！？

「まっ、まあ…間違ってないんじゃないかな…」

「ふーん。じゃあ、学校に来る本当の目的は？」

どうして島田さんは目を輝かせて僕の破滅への布石を固めていくんだ！？

そんなに僕の人生が終了するのが楽しいの！？

「島田、その辺にしといてやれ。」

明久でも秘密にしておきたいことの一つや二つあるだろうしな」

雄二、今君が最高に輝いて見えるよ…

「（明久、貸し1だ。合宿先での夕飯を2割よこせ）」

隣にいる雄二が対価を要求してきたが、それでもこの危機的状況から脱せられた代償としては破格の安さだ。

「（うん、わかったよ。助けてくれてありがとう）」

「（気にするな。これからも持ちつ持たれつこうぜ相棒）」（ここで明久と姫路がお互いの気持ちに気づいちまったら面白くないしな）

雄二の腹黒そうな顔が見えた気がするが気のせいだろう。というか、気のせいだと思いたい…

「じゃあ、次の問題いくわよ。」

あなたの好みの異性の特徴を3つ紙に書いてください」

島田さんから僕たち三人にメモ用紙と鉛筆が配られる。

好みの異性の特徴かあ…

やっぱり優しさが一番だよな。

『優しい』

次はできれば包容力があつた方がいいかな？

『胸が大きい』

いったい僕は包容力に対してどんな認識をもっているんだろう…

とっさに書いてしまった答えを消すために消しゴムを探すが見当たらない。

しょうがない、このまま続行するとするか。

他に特徴かあ…

うーん… やっぱり髪は長くてふんわりとした感じがいいかな？

『髪はロングでふんわりとした感じ』

あつ、でも天然気質で護つてあげたくなるような女の子も魅力的だなあ…

『天然気質で護つてあげたくなるような人』

いや、でも真面目でいて芯の強い人も中々いいかもしれない。

『真面目で芯が強い』

さて、この中から三つだよな。うーん、どれにしようか？

「吉井、後はあんただけよ。早くしなさい」

「あつ、うん！」

もう考えてる時間なんてない！

と、そこで僕に妙案が浮かぶ。そうだ、これなら…

「書けたら坂本に渡してね」

「ちょうど今できたよ」

島田さんに言われた通りに雄二に紙を手渡す。

雄二SIDE

どれどれ、あの三人はなにを書いたんだろうな？

まずは姫路から見てみるとするか。

『優しい人』 『一生懸命な人』 『周りを元気にしてくれる人』

これじゃあ、素直に明久って書いたのと同義だろ…

でも姫路本人はうまくごまかせたと思ってるんだろうな…

まあ、今さらな気もするし次は秀吉のでも見てみるか。

『優しい人』 『わしに暴力をふるわない人』 『わしを男扱いしてく

れる人』

あいつも大変だな……

涙で紙が濡れてるところを見るとよほど思ってたのだらう。

さて、お次が大本命の明久だな。どんな珍回答を書いていることやら……

『優しい』

これはみんな書いてるな。

『胸が大きい』

結構ストレートだな……

『髪はロングでふんわりとした感じ』

要するに姫路ご指名ってこった。

『天然気質で護ってあげたくなるような人』

あいつ、三つ以上書きやがった……

というか、今まで全部姫路の特徴じゃねえか！

『真面目で芯の強い人』

芯の強い人つてのも姫路の隠れた側面だからな……

もう、いいから姫路って書きやがれ！

まったく、明久も姫路もなにを考えてるんだか……

今なら須川たちの気持ちが少しはわかるな…

『全部まとめて姫路さん（本人には内緒にしといて）』

つて、正直に書いてやがった！？

本当にあいつはなにを考えてるんだ！？

「坂本、見終わった？」

「あ、ああ…」

若干の呆れと動揺をなんとか隠しながら返事をする。

「じゃあ、続きいくわよ。

さつき、書いてもらった特徴をすべて兼ね備えた異性が同時にあなたに告白してきました。二人の特徴はそれ以外全く別です。

さて、あなたはどの特徴をもった方と付き合いますか？」

たしかこの手の型は、ここで答えた特徴が一番重視してるってやつだったな。

余談だが、これを実験した学者の話では胸が大きい方が選ばれたらしいけどな。

「わしは家庭的な人がいいのじゃ」

秀吉は家庭的な人を求めてるわけか。

つて明久、まるで秀吉を親の敵のような目で睨み付けるな。別にお前と違って姫路を指名したわけじゃないだろ…

「私は誰かのために笑って、泣けて、一生懸命になれるような人が

いいです」

「僕も姫路さんと同じかな」

お前ら本当にお似合いだと思うよ。

そりゃ、お前らの共通点だってことわかって言ってるのか…？

まあ、どうせわかってないんだろうけどよ…

ビリッ！

「……えっ！？」「……」

島田が急に本を破りだした。というか、本を真っ二つってどんな力してるんだ…

「しっ、島田さんどうしたの！？」

明久、どうしたのじゃない。お前の責任だ。

今のお前と姫路は端から見たらイチャついてる様に見えるんだよ！

「み、美波ちゃん落ち着いてください。

そっ、そっいえばお弁当作ってきたんですよ。美波ちゃんもいかがですか」

バカっ、今の島田には逆効果だ。

姫路は良かれと思ってやっているから、こちらの心配を他所に弁当箱を開けていく。

「さ、さあみんなで食べてください」

姫路、普段だつたらナイス機転といたいが今の島田が怒ってる理由を考えてくれ！

「相変わらずおいしそうなお弁当だね」

あきひさあああ！！

お願いだからこれ以上島田の神経を逆撫でしないでくれ！
島田の正面に座ってる俺の身にもなってみろ！

「はい、みんなの分のお箸です」

姫路がみんなに箸を配っていく。

「あつ、早速そのお箸使ってくれてるんだ」

「明久君に買ってもらった大切なものですから♪」

ウサギ柄がついた箸を持って姫路が嬉々として言う。

明久、せめて言うタイミングを考えてくれ…

そして姫路、お前も少しは周りを見てくれ…

お前らは場を和ますためにやってるかもしれないがちっとも和んでないからな！？

「……………」ガタッ

無言で立ち上がった島田が別車両に走って行ってしまった。

「待つんじゃない島田よ！」

秀吉がいち早く島田を追いかけて席をたつ。

「島田さん！」

「美波ちゃん！」

明久と姫路も秀吉に続こうとするが、俺はふたりを手で制止する。

「お前らはここで待ってる。今は秀吉に任せとけばなんとかなるさ」

「うん…」

「わかりました…」

二人とも申し訳なさそうな顔をして席につく。

「私が美波ちゃんを怒らせちゃったんでしょ…」

「きつと僕が怒らせちゃったんだよ…」

別に誰が悪い訳じゃない。

明久と姫路が島田の怒っている理由に気づけなくて、島田は島田で自らやり始めたことで自爆しただけだ。ただ、不幸が重なりあっただけなんだ…

「ああ、やめろ。辛気臭いのなしだ。

この件については島田が帰ってきたら話す。それでいいだろ」

「うん…」

「はい…」

とは言ったものの、島田のやつ帰ってくるかな…
俺らの合宿は初っぱなから雲行きが怪しかった。

第35問 僕と心理テストと現地集合（後書き）

現地に着く前からハプニング！？

果たして明久たちは美波と仲直りできるのか！？

第36問 わしと島田と自制心（前書き）

墮落者断さん、感想ありがとうございました！

第36問 わしと島田と自制心

秀吉SIDE

「島田よ!」

わしは突然席をたってしまった島田を追いかけて走り出した。
おそらく島田が席をたってしまった理由は自制が効かなくなったのが原因じゃろう。

「待つんじゃ!」

車両間で島田に追い付き引き止める。いくら島田と言えども所詮は女子。

追い付くことくらいわけではないのじゃ。

「……………」

島田は無言のまま立ち止まる。

「ウチってバカよね…」

寂しそうに、だけれど自嘲気味に言う島田にわしはなにを言ってるのじゃあ?

どんな言葉でも今の島田には逆効果な気がするのじゃ…

「吉井と瑞希の仲がいいのは——ううん、二人がお互いのことが好きなのはわかりきってることなのに、つまらない嫉妬なんかしちゃって…」

わしは励ませばいいのか？

わしは打開策を授ければいいのか？

わしは一緒に悩んでやればいいのか？

その答えは今のわしにはわからんのじゃ。わしがどうしたいかのさ
えも…

「わかつてた筈なのに諦められなかった…
もしかしたら心中ではウチのことを好いてくれてるんじゃないか、
そんなバカみたいなことを考えてあの問題をだしたのよ…」

島田は後ろを向いておるからどんな顔をしているかはわからん。
しかし、床に落ちていく滴がすべてを物語っていたのじゃ。

「でも結果はご覧の有り様よ…
結局、ウチは吉井と瑞希の仲を再度認識させられるだけだった…
笑ってくれて構わないわ。バカな幻想を抱いて自分を苦しめた愚かな奴って…」

「わしは笑わんのじゃ」

「えっ…」

島田は涙が伝う顔を振り向かせる。

「わしは笑わん。どうして真っ直ぐな気持ちを抱いておる者を笑え
よう？」

もし、そんな輩があるならわしに言うのじゃ。わしがお主の力になるうぞ」

結果はどうあれ人の想いをバカにしている事などあっていい筈がないのじゃ。

「だけれど無謀だっと思うでしょ？」

「では、お主は無謀だからと言って諦めるのか？
自分の気持ちに嘘をついて今まで通り暮らしていけるのじゃろうか？」

「……………」

「今すぐ答えをださずともよい。答えは考え、考え抜いてだしたものでよい。

早くに決めてしまえば、それは後に後悔をつむ結果となるのじゃから。

ただ、明久も姫路も悪気があつた訳ではないのじゃ」

今のわしにはこれくらいしか言うことはできん…

これで精一杯なのじゃから…

「ありがとう木下…」

若干ながら島田の顔は晴れておつた。

「帰ろうぞ。みなが待っておる」

「そうね、帰りましょ」

明久SIDE

電車が終点につく間近、秀吉が島田さんを連れ帰ってきた。

「みんなごめんね。ウチはもう大丈夫だから気にしないで」

そう言つて気丈に振る舞う島田さんの顔はさっきよりは晴れていたが、まだ暗さが残っていた…

「ごめん、島田さん…」

「美波ちゃん、ごめんなさい…」

理由はどうあれ、僕が島田さんを傷つけてしまったらしいのだから謝るのは当然だろう。

「吉井に瑞希も気にしないで。さっきのウチはどうかしてたのよ。それに、ウチの方こそみんなに迷惑かけちゃってごめんね」

本当は島田さんだって辛い筈なのに、それでいて島田さんは自分に否があると言った。そこにどんな想いがあるのか僕にはわからないけど、僕に否がない訳じゃない。

「島田さんが謝ることないよ。それよりもば」それ以上言わないで…」

島田さんに突然、言葉を遮られてしまう。

「ここでこれ以上吉井が謝ったら、また八つ当たりしちやいそうだから…」

これ以上…吉井や瑞希に優しくされたら、また嫌なやつになっちゃうから…お願い…」

なにが島田さんをここまで追い詰めてしまったのか僕にはわからない。

だけれど真剣に悩んでその結果、僕に謝られたくないと言うなら僕はそれに従う他ないのだ。

「島田も島田なりに思うところがあるのじゃ。

じゃから、今は詮索せずにいつも通り接してくれるかのう?」

「もちろんだよ」

「私も美波ちゃんさえよければ…」

僕と姫路さんだって、それを望んでいるのだから断る理由がない。むしろ、こちらからお願いしたいくらいなのだから。

「ありがとう、吉井、瑞希…」

手の甲で涙を拭く島田さんを見て胸が痛む。

僕は本当になんのわだかまりもなく、いつも通り接していけるのだろうか…

僕自身はそれを望んだとしても島田さんが本当は望んでいないのかもしれない。

もし、そうだとすれば僕はなにをしてあげられるのだろうか？

「さっ、もうこの話は終わりだ。電車も着いたことだし降りるぞ」

雄二に続くようにみんなが各々の荷物をもつ。

外に出てみれば豊かな緑が辺り一面に広がっていた。

相当な田舎なのか古い木造建築の家もかなりの数がある。

「あそこの家なんかオバケが出そうだな」

「へ、変なこと言わないでよ」

「そっ、そうですよ。オバケなんている筈がありません！」

雄二の冗談を真に受ける姫路さんと島田さんはオバケが怖いのか、体をぶるぶると震わせていた。よかった、一応はいつも通りみたいだ…

「雄二も冗談を言っておらずに合宿先を目指そうぞ」

「……時間厳守」

ムツツリー二の言う通り、集合時間までさほど余裕がない。

「じゃっ、行くとするか」

雄二を先頭に僕たちは合宿先を目指す。

第36問 わしと島田と自制心（後書き）

私事ですが先日、テイルズオブエクシリアを買いました。
思いの他、父がはまってしまいプレイ時間的な意味で危険な状況で
す…

第37問 僕と料理と不可欠な存在（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第37問 僕と料理と不可欠な存在

明久SIDE

「ふう…」

合宿先の自室に荷物を置き一息つく。

この宿泊施設は文月学園が買い取ったもので、施設内ならばどこでも召喚獣を召喚できるらしいのだ。試しに召喚してみようかな？

「サモン！」

右手を振り上げ、明希を召喚する。

「ZZZ…」

寝てた…

相変わらずフリーなやつだ…

「明希、起きて」

片手で明希を揺さぶるようにして起こす。

「ほわあ…？」

どうした主人。マスター今日から一週間は試召戦争はないんだろ？」

確かに明希には合宿のことを伝えてあるのだが、真っ昼間から爆睡とはいかがなものだろうか…

「いや、合宿先に着いたから一応明希も出しとこうと思ってね」

「そいつはありがたいな」

腕組みをしながらふんぞり返る明希に若干呆れながらも荷物の一部を明希の方に渡す。

「せっかくだから荷物整理手伝ってよ」

「けっ、俺はそのために呼ばれたのかよ」

悪態をつきながらもちゃんと荷物を整理しだしてくれる。素直じゃないなあ…

「にしてもボロい部屋だな…」

明希の言う通り、部屋の中も相当な有り様だ。

姫路さんや島田さんには悪いけど、本当に幽霊とかが出そうな程に…

「それはしょうがないよ。なんでも築120年らしいからね」

「ったく、宿泊施設くらいまともなものにしとけよな」

明希の言いたいことももっともだが、破格の安さでの合宿であるから我慢するしかない。第一、ホテルなんか泊まることになればとてもじゃないが資金がもたないのだから、僕にとってはこちらの方がありがたかったりするのだ。

「ん？」

そっぴい、姫路さんやいつものやつらは？」

「ああ、姫路さんなら島田さんと同じ501号室。雄二が516でムツリーニが517、秀吉が518で僕らの今いる所が515号室だってさ。

なぜだか僕たち4人だけが個室なんだけどね…」

そう、どういった訳だか僕、雄二、ムツリーニ、秀吉の4人はそれぞれに個室が用意されていた。できれば相部屋の方がよかった身としては残念だ…

「じゃあ、俺は姫路さんの所に——って、離せ主人！」

「行かせるわけないよ！」

明希のしつぽを掴み、必死に進行を阻止する。

「俺は姫路さんの所に行くんだ！」

「だからダメだって！」

姫路さんは島田さん以外とも相部屋してるんだから明希が行ったら話がこじれるでしょ」

一応、明希のことは僕の親しい人+αしか知らないのだ。

そんな状況で一人で歩き、喋る召喚獣が見つかったとあれば後々面倒なことになりかねない。

「だとしても俺は姫路さんに会いに行くんだ！」

自分の尻尾が切れるのではないかという程の力を込めて明希は進もうとする。

明希の痛みは僕にもフィードバックするのだからいい加減止めてほしい。

それにしても明希の姫路さん好きには困ったものだ。いったい誰に似た事やら…

「そりゃ、お前だろ」

突如、ドアの方から聞き慣れた太い声が聞こえてくる。

「あつ、雄二！」

「よつ、明久に明希。ところで、お前らなにやってるんだ…」

雄二が若干呆れ気味に言うのも無理はないだろう。

なんせ、ドアを開けたら自分の召喚獣の尻尾を掴んで引き止めてるという滑稽極まりない光景が広がっているのだから…

しかも、それが観察処分者特有のフィードバックを受けて尻尾を掴んでいる本人までもが痛み顔に顔をしかめているのだから相当なものだ…

「理由は後で説明するから雄二も明希を止めてよ！」

「普通に召喚解除すればいいんじゃないか？」

……………言われてみればそうだ…

そんな簡単な事にも気づかなかった自分に若干自己嫌悪しながらも明希の召喚を解除する。

「そついえば雄二、どうしたのさ？」

「ああ、そうだったな。

あまりにもアホらしい光景のせいで忘れるところだった。今から飯だ、行くぞ」

つまるところ、雄二は僕を迎えに来てくれたということだろう。

「あつ、うん。ありがとう雄二」

荷物整理はまだ終わっていないが、それは夕飯の後でもいいだろう。そう考え、僕と雄二は夕飯の用意されている会食堂へと向かった。

〈会食堂〉

「あつ、姫路さん」

会食堂へ着くと、ちょうど姫路さんを見つけたので声をかける。

「明久君こんばんは。よかったら隣どうですか？」

「うん、ありがとね」

姫路さんの隣に座れたのはいいのだが、周りを見渡して思う。

僕にこれ以外の選択肢が用意されていたのだろうか？…

僕の座った席以外には軒並み『吉井明久のみ使用禁止』のメモ書きが置いてあった。

須川たちがやったのはわかりきっているが、一步間違えばイジメではないだろうか？

もちろん、僕としては姫路さんの横で食事するのは嬉しいのだけれど、支障もないのだが、なんとも言えない複雑な気持ちだ…

「山菜がたくさんありますね」

「そうだね。やっぱり田舎ではこういった料理が主流じゃないのかな？」

姫路さんの言う通り、ざっと見渡しただけでもワラビ、ふきのとう、ゼンマイ、キクラゲ、ヨモギといった色とりどりの山菜が天ぷら等にされ並べられていた。

「おーい明久！飯持ってこっちに来い！」

僕の席から少し離れた所から雄二の声が聞こえる。

おそらく雄二は昼間に僕がつくった借りを返せと要求しているのだろう。

確か内容は夕飯の2割だったはずだから適当に見繕えばいいはずだ。そう思い、僕はおかずをいくつか小皿に移して席をたつ。

「姫路さん、ちょっと雄二の所に行ってくるね」

「夕飯の時間も限られてますから、なるべく早く帰ってきてくださいね」

「う、うん」

早く帰ってきてなんて、なっ、なんだか新婚夫婦みたいだ…

つと、いけない、いけない。

こんなに顔赤らめたまんまじゃ、また雄二にからかわれかねないよ。気を引き締めて雄二の所を目指すために周りを見渡すと、霧島さんの向かいに座る雄二を見つける。

「雄二、約束の品だよ」

「……………明久、てめえは喧嘩うってんのか？」

「やだなあ、ちゃんと夕飯の2割用意したじゃないか」

いったい何が不満だというのだ。

「衣だけ山盛りにされて誰が嬉しいんだよ！」

「それでも、ちゃんと2割じゃないか！」

そう、天ぷらから一々衣だけを剥いで全体量の2割程度にしたというのになんの文句があるというのだ。

「こつちだつて大変だつたんだよ！」

「お前のその無駄な努力は別の方向に向けられないのか！？」

二人で眼のくれあいをしてながら硬直する。

「……………雄二、私の分あげるから我慢して」

そう言つて霧島さんは雄二の口に自分の天ぷらを押し込む。

「ほひふおうほ、ほへふあほはへほふひはへほふあふはほ」（おい翔子、これはお前の食べ掛けだろ！？）

なに、霧島さんの食べ掛けだって！？

つて、ことは間接キスってことじゃないか！？

「異端者リーダーに反応があった！

被告、坂本雄二をただちに連行し異端審問会を開始する！」

そんな声がどこからともなく聞こえてくると、雄二は黒覆面の集団に取り囲まれ、連行されてしまった…

薄々は勘づいていたけど、やっぱり僕と姫路さん以外は異端者の対象なんだ…

ところで異端者リーダーってなんだろうか？

もしかして、そのはた迷惑な代物で僕と姫路さんの行く先々に現れてるんじゃない…

壊せるなら、なるべく早く壊しておいた方が良さそうだな…

そんなことを考えながら姫路さんの所に戻る。

「姫路さん、ただいま」

「ひゃあ！？あつ、明久君…？」

なんで僕はそんなに驚かれているのだろうか？

多少疑問に思いながらも席に着く。

「そつ、その…少しおすそわけですけど、いりますか…？」

姫路さんがあのウサギの箸で自分のヨモギ天ぷらを挟みながら言う。きつと僕が雄二に夕飯をとられたと思って気をつかってくれたのだ

ろう。

「僕は大丈夫だよ。それよりも姫路さんは自分の分食べなよ」

「そうですよね…」

姫路さんはあからさまに落ち込んだ様に箸を引つ込める。
そんなに僕におすそわけをしたかったのだろうか？

「ほら、もう時間もないし早く食べちゃわないとだよ」

雄二の所で一騒動あったため、夕飯の時間がほとんど残っていない。
そんな状況では姫路さんから貰ったものを食べきれる保証はない。
そうすればせつかくの姫路さんの厚意を踏みにじってしまう結果になるのだ。

それでは申し訳ないことこの上ないので僕は自分の分だけを急いで
食べ始めた。

………なにかが足りない…

ふと、そんな考えが脳裏をよぎる。

おいしいはずのこの夕飯もなにかが決定的に足りない気がした。

その疑問は段々と大きくなっていき、確固なものとして僕の中に根
付いていく。

なにか足りないかと聞かれれば答えることはできない。

それは僕にとって普通になりすぎていることなのか、はたまた気に
する程でもないことなのかもわからない…

ただ、漠然とした違いを感じているだけだった…

「明久君…？」

姫路さんが心配そうに僕の顔を覗きこんでいる。

「どうしたの姫路さん？」

「どうしたのはこっちの台詞ですよ。明久君、さっきからお箸を持ったまま固まっていましたけどなにかあったんですか？」

僕は姫路さんに心配される程固まっていたのだろうか？

確かに疑問を抱いて箸を止めていた自覚はあったがそこまでとは思わなかった。

「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事があったただだから気にしないで」

「ならいいんですけど…」

あつ、でも私で力になれることがあったらいつでも言うてくださいね」

「うん、その時はよろしくね」

姫路さんにそう言つて、一つの可能性に気づく。まさか――

いや、そんなわけではないか…

例えばそうだとしても、いつかはケジメをつけなきゃいけない時があるんだ。

その時には、僕はそれを手に入れることはできないのだから、今の内に慣れておかなければいけないんだ。

君が作る料理以外に…

僕はその一つの可能性が怖かった。

僕にとって段々と君が欠かせない存在になっていくのが…

僕にとって君がなくてはならなくなっていくのが…

僕が君に依存してしまっているのがなによりも…

そうなってしまうえば僕は来るべき結末に耐えられなくなってしまう。

それは僕にとってどんな未来を予期しているのかも物語っている。

だから今の内に慣れておこう。

僕の隣にいつもいてくれた君がいないことを…

第37問 僕と料理と不可欠な存在（後書き）

ネット回線がようやく正常になりました。
ここまで長かった…（汗）

第38問 僕とのぞきと来るべき災難（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございます！

ついにストーリー評価点数が100ptになりました！

これも一重に読んでくださるみなさまのおかげです。

これからも拙作をどうぞよろしく願います。

第38問 僕とのぞきと来るべき災難

明久SIDE

「今日みんなに集まってもらったのは他でもない」

夕飯のあと、僕たちFクラス男子は雄二の部屋に集合させられた。はつきり言って個室にこの人数が集まると狭苦しいことこの上ない。

「あと十分で女子が入浴の時間となる！」

「なんだって!？」

「覗くしかないじゃないか！」

「レッツパラダイス！」

こいつらアホばっかだ…

まさかなんの警備もされていないと思っっているのだろうか？

「しかも俺は覗きを成功させる方法を考えてきた！」

「さすが坂本だぜ！」

「準備よすぎだろ！」

「女子のH A D A K A！」

このバカたちはほつといたとしても雄二がここまで覗きに意欲的な

のはおかしい。なにか裏があるに違いないな…

「そしてその作戦だが明久、お前の力を借りたい」

「嫌だね」

こいつが僕のことを頼る時はろくなことがない。

僕もみすみす泥舟に乗り掛かるほどバカじゃないから願ひ下げだ。

「そう言っつなつて。成功すれば姫路のH A D A K Aを見れるぞ？」

「それでも嫌だね」

そんなことで姫路さんのH A D A K Aを拝めたとしても、それは嫌われる原因にしかなりかねない。第一、どうやっても警備にあたる教師陣を抜くことは無理だろう。

「おーと、ここで余裕の発言が飛び出したぞ！

嫁のH A D A K Aならいつでも見れるから、必要ないらしいですよ！」

これは試験召喚大会の時に聞き慣れた司会者の声だ…

たしか、君はFクラスじゃなかったよね。なんでいるのさ……

というか相変わらずのこちらの意図を全く介さない解釈は止めてほしいものだ。

「さすが吉井、俺らとは格が違うな！」

「毎晩、見えるから必要ないってか！」

「まさかそこまでデキてたとは…」

こっちもこっちで相変わらずだ…

「明久…」

雄二が僕の肩に右手をのせる。今の雄二の目は真剣なことを話すときのものだ。

それだけ雄二にとって、この覗きは重要なことなのだろう。

「明希を召喚してくれないか」

「うん…」

今は理由は聞かないよ」

「すまないな。すべてが終わったら話すさ」

これが僕と雄二の信頼関係。

お互いに悩んでいる時はなにも言わずに手を貸す。そんな悪友との固い結束。

「サモン！」

幾何学模様から明希が飛び出してくる。

「なんだこのむさ苦しい部屋は…」

まあ、明希の言うこともごもつともだ。このボロくて狭い部屋に男子生徒が約50人というのはむさ苦しい以前に人口密度が半端じゃ

なく多いのだから。

「明希、出てきて早々ですまないが俺らに協力してほしい」

「協力だあ？」

「いったい雄二は明希になにを頼むつもりだろうか？」

「女子の入浴を覗く協力だ」

「はあ？バカ言ってるじゃねえよ」

明希が呆れるのも当然だろう。

いきなり覗きに加担しろと言われて首を縦に振るやつは――

「いっばいいいた……」

自分のクラスを少し虚しく思いながらも、雄二と明希の会話に集中する。

「そんなこと言うなよ」

「嫌だって言うてんだろ。」

そんなこととして姫路さんに嫌われちゃったら、どう責任とるつもりだ」

なんだろう、普段横暴な明希が正論を言っていると立派に見える……よくある、『映画のジャイアンはいい奴』現象なんだろうけど……

「姫路のH A D A K Aが見れ「協力するぜ」」

切り返しはやつ！？

って、驚いてる場合じゃない。早く明希の召喚を解除しなきゃ！

.....あれ？

召喚を解除したはずなのに明希が消えない。

「悪いな主人、俺にはこれがあるから召喚解除は効かないぜ」
マスター

そう言つて明希は自分の右腕に付いている腕輪を見せてきた。まさか！？

「ご名答。これはババアが作ってくれた俺用の腕輪だ」

ババアが作ってくれた腕輪……

それは試験召喚大会の優勝商品としてババアが作ると言っていたはた迷惑な品。

召喚フィールドがなくても明希に自由を与えてしまふ最悪の効果をもつ腕輪だ。

強化合宿の頃にはできると言っていたけど、連絡がないからできていないと思つてたのに……

「でも腕輪の効果は召喚フィールドのなしでも明希に自由があるってやつじゃ……」

「確かにそうだが、召喚フィールド内なら召喚解除を拒否する機能もあるらしいぜ。まあ、さっきは突然のことで追い付かなかったんだがな……」

さつきというのはおそらく、ここに着いたばかりのことを言っているだろう。

「ほー、すげえ効果じゃねえか明希」

「まっ、これで合宿中の俺は晴れて自由の身ってこった」

そう、この宿泊施設全体に召喚フィールドが張られてるのと同じ作用が働いているのだから今日から一週間、明希は自由なのだ。

「じゃあ早速作戦会議を始めようぜ」

「そうだな」

明希はご機嫌で雄二の肩に乗ると二人でなにやら相談を始めてしまった。

まあ、雄二がどんな作戦を考えてたとしてもあっちには鉄人や高橋先生がいるのだから心配ないだろう。僕はそう一人で納得して自室に戻っていった。

そうだ、まだ荷物の整理をしていなかったんだっけ…

〈自室〉

「あれ…？」

部屋に戻ってきた僕は自分の目を疑った。
なぜなら、ちらけたままだった僕の荷物がきれいに片付いているの

だ。

もしかして旅館の人がやってくれたのだろうか？

だとしたらメモ書きとかが置いてあるかもしれない。

そう思い、僕は冷蔵庫の置いてある隣の部屋の扉を開けた。

「……………」

「……………」

赤い着物を着た少女と目があった。

黒い髪の毛に丸い瞳、歳は12〜15といったところだろう。この子は誰だ？

旅館の従業員にしては小さすぎるし、この施設は文月学園が買い取っているのだから他の宿泊者の訳もない。

「えっと…君は誰？」

「私は淡雪。ひとゆめ一夢 あわゆき淡雪」

なんだか人の名前としては不自然な感じがする。それに気配もなんとなくだけど人とは違う気がした。

「それで淡雪ちゃんはここでなにしてるの？」

「私はここの主を災難から守りに」

「この主…？」

それは僕のことだろうか？

「一応、この部屋は僕のだけど」

「ならあなたを災難から守りにきました」

災難から守りにきたと言われても困ってしまう…
本当にこの子は誰なんだろうか？

「あなたの名前は？」

「吉井明久だけど？」

「吉井様ですか。」

わかりました吉井様、以後私が座敷童子としてあなたをお守りします」

「あははは、よろしくたの——って、座敷童子！？」

あまりの事実 zu 自分の耳を疑ってしまう。

だって座敷童子と言えは、よく妖怪系の話で出てくるあれのことだよね！？

「はい、座敷童子の一夢淡雪です」

どうやら僕の耳がおかしくなつたわけではないようだ。

「えっと…座敷童子が僕になんの用かな？」

「ですから、あなたとあなたの大切な人たちに災難が迫っているのです。」

私はそれからあなた方をお守りするためにやって来ました」

確かに座敷童子が家の主を災難から守ってくれるというのは聞いたことがある。

だが、だからと言ってこんな突拍子もない話をそう簡単にも信じられない。

「具体的にはいつぐらいにどんなことがおきるのさ」

「なにがおきるかは分かりませんが、明日に災難は訪れます」

明日とはまた急な話だ。

「ご心配なさらずに。」

私をこの部屋においてくだされば吉井様をお守りできますから」

まあ、部屋においておくぶんには困りはしないからいいだろう。

「じゃあ、よろしく淡雪ちゃん」

「私のことは淡雪と呼び捨てで構いません。

主である吉井様と対等であるわけにはいけないので」

「じゃあ僕のことと吉井とか明久でいいんじゃないかな？」

「いえ、主を呼び捨てで呼ぶなんて滅相ありません。

これは座敷童子の決まりでもありますのでご承認ください」

「わっ、わかったよ…」

意外とそこらへんについては厳格なようだ。

しかし幽霊が出そうな程おんぼろだと思ってたが、まさか妖怪が出

てくるとは…

世の中にはまだまだ不可思議なこともあるものだ。

「ところで淡雪はご飯とか食べるの？」

「いえ、基本的には食べなくても構いませんが、食を楽しむという概念は存在いたしますので貰えると嬉しいです」

要するに栄養的には必要ないが、味覚はあるから食べてみたいという事だろう。

「じゃあ、明日の朝食からここに持ってきてあげるね」

「お手数おかけしてすいません」

そう言っただけで淡雪は正座のまま、床に手についてお辞儀をする。

「そんなにかしこまらなくてもいいって」

「いえ、吉井様が私のためなどに動いてくださるのにその様な事では示しがつきません」

うーん、性格的には問題はないんだけど、どうも頑固な部分があるようだ。

妖怪だから古くからのしきたりを守ってるだけかもしれないけど、やりにくいなあ…

「そつえば淡雪はどんなことができるの？」

「料理、洗濯、掃除、裁縫と基本的な家事はこなせるかと思っています」

意外に家庭的な妖怪だなあ…

って、僕が聞きたいのはそういうことじゃなくて！

「えつと、ほら、もう少し妖怪っぽいことってできないの？」

「一応、人から視認されなくなることと壁抜け程度はできますよ」

なんと戦闘に不向きな能力だ。

それとも妖怪同士で争うことはないのだろうか？

「あつ、そういえば明日は食材を集めておいた方がいいかもしれないよ」

「えつ、急になんで？」

「私はこの部屋は守れますが、この部屋の外に吉井様出られてしまった場合は保障できません。ですから籠城しても大丈夫なようにです」

なんだろう、一気に不安になってきた…

この部屋に籠城しなければならぬ程の災難が迫ってるなんて信じたくない…

「うん、じゃあ明日は色々と食材を集めておくよ」

一応、パーティー用お菓子も持ってきたからある程度の量で済むだろう。

にしても、明日はいつたいどんな災難が待ってるって言っただろうか…

できれば姫路さんやみんなは巻き込まないように解決したいものだ。

第38問 僕とのぞきと来るべき災難（後書き）

いきなりの超展開！？

明久の身に迫る災難とはいったい…？

ちなみに今回でできました座敷童子がアンケートで募集したものです。

みなさまからの投票の結果、一夢と淡雪が同着でしたので二つを合せた名前となりました。

ご投票ありがとうございます！

第39問 俺とのぞきと呪いの電話（前書き）

きるぐまー1号さん、感想ありがとうございます。
ついに総合評価点が500pt突破です！
ご愛読ありがとうございます。

第39問 俺とのぞきと呪いの電話

雄二SIDE

ちくしょう…

翔子が勝手に作った婚姻届を手に入れるために、男子を使って女子たちの混乱を招こうと思ったんだが、まさか翔子が自室にいるなんて…

困にしたやつらも全員教師陣に倒されちまって、明日は俺も含めて補習だよ…

明希のやつだけは召喚解除拒否を承認して逃げやがったけどな。

トゥルルルル

ん？

着信音か。なにになに、非通知って、いたずら電話かよ。
まっ、大方明久だろうし暇潰しにでもでてみるか。

ピッ
♪

「もしもし坂本だ」

「もしもし私メリーさん。今、あなたの部屋のゴミ箱の中にいるの」

いきなり近すぎだろ…

というか、なんで自らゴミ箱に入ってたんだよ！？

そんな訳のわからないいたずら電話に呆れて通話をきる。

さすがに不気味になってきた…
ちよつとゴミ箱の方にも見てくるかな。そう思って、ゴミ箱の中
を覗き込む。

………なにもないな。

まあ、所詮はいたずら電話だ。気にする方がどうか――

トゥルルルル

また電話だ…

しかも今度も非通知…

「もっ、もしもし？」

「もしもし私メリーさん。今、あなたのいる旅館の前にいるの」

なんか遠ざかってる！？

それにしても声は女みたいだから明久のいたずらって線は消えたな。そうになると、翔子辺りがさっきの仕返しにやってるのか？

「翔子、いたずらも大概にしろよ」

「ふふふ…」

ツウーツウー

あの野郎、不気味な笑い声だけ残して切りやがった…

しかし、相手が翔子とわかったのならなにも恐れることは――あ
るな…

下手な妖怪や幽霊なんかよりも翔子の方が断然恐ろしい…

トゥルルルル

「もっ、もしもし…」

相手が翔子だとわかってしまうと余計に恐いものだ……
こんなことなら下手な詮索するんじゃないかった……

「もしもし私メリーさん。今、あなたのいる階にいるの」

いよいよ迫ってきてやがったな。

でも待てよ、これが本当にかの有名なメリーさんだった場合、俺はなんらかの対象をしなきゃならないんじゃないか！？

……って、メリーさんの回避方法知らねえぞ！
くそつ、こういう時は明久のやつが役に立つんだが——そうだ明
久だ！

あいつの部屋に行けば仮に相手が翔子でも逃げられるし、万が一メリーさんだとしても対処方を知ってるだろう。

トルルル

げっ、また携帯が鳴ってやがる……

出たのではないが、出なかったら出ないで悲惨な目にあいそうだな。

「もっ、もしもし……」

「もしもし私メリーさん。今、あなたの部屋の前にいるの」

やばい……

これで明久の部屋に逃げ込むって案は消えてしまった……でも相手が翔子ならば逃げ切る方法がないわけじゃない。

これをやったらやっただ後が大変になりそうだが、今お仕置きをされるよりはましだ。決意を決め、一呼吸いれる。

「俺はお前のことが大好きだああ！！」

これで翔子は放心状態のはずだ。急いで携帯をきり、部屋から飛び出す。

そこには案の定翔子がいたのだが、なぜだか黒いオーラが出ていた。

「しょっ、翔子…?」

「……雄二、これは誰?」

翔子の指差す方向、すなわち俺の足元を見ると、そこには金髪の人形が立っていた。しかもなぜだかこちらを見て顔を赤らめてやがる…

「誰って、俺はこんな人形知らないぞ」

「ひどいつ、今さっき『大好きだ』って言うてくれたのに!」

「うわっ!？」

人形が喋りだしたぞ!？」

「……雄二、どういふことか説明して」

「待て翔子!俺は本当にこんなやつ——」

ここで俺は一つの可能性に気づく。今さっき『大好きだ』って言うた…?

そして翔子が放心状態になってないって事はもしかして……

「もしかしてお前がメリーさんなのか…?」

「そうよ、私があんたが『大好きだ』って言うてくれたメリーよ!」

金髪を振り回し、メリーは泣きじゃくった様に言う。

要するには俺への電話はいたずらじゃなくて本物のメリーさんからきていた。

そして俺が翔子対策に言った『大好きだ』をメリーのやつは真に受けちまったって訳か…

「……雄二、二人がどういう関係か説明してもらっ

「そうよ、あんたがこの女とどういう関係なのか説明してもらっんだから！」

そう言っつて翔子とメリーが俺に詰め寄ってくる。

メリーの方は背丈的に視界にいれなくてもすむが、翔子からは目をそらせない。

というかそらしたら殺される…

「まっ、待て翔子、メリー！俺の話を聞いてくれええええ！！」

（数分後）

「まったく、ひどい目にあっただぜ…」

「……雄二が隠し事するのが悪い」

翔子が自分でつけた俺の傷に湿布を貼りながら言う。

「そうよ、隠し事なんかする雄二が悪いんだから」

メリーの方も小さいながらも湿布を貼ってくれている。

「んなこん言ったってお前らは話を聞かなかっただろぅが…」

今は一応、両者ともお互いの存在に納得したようだからいいが、それまでが本当に大変だった…

翔子はいつものように俺に『お仕置き』をしてくるし、メリーはメリーでさすがは人を殺す妖怪とだけあってか小さな包丁を常備していて、それで攻撃されまくった…

「……それは雄二が浮気したから悪い」

そもそも俺はお前の彼氏じゃない。

「違うわよ！

雄二は私に『大好きだ』って言ったんだからあんたが浮気相手ですよ！」

そしてメリー、お前の彼氏でもない。

「……私と雄二の方が長く一緒にいる」

だからなんだってんだ…

「そんなの関係ないわよ！

大切なのは愛の大きさなんだからね！」

前半部分だけは肯定しよう。

「……第一あの言葉は私がもらうはずだったもの」

確かにそうだが、それは逃げるための手段だ。

「そんなの負け犬の遠吠えよ！」

あたかも自分がかつたかのごとく言うな。

「……そんなことない」

「なら雄二に聞けばいいじゃない」

お願いだから俺を厄介事に巻き込まないようにしてくれ…

「雄二どうなの！」「」

「ああ！俺を巻き込むな！俺は寝る！寝るからな！」

そう言つて俺は布団を被るとだんまりを決め込む。

「……雄二は今日も照れ屋さん」

「まったく、男ならハッキリしなさいよ」

悪態をつきながらも二人は俺の部屋から出ていったようだ。

はあ……

今日は疲れたな。まったく、なんでこんなことになっちまったんだろつな…

そう、独りでに落ち込みながら俺は眠りについた。

第39問 俺とのもきと呪いの電話（後書き）

雄二のところにはメリーさんが！？

いったいこの旅館はどうなってるのか！？

第40問 僕と信用と頼りたい想い

明久SIDE

「あつ、雄二おはよう」

朝食を食べに会食堂に向かう途中の廊下で雄二と出会う。

「おう…明久か…」

見るからにやつれている印象を受ける雄二がこたえる。

大方、昨日ののぞきが失敗して霧島さんにこつてりとお仕置きされたのだろう。

まあ、自業自得だから同情の余地もない。

「そういえば明希が戻ってきてないんだけど知らない？」

「明希ならのぞきが失敗する直前に召喚解除を承認して逃げ帰ったぞ」

あの腕輪はそんな臨機応変に使えるのか…

ますます明希がめんどうなことになりそうだ…

「そういえば雄二はなんでのぞきなんてしようと思ったのさ？」

「ああ、それはのぞき騒ぎで女子を混乱させて、その隙に俺が翔子の部屋にある婚姻届を回収する予定だったんだ。

だが、結果はこっちの惨敗だ。男子共は鉄人たち教師陣に倒され、

肝心の俺の方も部屋で翔子に待ち伏せされてたわけだ…」

「そうなんだ……」

婚姻届というのは霧島さんと雄二の名前が書いてあり、更には両者の実印まで押してあるという代物だ。当然ながら雄二は判を押した覚えはないと言っている。

少し前から雄二はそれを手に入れようと躍起になっていたけど、まだやってたんだ…

「まったく、雄二だって本当は霧島さんの「言うなあああ!!」」

言いかけのところで雄二に右手で口を塞がれてしまう。

「ふむへふうひ!」（離せ雄二!）

「明久、お願いだからめったなこと言わないでくれ。もし、あいつに聞かれてたらなにされるかわからないんだ」

雄二がせわしなく辺りを見回しながら言う。

「つて、やばい……段々と息が苦しくなってきた…」

「ひわはい、ひわはいらはまふへ!」（言わない、言わないから離して!）

雄二の右腕を叩きながら苦しいことをアピールする。

「あつ、すまなかつたな…」

どうやら僕の意図がわかってくれたらしく雄二は手を離してくれた。

はあ…苦しかった……

「ところでなににそんな怯えてるのさ？」

「分かりやすく言えば、翔子並に面倒なのが一人増えた」

「????」

雄二がなに言いたいのかちつともわからない。

「お前はわからなくていいんだよ。」

それよりお前って、メリーさんの対処法知ってるか？」

なぜここでメリーさんの対処法なんだろうか？

「まあ、一応は知ってるよ」

「ほんとか!？」

朝食のおかず全部やるから教えてくれ！」

雄二の顔が途端に輝く。もしかして………

「確か、メリーさんから電話がかかってきたら壁伝いに移動して全身が映る鏡を二台用意する。そうしたらそれを合わせ鏡にして素早くその間に入る。」

後はそこで待つてれば、メリーさんが最後にくる後ろがわからなくなつて来れないらしいよ。ちなみに、壁伝いに移動するのも後ろをとられないためだよ」

「そうかありがとな——って、もう手遅れじゃねえかあああ!!」
「やっぱり予想通りか…」

「雄二、メリーさんから電話きたんだね…」

「そつ、そんなことあるわけないだろ…」

雄二、もう顔が完璧なまでにひきつってるよ…

「そんなこと隠さなくてもいいよ。僕だってさ……」

「もしかしてお前もメリーから電話がきたのか!？」

ここで雄二がボロをだしたのは黙っておいてあげよう。

「いや、僕の場合は座敷童子と同じ部屋に住むことになった」

「座敷童子ならいいじゃねえか!

こちらら殺人妖怪だぞ! 機嫌損ねると常備してる小型ナイフ振り回すんだぞ!？」

あれ?

なぜだかあまり怖い情景が思い浮かばないんだけど…

ところでメリーさんと座敷童子って、この旅館に大御所が二人もいるとはどういふことなんだろうか…

「ところでそつちの座敷童子はどんな状況なんだ?」

「性格自体には難はないんだけど、僕のことを『吉井様』って呼んだり座敷童子のしきたりに関しては頑固だったりするよ……」

「ならまだいいじゃねえか…」

「こつちなんてどういう訳だかメリーのやつに馴つかれちまったんだよ……」

メリーさんに馴つかれるっていったいなにをしたんだろうか…？

「ま、まあ、お互い頑張ろうか」

「そうだな……」

僕たち二人は朝からブルーだった…

〈会食堂〉

「明久君おはようございます」

「おはよう姫路さん」

昨日と同じ席に座り、隣にいる姫路さんに挨拶する。

「明久君は今日の予定ありますか？」

「特にはないけど、近くの山に行ってみようかな？」

本当は淡雪に言われた食材を集めにいくのだが、姫路さんを巻き込むわけにもいかないから嘘についておく。

「山ですか。」

確かに山菜や小動物とかがいて楽しそうですね。私も行ってもいいですか？」

「えっ、それはちょっと……」

ほら、今日はAクラスの人たちと合同勉強会があるから姫路さんはそっちにでなよ」

そう、今日は強化合宿の学園側の目的である学力向上のための合同勉強会があるのだ。姫路さんは勉強熱心だから、これで退いてくれるだろう。

「なら明久君もそれにでるべきです。」

それに連れてつてくれないなら先生に言っちゃいますよ」

「そんな……」

弱ったなあ……

どう考えても八方塞がりな気がしてきた……

「なんて言うのは嘘ですよ」

「えっ？」

見れば姫路さんはいたずらっぽく笑っていた。僕はからかわれていたのだろうか？

「でも明久君が悪いんですよ。
また私に秘密にしてなにかしようとしてるんですから…」

そう言う姫路さんは少し怒っているような、それでいて悲しさも含んでいるような表情をしていた。

「私は明久君にとってそんなに信用できない人なんですか。
なにかを隠さないと話してもできないような人なんですか。
私じゃ…明久君に頼ってもらうことすらできないんですか……」

「姫路さん…」

そうだ、姫路さんは悲しんでいるんだ。

僕が今まで良かれと思った行動も姫路さんにとっては辛かったのか
もしれない。

秘密を作ってしまうこと、頼らないこと、それは相手を信用して
いないことと同じなんだ…

例え、それが姫路さんの為だとしても悲しませてしまっているなら
本末転倒だ。

「ごめん、姫路さん…」

だから僕は謝ることしかできない。ただ、頭を下げることしか…

「いえ、私の方こそすいません…
わかってるんです。

明久君が私のために、私たちのために動いてくれることを。
わかってるのに…わかってたはずなのに……こんなこと言っちゃ
うなんて私、最低ですね……」

姫路さんの目には涙が浮かんでいた。

それだけ思い詰めていたということなのだろう。

僕がそれだけ悲しませてしまったということなのだ。

「そんなことないよ。」

人は誰かに頼りたいし、誰かに信用されたいんだ。だから、姫路さんがそう思うのはなにも悪いことじゃない。それに僕は嬉しいよ。」

「嬉しい…ですか？」

姫路さんが涙で濡れた顔をあげる。

「うん。」

姫路さんが僕に頼ってほしいって、信用してほしいって思ってくれたことがね。」

「明久君…」

「ほら、涙拭きなよ。」

ポケットからハンカチを取り出すと姫路さんに手渡す。

「ありがとうございますね。」

姫路さんはそれを受けとると涙を拭き取っていった。

「本当にごめんなさい、明久君…」

「僕の方こそごめん…」

まさか姫路さんがそこまで思い詰めてるなんて思わなかったんだ…」

だけど、それは僕にとってはかなり嬉しいことだ。僕が思い描くものには程遠いとしても、僕はそれだけ姫路さんにとって大切な存在になれているのだから。

それが、それだけで僕は幸せだった。

「姫路さん、一緒に山に行こうか」

だから、その幸せをもう少しだけ…

巻き込みたくはないけど、姫路さんを悲しませるのはもっと嫌だから

「いいんですか…？」

「うん、一人で行くよりも二人で行く方が楽しいよ」

「でも合同勉強会の方はどうするんですか？」

そうだ、姫路さんを連れていくかぎり抜け出すわけにもいかない。

「うーん、後で鉄人に話しくよ。それで許可がとれたら行こうか」

「はいっ」

笑顔で言う姫路さんはいつにも増して嬉しそうだった。

第40問 僕と信用と頼りたい想い（後書き）

今までもそうですが、今章も早速原作に似ても似つかないものに…
本当に私は原作に沿う気があるのかどうか自分に聞きたくなります
ね…

第41問 僕と君と花言葉（前書き）

心葉さん、感想ありがとうございました！

第41問 僕と君と花言葉

明久SIDE

「わぁ……

きれいな山ですね。木立の間から流れる風が涼しげで気持ちいいです。」

姫路さんが目を閉じ、両手を広げるようにして深呼吸する。

「そうだね。緑はきれいだし、涼しいしでここはいいところだよ。」

僕も姫路さんを真似て深呼吸してみると体中が浄められていくような感覚がする。

「ふう…

って、こんなことしてる場合じゃなかったんだ。

姫路さん、もっと奥の方に行ってみようよ。」

「はいっ。」

いくら鉄人に許可をとってあるとしても、長居をするわけにはいかない。

それに今日、僕に災難がやってくるのだから、いつまでも姫路さんと一緒にいるわけにもいかないのだ。

「朝食の時からやけに上機嫌だけどなにかあったの?」

「そ、そうみえますか…?」

「うん、なんだかいつも楽しそうに見えるよ」

でも、それは僕の錯覚なんだろう。

姫路さんが僕といてくれる時間を楽しみに、大切に、僕が想うのと同じように感じていてほしいと思うバカな男の妄想にすぎない。それでも、妄想だとわかっていても聞かずにはいられなかった。

もしかしたら、可能性があるのかもしれないのだから…

おこがましいと思われるかもしれない、バカだと嘲られるかもしれない、そんなことはない現実をたたきつけられるかもしれない。それをわかっているのに聞かずにはいられない僕はもう戻れないだろう。

昨晚の夕飯の際に気づいてしまった君の大切さに、僕の中での君の大きさに…

君にとって僕は僕の思い描くような人じゃないかもしれないけど、僕にとっては誰よりも、なにを差し置いてでも護りたいほど大切な人なんだ。

だけど、君の甘さにつかまってしまった…いや、自らつかまりにいった僕は引き返すことも振り向くこともできない。

ただ、まっすぐに進むことしかバカな僕にはできないんだ。だから

「それは明久君と一緒にいられるからですよ」

君の言ったことが信じられなかった。

まるで告白のような言葉に耳を疑ってしまった。

「明久君と一緒に同じ時を過ごせるのが嬉しいからです」

気が動転してしまいなにを言っているかわからない。

もしかしたら僕の思い描くものが側にあるのではないのか。

そんな錯覚にも陥ってしまいそうなくらいに現実味を帯びた言葉。

僕と一緒にいることが姫路さんにとって楽しい……

それは僕が姫路さんに幸せを与えられてるということなのかもしれない。

僕にとっての幸せは姫路さんの中でも共有されているのかもしれない。

例え、僕が想うより程遠いとしても姫路さんは今の時を大切にしてくれている。

それが僕にとって幸せで、嬉しくて、それでいてむずがゆかった。

「ひめ「明久君、早くしないと西村先生に怒られちゃいますよ?」

ようやくでかけた僕の言葉は姫路さんによってかき消されてしまう。少し前に立つ姫路さんは振り返りながら僕に笑顔を向けてくる。

今はこれでいい。

僕の想いも姫路さんの言葉の意味も。

自然とそう思えるほどに僕は今の時を大切にしたいと思った。

姫路さんと過ごせるこの時がなによりも大切なことから。

〽数分後〽

「姫路さん、それは食べられないよ」

「そうなんですか…」

姫路さんが成長したワラビに伸ばしかけた手を引っ込める。

「タケノコと一緒にワラビも成長しすぎると食べれなくなっちゃうんだ」

正確言えば食べれないこともないが相当まずいんだよね…

「明久君は物知りなんですね」

「金欠の時なんかの貴重な栄養源だから自然と覚えたんだ」

特にヨモギは道端に生えていることもあるため、主食にまで昇華したこともあったのは秘密だ。

「もう、ちゃんと栄養とらないとダメですよ」

「大丈夫だよ、今は姫路さんのおいしいお弁当が食べられるからね」

「な、なに言ってるんですか!？」

ちゃんと私のお弁当以外でも栄養とらないといけません!」

途端に姫路さんは顔を真っ赤にさせてしまった。

それに怒ってるみたいだけどなにか気に障るようなことを言っただけだったのだろうか？

「じゃあ姫路さんが僕の家で作ってくれる手料理でも栄養とるよ」

「そ、そういう意味じゃありません!」

「だって姫路さんの料理がおいしすぎるから、どうしても食べたくなるんだよ」

「あう…」

明久君はズルいですよ…」

なぜだか姫路さんは真っ赤にした顔をうつむけてしまった。さっきまで怒ってた(？)みたいなのにどうしたんだろう？

「(私ばかりがドキドキさせられっぱなしなんて明久君はズルいです…)」

「ん？」

姫路さん今、なにか言った？」

「なっ、なんでもありません！」

どうも今日の姫路さんはいつもと違う気がする。

なんというか僕と同じで緊張しているような感じた。

当然だが、僕の方は姫路さんと二人っきりなのだから心拍数がとんでもないことになっている。一応、平静を装っているがいつまでもつことやら……

「あっ！

明久君見てください。あの花かわいいですよ！」

姫路さんが嬉々として指差す方向を見ると確かに一輪の花が咲いていた。

正確には一輪と表するべきではないのだろうが、白いハンドベルの

ような形をした花が咲いている。あれは確か甘野老あまごころだったかな？
甘野老の花言葉は――

「姫路さん、ちょっと待っててね」

「明久君、まさかとつてくるつもりですか!？」

姫路さんが驚くのも無理はないだろう。

なんせ甘野老が咲いているのは急斜面になっている崖だ。
だけど、少し回り道をして上の方に行けばとつてこれないものではない。

「大丈夫だよ。上からとつてくるからさ」

「そんなことしたら転げ落ちちゃいます!」

まあ、確かにその可能性もなきにしもあらずだ…

「きつと大丈夫だよ。だから、姫路さんはここで待っててね」

僕はそれだけを言い残すと走り出した。

瑞希SIDE

「はあ……」

走り去っていく明久君の後ろ姿を見て思わずため息が出てしまいま

す。

明久君が私のためにあの花をとってきてくれるのは嬉しいんですが、それよりも明久君と一緒に行動したかったです…

頑張つてアピールしたつもりなんですけど、やっぱり明久君は私なんか眼中にないんでしょうか……

そういえば、あの花は確か甘野老という花でしたよね。

根が甘いからそういう名前がついたらしいんですけど、花言葉は……うーん、なんでしたっけ？

5 / 2 3 の誕生花だということは覚えていらっしゃるんですけど…

「おーい、姫路さーん！」

「あつ、明久君！」

崖の上から手を振っている明久君に手を振りかえします。あれ？ なにか別の花を持っていますね。

「明久君、その右手に持っている花はなんですか？」

崖の上にいる明久君に聞こえるよう、なるべく大きな声で出してみます。

「これはヒヤシンスって花だよ。さっき、そこで見つけたんだ！」

ヒヤシンスですか。

確か、色によつて花言葉が大きく変わった筈です。

明久君が持つてるのはピンクと紫、それに黄色ですね。

残念ながら私はどの色がどんな花言葉か覚えていないんですが、明久君は知ってるんでしょうか？

知っていてとってきちゃっているなら、ちょっと嬉しいです。

「姫路さん、今から降りるね」

「気をつけてくださいよ」

私の心配を他所に明久君は斜面に足を踏み入れました。

明久SIDE

僕はヒヤシンスを片手に持ちながら崖を慎重に降りていく。

ヒヤシンス。花言葉は色により多数あれど僕の伝えたい想いは黄色の言葉。

甘野老。その花言葉は君にぴったりの花言葉。

僕が君のことが大好きな理由の内の一つ。

僕はその想いに何度触れ、何度助けられたのだろう…

そして後何度、僕がそれに触れられる機会があるのか…

「明久君！」

それに氣をとられてしまっていた僕は自分が足を踏み外しているのを今知る。

まずい、斜面は土肌がむき出しになっているから一度滑りだしたら止まらない！

それに転げ落ちてしまえば、また下にある崖に落ちかねない！

とっさになにか掴まるものはないか辺りを見回すが、特に見当たらない。

くっ、もう踏ん張るのも限界だ……

「うわあああああ！」

「明久君！」

姫路さんが僕の落ちる場所に走りよってくるのが見える。

来ちゃダメだ。そうすれば姫路さんまで巻き込むことになってしま
う！

だけど斜面を転がる僕はろくにしゃべることもできない。

僕はこのまま落ちていくのか……？

姫路さんを巻き込んでしまうのか…？

いやだ。そんなのは…それだけは！

覚悟を決めて、むき出しの地肌に左手をつける。

「っっ…」

地面からとびだしている石の尖端が手を傷つけていく。

まず出血は免れないだろう。もしかしたらそれ以上になるかもしれない。

痛みも相当なものだ。だけど、段々と速度が緩まってきた。この調子なら…

「っっ！？」

一際鋭利な石に手をすってしまい、思わず手を地面から離してしま
う。

当然、滑り止めを失った僕は再度転げ落ちる速度を増していった。

「明久君、明希君です！明希君を召喚してください！」

そうか！

今の明希ならババアの作ったたはた迷惑な腕輪のおかげで召喚フィールドなしでも出てこれ——って、無理無理！

一回転する度に砂が口の中に入っちゃべりづらいのに『サモン』なんて言えないって！

明希を召喚するのを諦め、なんでもいいから掴む物と思い手を伸ばす。

「えっ…？」

回転が止まった…

疑問に思い、なにかを掴んでいる左手を見上げると、そこには甘野老があつた。

また、僕は助けられたんだね…

『心の痛みが分かる人』

それが甘野老の花言葉。

僕の大好きな人にぴったりの言葉。

「明久君、大丈夫ですか！？」

下から姫路さんが心配そうに聞いてくる。

「うん、甘野老に助けられちゃった」

甘野老を支えにして体勢を立て直す。

「もう、心配させないでください…」

「ごめん、ごめん。今から降りるからそこどいてね」

「今度は気をつけてくださいよ」

「わかってるって」

慎重に甘野老を抜くと、斜面を下っていく。
今度は大事に至らずにすんだようだ。

「お待たせ、姫路さん」

「お待たせじゃありませんよ！
明久君になにかあったらどうするつもりだったんですか！」

普通、あんな危ないことしたら怒られて当然だよね…

「ですけど、明久君が無事でよかったです」

「心配してくれたんだね。ありがとう、姫路さん」

「ほんとに……ほんとに心配したんですから…」

今にも泣き出しそうに姫路さんが言う。

僕はこんなにも心配をかけてしまっていたんだ。

僕はこんなにも心配されていたんだ。

それだけ僕は想われているのかもしれない…

「ごめん、姫路さん……」

「いえ、明久君が無事ならそれでいいんです」

そう姫路さんは笑顔で言う。

「はい、まずは甘野老」

その想いに何度も助けられた僕から君にぴったりな花を送ろう。

『心の痛みが分かる人』

「次はピンクのヒヤシンス」

君のかわいさを象徴するかのように。

『しとやかなかわいらしさ』

「紫のヒヤシンスもね」

僕の想いがいつまでも……

『初恋のひたむきさ』

「最後に黄色のヒヤシンスだね」

僕が一番伝えたい想い、気持ち、言葉。

『あなたとなら幸せ』

「こんなたくさんのお花ありがとうございます。
帰ったらお部屋に飾っておきますね」

両手いっぱい花束を持つ姫路さんはとても幸せそうだった。
やはり女の子は花を貰うという行為に憧れをもっているのだろうか？
事の真偽はわからないが、なにはともあれ受け取ってもらえてよかった。

僕の気持ちを受け取ってもらえた訳じゃないけど、それでも……

「あつ、明久君！

その…明久君もこのお花、部屋に飾りませんか…？」

そう言つて姫路さんは黄色のヒヤシンスを……そう、僕の伝えたかった想いを半分手渡してくれた。

「いいの？」

「はい、私があればいいわけじゃありませんけどせめて……」

「せめて？」

「と、とにかく明久君も一緒に部屋に飾りましょうね」

「う、うん……」

姫路さんからヒヤシンスを受け取り思う。もしかしてこれは――

ガサガサガサ

「「なつ、なに！？」」

突然、近くの草むらから音が聞こえる。

「もしかしてイノシシでしょうか？」

「それはないとは思っけど…」

警戒しながらも少しずつ草むらに近づいていく。

「「！？」」

そこにいたのはここにいない筈の――

第41問 僕と君と花言葉（後書き）

作中で瑞希の考えていたとおり5/23は甘野老の誕生花です。
そして5/23はある日なんですがみなさんお分かりでしょうか？

第42問 僕とカカシと空想壁（前書き）

黒炉さん、d・c・2隊長さん、感想ありがとうございました！

第42問 僕とカカシと空想壁

明久SIDE

「境内院さん!？」

「美娘ちゃん!？」

姫路さんと共に、茂みの中で倒れている境内院さんに駆け寄る。

「美娘ちゃん、しっかりしてください!」

「お……………」

姫路さんの呼び掛けに境内院が何かを言おうとする。
よかった、どうやら意識はあるみたいだ。

「お……………」

目立った外傷はないが、かなり衰弱している。まさか……………
試しに境内院さんの前にワラビを一本出してみる。

「食べ物!」

指ごと食われた…

っていうかやっぱり…

「お腹すいてたんですね……」

「いやあ、山でまよげほっげほっ」

境内院さんがアクを抜いてないワラビを食べたせいでむせている。
いや、あげたのは僕だけであれは仕方なかったというかなんという
か…

「大丈夫ですか美娘ちゃん!？」

「うん、なんとか…」

なんだろう、すごい罪悪感が……
でもあの場でワラビをあげていなかったらいなかったで罪悪感が……

「酷いよ、よっちゃん。」

こうなるのわかってて食べさせたでしょ」

「でもあげていなかったら、それはそれで困るでしょ？」

「確かにそうだね…」

じゃあ、この件は恨みっこなしにしようね」

「あははは、そうしてもらえると助かるよ」

境内院がお気楽な性格で良かったと心底思った瞬間だった…

「そっぴや、なしてよっちゃんもみずちゃんもこんな山ん中いるの
?」

「ああ、それは「ストーブツ!ふふつ、私わかつちやっただよ」

僕の言葉を遮って境内院さんが得意気に言う。

「きつとこんな感じに違いない！」

「以下、美娘の想像と共にお楽しみください」

「姫路さん、僕のことはいいから逃げて！」

「それじゃあ明久君が！」

明久の背中に護られるように隠れている瑞希は首を縦に振らない。

「明久、愛しい彼女との別れはすましたか？」

文月学園を牛耳るギャング、雄二が明久に拳銃を構えながら言う。
彼は自分の権力を盾に文月学園で容姿、学力共にトップを争う程の
才女である霧島翔子をものにしただけでは飽き足らず、明久の許嫁
である瑞希にまで手をつけようとしていたのだ！

「あばよ、明久」

雄二の銃口から弾が射出される。明久は端^{はな}からよける気はない。
自分の大切な人を護るために、ただそこに立ち雄二に狙いを定める。

「例え、同士討ちだとしても姫路さんを護ってみせる！」

明久も引き金を引き、最期の弾を撃ちだす。
それは狙いを寸分違たがわず捉えた。

バタッ！

「やるじゃねえか明久……」

拳銃を構えたまま、雄二は倒れる。

「明久君、私たち……」

「うん、勝ったんだ。だから――」

「っ！」

振り向いた明久の顔を見て瑞希は気づいてしまった。

この顔は明久が自分を押し殺して無理を言っている時の顔だと。

「だから「イヤです!!」」

泣きながらいう瑞希の頭に明久が優しく手をのせる。

「もういいんだ。」

僕はもうすぐに死んじゃうし、雄二の恐怖は去った。

どこにでも好きな所に行って人生をやり直すといいよ。

大丈夫、姫路さんならきつといい人が見つかるからさ……」

雄二の弾が貫いた自分の胸を押さえながら明久が言う。

急所からは僅かに外れているが、もう助かる命ではないだろう。

明久もそれを悟ったうえで瑞希に諭しているのだ。

「なら私はここに、明久君の側にいます！」

私の好きな場所は明久君の側です！

私にとって明久君以上の人なんかいないんです！

だから……だから、私はずっと、ずっと明久君の側にいます！」

「わがまま言っちゃダメだよ…」

もう僕は無理なんだ。長くないってもんじゃなくて今すぐにでガハッ！」

明久が血ヘドを吐く。

もはや立っていること自体、奇跡に近いのだ。

そんな中、意識を集中させながら話すことなど無理に等しい。

「明久君！」

しっかりとしてください明久君！」

瑞希の呼び掛けに応えるだけの気力は明久には残っていない。

ただその場に倒れ込み、己の愛しい人を最期まで目にやきつけておくことしか…

「イヤです…」

死んじやイヤです明久君！

一緒にお買い物行こうって約束したじゃないですか！

海に連れてってくれるって約束したじゃないですか！

まだ、私の作ったパエリア……食べてくれてないじゃないですか…」

明久はなにも言うことはできない。

どれだけ瑞希の想いが、気持ちが届いたとしても応えることができないのだ。

だから彼は精一杯笑った。彼女が自分を思い出す時は笑顔でいられるようにと。

それが何一つ応えることができない彼なりの返事。
最期まで一人の少女のために生きてきた彼からの最後の贈り物。

『僕のことを思い出してほしいなんて言わない。

だけど、もし君が僕のことを思い出してくれる時があつたなら、せめて最期の笑顔を思い出してほしい。これが君に迷惑をかけたバカな男の最期の願い……』

（想像終了）

「と、まあこんな感じに違いない！」

「いや、どこも当たてないから。

それに突っ込みどころしかなくて、どこから突っ込んでいいかわからない……」

「なら突っ込みはしなくていいんじゃないかな」

もはやそういう問題でもないと思うんだけど……

「姫路さんからもなにか言ってよ……」

「そ、そうですね。

美娘ちゃん、その後私と明久君はどうなったんですか？」

「そんなこと聞いてどうするのさ！」

まさか姫路さんは境内院さんの茶番に付き合うつもりなんじゃ……

「うんうん、その後はね悲しみ明け暮れているみずちゃんのところ
に忍者の末裔であるスケ君がくるんだ。

そしてよっちゃんを生き返らせる秘薬を探すために辺境の山岳地帯
に」

なんで無駄に話が繋がってるんだ……

というかスケ君って誰？

もしかしてスケベの意味のスケ君でムツツリー二のことだろうか？
だとしたら、どこから僕の交遊関係の情報を仕入れたのか問いた
だしい。

「それで明久君と私はここにいますね」

「そうそう。んで、今からはギャング雄二の残党との戦いがある
んだよ」

雄二が完璧に死人扱いされてる……

「しかも、その残党の中にはギャング雄二に捕らえられていた筈の
霧島翔子までいたんだ！」

「翔子ちゃんと戦わなきゃいけないんですね……」

もうダメだ……

ボケが飽和しすぎてて、突っ込む気力すらなくなってきた……

「その話はそこまでにしといてさ、なんで境内院さんはここに

の？

もしかして、こんなド田舎に観光とか？」

話を切り返すために話題を投げ掛ける。

「んにゃ、私は仕事で来ただけだよ」

仕事といえばお祓いの類だろうか？

「山の中でお仕事なんですか？」

「いやあ、それがさお金が無くて歩いてきたら迷っちゃったんだよね」

姫路さんの問いに境内院さんはあっけらかんと応えるが、要するには行き倒れていた訳だ。にしても、電車賃もないとは相当貧乏なんだなあ…

「大変でしたね…」

それで、お仕事の場所はどこなんですか？」

「それはこの近くの旅館だよ」

「「えっ……」」

あまりのとんでも発言に姫路さんと共に固まってしまう。だって、この近くの旅館っていえば一つだけで……

「あ、明久君、もも、もしかして…」

「うん…もしかしなくてもだと思つよ…」

実際、座敷童子やらメリーさんやらがいるのだからお被いに来られてもなんら不思議はない。いや、むしろ呼ぶべきだと思う。

「もしかして二人は旅館の場所を知つてたりするのかな？」

「知つてるもなにも僕たち、そこに宿泊してるんだ」

「学力の向上を狙つた強化合宿なんですよ」

僕たちはそれをほつたらかしてここにいるんだけどね…

「ほほう、じゃあ道案内お願いしてもらつてもいいかな？」

「もちろんだよ」

「でも美娘ちゃんはこの部屋に泊まるんですか？」

姫路さんの疑問ももつともだ。

あの旅館は文月学園が管理しているため、一般の客が泊まる部屋はないのだ。

「それなら心配無用だよ。

私用の部屋が用意されてるみたいだからね」

「それなら安心ですね」

「うんうん、そういうことで旅館に向けてレッツゴー！」

右手の拳を上げて境内院さんが楽しそうに言う。相変わらず元気だなあ。

〈数分後〉

「おかしいなあ…」

そろそろ、ふもとに出てもおかしくないはずなんだけど…」

確実に行きよりも帰りの方が長く歩いてる気がする。

「そうですね…」

まるで狐につままれた気分です…」

本当にそんな感じた。

なんだかさつきから同じ風景をぐるぐる回ってる気がする。

「もしかしたらタヌキに化かされてるのかもしれないよ」

「この山にはなにかいるんでしょうか？」

「いるとしてもあんなのしかいないよ」

姫路さんの疑問に進行方向の少し先にいるものを指さして応える。

「そうですね。あんなのしかいませんね…」

「そうそう、あんなの気のことないよ」

境内院さんの言う通り、カカシのような格好に赤い布の中に綿を詰めたような顔のあんなのなんか――

「なんじゃあれえええ!!」

驚きのあまり大声をあげてしまった。
カカシの方も僕の声に気づいたらしく、こちらに跳ねながら迫ってきた。

「姫路さん、境内院さん逃げるよ！」

「なんであんなのから逃げなきゃいけないんですか？」

「そうだよ。よっちゃん、焦りすぎだよ」

二人はいつたい何を言ってるんだ！？

カカシが動いてるってことだけでも無気味なのに『あんなの』なんて！

『あんなの』……………？

そうだ、僕も最初はあれに疑問をもたなかった。

そこにいて当然だと思っていた。あんなにも無気味な存在だということ…

ということとはもしかして！？

「姫路さん！境内院さん！」

一つの可能性を示唆し、僕は二人の手を掴んで走り出した。

「フォンフォンフォン！」

カカシの方もやけに陽気なリズムをとって僕たちを追いかけてくる。僕の考えが正しければ、姫路さんも境内院さんもあのカカシになんの疑問をもっていないだろう。たぶん、それがあいつの妖怪としての能力。

相手に存在を認知させない能力。

そんな能力をもってるやつが淡雪みたいに友好的な妖怪なわけない！

とにかく逃げなきゃ！

その一心だけで必死に逃げる。

幸い、二人とも疑問をもちながら僕のひく手についてきてくれている。

「フォンフォンフォンフォン！」

段々とカカシとの距離が縮まってくる。

一本足で跳ねているだけなのになんて速さだ！

せめて二人が正気に戻ってさえくれれば僕があいつをひきつけることが出来るのに……

僕がもう一人いれば………そうだ！

「サモン！」

お馴染みの幾何学模様から明希が飛び出してくる。

「フォンフォンフォンフォン！？」

さすがのカカシもいきなり出てきた明希に驚いているようだ。

「^{マスター}主人なんだこのカカシは？」

よかった、どうやら明希はちゃんとあのカカシを認識できているみたいだ。

「とにかくそいつを倒して！

なんか色々ややバそうなんだよ！」

「まあ、ヤバそうなのはわかるなよつと！」

明希が素早くカカシに迫ると、一太刀くれてやった。

「フォッフォォーン！」

あつ、逃げてつた…

一発くらっただけで逃げてくなんて案外弱いんだなあ……

「なんなんだあいつは…」

木刀を腰に納めながら、明希は呆れたように言う。

「さあ？」

よくわからないけど、少なからずこちらにプラスになる存在じゃないよね」

「それには同感だな」

本当になんだったんだろうか？

できればもう会いたくないけど、正体をつきとめてみたい気持ちもある。

まあ、なにはともあれまずは宿に——つて、あれ！？

「なんで旅館の目の前にいるの！？」

「山下つてたんだからそれが普通だろ」

確かに明希の言う通りなのだが、あれほど時間がかかったのにいともあっさりと山をでられるなんて……

これもあの力カシの能力なんだろうか？

「まっ、ささつと姫路さんたちを運ばうぜ」

「そうだね」

僕はいつの間にか僕の肩に寄りかざるように寝てしまっている二人を背負うと旅館に入っていた。

第42問 僕とカカシと空想壁（後書き）

それにしても凄い雨ですね。

学校に行ったのに友達とだべってきた以外なにもしないで帰らされましたよ…

第43問 僕と悲鳴と一つの可能性（前書き）

（冒頭雑談）

明「えっ!？」

なにこの突拍子もない企画!？」

唐「本編に全く関係ありませんのでとばしてもらって一向に構いません」

明「誰に向けて話してるの!？」

唐「こんな駄作者につきあってくれている心優しい読者様に」

明「駄作者だというのは認めるよ」

唐「ところで何か言いたいことある？」

明「うーん……」

じゃあ、前々から聞きたかったんだけど原作3巻の内容やる気ある?」

唐「強化合宿はやってるけど、そのほかは原作と大きく離れるよ」

明「だよね…」

妖怪がでてる時点で3巻関係ないもん…」

唐「ただ心配なことがある」

明「いつたいなんなのさ？」

唐「こんな突拍子もないことやって受け入れられるか…」

明「そんな心配するなら端かつらやらなければいいじゃん！」

唐「それでもオリジナルティがほしかった」

明「もう知らん…」

瑞「こんな作者ですがよろしくお願いしますね」

希「このバカに言いたいことがあつたら何でも言ってくれ」

第43問 僕と悲鳴と一つの可能性

明久SIDE

「これだけあれば、ある程度大丈夫でしょう」

僕が採ってきた山菜を見ながら淡雪が言う。

量的には三日分ほどあるから困ることはないだろう。

ちなみに姫路さんと境内院さんは各々の部屋に送り届けた後だ。

「そつえば淡雪、山で変なやつを見かけたんだけど…」

「どんなのでしょうか？」

「カカシみたいな姿をしてて、顔にあたる部分が赤い布に綿を詰め
たような感じのやつ。『フォンフォン』言いながら追いかけて来た
んだ」

あの無気味なカカシのことを思い出しながら淡雪に説明する。

「特徴からいけば瀬良案山子せらかカンと同じですが、彼らはしゃべったりは
しないはずなのですが…」

「じゃあ何をする妖怪なの？」

「気づかれぬように人についてゆき、一人になったところを連れ去
る妖怪だと言われています。連れ去られた人は瀬良案山子になっ
てしまつとも…」

なんともおぞましい話だ。それに、増やし鬼の要領で増えていくとは質が悪い…

「気をつけた方がいいかな？」

「一人でいる際にはお気をつけください。

もともと、この部屋の中なら私の守護がありますので心配無用ですが」

淡雪の力は意外に強いらしい。さすが有名妖怪といったところだろうか。

さて、一人になる可能性が高い人は……

姫路さんは島田さんと相部屋だから大丈夫。

雄二もメリーさんがいるから大丈夫だろうし、ムッツリー二なら捕まるようなヘマをしたりしないだろう。となると、秀吉が一番危険となる。

「ちょっと秀吉になるべく一人にならないよう伝えてくるよ」

「お気をつけて」

正座しながらペコリと頭を下げる淡雪に苦笑しながらも扉を開ける。

「フォンフォンフォンフォン！」

バタンツ！

速攻で扉を閉め、鍵をかける。

「淡雪！もうすぐそこまで来てるよ！？」

ああ、どうしよう！

もしかして、もう誰か犠牲になっちゃったんじゃない？

もしかしたら、今の瀬良案山子が僕の知ってる誰かかも知れない。
このままじゃ犠牲者が増えてく一方だよ！いったいどうしたらいいんだ！？

「今のは瀬良案山子ではありませんね」

「そんなのはどう——えっ？」

淡雪は今、瀬良案山子じゃないと言わなかっただろうか？

「ですから、あれは瀬良案山子ではなく山の神の遣いなのですが」

「って、ことは恐がらなくても大丈夫ってこと？」

「はい。なにか私に話があるようですので入れてあげましょう」

淡雪がそう言うと、鍵をかけた筈の扉が独りでに開き、僕の部屋に
カカシが入ってきた。

「フォンフォンフォン！」

「ふむふむ」

「フォーフォンフォンフォン！」

「そうなんですか」

見事に僕一人、蚊帳の外だ。

妖怪同士がなに話しているかなんて全くわからない。

というか、淡雪は本当にわかってるんだろうか？

なんだか適当に相づちを打ってるようにも見えるんだけど…

「フォンフォンフォフォン！」

「了解しました」

どうやら二人の話は終了したようだ。

「吉井様、どうやらこの者は捕らえられた同胞を探しているようです」

「仲間を探してる…？」

山の神の遣いだというのに捕まったりするのだろうか？

第一、こんな悪趣味な力カシなんて捕まえてどうすることやら…

「はい、この旅館のどこかにいるらしいのです」

「だけど、この旅館は文月学園が管理してるんだよ？」

「そこは妖怪同士のいざこざですから、一般の方々の管轄外かと思っています」

妖怪が山の神の遣いを捕らえてるのか…

なんだか、とんでもないことにも巻き込まれてる気がする……

「まあ、とにかくこのカカシは害がないんだよね？」

「はい、山の神の遣いですから害があるわけありません。

それとカカシではなくフォンという名前があるそうなのですが…」

フォンっていうのか。ところで『フォンフォン』しゃべるからフォンなのか、フォンだから『フォンフォン』しゃべるのかどっちだろうか？

「ならよかった。よろしくねフォン」

まあ、そんな疑問はおいておき、フォンに挨拶をする。

「フォンフォン！」

「うわぁ！？」

返事のつもりなのか、フォンはおもいつき僕に体当たりしてきた。僕はそれを寸でのところでかわしたのだが、危ないところだった…

「こらフォン、吉井様に迷惑かけてはいけません」

「フォン…」

淡雪にしかられたフォンは悲しそうに返事をする。

「吉井様もなにとぞ理解ください。

フォンはまだ遣いとなってからの年月が短いのです…」

なんだかこうみると淡雪がフォンのお姉さんみたいだ。

「僕はぜんぜん気にしてないからいいよ。
それよりフォンはなんで山の中で僕たちを追いかけてきたの？」

「フォンフォンフォン！」

「久しぶりに見た人間だからつい、嬉しくなつてついてきちゃった
みたいです」

「そんなことなの…」

「必死で逃げてきて損したよ…」

まさしく骨折り損のくたびれ儲けというものだろう…

まあ、結果的に誰も被害にあつてないからいいんだけどね…

「きゃあー！ー！ー！」

安堵したのもつかの間、廊下から悲鳴が聞こえてきた。

僕は急いで廊下にでるが、悲鳴をあげたとおぼしき人は既にいなくなっていた。

代わりといつてはなんだが、各部屋からぞろぞろとみんなが出てくる。

「なんの騒ぎだ？」

後ろから聞こえてきた声に振り向くとそこには雄二がいた。

「なんか廊下から悲鳴が聞こえたんだけど、誰もいなくてさ」

「大方誰かのイタズラに決まってるわ」

雄二の肩に乗ってる金髪の人形が言う。

「雄二、これがメリーさん？」

「ああ、こいつがメリーだ…」

雄二がメリーさんをつまみあげてこちらに見せてくる。
襟の部分を持たれてしまつてゐるため、メリーさんは抵抗もできずにつるさがる型となつてゐる。はつきり言つて哀れだ…

「雄二、離しなさいよ！」

「嫌だ」

「雄二…」

そんなに私のことを離したくないなんて嬉しい」

顔を赤らめながら言うメリーさんを見て思う。確かにめんどくさい…
こういうのをなんていうんだっけ……たしかメンヘラ？
まあ、雄二は御愁傷様ということにしておこう。

「明久君！坂本君！
いったいこれはどうしたんですか？」

振り向けば姫路さんと島田さんがこちらに走つてきていた。

「目がさめたんだね姫路さん。無事でよかったよ」

「私のわがままですっていったのに明久君に迷惑かけてしまつてす

いません…」

姫路さんは申し訳なさそうに言う。

おそらく僕がおぶって帰ったことを島田さんに聞かされたのだろう。

「別に気にしてないからいいよ」

「吉井、ウチは誘われてもないんだけど」

ヤバイ…

島田さんが相当不機嫌だ。そんなに山菜採りに興味があつたのか…
いや、もしかしたら山菜が好きなのもしれない。

どちらにしろ島田さんには悪いことをしてしまったのだから謝ろう。

「島田さんごめん。そんなに島田さんが山菜好きだとは思わなかったんだ…」

「はあ………やっぱり吉井は吉井ね…」

「????」

島田さんがなにを言いたいのかいまいちわからない。

もしかして山菜が好きなのではなく山登りが好きなのだろうか？

「まあ、話を戻して状況説明だが明久、お前はなにかを知ってるんだろ？」

さすが雄二といったところだろう。事実、僕には一つの仮説が存在している。

「うん。悪いけど僕の部屋まで来てくれないかな？」

「俺は構わないぞ」

「おじやましますね明久君」

「ウチも行くわ」

第43問 僕と悲鳴と一つの可能性（後書き）

さて、前書きにもありますが今章は原作と大きく離れます。

具体的には。。。は38・39問以降はないかと…

そこでみなさんに質問なのですが、このままつっぱしていいのか、はたまた数話前から書き直したほうがいいのか聞きたいです。

一つ注意事項（？）を言っておきますと、どちらにせよ前章までのノリ通り拙作は明瑞を貫き通します。

では、よろしかったらご意見などいただけるとうれしいです！

第44問 僕と人質と妖怪大戦！？（前書き）

きるぐまー1号さん、SHINさん、感想ありがとうございました！
アニメ二期の方も今週でラストですね。

内容は6巻ですから今期の最後も明瑞展開が見れそうで嬉しいです。

第44問 僕と人質と妖怪大戦！？

明久SIDE

「みんな入ってよ」

話し合いをするため、姫路さん、雄二、島田さんを僕の部屋に入れる。

「おじゃましますね」

ペコリと頭を下げながら入室する姫路さん。相変わらず礼儀正しいなあ…

「明久の部屋らしくボロっちなあ…」

まあ、雄二に礼儀正しさとか求めたら負けだと思っ。というか、内装ってどこも同じはずだよね！？
お願いだからそうであってほしい…

「でも吉井の部屋にしては片付いてるじゃない」

島田さん、あんたは僕のことを余程不摂生な人だと思ってるでしょ…
否定はしないけど、正直傷つくからあまり言わないでほしい。

ガラガラ

って、姫路さんなに勝手に奥の部屋に進んでるのさ！？

「……………」

「……………」

お互いに視線を合わせたまま固まってしまっている姫路さんと淡雪。気まずい！これは相当気まずいよ！！

「あもう、すいませんがどちら様ですか？」

まあ、招待された部屋に知らない人がいたら普通疑問に思うよね…

「一夢淡雪と申します。」

今は吉井様に遣えておりますのでどうぞよろしくお願いします」

「あわゆきいいい！！」

その勘違いを生み出すような自己紹介はやめてくれない！？」

せっかく最近姫路さんと距離が縮まってきたと思うのに逆戻りしかねないよ！

って、言わんこっちゃない！

姫路さんは明らかに動揺してるし、島田さんは僕に向かって臨戦体勢に入ってるって！

「ほう、これが明久の言ってたやつか」

雄二がこの状況を見ながら面白そうに言う。

「坂本君はなにか知ってるんですか？」

おっ、姫路さんがくいついてくれた。これで誤解は解けそうだ。

「ああ、こいつは座敷童子らしくてな明久を災難から守ってくれるんだと」

「と言いましても、この部屋にいてくださなければお守りできませんが」

「けど、明久君を守ってくれてるんですよ？」

「なら、いいやつなのかしら？」

どうやら二人の誤解もこれで解けそうだ…

「善か悪かの判断は皆様に任せますが、私は吉井様に危害を加える気はありません。ところで皆様は吉井様とどういった関係で？」

そういえば淡雪には僕の交遊関係を全く説明していなかったなあ…

「俺は坂本雄二。」

明久とは一年からのクラスメイトで今は代表をやらしてもらってる」

「坂本様ですね」

どうやら人に対してはほとんど様をつかうらしい…

「ところで少々伺いたいのですがなぜメリーと一緒にいるのですか？」

「「バレた!?!」」

雄二とメリーさんの声が見事にハモる。

「久しぶりですねメリー」

[illegible]

メリーさんはうわごとのごとく謝罪しながら頭を抱え、震えている。

「おいメリーどうした!？」

「もうしませんもうしませんもうしませんもうしません。」

許してください許してください許してください許してください許してください」

雄二の問いかけにも応えずに震え続けるメリーさん……

「淡雪、いつたいなにしたのさ……」

「大したことではありませんが以前、私の主にちよつかいをだしたので少々絞めただけです」

何事もないように淡雪は笑顔で言う。

しかし、その笑顔の下にある本性が今、確実に垣間見えていた……

たぶん、淡雪はとんでもない猫かぶりなんだろう……

怒らせないようにしないと……

「えっと、まだお二方の自己紹介が済んでいませんのでお願いできますか？」

「じゃあウチからいくわ。」

ウチは島田美波。吉井とは坂本と同じで一年からのクラスメイトよ。後は木下秀吉と土屋康太って人が一年からのクラスメイトだわ」

これからのことを考えて事前に秀吉とムツリーニのことを説明してくれたようだ。以外に島田さんも気が利くところもあるんだなあ…

「島田様に土屋様、それに豊臣様ですね」

「豊臣じゃなくて木下だからね！」

「しかし秀吉といったら豊臣様なのでは？」

「そうだ」

淡雪は妖怪だからすごい昔のことだって知ってるし、生きてきてるんだった……

「まあ、とにかく豊臣じゃなくて木下なんだよ」

「なるほど、豊臣様は旧姓を名乗るようにしたのですか」

なんか一人合点いったようだけど、なにを言ってるのかさっぱりわからない…

「えっと、最後に私ですね」

「はい、自己紹介をお願いします」

淡雪に促されて姫路さんが自己紹介を始めようとした瞬間――

バンッ！

「……その役目、我らが引き受けよう！」「……」

勢いよく扉を開けて須川たちが僕の部屋になだれ込んでくる。

「彼女は姫路瑞希！

品行方正、才色兼備の完璧なお嬢様だが、不運な事件からFクラスに所属している」

マイクを持ちながら説明を始めるのは例の司会者だ。

君はクラスでやることとかはなにもないのか……

「そして淡雪さんの主人である吉井の小学生からの幼馴染みであり許嫁だああ！！」

はいきた。いつものパターンだよ……

「ふむふむ、吉井様の許嫁ですか。よろしく願いますきやう妃様」

「淡雪ちゃん勘違いですよ！」

「そうだよ淡雪、僕と姫路さんはそんな関係じゃないって！」

さすがに真に受けられると色々と困るから淡雪に制止をいれる。

「しかも二人の家は近所だというんだから最初からフラグが立って

たんですよ！

更に二年になった際に同じクラスになるやいなや互いを支えあい、数々の困難を乗り越えてきたのだ！

そして我らはそんな二人を応援する集団。名を異端審問会と言う！今や学園内の加入率は二年で八割、一年と三年にも四割と勢力を拡大中だ！」

ああ！

なんでこんな姫路さんに嫌われるような説明しかできないんだ！？それにちやっかり自分たちの自己紹介まですましちやってるよ！しかも加入率ってそんなに多かったの！？

やけに色々と言っけなわけだよ……

たぶん、こんなに納得と驚愕が入り交じった自己紹介は生まれて始めてだ…

「以上のような事実がありますが本当に許嫁ではないのですか？」

「い、いえ、本当に違いますよ…（でも本当にそうなら…）」

なにかを小声で言う姫路さんを見て淡雪がしばらく考えこむように見つめる。

「やはりあなたのことは妃様と呼ばせていただきます」

「なんで！？？」

「吉井様はそんなこともわからないのですか？」

淡雪はかわいそうな人を見るような哀れみの表情で僕の方を見る。

「いやいや、淡雪こそ一連の会話聞いてた!？」

「はあ…」

吉井様は色々と鈍いんですね。もちろん妃様もですけど…」

「「????」」

淡雪の言っている意味が解らず、僕と姫路さんは頭上にクエスチョンマークを浮かべるだけだ。

「すまないな淡雪。

こいつらのこれは今に始まったことじゃないから話を進めてくれ」

雄二が呆れたように言うが、一応は助けてくれたのかな？

って、あれ？

いつの間にか須川たちがいなくなってる。

からかい終わったから満足したのかな？

「わかりました。かい摘まんで説明しますとこの旅館には多くの妖怪がいます」

「「きゃあああああああ!！」」

いきなり姫路さんと島田さんが叫び声をあげる。

「ど、どうしたの二人とも!？」

「私、オバケとか妖怪とかそういったのはダメなんです…」

まあ、姫路さんらしいこたえだよね…

確かに姫路さんはこういったのは苦手そうなイメージあるし事実、如月ハイランドの時のお化け屋敷では終始怖がってた記憶がある。

「ウチは平気だけどなんとなくよ…」

こっちは見栄を張ってるね。

なんというかとても分かりやすい見栄のはりかただと思うけど…

「妃様に島田様、私やメリーも一応妖怪の類なのですが…？」

淡雪の疑問ももつともだ。

この二人（？）だって妖怪なのになぜ姫路さんも島田さんも平気なのだろうか？

「淡雪ちゃんやメリーちゃんは見た目が可愛らしいからいいんです！」

「そうよ、他のやつらみたいに化け物じゃないからいいのよ！」

なんだろう、解るような解らないような見解だ…

「いまいちふに落ちませんが話を進めるとしましょう。」

今のところは旅館にいます妖怪は潜んでいますから、こちらから仕掛けない限り危害を加えてはきません。しかし——」

「誰かがなにかをされた可能性が高い。それも連れ去られた可能性がだ」

淡雪の言葉を引き継ぐように雄二が続ける。

フォンの事情なしに答えを出せるのはさすが雄二といったところだろう。

「ってことは私たちもオバケに連れてかれちゃうんですか……」

姫路さんが身を縮こませるように震わせ淡雪にたずねる。
こういった一つ一つの動作が相変わらずかわいいなあ…

「おそらくそれはないでしょう。」

むこうもできれば人に存在を気付かれない筈ですから」

「じゃあ、なんで今回は目立つ誘拐なんて手をとったんだ？」

「それは私にもわかりません。」

ですが、妖怪を見かけたとしても刺激をしませんように」

雄二の的確な質問にさしての淡雪もお手上げのようだ。

やはり、妖怪同士だとしてもわからないことがあるのだろう。

「できれば妖怪には会いたくないです…」

「うちもよ…」

瑞希、もしものことを考えてこれからは極力一緒に行動しましょ」

「そうですね。美波ちゃんが一緒なら心強いです」

淡雪の話では二人以上いる場合は狙われならしいから、これで二人は安全だろう。

「雄二に近づいてくる不埒な輩がいたら私が成敗してあげるから！」

「好きにしてくれ…」

手持ちの小さな刃物を振り回して意気込むメリーさんとは対照的に雄二は呆れからか、はたまた疲れからか冷めていた。

「では、今宵はこれにて」

淡雪は丁寧にお辞儀をするとすうと消えていった。

「消えちゃいました…」

「やっぱり妖怪なんだな」

「妖怪というより魔王…」

メリーさんはボソツと呟いたあと、しきりに辺りを見回している。そんなに怖いなら最初から言わなければいいのに…

「瑞希、ウチらも帰りましょ」

「そうですね。明久君、おじゃましました」

入る時と同様に姫路さんはペコリと頭を下げる。

「うん。おやすみ姫路さん、島田さん」

僕は手を振って二人を見送る。

「じゃあ、俺も帰るな」

「ああ…」

遂に雄二と初夜なのね。ドキドキするわ」

「黙れ。というか、変なことばっか考えてるな」

「まあ、二人ともまたね」

雄二の言っていた『面倒なやつ』の意味を再確認しながら雄二に手を振る。

さて、僕もそろそろ寝るかな。

（翌日（強化合宿3日目））

「吉井様、朝ですよ」

「うーん……おはよ…淡雪…」

淡雪に起こされ、まだ眠気が残る体をおこす。

『ピンポンパンポーン

緊急連絡だ。繰り返す緊急連絡だ』

ボーとする頭に館内に取り付けられた放送機材から鉄人の声が響く。朝から鉄人の声を聞かされるなんて最悪だ…

これが姫路さんのモーニングコールだったらどれだけ幸せなことだ

ろうか。

『昨日、とある神主がここにやってきて話があるらしい』

神主って境内院さんのことかな？

こんな朝早くからなんて、そんなに重要な話なんだろうか？

『こほんっ、文月学園の生徒さんにお知らせします』

いつもの間延びした声じゃないが、これは間違いなく境内院さんの声だ。

まさか、なにか霊的な関係なんだろうか？

『この旅館の廊下は完璧に妖怪に占領されました。なので事が片付くまで廊下に出ないでくださいね』

えっ……？

妖怪に占領されたって？

そんなバカな。

疑問に思い、扉を開けるとちょうど通りかかったナマハゲと目があった。

しかも、その後ろには一反木綿やら貧乏神らしいのまでと数多の妖怪がいた。

バタンッ！

勢いよく扉を閉めると淡雪の所に駆け寄る。

「淡雪！

外が大変なことになってるよ！」

「放送を聞いていましたのでそれくらいはわかっています。それよりもなぜ扉を開けたのですか？」

「いや、なにかの冗談だと思ってさ…」

「というか、普通はあんなの冗談だと思うのが普通の気が…」

『なお、妖怪たちは部屋の中には入ってきませんのでご安心ください』

「一応は姫路さんたちも安全だね」

放送に安堵しながら淡雪に言うが、淡雪は難しい顔をしていた。

「もしかしたら妃様たちはピンチかもしれません」

「えっ？」

だって、妖怪は部屋に入ってこないって…」

「今は、の話です。」

おそらく妖怪たちの動きが活発になったのは巫女様が館内に入ったためでしょう。人質をつくって巫女様に対抗する筈ですから…」

ということとは姫路さんたちが！？」

「淡雪、今すぐ姫路さんたちを僕の部屋に連れてこよう！」

そうすれば淡雪の守護で安全なはずなのだから。後は境内院さんがなんとかしてくれるだろう…

「それは無理な話です。」

あの妖怪の大群の中をどういくのですか？」

「だけどここのままじゃ姫路さんが!！」

きつと今ごろ放送を聞いて怯えているはずなのに!

「……………吉井様は本当に妃様のことが大切なので
すね。」

わかりました。今から私の守護を吉井様の周りに展開できるように
します。

しかし、そのためにはこの部屋にある結界を解かなければなりません。
それでもよろしいですか？」

「当然だよ」

僕の頑張りで姫路さんが少しでも救われるというなら――

「結界が解けたとなれば妖怪たちは積極的に入り込んできますが、
三十分ほど耐えてください」

「わかったよ。サモン!」

役立つかわからないが一応明希を召喚しておく。

「説明なんかいらねえよ。姫路さんのためってならもちろん協力す
るぜ」

「よろしくね」

木刀を構える明希も俄然やる気のようにだ。

「では、結界を解きます！」

「姫路さんのために絶対負けない（ねえ）！！！」

第44問 僕と人質と妖怪大戦！？（後書き）

さて、次回から本題（？）である妖怪たちとの戦いが始まります。
果たして明久たちは瑞希たちを救えるのか！？
次回もよろしくお願いします。

第45問 僕と明希と隠し通路（前書き）

黒炉さん感想ありがとうございます！

第45問 僕と明希と隠し通路

明久SIDE

「おらよつと！」

明希が木刀で部屋に入ってきた一反木綿を攻撃する。

Fクラス吉井明久 日本史298点

一反木綿 UNKNOWN 126点

「はあ？」

なんでこいつらに点数なんてあるんだよ…」

「さあ？」

でも点数があるってことは召喚獣で倒せるんだから好都合じゃない」

召喚システムは科学とオカルトでできているから、そのオカルトの部分がなんらかのかたちで作用したのかもしれない。

しかし、今はそんなことを気にしてる場合ではない。

結界の名残から一斉に妖怪が部屋になだれ込んでくるということはないが、休みがない連戦状態だということにはかわりないのだから。

「^{マスター}主人も少しは戦ってくれ！」

一反木綿の攻撃をいなしながら明希が言う。

「生身の人間がどうやって妖怪相手に立ち回れって言うんだよ！」

明希はオカルト作用のおかげでダメージを与えられるが、生身の人間である僕は妖怪はもちろん、物理干渉ができる召喚獣以外にダメージを与えられるわけがないのだ。

「ちっ、しょうがねえな。ダブル！」

明希の掲げた右腕に付いている例の腕輪が輝きだす。
その光は明希をも包み、明希の姿を完全に隠していた。

「主人、副獣の操作は任せませ」

そう言うとも明希は再度一反木綿の方へ走っていった。
ところで副獣とはなんのことだろうか？
そう思い、明希の元いた所に目を移すと明希がいた……

「明希、ドッペルゲンガーが入り込んでるんだけど…」

よりによって明希に変身するとは…

今さっきまで明希と話してたんだからバレるに決まってるじゃないか。

まったく、バカなドッペルゲンガーもいたもんだね。

「バカは主人だ！

そいつは副獣って言って、全てが主人の操作に従って動く所謂普通いわゆるの召喚獣なんだよ！」

「なるほど！」

ババアはこちらに迷惑をかけるだけじゃなくて便利な機能までつけてくれたようだ。今回は純粹に感謝しておこう。

「でも手数二倍って反則級だよね…」

単純に考えても二倍の点数の強さ。

実際は連携などのことを考えれば三倍、四倍の強さを発揮するだろう。

「そこら辺は安心しろ。点数が半分だからな」

「えっ…？」

Fクラス吉井明久 日本史149点

召喚獣 明希 日本史149点

一反木綿 UNKNOWN 126点

「本当だ……」

まあ、半分になったとしても前述の通り明希一人の時より格段に強さは上がってるだろう。

「それは主人がちゃんと操作できればの話だけだな」

「観察処分者をなめないでよね」

伊達に教師たちの雑用をさせられてきたわけじゃない。

召喚獣の操作なら誰にも劣らない自信がある。

だけど、なんでさっきから明希に考えてることが筒抜けなんだろうか？

「主人いったぞ！」

明希の声で召喚獣に意識を集中させる。

一反木綿は明希には敵わないとみたのか、僕の召喚獣に巻き付こうとしている。

「僕もなめられたもんだね」

召喚獣を中心にとぐろを巻くように巻き付けようとしてくる一反木

綿に木刀を一突きする。

一反木綿と言えども所詮は布の様なもので、突いた場所に隙間ができる。

召喚獣をそこから飛び出さすと反転して一太刀くれてやる。

「明希いまだ！」

相手が体勢を崩したのを確認すると明希に合図をだす。

「おう！」

明希は大きく跳躍すると一反木綿の真上に位置どった。

「「「くらいやがれえええ！！」」」

僕は下から切り上げるように、明希は上から両手で掴んだ木刀を突きだしながら急降下する。

ザシュツ！

一反木綿は明希と僕の召喚獣に切り裂かれ地に伏っしる。

一反木綿 UNKNOWN 討死

妖怪に討死もなにもあるんだろうか…？

「まずまずじゃねえか主人」

「明希の方こそ」

互いに励ましあい、次の相手に備える。

「わりい子はいねえかあああ!?!」

「ナマハゲきたあああ!?!」

明希と珍しくハモったのには訳があり、以前明希と一緒にやったゲームにナマハゲにそっくりな敵キャラがいて、そいつにボコボコにされたのだ……

「明希、ガードも後退も許されないよ……」

「もちろんアイテムなんか使ったら即死だな……」

二人して恐怖に震える中、ナマハゲの点数が表示される。

Fクラス吉井明久 日本史149点

召喚獣 明希 日本史149点

ナマハゲ UNKNOWN 255点

教科が日本史に設定されてて本当によかったと思う。

世界史でもいいのだが、その他の教科ではよくて150点前後だ。特に英語は100点前後を未だにさまよっているため、英語になった瞬間に即死する可能性だってあるだろう。

「わりい子にはお仕置きだあああ!」

手に持っているドスを振り上げ、ナマハゲが僕の召喚獣と明希の方

へ襲いかかってくる。

「んな大振り当たるかよ！」

明希はサイドステップでナマハゲの右方向へとよける。

「楽勝だね」

僕も召喚獣をスライディングさせ、ナマハゲの足元をくぐらせる。

「今度はこっちからいかせてもらっぜ！」

そう言うと明希は相手を攪乱するように左右に移動しながら迫っていく。

木刀を短く持っていることから、この一撃で決める気はないのだろう。

あくまで連撃の一手といったところとみるのが無難だろうか。

「ちょこまかとうつとうしいぞ！」

ナマハゲが片手に持っている木製のオケの様なものを明希に投げつける。

「はんっ、こんな攻撃——！！？」

明希は体を90°回転させることでオケを避けるが、それに気をとられてたせいでナマハゲの接近に気づいていなかった。

「お仕置きだああ——！！」

「うわあああ!!」

「明希!?!」

カバーに入るために召喚獣を走らせるがもう遅い。

明希はナマハゲが切り払ったドスの衝撃を受けて飛んでいってしまった。

召喚獣 明希 日本史103点

「これくらい……どうってことはない……」

血がにじむ右足を木刀で支え、明希が立ち上がる。

「っ……!」

フィードバックで僕の右足にも痛みがはしるが明希の痛みはこんなもんじゃないはずだ。そんな中、明希が頑張っているのに僕がやらないでいいわけがない。

「明希は下がって。ここは僕に任せてよ」

「主人、バカなこと言うのはよせよ。相手は100点以上も差があるんだぞ」

「そうだね。だけど、100点以上の差なら以前にも経験したから大丈夫だよ」

試召戦争の時に根本君と戦った時のことを思い出す。
そつえば、あの時は姫路さんに『いつもの僕じゃない』って怖が

られちゃったんだった…

「そついえば前にんなこんもあつたな」

どうやら明希の記憶にはあるらしい。たしか、自我が生まれたのは根本君と戦う直前だと言っていたから最初の記憶ということになるだろう。

「ってことでここは任せさせてもらうよ。

僕だって姫路さんたちのために頑張りたいしね」

「わりいな。ここは主人に任せるわ」

明希も了承してくれたようで、その場に座り込んで休んでくれた。

「待たせたね」

ナマハゲの方を睨みながら言う。

「人の話を邪魔するのはわりい子がすることだからな」

なんか妖怪って結構律儀なやつが多いなあ……

って、オケを投げてフェイントをくらわすのは悪いことじゃないのかな…？

「じゃあ、いくよー！」

とっさの防御にも対応できるように木刀を構えて召喚獣は走り出す。

ズテンツ！

「あつ……」

召喚獣がさつきナマハゲがドスで空けた穴に引っ掛かって転んだ……でもナマハゲならこれはみのがし――

「いまだあああ……！」

「不慮の事故にあつたやつを攻撃するのは悪いことじゃないのかあああ……！」

「勝負に情けは無用だあああ……！」

めちやくちゃだ！

予想以上にめちやくちゃなやつだ！

つて、そんなこと考えてる場合じゃない！

なんとかしてよけないと討死になっちゃうつて！

必死に召喚獣を動かそうとするが穴にピッタリはまってしまつていて抜けだせそうにない。まさにジャストフィットというやつだろう……

とにかく防御をしようと木刀を横に持ちガードしようとするが、いつまでもナマハゲがドスを振り下ろしてこない。それどころかさつきから固まったままだ。

「まったく手間かけさせんなよ」

聞き慣れた声と共に雄二がナマハゲの後ろから現れる。

「雄二なんでここにいるのさ……！」

「助けてやったのにその言葉とは大層な身分だな」

「えっ!？」

ナマハゲ UNKNOWN討死

そう表示されるとナマハゲは消えていき、ナマハゲのいた場所には雄二の召喚獣がいた。

「あ、ありがと…」

でも、どうして僕の部屋に？」

「あそこから入ってきたんだ」

雄二の指さす方向に目を向けると、そこには開いたタンスがあった。

「まさか、雄二の部屋とあのタンスは繋がってるの……」

「ああ、どういうわけだか俺の部屋のタンスと繋がってる」

とんでもない欠陥住宅だが、廊下を自由に移動できない今はむしろ好都合ではないだろうか？

「その顔はお前も気づいたようだな」

「うん。これをうまく利用できれば姫路さんたちを助けられるかもしれない」

要するには他に隠し通路があれば、それを転々としていき姫路さん

の部屋に辿り着く寸法だ。

「やっぱりお前は姫路のために動くんだな」

満足したように雄二が言う。

「うん。僕で姫路さんの力になれるならね」

「明久らしいな。ただ、この作戦には問題点がある。」

「わかってる。僕か雄二の部屋から続く隠し通路の先に姫路さんの部屋があるとは限らないってことだよな」

その場合は――

「廊下に出なきゃいけないなるな」

「そこは心配いりません。
たった今、結界が完成いたしましたから廊下に出ても大丈夫です。
複製ならすぐに作れますから坂本様の分もただちにお作りしますから」

淡雪の言う通り、淡雪の結界があれば廊下に出ても安心だろう。

「そうか、悪いな」

「ちょっと淡雪、私の雄二を恩を売ろうたってそうはいかないんだからね」

雄二の肩に乗るメリーさんが淡雪を牽制する。

「メリー、あなたも妖怪の端くれなら主人を守りなさい」

「ちょっと待て！

俺がメリーのだってのはスルーか！？」

「坂本様には吉井様にとっての妃様のよう方がいるのですか？」

見事に霧島さん一択。

「いつ、いるわけないだろ！」

「わかりやすいですね。

ということですから、坂本様のことは諦めなさいメリー」

「翔子とは雄二の魅力を語り合う仲だから大丈夫よ」

「俺はそんな事実知らないぞ！？」

どうやら雄二の知らないところで霧島さんと結託していたようだ。
それにしても、よくあの霧島さんが雄二の側にいることを許したな
あ…

「そんなこと話してる間に坂本様の分もできましたよ。

ただし、極度に攻撃を受けますと結界が破れますので極力廊下を通
らないでください」

「わかったよ」

そう言った瞬間、僕と雄二を包み込むように薄い透明の幕のような

ものが張られる。

腕を伸ばしてみると、それにつられて幕も変形するのだから中々の高性能だ。

「では、通路探しといきましょう」

「その必要はないぜ」

声のした方を向くと明希が畳をひっくり返していた。

「これで借りは無しにしようぜ主人」

畳の下にある空洞を指さして明希が自慢気に言う。

あの空洞は明らかに人工的に作られたものだから隠し通路とみて間違いないだろう。

「僕たちの中に貸しだの借だのなんてないよ。だけどありがとう、明希」

「まっ、まあ、これくらい普通だって…」

少し頬を赤らめながら明希が言う。相変わらず素直じゃないなあ…

「じゃあ、行くとするか」

「」「」「うん（おう）！！」「」「」

雄二の合図で僕たちは床下へと入っていった。

第45問 僕と明希と隠し通路（後書き）

『僕（私）と月明かりと恋い煩い』の制作に移りますのでしばらく更新が停滞するかもしれません。

なるべく早く仕上げるつもりですが、ご理解のほどよろしくお願いします。

第46問 僕と一般人と立ちはだかる壁（前書き）

桃色さん、きるぐまー1号さん、感想ありがとうございます！

PV300・000・ユニーク30・000を突破していました。

ご愛読ありがとうございます！

第46問 僕と一般人と立ちはだかる壁

明久SIDE

「淡雪、そういえばフォンはどうしたの？」

畳の下にあった隠し通路を通りながら淡雪にたずねる。

この通路は立って歩くだけの高さがなかったため、手について進まなければならぬ状況なのが辛い…

「フォンは一度山に帰って、仲間と打ち合わせをしようと言っていました」

やっぱりフォンみたいのが何匹もいるのか…

いくら悪いやつじゃないってわかっていても、あまり好ましい絵面じゃない…

「明久、フォンって誰だ？」

「フォンは山の神の遣いらしいんだけど、カカシの頭が赤い布に綿をつめたような不気味なやつなんだ。喜作んだけど本当に不気味だよ…」

たぶん見たことのある人にしかあの恐さは解らないだろうけど、雄二に説明をする。というか、この地下通路って意外に長いなあ…
いったいどこに繋がってるんだろうか？

「明久の頭でも恐怖を感じられたなら余程不気味なやつなんだろう

な」

「そうそうって、僕を今バカにしたよね!？」

とつさに振り向くと、あわゆく頭を天井にぶつけそうになり頭を下げる。

「違うぞ。

明久の行動力が有り余る思考回路でも尻込みすることがあるんだと思っ
てな」

「なんだ、褒められてたのか。それならいいよ。行こうか」

もう一度向き直り、再び奥に進んでいく。

「（やっぱりこいつはバカだな…）」

↓数分後↓

「二人とも止まって」

僕の後ろに続く淡雪と雄二に制止をかけながら、頭上にあるマンホール
の出口のようなものを指さす。

ちなみに明希は足の治療のために一旦、召喚獣の世界に戻っており、
メリーさんは相も変わらず雄二の肩に乗っている。

「場所的には結構端まで来ましたが、いったいどなたの部屋でしょ

うか？」

「翔子の部屋とかは勘弁してくれよ……」

たしかにメリーさん＋霧島さんは雄二にとって拷問に等しいだろう。

「まあ、とにかく開けるよ」

「「ああ（はい）」」

できれば知ってる人がいますようにと願いながら出口の取手を掴みながら上に押し上げる。

ガンガン！

「あれ？」

一瞬、開きかけたのだがまるで上から押さえつけられているように重みがかかって開かなくなってしまった。

「雄二、手伝って」

「つたく、やわなやつだな」

愚痴りながら雄二も一緒に出口の取手を押す。

「んんん！？

なんでこんなに重いんだよ！」

「この上に鋼鉄の塊とかあったりして」

「旅館にんなもんあるかああ!!」

ギギイ……

雄二が一際力を入れると、やっと出口がおもむろに開いた。

「今だ!」

僕たちはなだれ込むように出口に向かう。

「ふう…」

なんとかでれたあ…」

「どうやら俺の写真がないし、翔子の部屋じゃないみたいだな…」

たしかに霧島さんならそれくらいは平気でするだろう。

「おまえらあ…」

かわいらしさの欠片もない凶太い声が押し上げた畳の下から聞こえてきた。

まさか、もうここは妖怪に占領されてしまったんだろうか…

畳が徐々に持ち上がったいく。

畳の陰になってどんなやつが持ち上げてるのかはわからない。

畳がちょうど人の背丈ほどまで持ち上がった時、突如それはこちらに向かって投げられた。

「うわぁっ!?!」

とつさに回避するが危ないところだった…

速度からして当たったら、気絶だけではすまされないだろう…

こんなことができるのは妖怪の中でも相当な力持ちか鉄人くら――

―あつ！

「鉄人！」

畳を投げた張本人である鉄人を指さしながら叫ぶ。

「西村先生だ」

いつもの決まり文句を鉄人が言う。いちいち返答しなくてもいいと思う。

「鉄人、どうして俺たちの邪魔をした？」

「単純に床下から妖怪が侵入してきたかと思ったからだ」

鉄人が押さえつけてたから中々開かなかったのか…

というか、少し畳が浮かび上がっただけで反応できる神経は相変わらず人間離れしていると思う……

「だけど畳を投げる必要はないよな？」

言われてみれば畳を投げる際、鉄人からは僕たちの顔が見えていたのだから攻撃される謂れはないはずだ。

「床下で遊ぶという悪さをした生徒を指導するのは教師の役目だ」

「それは誤解ですよ！

僕たちは廊下が妖怪のせいで通れないから、隠し通路を使って姫路さんたちを助けようとしただけです！」

「そうだ！」

俺は姫路からの明久株UPを手伝わされてるだけだ！」

雄二！

君はいつたいなに根も葉もないことを口走ってるの！？

「そうですよ！」

吉井様と妃様の邪魔をするというならただじゃおきません！」

淡雪！

君は僕を守護するどころか貶めようとしてない！？

「すまんが、どちら様だ？」

淡雪を見ながら鉄人が至極まっとうな質問をする。

そりゃ、学園管理の旅館に部外者がいたら疑問に思っよね…

「私は——」

はつきり言っつて、淡雪の自己紹介にも飽きてたので割愛させてほしい。

「納得していただけましたか鉄人様？」

「俺は西村宗一なんだがな…」

まあ、そちらの事情には納得した」

どうやら一件落着のようだ。

「事情が理解できたなら当然ついてきてくれるよな？」

雄二がなぜだか挑発気味に言う。なにを企んでいるのだろうか？
なにはともあれ、鉄人がついてきてくれれば妖怪など恐れるに足らずだろう。

たぶん、召喚獣なしでも廊下を制圧できる……

「いや、それはだな……」

鉄人にしては珍しく齒切れが悪い。
なにか思うところでもあるのだろうか？

「坂本様、すいませんが鉄人様にはここにいてもらわなければなりません。」

私やメリーが居着いたお二人の部屋ならいず知らず、一般人しかおりません部屋を空にすれば妖怪の拠点を部屋を増やすことになりかねませんから」

「「なら安心だよ（な）」」

「お前ら、それはどういう意味だかじっくり聞かせてもらおうか？」
どういう意味もなにも鉄人は一般人じゃないってだけの話に決まっている。

「そんな話はおいといてだ、結局は一般人じゃいてもいなくても変わらないんじゃないのか？」

たしかに雄二の言う通りだ。鉄人ならまだしも、一般人にどうしろと言うのだ…

「いえ、人が部屋の中にいることによって妖怪たちは部屋に入りにくいのです。

もともと、人目につかないように行動している者がほとんどですから、結構人がいるところにはめったなことがない限り現れません」

恥ずかしがり屋なら人拐いなどしないでほしいものだ…

「じゃあなんで、僕と雄二の部屋は空けてもよかったのさ？」

「妖怪は基本的に相手の領地に入ることとはしませんから安心というわけです」

領地とか犬かなにかか……

「まあ、妖怪にも色々あるのです」

「それはわからなくないこともないけど…」

正直言つてめんどくさいことこの上ないやつらだと思う。

「明久、長居は無用だ。行くぞ」

「うん」

「急ぐのは構いませんが、一度廊下に出てみませんか？
もしかしたら妃様の部屋がそばにあるかもしれませんから」

「そうだね」

淡雪の言う通り、姫路さんの部屋が近くにあるなら多少のリスクを背負ってでも廊下を突っ切った方が早いだろう。

「いくよ」

扉に手をかけ、三人に振り返る。

「おう！」

「いいわよ！」

「はい！」

ガチャ

四人で一斉に廊下に出る。

「……」

思わずみんな揃って絶句してしまった。

というか、廊下の筈なのに部屋が前方、左右が壁に塞がられていたら驚くのが普通だろう…

「塗り壁ですね」

淡雪が右方向にある壁に手をつけて言う。

「私の邪魔するなんていい度胸じゃない！」

メリーさんが小さなナイフを取り出して構える。

「メリーやめときなさい。」

あなたのナマクラでは塗り壁に傷一つ付けられませんよ」

「うつ…」

メリーさんは渋々といった感じに取り出した刃物をしまう。

「塗り壁ってどいてくれないの？」

「道を塞ぐのが目的なので無理かと思われます。それにしても弱りましたね…」

「なにか都合でも悪いのか？」

雄二が思案顔の淡雪にたずねる。

いや、普通に姫路さんの所に直行できないことが都合悪いんだけど……

「おそらく塗り壁はこれ一匹ではないはずですから、妃様の所にたどり着ける道が極端に限られてくるのです」

「最悪、姫路の部屋とその向かいの部屋からしか行けないなんて事もありえるってことか…」

「それってまずくない…？」

もし隠し通路がそのどちらにも繋がっていないとしたら姫路さんは

……

「これは一度、作戦を練り直した方がいいかもしれませんね」

たしかに淡雪の言う通り、無策に動き回るよりもそちらの方がいいだろう。

「すまんが、俺は一度部屋に戻って飯を食いたいんだが？」

「たしかに朝食も昼食も食べてないから、一度僕の部屋に戻ろうか。山菜でよかったらわけてあげるし」

淡雪の言う通りに山菜とりに行つててよかったと思う。

妖怪騒動がいつまで続くかわからないが山菜がない場合、下手したら飢え死にしかねないと思う…

「それは助かるな。じゃつ、一回明久の部屋に戻るとするか。つうわけだ、じゃあな鉄人」

「バイバイ鉄人」

「鉄人様、ご縁ありましたらまたお会いしましょう」

「結局呼び名は変わらないのか…」

第47問 私と美波ちゃんと想いの資格（前書き）

最近、更新が滞っていてすみません。

就活が忙しく他作者様の作品も見れていない状況です…

今回は少し人間くささのある話ですので人の汚い部分が嫌いな方はとばしてもらって構いません

第47問 私と美波ちゃんと想いの資格

瑞希SIDE

「瑞希、絶対に廊下に出ようなんて言わないでよ……」

「わっ、わかっています…」

私だって好き好んで妖怪の中に突っ込みたくなんてありませんし…」

朝のあの放送から早三時間。

私たちは廊下に出るのも恐くて部屋の中に籠城していました。

「そ、そういえば瑞希ちゃんの夫はどうしたの？」

「ふえ！？

ち、違うんですよ。私と明久君はそんな関係じゃ……」

相部屋になっているBクラスの律子ちゃんの発言にドキドキしながらも返答します。ちなみに捕捉すると、彼女は召喚大会の時に一回戦で戦った方です。

「律子は吉井君なんて一言も言っていないわよ。

やっぱり瑞希ちゃんだって意識してるんじゃない」

「あう……」

律子ちゃんの相方の真由美ちゃんにダメ出しに返す言葉もありません。

たしかに意識してないといえば嘘になりますけど、明久君にとって私はただの友達……いえ、友達と思われてるかどうかわからず……

「いい加減に白状しちゃいなよ。本当はどこまでいったの？」

「いえ、本当になにもないですよ……」

あるわけないんです。私には気持ちを伝える勇気も明久君に想われる資格も……

「隠さなくたっていいじゃない。私と恭二なんて異端審問会だったというのにびくびくしながら会わなきゃいけないのよ。」

その点、姫路さんと吉井君は公認なんだから胸はってなってる」

こちらはBクラス代表の根本君の彼女の友香ちゃんです。

根本君には二学年始まって早々の試召戦争で酷いことをされましたが、最近は明久君たちと仲良く話しているところを見ます。

試験召喚大会の時に明久君が「まだ許した訳じゃない」って言うてましたが、今はそのわだかまりもないみたいで良かったです。

「なんだかFクラスの人たちが迷惑かけちゃったみたいですしません……」

「別に姫路さんのせいじゃないからいいのよ。」

それよりもさ、なんでもいいから吉井君とあったこと話してよ」

「だ、だからなにもないって言うてるじゃないですか！」

「いい加減しなさいよ。瑞希がなにもないって言うてるんだからやめなさいよ」

美波ちゃんの一言でみんなが静かになります。

だけど美波ちゃんの様子がどこか変です。なんというかイライラしてる様な……

美波ちゃんとは友達想いですから私が困ってるのに気づいて注意してくれた。

そして私を困らせた三人にイライラしている………違います。

美波ちゃんがイライラしているのには別の理由があるはずで

行きの電車の中でも考えたことですけど、もしかして――

「美波ちゃん、ちょっといいですか？」

「うん……」

「美波ちゃんと少しお話がありますから、少し待っていてくれますか？」

「いいわよ」

「待ってるね」

「こっちは気にしないでいいわよ」

私と美波ちゃんは立ち上がると寝室である隣の部屋に行きます。

「……………」

無言でふすまを閉じると美波ちゃんと向かい合います。

「今から言つことが間違いだったらすいません」

「……………」

美波ちゃんは無言のままです。

おそらくこれから私の話すことにも薄々気づいているのでしょう。

「美波ちゃんは……………いえ、美波ちゃんも明久君の事が好きなんですネ」

「瑞希もなのよね…」

これは肯定の意として受け取っていいはずですよ。
やっぱり美波ちゃんも明久君のことが好きだったんです。私と同じで…

「はい…」

美波ちゃんも明久君のことが好き…
ですけど私だって明久君を諦めたりはしません。

「わかってる。瑞希が吉井のことを諦めないって。
だけどウチだって一年越しの想いをそう簡単に諦められないわよ」

美波ちゃんも明久君への気持ちを諦める気はない。

それはいつか二人の内どちらかが泣かなければならない結果になる
ということ。

最悪の場合、どちらも受け入れられない可能性だって存在するんです…

ですけど――

「私だって諦めれるわけありません。

私は明久君のことが好きです。大好きなんです。

美波ちゃん是一年越しと言いましたが私はそれ以上に……ずっと前から明久君のことが好きだったんです！」

美波ちゃんには悪いかもしれませんが、私だってずっと明久君のことが好きなんです。

「瑞希の思いだって知ってるわよ！

ただどuchiの方が期間が短いとしても思いの大きさは変わらないはずよ！」

「変わりませんよ！

いくら私たちが明久君を想っても明久君がなにも感じてくれなければ、なにも変わるわけじゃないじゃないですか！」

「うっ……」

叫ぶように言って美波ちゃんを脅かしてしまった自分に若干自己嫌悪しながらも言い続けます。

ここで止めてしまったら美波ちゃんを突き放すのと同じなんです。

「ですから私と美波ちゃんは同じなんです。

重要なのは明久君への想いの強さとか長さとかじゃなくて明久君にどう想われているか。当然、私たちの思いだって大事ですけどね」

そう、誰かを想う気持ちに優劣があっていいわけではない。

さっきは感情的になってあんなこと言ってしまったが、誰かが他人の想いを否定する資格なんてないんです。

ただ、その想い人に相応しいかどうかは必要になってくる……

明久君は周りを明るく、元気付けてくれますし心配性なくらい他人想いです。

対して私は鈍いし、みんなの足は引つ張ってしまいますし、坂本君と翔子ちゃんに言われるまで自分の料理の酷さにも気づかなかつたでとても釣り合いません…

「それって、瑞希はウチのこと認めてくれるってこと…?」

「はい、明久君にとって私も美波ちゃんもまだ特別ではありませんから同じなんです。同じスタートラインにいるんですよ。だからと言って負ける気はありませんよ」

空元氣でもしておかなければ押し潰されてしまいそうな重圧感。自分で考えて答えですけど、改めて考えれば考えるほど悲しくなってきました…

「ウチだつて負けないんだから」

そう言う美波ちゃんの顔は久しぶりに見た晴れ晴れとした本当の笑顔でした。

一人で抱え込んでいた重荷がやっと下ろせたかのような晴れた笑顔。美波ちゃんが今までどれだけ悩んできたかの証拠。

「今まで美波ちゃんの気持ちに気づいてあげなくてごめんなさい」

たぶん、今まで何度も気づかない内に美波ちゃんを傷付けてきた。それがどれだけ美波ちゃんの心を傷付けてきたか…

「いいのよ。これはウチ個人の問題だつたんだから。それにずっと一人で抱え込んでいたわけでもないから安心して」

「誰かに相談したんですか？」

「うん、ちよとね。二回ほど相談にのってもらったの」

名前を直接出さないということは言いづらいことなんでしょうから深く追求するのは止めておきましょう。

「じゃあこれから友達として、そして恋の好敵手^{ライバル}として仲良くしてきましょうね」

「瑞希はウチなんかと仲良くしていいの？」

「なに言ってるんですか、いくら美波ちゃんが私のライバルだとしても美波ちゃんが私の大切な友達であることは変わらないですよ」

そんな簡単に友情は消えるものではありません。

友情だって誰かを想う気持ちなんですから…

「ありがとう瑞希……」

ウチの方こそ瑞希の友達として、そして好敵手としてよろしくね」

「はいっ！」

ここに一つ美波ちゃんと私の間に新たな関係が生まれました。ただ今までの関係が崩れることはない。そう、今はそう思っています……

第47問 私と美波ちゃんと想いの資格（後書き）

さて、疑問に思った方もいたかもしれませんが、拙作の瑞希は今まで美波の想いに気づいておらず今話でやっと気づくことになっております。

では、次回もよろしくお願いします

第48問 僕とみんなと第2ラウンド！（前書き）

うーん……

最近、三日に一回のペースでの更新になっています…
申し訳ありません

第48問 僕とみんなと第2ラウンド！

明久SIDE

「まずは灰汁あくを抜いてと……」

昨日、水をはったボールに入れておいたワラビを取り出すと大皿に移す。

その後、備え付けの冷蔵庫からマヨネーズに醤油、オカカを取り出してワラビとあえる。

「案外手慣れてるんだな」

「貧困生活の時はよく食べてからね」

姫路さんに言ったことと同じ内容を雄二にも言う。

姫路さん……今ごろどうしてるかな…

どうすれば姫路さんを助けられるんだろう…

昨日、僕の部屋に泊めてあげればよかったんだろうか…？

いいや、そんなこと言い出したら姫路さんに距離をとられてしまうだろう…

「明久……」

今は辛いかもしれないが我慢してくれ。

俺たちが焦ったら助けられるもんもできなくなっちまう。俺だって辛いんだ…」

「雄二……ごめん」

そうだ、雄二だって霧島さんが心配なのを我慢しているんだ。
僕と違って本当は相思相愛の雄二が我慢してるんだから僕だって我慢しなきゃ…

本当に姫路さんのことを想うなら今は我慢しなきゃいけないんだ。

「まっ、考えても仕方ないし食うとするか」

「そう…だね」

小皿に雄二と僕の分を移す。

ところで、なんでこの旅館は無駄に各部屋の日用品が充実してるんだろう…

「食事の時間ですか？」

さっきまで姿を消していたのに目ざとくできてきた。

案外食い意地がはってるよね…

「うん、淡雪も食べる？」

「はい、ご賞味させていただきます」

今日半日お世話になった淡雪にもワラビを盛り付け、手渡す。

「^{マスター}主人俺の分はなしかよ」

お次は召喚獣の世界から勝手にでてきた明希だ。

まったく、ババアも本当に人騒がせな機能をつけてくれたもんだよ…

「ちゃんと明希の分もあるよ。はい」

「サンキュー」

明希にあった小さな小皿を明希の目の前に置いてあげると明希はがつつくように食べ始めた。こういうところだけ見ると子供だよね。

「そういえば右足は大丈夫なの？」

「ああ、どうやら選択科目が変わったらしく完治したぞ」

そう言っ明希は傷一つない右足を見せてくる。
たしかに選択科目が変われば点数を消費していない限り、全快の状態と考えてもいいはずだ。

「よかったよ、明希がナマハゲにやられた時には心配したんだよ」

「けっ、俺はそう簡単にくたばるほどやわじゃねえよ」

相変わらずの憎まれ口は治らずじまいか…

「たしかにね。でも一人で頑張りすぎちゃいけないよ。

僕も雄二も淡雪もメリーさんだっているんだから、仲間を頼ろうよ」

「そ、そうだな…」

仲間…だし頼ってみるのもいいかもな…」

前言撤回。最近はずいぶん素直になってきてるようだ。

「にしてもワラビって結構うまいんだな」

「はい、これはこちら一帯の山を私の領地にしたいくらいですね」

「まっ、まずくはないな」

「雄二のくわえたお箸。はあはあはあ……」

普通なのが一人、異常なまでの食欲を見せてるのが一人、やっぱり素直じゃないのが一人、そして変態も一人……

なんで僕は強化合宿に来てるのにこんな力オスな状況にいるのだろうか……？

本来なら意中の人とちよつとむず痒くなるようなイベントを期待してもいいんじゃないんだろうか？

それとも僕はバカだからそんなイベントすら見逃してたとか……？

がらがら

「ふう……次はどこだ？」

突然壁がスライドしたかと思うと須川君たちが入ってきた……

「こんにちは須川君……」

「おお、ここは吉井の部屋か！」

須川君の方も隠し通路を使いながらいるらしく特に驚いてる節もない。

この様子だと他の人たちも隠し通路に気づいてるころだろうか？

ペラッ（掛軸がめくれる音）

サァー（天井が開く音）

ガラガラ！（んでもって、押し入れが開いた音）

「平賀君！？根本君！？久保君！？」

なんか色々と入ってきた…

いったい、僕の部屋はどれだけ隠し通路に繋がってるんだろう…

「吉井かお邪魔してすまないな」

「いや、気にしないでいいよ…」

この非常事態だというのに平賀君も随分と冷静だ。

伊達にクラス代表をやってるわけじゃないってところだろうか。

「すまない吉井、友香を見なかったか？」

「たしか小山さんなら姫路さんと同じ部屋にいるはずだけど」

根本君は本当に変わったよ。

今も彼女である小山さんのために隠し通路を練り歩いてきたのだろう。

その姿はBクラス戦の時や以前まで言われていた『卑怯な根本』ではなく、『優しい本来の根本君』だった。

「ということは僕に吉井君、根本君の目的は一緒ってことだね」

「ん？」

僕と根本君は目的地が同じだけど久保君は違うよね？」

久保君が岩下さんや菊入さんと付き合ってるなんて話を聞いたことはないし…

久保君はいつたいなんの目的はあるというのだろうか？

「それはだね、吉井君——」

久保君が中指で眼鏡を押し上げると眼鏡がキラリと光る。

さすがは学年次席（本当は三位だけど…）の久保君だ。

僕やバカな雄二ではとても思いつかない様なすごいことを考えてるに違いない。

「軍師としての務めを果たすためだよ」

「????」

久保君は再度眼鏡を光らせてやりきった感満々でいるが僕はなんのことだかさっぱりわからない。

「明久諦めろ、いつものパターンだ」

僕の肩に手をおき、雄二は悟ったように言う。

「ああ、いつものあのパターンね……」

ここまで言われてわからないほど僕もバカではない。

要するにいつものパターンなのだ。それ以上説明する必要もないだろう…

そつえば清涼祭の時に霧島さんから見せてもらったビデオカメラ

で久保君は異端審問会のみんなから『久保軍師』って呼ばれてたなあ……

「久保軍師、これから我らはいかなる行動をとるべきなのでしょう
か？」

いつの間にか異端審問会の面々が久保君の周りに集まってきた。
須川君たちについてきた人も何人かはいたけど、明らかに人数が増
えてる……

「そうだね……」

おそらく、この旅館には数多の隠し通路が存在する。

それを一つずつ回っていつては埒があかないから二人一組の編成を
組み、吉井君の嫁（姫路さん）を見つけ次第ここまでお連れするん
だ」

「……イエサー、イエス！」「……」

「なにさらつととんでもないこと行ってるのさ！
確実に字と読みが間違ってるよね！？」

もうある程度のことは突っ込まないようにしようと思っていたが、
『吉井君の嫁』と書いて『姫路さん』と読むのは色々と姫路さんに
失礼ではないだろうか。

「吉井君、君はもう少し勉強をした方がいいと思うよ」

「そうだぞ吉井、『吉井君の嫁』と書いて『姫路さん』と読むなん
て俺の近所の小学生でも読めるぞ」

「もうみんな嫌いだああ！」

どうして久保君まで僕を貶めようとしてるの！？
やっぱりこの学園に僕の味方はいないの！？
それに、いくらなんでも小学生が読めるなんてことはないよね！？

「明久」

雄二が再度僕の肩に手をのせる。

「雄二……………できれば言わないで。オチが読めるから」

どうせまた『いつものパターンだから諦める』と言う気なのである。
う。

「俺の近所の小学生も読めてたから諦める」

「言わないでって言ったのに追い討ちかけないでよ！
というか、本当に小学生が読めている事実に驚きだよ！？」

僕の予想の斜め上をいていた…
たぶん、文月学園の周り一帯に僕の仲間なんていないのだろう……

「まっ、明久はおいとくとしてだ。たしかにこれだけの人数がいれば姫路のところにも早くつけるだろう。だが問題がある」

「これだけの人数の中に女子が一人もいない」

雄二に続くように久保君が言う。

たしかにざっと30人ほどいるのに女子が一人もいないのはおかし

い。

「それにムツツリー二がないのも気になる」

雄二の言う通り、ムツツリー二ならば隠し通路などの仕掛けにはいち早く気付き、行動してるに違いはないからおかしな話だ。

まあ、秀吉は男子じゃないから不思議じゃないけど。

「単純に考えれば、なにか強大な妖怪に行方を阻まれているか、恐くて部屋から出ていないかのどちらかだろう」

「強いやつがいようと姫路さんの所に行くのは邪魔するなら倒すだけだ。そうだる主人？」

明希が試すようにこちらを見る。

まったく、明希もわかりきったことを聞くなんて不粋だなあ。

「うん。どんな困難な目にあっても姫路さんを助け出してみせる」

僕のできるすべてをかけてでも。

「よく言った明久。」

よし！行くぞ野郎ども！！

ここを活動拠点とし、女子たちを救い出せ！！」

「「「「「おおー！！！！」」」」」

雄二の掛け声にみんなが同調する。

さあ、第二回戦の開始だ！

第48問 僕とみんなと第2ラウンド！（後書き）

明瑞分が足りない…

今までが明瑞成分が強すぎたせいかな数話絡みがないだけで物足りなく感じてます。

よし！再会させたら目いっぱいイチャイチャさせることにしましょう
（笑）

第49問 私と明久君と大好きな笑顔（前書き）

S H I Nさん、感想ありがとうございました！

第49問 私と明久君と大好きな笑顔

瑞希SIDE

「いくら外に出れないっていつても何もしないと暇よね……」

友香ちゃんがぼやくように言います。

「だけど廊下にも出れないんだからどうしようもないでしょ？」

美波ちゃんの言う通り廊下に出ることはできません。

いえ、物理的に出れないわけではなく出たら妖怪がたくさんいて恐いんです…

「こんな事ならトランプでも持ってくればよかったよね…」

「真由美の言う通りね。誰かトランプとかUNO持っていない？」

トランプとかUNOですか……

私は持ってきていませんし、行きの電車で取り出していないということは美波ちゃんも持っていないはずですよ……あつ！

「トランプやUNOじゃないですけど百人一首なら持っていますよ」

「……ほんと!?」「……」

皆さんの目の輝きがちょっと怖いです…

よほど暇を持て余していたんですね…

「はい、勉強会で使えるかと思って持ってきたんです。
押し入れの中に置いてあるカバンに入れてありますから取ってきてま
すね」

「やったーこれで暇しないですむわ」

「暇しないのはいいけど、ウチは百人一首って苦手なのよね…」

たしかに美波ちゃんは読めない字がありますし、百人一首は古典的
なものですから苦手かもしれませんね。なにかハンデをつけた方が
いいでしょうか？

ガラガラ

そう思いながらカバンの入れてある押し入れを開けます。
すると押し入れの中の壁についてる目が一斉にこちらを――

「……………きゃあああああああああああ
あー!」

「どうしたの瑞希!？」

すぐに美波ちゃんが走って頭を抱え、うずくまる私のそばにきます。

「目です…」

壁に目がたくさんついてます…」

「壁に目？」

それなら一目蓮じゃないかしら？」

美波ちゃんの後が続くようにやってきた律子ちゃんが冷静に言います。

「大丈夫よ。一目蓮は人に害を加えないし、もうどこかへ行っちゃったから」

「ほんと…ですか…？」

恐る恐る押し入れの方へ目を向けるとたしかに普通の壁でした。さっきまでたくさんの目が張り付いていたのに何事もなかったかのように…

「本来は障子に張り付いて出てくる妖怪なんだけど障子が減って居場所がなくなっちゃったんでしょうね」

もうお寺に行きたくないです…

「なんで岩下さんはそんなに詳しいのよ…」

「親戚に住職がいて小さいころよく遊びに行つたの。それで一目蓮なんてよく出てきたから慣れっこなの。」

一目蓮以外の妖怪はてんでダメだけどね…」

友香ちゃんの疑問に律子ちゃんは苦笑しながら応えます。たぶん、私は何度見ても耐性がつくとは思いません…

「でも危害がないとしても妖怪がいるって事は部屋の中も危ないんじゃない？」

「たしかに美波ちゃんの言う通りですね。
いざというときの脱出経路を見つけとかないといけませんし」

「そんなこと言っても隠し通路があるわけじゃないんだから逃げ道なんて入り口しかないわよ……」

「結構シビアな問題ね……」

みんなで考え込んで黙ってしまいます。

ガチャッ！

私たちは一斉に開いた扉の方へと視線を向けます。
そこにはカッパに似たなにかがいました……

「ゲラゲラゲラゲラ！」

「……きゃあああああああああああああ……！！」「」「」「」

みんなで一斉に部屋の奥に逃げ込むように走り出します。
部屋に入ってきて早々に笑うなんて不気味すぎます！

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

笑いながらもカッパに似たなにかは一步、また一步と着実に私たちの方へと歩みよってきます。

私たちは壁に張り付くようにしてるのでこれ以上逃げることもできません……

「……うう……」

「いやいやいやいや！」

「こ、これ以上近づいたらタダじゃおつ、おかないわよ！」

「もうダメよ……」

恐がる私たちを他所にカッパモドキは残り数歩というところまで迫ってきました。明久君、助けてください……

私は来るはずもない想い人をまぶたの裏に浮かべ、目を瞑ります。

「ゲラゲラゲラッ!?——」

バタッ！

カッパモドキの笑い声が収まったかと思うとなにかが倒れる音がしました。

恐る恐る目を開けると、そこには——

「大丈夫、姫路さん？」

「明久……君……」

いるはずのない明久君がいました……

更に私と明久君の間にはカッパモドキが倒れています。

「誰も怪我していないようでよかったよ」

そう言って明久君はいつものように笑います。そう、いつもと同じように……

「助かったあ…」

「姫路さんと相部屋でよかったよね」

「うんうん、姫路さんと相部屋じゃなかったら吉井君は来てくれなかったしね」

友香ちゃん、真由美ちゃん、律子ちゃんが安堵したように言います。
ですけど私と相部屋の事と明久君の来てくれた事の関係性がいまいちわかりません…

「三人ともからかわないでよ。」

つと、それよりもここは危険だから僕の部屋まで逃げよう。案内するよ」

「吉井がどうしてもって言うなら着いていくわよ」

「でも待つて。外には妖怪がいるんでしょ？」

律子ちゃんの言う通り廊下には妖怪がたくさんいるはずですよ。
その中をぐり抜けるなんて、とてもじゃないですけど無理ですよ…

「その点は心配いらないよ。どういう訳だか妖怪は召喚獣で倒せるからさ」

ということとはさっきのカツパモドキは明希君が倒してくれたんでしょうか？

なら今度お礼を言わないとですね。

「吉井君もいることだし、それなら安心かな」

「うん、僕も出来る限りみんなを守るから早く行こうよ」

「吉井君もそう言ってることだし行きましょ」

真由美ちゃんにつられるようにみんなが立ち上がります。

だけど私はどこかに違和感を感じ、立ち上がることができません。

「どうしたの姫路さん？」

みんなを待たせちゃいけないから早く行こうよ？」

そう言っつて明久君は手を差し出してきます。

私はほとんど無意識にそれを掴むと明久君につられて立ち上がりま
す。

「じゃあ、廊下に出るよ」

明久君はそう言っつて入り口を開けると私の手をひいて廊下に飛び出
しました。

後ろには私たちに続くように四人がついてきています。

「ふえ……？」

廊下に出て周りを見渡した私は思わず啞然としてしまいました…

「なんで通路がないのよ…」

美波ちゃんの言う通り正面には向かいの部屋があるのですが、廊下
の左右の通路が壁で塞がれていました…

「これはぬりかべってやつで召喚獣でも倒せないから気にしないで」

「でも吉井はどうや——きやああああああ!!」

『どうやってきたのか』と言いかけた美波ちゃんの目の前に急に天井から逆さまに女の人が出てきました。しかも天井にぶら下がったままです。

「島田さん、しっかりして！」

そいつは逆さ女ってやつで、背後が弱点だから早く召喚して！」

「うっ、わかったわよ……さ、サモン！」

例の幾何学模様から美波ちゃんの召喚獣が現れます。

そういえば、この旅館内全域に特殊な細工を施してあるので、先生の承認なしにどこでも召喚できるんでしたね。

「「「サモン!」「」」

三人も美波ちゃんに加勢するように召喚獣を召喚します。よし、私だって！

「サモ——」

私は言葉を言い続けることができませんでした。

明久君が後ろから手で私の口を抑えているため、声が発せられないのです。

「はにふふんへふか！」

美波ちゃんたちは私と少し位置が離れてますし、恐怖と集中力で私の状況に気づいてません。

「姫路さんはこっちだよ」

明久君は私の耳元でささやくと私の口を抑えたまま後ろの壁へと後退りしていきます。このままじゃ壁に当たっちゃいます！

そう思って目を瞑りますが、いつまでたっても痛みがやってきません。

疑問に思って目を開ければそこは私たちがさっきまでいた部屋とそっくりな部屋でした。ただ決定的に違うのは扉がどこにもないということ……

「姫路さん、やっと二人つきりになれたね」

明久君と二人つきり……

本来なら、それを考えただけで幸せな気持ちでいっぱいになります
が、今は違います。むしろ恐いんです。他の誰でもない、明久君が
……

「僕、ずっと姫路さんに言いたいことがあったんだ」

そう言いながら明久君は後ろから私を包み込むように抱き締めてきます。

「私も…あなたに言いたいことがあります」

「あなただなんて変な呼び方しないでよ」

「変じゃ…ありませんよ！」

私は私を抱き締めている彼を振りほどくようにして距離をとろうとしますが、あともう少しというところで片腕を捕まれ強制的に向かい合う形にされてしまいます。

「だって今まで明久君って呼んでくれてたのに急に『あなた』だなんて変だよ」

そう言って私の知っている明久君の顔は困ったように笑います。

「いいえ、あなたは明久君じゃありません」

これだけは確実に言えること…

「なに言ってるんだよ。この顔が僕以外の誰のものだっていうんだい？」

「たしかにそれは私の知っている明久君の顔です。

ですけど…私の大好きな明久の笑顔じゃありません！

私の大好きな明久君はみんなが困っているときはいつも通りは笑わないんです！

みんなの不安を取り除くような、そんな温かな笑い方をするんです！でもあなたの笑顔は違った。

あれはいつもの笑顔です。明久君が楽しい時に見せるいつもの笑顔なんです！」

これが私の感じていた違和感の正体。

明久君じゃないのだから違和感を感じて当たり前なんです。

「あなたはいつたい誰ですか……」

第49問 私と明久君と大好きな笑顔（後書き）

瑞希を謎の個室に連れ出した明久の正体とは果たして！？

今回出てきたカップモドキですが正式名称は水虎といえます。

カップに似た見た目でつられて笑った人は死んでしまうそうですよ。

では、次回もよろしく願いいたします！

第50問 僕と妖怪と召喚獣！？（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第50問 僕と妖怪と召喚獣！？

明久SIDE

「いくよ明希！」

「おう、合わせろよ主人！（マスター）」

ズシャツ！

僕の召喚獣と明希が同時にたんたんころりん（柿のお化け）を斬りつける。

たんたんころりん UNKNOWN討死

お馴染みの表示がでて、たんたんころりんが消滅していく。

「手応えがねえなあ！」

「下手に手こずるよりはマシだけどね……」

木刀を振り回しながら戦い足りないことをアピールする明希に若干呆れながらも周りを見渡す。どうやらさっきので一区切りついたらしく後続は見当たらない。

それにしてもいつになったら姫路さんの部屋につけるのだろうか？かれこれ十部屋ほど回っているが姫路さんはおるか女子すら見つからない。

「主人、もたもたすんなよ。次行くぞ」

「わかってるって」

そう言つて戦場である廊下から部屋に入っていく明希を追いかけていく。

「止まれ主人！」

「えっ！？」

明希の制止により部屋の入り口で僕は立ち止まる。

「ボスクラスのお出ましってわけか」

臨戦態勢に入っている明希の見据える先に視線を移すと、そこには炎をまとった人力車で使うような車輪がいた。たしかこいつは火車という妖怪のはずだ。

「ガハハハ、マタイケニエガキオツタワイ」

車輪の中心についている顔が高らかに笑いながら言う。

「明希、生け贄って…」

「んなもん、こいつ倒しやわかるこんだろうよ」

たしかに明希の言う通りだが、本来部屋に入ることがない妖怪が部屋を占領しているのだから一筋縄ではいかないだろう。

「イセイガイイジャネエカボウズ！カカツテキナ！」

火車がそう言うと共にお互いの点数が表示される。

Fクラス吉井明久 世界史138点

召喚獣 明希 世界史142点

火車 UNKNOWN 488点

雄二たちと別行動をとってから僕も明希もほとんどダメージを受けていないため、点数の消費はほとんどない。だが、それでも200点差もある……

「イクゾボウズドモ！」

そう言い放った直後、火車の炎がより一層強くなり猛スピードでこちらに突っ込んできた。

「あぶねっ！」

「せつ、セーフ……」

僕の召喚獣と明希は間一髪のところかわすが危ないところだった。スピードもさることながら、あの点数での攻撃を受けたら一堪りもないだろう……

それに畳だって焦げて………焦げてる……？

なんでだ？

なぜ、炎をまとっているのに畳が焦げるだけですんでるんだ？

………なにかある。この妖怪騒動の裏に僕たちの知らないなにかが……

「主人、そっち行っただぞ！」

明希の声に正面を向くと火車が僕目掛けて突っ込んできていた。僕自身は淡雪の張ってくれた結界のおかげでよける必要はない。なら、試してみる価値はある！

召喚獣に木刀を構えさせると火車の進行方向から少しずらす。

あれだけの速さが出ているのだから途端に進行方向を変えるのは無理だろう。

「はあああー！」

案の定、そのまま突っ込んできた火車を掬い上げるように木刀で弾く。

「ソナナコトシテモイミガナイゾ！」

宙に舞う火車が僕目掛けて落下しながら言う。

「いいや、意味ならあるさ。明希！」

「おうよー！」

明希が自身の木刀を僕目掛けて投げてくる。

さすが僕の片割れだけあってやることわかってるじゃないか。

「ふつとべえええー！」

受け取ったちよつと小さめの木刀で火車を野球ボールを打ち返すよ

うに打つ。

火車 UNKNOWN 449点

「ガハハハ、ソノテイドノチカラジャワシハシナンヨ！」

高らかに火車が笑うが、たしかに火車の言う通りだ。だ
けど、目的は火車を倒すことじゃない。

「受け取って明希！」

体勢を立て直した僕の召喚獣が明希目掛けて木刀を投げる。

「チエツクメイトだ！」

空中で木刀を受け取った明希は、そのまま僕に打たれ明希の頭上を
とんでいる火車を加速させるように打つ。

召喚獣は人の何倍もの力があるからその加速力も中々のものだ。

火車 UNKNOWN 386点

「ナカナカノコウゲキダガマダマダジャナ！」

「「いいや、僕（俺）たちの狙いそこじゃない！」」

「ン？マツ、マサカ！？」

火車も今頃気づいたようだがもう遅い。火車は減速せずに窓にぶつ
かると、そのまま窓ガラスを突き破り旅館の外へと消えていった。

「さてと、真実を確認するとするか」

「そうだね」

明希と共に火車の落ちていった窓から下を見るが、案の定なにもいなかった。

「やっぱり召喚システムの内の一つだったんだね」

だから召喚フィールド外である旅館の外に出てしまったから消えてしまった。

「まったく、ハバアも手の込んだことやってくれるぜ」

おそらくは一定パターンの組み込まれた自立式の召喚獣なのだろう。妖怪の姿をしていたのは大方、召喚システムの一環だということがバレないためのカモフラージュ。ついでに女子陣に対する牽制つてところだろうか。

しかし狙いがよめない。

なんのためにこんな大がかりでめんどくさいことをやっているのだろうか？

それに住職である境内院さんも僕たちを騙すためだけに呼ばれたのか？

たぶん、そうじゃない。まだ僕たちが知らないなにかがあるんだ…

「とにかくハバアの所に行くとするか」

「その前に火車の言ってた生け贄ってのが気になるんだけど……」

さすがに召喚システムの一環である火車が人を殺すとは思えないし、

観察処分者以外の召喚獣は物理干渉ができないのだから無理だろう。

「大方、押し入れの中にでもいるだろうよ」

そう言つて明希が押し入れの扉をおもいつきり引く。

「きゃっ！」

押し入れの中にいた女の子が驚きの声をあげる。残念ながら僕が知っている人ではないが、初めての女の子だから他の女子がどうなつてるか聞ける——！？

「うわぁ！？」

突然持ち上がった足元の畳によるけながらも体勢を立て直す。

「これで地図は完成したな」

そんな聞き慣れた雄二の声と共にぞろぞろと床下からみんなが出てくる。

その中にはムツツリーニや秀吉、女子たちもいた。ただ——

「雄二、姫路さんは…？」

そう、ただ一人姫路さんだけがいなかった…

「『姫路さんは？』じゃないわよ！

吉井、あんたこそ瑞希をどこに連れてつたのよ！」

応えたのは雄二ではなく島田さんだ。

よくわからないことを言ってるし、なぜだか怒ってるみたいけど……

「姫路さんがどこにいるかは僕が聞きたいんだけど…」

「よくもそんな白々しいことが言えるわね！」

吉井が瑞希を連れてウチたちの前からいなくなったんじゃない！」

僕が姫路さんを連れて島田さんたちの前からいなくなった？

島田さんの言ってることがますますわからない。

第一今日は姫路さんに会ってすらいけないというのになにを言ってるのだろうか？

「島田もいつペン落ち着け。明久の方もなにがなんだかわかってないらしいぞ」

「そうだよ。僕は今日、姫路さんに会ってすらいけないんだよ」

雄二の助け船に便乗するよつに島田さんに言う。

「瑞希に会ってない？」

「どういうことよ。ちょっと前にウチたちの部屋に来たでしょ？」

「行ってないよ。」

それに僕は姫路さんの部屋を探してたんだからさ……」

「なによ……」

それじゃまるで吉井が二人いるみたいじゃない……」

「おそらく、その可能性が高いでしょう」

今まで静観していた淡雪が言う。
おそらく全員分の結界も作り終わったから誰かに同行していたのだろつ。

「僕が二人…？」

「ええ。

正確には吉井様の偽者であるドッペルゲンガーがいることになりますが」

ドッペルゲンガー…

特定の人と同じ姿をとり、あたかも本人のように振る舞う妖怪…

「仮にドッペルゲンガーだとしてなぜ姫路を拐う必要があるんだ？」

「妃様の拐った正確な理由はわかりませんが、人質と考えるのが妥当かと」

姫路さんを人質だつて…？

いくらなんでも手が込みすぎじゃないか！

なんで召喚システムの一環ごときに…… 召喚システム？

ならどうやって姫路さんを拐ったんだ？

物理干渉のできないはずの召喚獣がどうやって……

…… いや、一つだけ可能性がある。ドッペルゲンガーが姫路さんに触る方法が…

「淡雪、メリーさん、君たちは本当に妖怪なの……？」

「ええ、私は座敷童子ですから妖怪ですよ」

「私なんか名前そのままだけだね」

ここまでは想定済みの答えだ。

「それはそういう設定の召喚獣じゃないってことでいいんだよね？」

「明久、なに言ってるんだ？」

雄二が訳がわからないという風に言う。

やっぱり雄二でも気付いていなかったのだろう。

いや、僕だって焦げに気付かなければ気づけなかったかもしれない…

「ここでさっきまで僕と明希は火車と戦っていた。

だけど、あそこの窓から……いや、召喚フィールドから出したら消えたんだ」

「……じゃあ妖怪は全部、召喚システムでできてるってこと？」

雄二の隣にいる霧島さんが小首を傾げながら尋ねてくる。

「うん。少なからず今まで僕たちが今まで戦ってきた妖怪はね」

「……じゃあメリーも？」

霧島さんが悲しそうにメリーさんの方を見る。

きつとメリーさんの言っていた通り、仲良くなっていたのだろう…

「たぶん、メリーと淡雪は違うと思う」

「なぜそう思われるのですか？」

淡雪は自分のことなのに僕を試すように尋ねてくる。

「まず一つ目の理由として明希並の自我をもっていること。

明希用の腕輪を作るのに精一杯なババアにそんな芸当ができるとは思えない。

二つ目に他の妖怪には逐一点数モドキが表示されてるのに淡雪たちには一度も表示されたことがないってことかな」

「答えとしては充分ですね。

そこまで導きだせるのなら隠したところでじきに見破られるのが関の山。

教えしましょう。私の知っていることすべてを」

そう静かに言うとき淡雪は周りを見渡す。

「すみませんが、ここからは本当の意味で人知を越えた範囲ですの
で覚悟のない方は別室に移っていただきたいのですが」

これは淡雪なりの配慮。関係ない一般人を巻き込みたくないという……
それだけ重大かつ、恐ろしいことなのだろう。

「僕は当然残るよ」

それが今、僕が姫路さんにしてあげられることだから……

「俺なんか既に人知越えてるんだから関係ないぜ」

たしかに明希は人が考^{ババア}えた召喚システムの枠を越えた存在だから充

分人知を越えているだろう。だけど、これはそういった問題なの……？

「俺に喧嘩を売ろうってなら妖怪だろうと容赦しないぜ」

「……瑞希を助ける」

雄二と霧島さんも参戦表明する。

「友達を助けるのは当然のことじゃ」

「……ドッペルゲンガー、殺すのは惜しいが許さん」

少し離れたところでなにやら話し合っていた秀吉とムツツリー二もやってくれるようだ。

ところでムツツリー二、君はドッペルゲンガーをなにに使おうっていうんだい？

はなはだ疑問に思いながらも島田さんの方へと視線を移す。

いつものメンバーで後は島田さんただけだけど幽霊とか妖怪とか、そういった類いが苦手らしいから無理にでる必要はないだろう。

「………ウチも行くわ……」

「島田さん無理しなく」いかせて！」

島田さんの訴えかけけるような口調に思わず僕は黙ってしまった。

「ウチもいかせて！」

目の前にいた瑞希が拐われるのも気付かなくて、吉井にあらぬ疑いをかけて……

このままじゃイヤなのよ！ウチだけなにかを知らないままなのはもうイヤ……」

半泣きになりながらも島田さんはしっかりと話す。

島田さんは島田さんで思い詰めていたのだろう…

だけど、その言葉は今回の件に対してだけじゃない気もするし、秀吉も島田さんの言葉を聞いてうつむいてしまった。

もしかしたら二人はなにか共通で知っていることがあるのかもしれない。

「吉井様、それだけの決意があれば充分ではないでしょうか？」

「そうだね…」

じゃあ、島田さんをお願いね。

だけど、恐かったら隠れてもいいんだよ。

島田さんがついてきてくれるだけで嬉しいんだからさ」

「う、うん…」

なににせよ、他人のために自分の殻を破ることはすごいことだと思う。

それが自分の大切な人のために破ってくれるなら同時に嬉しさともなる。

やっぱり姫路さんはみんなに好かれてるんだよね…

僕には遠すぎる存在だよ…

「メンバーは決まりましたね」

「ちょっと待ってくれ。俺たちだって行く覚悟くらいあるぞ」

須川君が淡雪に抗議するように言う。

僕のエゴかも知れないけれど、きつと文月学園のみんななら誰一人欠けることなくついてきてくれるだろう。そんないい人たちばかりだから――

「悪いけど須川君たちには残ってほしいんだ。

あまりにも大所帯で行ったらむこうも警戒するだろうし、いざという時のために避難経路を確保しておいてほしいからさ」

「避難経路？」

「うん。たぶん、ドッペルゲンガーは本当の妖怪で僕たちを殺してこようとするかもしれない。だから、その時のためのね」

本当はそんなことすら意味がないことはわかってる。

だけど須川君たちの厚意を無下にはできないし、巻き込みたくもない。

それを言えば雄二たちも巻き込む訳にはいかないのだろうけど、たぶん退かないと思うだろうし、正直な話僕一人だと心細くもある。

「わかった。俺たちは出口までの道を確保しとくぜ」

そう言ってみんなは部屋から出ていった。

「甘いですね」

「自分にね……」

僕は淡雪の言葉に自嘲気味に繋げる。

「やはり甘いですよ。吉井様は……」

淡雪はそう言うと、きびすを返して雄二たちの方に向き直る。

「では残ってくださいた皆様にお話しましょう。」

なぜドッペルゲンガーがここにいいのか、そして私の過去を」

第50問 僕と妖怪と召喚獣！？（後書き）

次回、ついに強化合宿編が佳境に！

そして明かされる淡雪の過去とは！？

次回もよろしく願います！

第51問 私と秋夜様と大切なもの（前書き）

今回は短めですがどうぞ

第51問 私と秋夜様と大切なもの

ここは…どこ…？

周りを見渡せし、目に映るものは全て古びた物ばかり。

天井にも亀裂が入っており、一目でこの部屋の主が貧乏だということがわかった。

しかし、なぜ自分がここにいるのか、はたまた来たのかわからない。なにか大切なことを忘れているような気がする…

自分自身の存在を証明するほどに大切ななにかを……

ガラガラ

ふすまが開き、一人の男性が入ってくる。

歳は二十いくかどうかというところではないだろうか。

全身黒づくめであるが不思議と怪しさは感じられない。

「……………」

私がなぜここにいるのかを知っているであろう男性は私の方を凝視したまま固まってしまっている。もしかして私の顔になにかついているのだろうか？

だとしたら言ってほしいものなのですが……

「あの…その…えっと……………」

やけに男性はそわそわしながらも、私の方をチラチラと見ながらなにかを言いたげにしています。

「なにかご用ですか？」

「うん…その、君はだれ？」

「……………えっ？」

予期せぬ返答にしばらく固まったあげく間抜けな返答をしてしまいます。

彼は私が誰だか知らない…？

じゃあ、私はなんのために知らないここにいるの…

「いや、だから君は誰だか聞いてるんだけど…」

「……………私もわかりません…」

自分が誰なのか、また、なぜここにいるのかも…」

「えっ……………」

困りましたね…

どちらとも私の素性がわからない以上、追い出されることは必須。

おそらく、この部屋から出たとしても見知らぬ世界が広がっているでしょうから手のつけようがありません……

目先の問題としては住みかと食料ですよね。

当然というか、私は一文なしですし行く宛すらありません…

これは弱りましたね…

俗に言う『絶体絶命』というところでしょうか？

「ねえ、なにか考え込んでるところ悪いんだけど、君さえよかったらここにいてもいいんだよ？」

「わかっています。私も追い出されることくらいは——えっ？
今なんと？」

私の聞き間違えでなければ『ここにいていい』と…

「だから、君さえよければここにいてもいいって言ってるんだよ」

「見ず知らずの私をおいてくれると？」

そんな虫のいい話があるわけない。

そんなことしても彼にはなんの得などないのだから…

「自分のことすらわかってない人をほっておけないよ」

「素性のわからない私でも？」

それを受け入れるなんてお人好しを通り越してバカだ。

「君だって僕のことをなにも知らないでしょ。なら条件は一緒だよ」

「…あなたは……優しいんですね」

損得勘定をせずに無償の優しさをくれるなんて…

「甘いんだよ」

「甘い？」

「うん。僕は自分に甘いんだ」

「よくわかりません…」

でも、暫くはここに泊めてもらってもよろしいということでしょうか？」

「だからいいって言ってるじゃないか」

そう言つて彼は屈託なく笑いました。

それは私から彼に対する不安を取り除くには充分すぎるくらいの明るい笑顔…

「では、暫くお世話になります。えっと……………」

「秋夜。^{しゅうや}月島秋夜だよ」

「はいっ！」

では、改めてよろしくお願いします秋夜様」

私は今、自然に笑えているだろうか？

見ず知らずの私を受け入れてくれた秋夜様に不安をもたせないように……

「普通に秋夜でいいよ」

「いえ、居候の身ですから秋夜様と呼ばせていただきます」

なぜだかそうしないといけない気がした。もしかしたら空っぽの私に唯一残っていたものかもしれないのだから、これだけは譲れないのだ。

「うーん、君がそういうなら仕方ないか…」

ところで君はなんて名前なのさ？」

「名前……」

あったのかもしれないですけど、わかりません……」

「そうか……」

そう言うとき秋夜様はまるで見定めでもするかのように私をまじまじと見詰めてきます。

「あんまり見詰められると恥ずかしいです……」

「あつ、いやこれ違うんだ！

その、君の名前を決めようと思ってさ。

ほっ、ほら、その白い着物に君の柔らかい感じで淡雪なんてどうか
なあなんて……」

「淡雪……」

いい名前ですね。淡雪……私の名前は淡雪ですっ！」

これが私が秋夜様から初めてもらって今も残っているたった一つの
もの……

私の一番大切な秋夜様からのプレゼント。今はもういない秋夜様か
らの……

第52問 私と秋夜様と晴香さん（前書き）

過去話という都合上、仕方がないことですが明久たちは今回も出番なしです…

第52問 私と秋夜様と晴香さん

「秋夜様、秋夜様！」

朝ですよ。もう朝ごはんもできています！」

朝食の支度を終えた私は布団の中で気持ちよさそうに寝ている秋夜様を揺さぶり、起こそうとしますが一向に起きる気配がありません……

「秋夜様！」

「……うつ……晴香……」

「……………」

またです……

寝ている秋夜様が時折口にする『晴香』という名前……

秋夜様となんらかの関係がある方とは思いますが、私は見た目すら知りません……

また寝ている秋夜様に呼ばれる、見知らぬ『晴香』という方に嫉妬の念を抱いたこともあります。私は一度も呼ばれたことないのに……私にとって、この『淡雪』という名前が私である唯一の証明なのに……

居候の身。それで多くのことを望むのはお門違い。

それくらいはわかっています。わかっていますけど……一度くらいはせめて……

「ん……ふわあ……」

……あつ、淡雪おはよう「」

ようやく秋夜様が目を醒ましました。

「おはようございます秋夜様。もう朝ごはんできますよ?」

まだ寝惚け眼の秋夜様に心中を気付かれないように、できる限りの笑顔で接します。

「……………淡雪、調子悪いの?」

じつと私の方を見ていた秋夜様は私の額に手を当ててきました。

「ひゃあっ!?!」

しゅ、秋夜様なにしてるんですか!?!」

たぶん私は今赤面しているのだと思います。身体が火照ってあついです…

「なにつて、熱がないか確かめただけだけど?」

「熱?」

「そうか、熱がなになのかもわからないのか……」

熱っていうのはね、菌やウイルスが身体に入り込んで身体が熱くなることだよ」

では、私は熱があるのかもしれないね。

だって身体がこんなにも熱く、心臓がドキドキしてるのですから。

「そっ…なんですか…」

これで秋夜様に説明してもらうのも何回目になるでしょうか…
ここに来て早一週間、私には世間一般的な知識が足りていないらしく、秋夜様にその都度説明してもらってる有り様です。

「少し顔も赤いし、額も熱いから今日は寝てなよ」

「だ、大丈夫です！」

私は小さくガツポーズをとって自分が健康であることをアピールします。

それに、これが熱ならば悪くないです。こんなに心地よい温かさなら…

「本当に大丈夫？」

「はいっ！」

だからもう少しだけ私に……私だけにその温かさを……

〈数分後〉

「うん、今日も淡雪の料理はおいしいね」

朝食である味噌汁をすすりながら秋夜様が言います。

「そんなことはありませんよ」

私は褒められたことが嬉しくて、つい頬が緩んでしまいます。もっと秋夜様に褒めてもらいたいです。

そうだ、この前『てれび?』だかという人が閉じ込められている珍妙な箱で、中の人が言っていた鮭の塩焼きというのを作ってみましよう。

ニホンジン（秋夜様もこれに属するらしいです）のほとんどは好きだと言っていましたから、きっと秋夜様も喜んでくれるはずです。

「楽しそうだね淡雪。なにかいいことでもあったの?」

「はいっ!」

明日は秋夜様を喜ばせてあげますから」

それが私にとっての幸福です。

「よくわからないけど淡雪が楽しそうだしいつか…」

つと、そういえば今朝はなにか考えてたみたいけどなにがあったの?」

おそらく秋夜様は私の心情の変化に気付いているのでしょう。

その内容は定かでないとしても、なにかを悩んでいることくらいは…

「たしかに今朝方、悩みはありましたが、もう解決したからいいんです」

だって、あなたが起きて初めて呼んだのは私の名前だから。

昨日も一昨日もそのまた前の日も一番に私の名前を呼んでくれたから…

「そうか…」

まあ、僕でも力になれることがあったら言うてよ」

「はい、もしその時はよろしくお願いしますね」

だけど、あなたにこの胸の悩みを打ち明けることはできない。

打ち明けてしまえば終わりだから…

そこで終わってしまうから…

あなたは私から離れていってしまうから……

「じゃっ、そろそろ学校に行ってくるよ」

そう言つて秋夜様は初めて会つた時と同じ黒づくめの服に着替えに
いきました。

どうやらあの黒づくめの服は『ガッコウ』という場所に行く際には
着なければいけないようです。

「じゃあ、行ってくるね淡雪」

「はい、いつてらっしゃい秋夜様」

私は『えぶろん』というものをつけたまま秋夜様に手を振ります。

秋夜様の方もはにかみながらも手を振り返してくれます。

さてと、私も明日のために鮭を買いに『おつかい』に行かなければ
なりませんね。これについての知識も『てれび』で得ているので大
丈夫です。

たしか『は。めてのおつかい』という番組で小さな子供たちが『お
つかい』をしていたのを見ていましたから抜かりはありませんよ！

秋夜SIDE

憂鬱だ……

家にいる時は淡雪が屈託のない明るい笑顔を向けてくれるから気持ちも晴れるが、学校にいると友達と話してるのも億劫になってくる……
例えば淡雪があの日、突然僕の部屋に現れたのは偶然なのか、はたまた必然なのか。少なからず、あの時の僕は癒しを求めていた。誰かが傍にいてほしかった…

彼女だった晴香にフラれてしまったあの日は……

だから、見ず知らずの淡雪も家においてしまった。

本当に淡雪のことを考えるべきなら親や親類を探してやるべきなのだろう。

だけど、僕自身が癒されたいがために淡雪を家におき続けている。

すべては僕の『自分自身に対する甘さ』からきてしまった事態だというのに僕はどうすることも……いや、今のままでいたいと思っているんだ。

最悪だよな……

彼女にフラれたからって、見ず知らずの女の子を代わりみたいに扱うなんて…

こんなんだから晴香にもフラれちゃったんだろうな……

「ねえ！秋夜、人の話聞いてんの！」

「いたっ！」

突然、頬をつねられる。

「『いたっ！』じゃないわよ！あんたは私の話聞いてんの！？」

顔を上げればそこにいたのは晴香で――

「つて、晴香！？」

「なに今頃驚いてんのよ。」

さっきからずっと話かけてたでしょ」

晴香は一週間前以前のようには呆れた風に言う。

「あつ、いやごめん…」

それで要件はなにな？」

「はあ…」

やっぱり聞いてなかったんじゃない。

まあいいわ、単刀直入に言うから。今日私の家に来なさい」

「えっ…？」

今更晴香はなにを言っているのだろうか？

もう僕たちは恋人同士じゃないというのに家に呼ぶなんて…

「鈍いわね。」

私のはあんとよりを戻したいって言うてるのよ。当然来てくれるわよね？」

「うん…」

いまいち腑に落ちないが、一応了承しておく。
晴香がなにかを企んでいるのかもしれないけど、もし本当に仲を戻せるなら……

「じゃあ、家で夕飯作って待ってるから」

それだけを言い残すと晴香は自分の教室に戻っていつてしまった。

「本当に僕たちは仲直りできるんだろうか…」

誰に言うでもなくポツリと呟くが当然反応してくれる人はいない…

淡雪SIDE

「ふふふ」

私は今、カレーを作っています。

カレーは秋夜様の好物ですから今日のお夕飯は喜んでくれるはずですよ。

「ふふつ、楽しみですね」

私は鼻歌を歌いながら調理を続けます。早く秋夜様に帰ってきてほしいです♪

第52問 私と秋夜様と晴香さん（後書き）

次回くらいには過去話が完結すると思いますので今しばらくおつきあいください

第53問 僕と淡雪とかけがえのないもの

「はあ…

秋夜様、遅いですね…」

準備の整ったテーブルに座りながら私は一人、秋夜様の帰りを待ちます。

時計を見れば既に短い針が10を示していました。

いつもなら、遅くても8と9の間には帰ってくるのに……

ピッ

傍にあつた『りもこん』で『てれび』の電源を入れると男女が楽しそうに『れすたらん』という場所で食事をしていました。たしかこれは秋夜様もたまに見ている『どらま』というやつですね。私も早く秋夜様とご飯を食べたいです…

外で食べたいなんて言わない

豪華なものがほしいなんて言わない

食事をつくってほしいなんて言わない

だから、せめて一緒に食べたいです…

私のつくった料理を二人でいつもみたいに……

秋夜SIDE

ピンポン

補習が終わり、約束通り晴香の家までやってきた僕はチャイムを押す。

ガチャツ

「あ、秋夜。さっ、早く入って」

「うん…」

エプロンをつけた晴香に促されるまま家に入っていく。
家の中には肉を焼いていたのかおいしそうな香りが漂っていた。

「先にリビングに行つて。私は料理持ってくるから」

「あつ、僕も手伝うよ」

さすがに料理まで作らせておいて何も手伝わないのでは酷いと思う。

「いいわよ。秋夜は早く席についてて」

「そうか…」

わかった。先に席についてるよ」

そう言つて料理の椅子に座るが、どうも腑に落ちない。

一週間前はあんなに怒ってたのに、急によりを戻したいと言ったか
と思ったら家にまで呼んで夕食を振る舞ってくれるなんて不自然す
ぎやしないだろうか？

たしかに呼んでくれたのは嬉しいし、できることならよりを戻した
い。

だけど、晴香に淡雪のことをなんて説明するんだ？

………淡雪には晴香のことをなんて説明するんだ…？

「秋夜お待たせ」

陽気な声と共に晴香が料理を運んでくる。

「豪勢だな…」

思わず圧倒されてしまいそうな程の料理を目の前にして言葉が漏れ
る。

次々と並べられていく品は七面鳥の丸焼き、海鮮サラダ、ビシソワ
ーズ（要するに芋汁）とどれも豪勢なものばかりだった。

「これ全部、晴香がつくったのか？」

「こう見えても私、結構料理には自信があるんだからね」

そう言っつて晴香は自信たっぷりに胸をそらす。

「たしかに弁当もらった時はうまかったけど、ここまでとは…」

「ふふっ、ちょっとは私のこと見直したかしら？」

「見直したもなにも最初から軽視なんてしてないんだけどね…」

こうやって晴香と他愛ない話をするのも懐かしく感じる。
たった一週間の間があいただけだけど、それが僕にとってには長かったのかもしれない。淡雪と出会ってからの一週間が……

淡雪…

さすがにもう一人でご飯、食べてるよね…

できれば連絡しておいてあげたかったけど学校から家までは十駅も離れてるし、まだ淡雪には電話の出方を教えていないから仕方ないだろう。

そう、仕方ないんだ…

「ちょっと、なにボーツとしてんのよ。冷めないうちに早く食べなさい」

「あつ、うん。いただきます」

手を合わせて七面鳥の丸焼きをフォークで適量に切っていく。
うん、肉汁が染みだしてきておいしそうだ。

「ねえ秋夜、一つ聞きたいことがあるんだけど？」

「なに？」

向かいの席に座った晴香に返答する。

「そのね…

聞いた話なんだけど、秋夜の家……その……白い着物を着た女の子

が…出入りしてるってほんと…？」

「えっ…？」

白い着物を着た女の子。間違いなく淡雪のことだろう。だけど、なにをどう説明するんだ！？

それに淡雪と一緒に外出したことは——っ！

そうか、淡雪が買い物に出かける時に見かけられたのか…

まずい、ここで本当のことを話せば間違いなく晴香との関係は悪化するだろう。

けどはぐらかして説明すればどうなる？

晴香のことだ、間違いなく僕の家まで来て淡雪を追いつくとするだろう。

淡雪か晴香か……

「ねえ秋夜！」

いつの間にか晴香が僕の隣まで迫ってきていた。

僕はその剣幕に思わずたじろいでしまい席から壁に逃げるように後ずさる。

「秋夜の家になんていなくていいわよね…」

さっきまでの剣幕とは打って変わって晴香の目には涙が浮かんでいた。

「お願いだから秋夜に家に女の子なんていなくて…」

私は今でも秋夜が好きなの。

一週間前に『優しすぎる』って言って別れ話を持ち出したのも秋夜

の気を引きたかっただけなの……」

「晴香……」

頬に伝う雫を拭きながら晴香が一步步近づいてくる。

そして、僕の目の前までくるともたれ掛かるようにして服に顔を埋めた。

「お願い……今日は私の家に泊まって……」

そうすれば……秋夜も思い直してくれると思うから……」

『明日は秋夜様を喜ばせてあげますから』

「……………」

「えっ……」

晴香の肩をそっと掴み、引き離す。

「ごめん晴香、やっぱり僕帰るよ」

「どう…して…」

「僕は帰らなくちゃいけないんだ。
待ってる人が……約束があるから……」

僕の大切な人がいるから、そこに…

「私がいるじゃない！
なのに…どうして…どうしてなのよ！」

「……………淡雪は晴香の代わりじゃないんだ」

そう、誰の代わりでもない淡雪は淡雪なんだ。

この長い一週間……たった一週間だったけど、淡雪が僕に見せてくれた笑顔、優しさは僕にとってかけがえのないものなんだ。
乗り換えた。悪く言えばそうかもしれない。

だけど他人になんと言われようともいい。
僕にとって淡雪はそれほどかけがえのない存在だから！

「淡雪をこれ以上待たせるわけにはいかないんだ」

それだけを言い残すと、僕は晴香の家から出ていく。

「ちょっと秋夜！

どういうことよ！全然意味がわからないんだから！」

後ろから晴香の声が聞こえてくるが立ち止まる気はない。

待ってて淡雪。今すぐ帰るから！

「秋夜の家」

「（ただいま）」

玄関の鍵を開けてそっと入る。

僕は独り暮らしだから門限とかはないが、これからは淡雪のために早く帰ろう。

まあ、今日はもう寝ちゃってるだろうけどね。

腕時計を見ればもう11時を過ぎていた。

さすがにこの時間帯まで淡雪が起きてるとは思えないし、僕自身に過失があるのだから文句は言えない。

ガチャッ

晴香の家では結局、食べ損ねたので何かを食べようと思いリビングへ向かう。

「ふみゆ……秋夜……さま……」

淡雪が用意がすんだテーブルに倒れ込むようにして寝ていた。まさかずっと待っていたのか……？

いつ帰ってくるかわからない僕を……

いつものように用意された食卓で僕を迎えいれようと……

「ごめんね淡雪…」

ソファーから毛布を取ってくると淡雪にそっとかける。

「秋夜…さま…？」

どうやら淡雪を起こしてしまったようだ。

「ただいま淡雪」

「お帰りなさい…しゅ…や……」

淡雪は言い終える前にまた寝入ってしまった。

たまには寝ている淡雪を見ながら食事なんてのもいいかもね。

そう思い、淡雪のつくってくれた料理を盛り付けるために台所にいく。

「今日はカレーか……」

以前に話した僕の好物を淡雪が覚えていてくれたのかはわからないけど、今日はたくさん食べたいと思っていたからちょうどいい。

カレーを白米を入れた皿に盛り付けると淡雪のいるリビングに戻る。

「いただきます」

スプーンで一口すくうと、それを食べる。

「おいしいよ、淡雪」

時間がたつてしまっているけど

豪勢な料理じゃないけど

淡雪がいる、ここで食べられることが僕にとっては何物にも代えがたいことなんだ。淡雪、君は誰の代わりでもない。

だけど君の代わりは誰にもできないんだよ……

第53問 僕と淡雪とかけがえないもの（後書き）

ということで、過去話は後もう一話続くこととなります。
前回、今回で過去話終わりのようなことになってしまいました。
基本、思いつきで書いているので計画性が皆無なんです…
では、謝罪も込めまして次回もよろしく願います

第54問 僕と過去と二人の宿敵（前書き）

ついに過去編ラスト！

第54問 僕と過去と二人の宿敵

淡雪SIDE

「きれいですね…」

私は窓の外に映る夜景に目を輝かせながら呟きます。

「気に入ってもらえたかな？」

「はいっ！」

秋夜様の間に元気よく応えると再び徐々に移り変わる景色に魅入ります。

秋夜様が遅くに帰宅なさった翌日、秋夜様が突然『ゆうえんち』という場所に連れてってくれると言ったので来てみると、そこは見たこともない乗り物でいっぱいでした。

そして、たくさん遊んだ私たちは最後に『かんらんしゃ』という物に乗ることにしたのですが、これはすごい乗り物です。

最初は低い位置にあるのですが、徐々に上に上がっていくと『ゆうえんち』全体のライトが夜に映えてとてもきれいに見えるのです。

「淡雪はなにが一番気に入った？」

「そうですね…」

『じえっとこーすたー』は速すぎて少し苦手でしたが面白かったですし、『こーひーかつぶ』はくるくる目が回りましたけどそれが楽しかったです。

だけど、一番はこの『かんらんしゃ』というやつですね」

だって、こんなきれいな景色を秋夜様と二人っきりで見れるのですから…

「なら、僕と同じだね。よかったよ」

そう言って少し恥ずかしそうに笑う秋夜様の顔が窓ガラスに映ります。

そして、そこには幸せそうな私の顔も……

もうこの時間以外いない。この時間さえ続けばそれでいい…

私が高んなのか、どこから来たなんかどうでもいい。

だから少しでいいから、この時間だけを長引かせて…

「そろそろ着くね…」

「そう…ですね」

だけど、そんなことは無理だから…

時間は戻ることではなく着実に進み続けるのだから…

一步踏み出したい。

だけど私にはそんな勇気もないし、秋夜様を困らせてしまうだけ…だから、結局は流れゆく時に身を任せるしかなかったのです。

秋夜SIDE

淡雪と遊園地に行った休日の明けた月曜日、僕は重い足取りで学校

に向かっていた。

「はあ…」

晴香になんて言おうかな…」

金曜日は勢いだけで晴香の家を飛び出してきてしまったが、今日は謝らなくちゃならない。しかし、淡雪のことをなんて説明したらいいかわからないし、なんて謝ったらいいかわからない。

そんなことを考えながら歩いていると前方に中学時代からの親友である優希を見つける。

「よっ、優希！」

いつものように優希の背中をパンツと叩きながら話しかける。

「なんだ秋夜か。俺に話しかけんなよ」

なぜだか優希は不機嫌な態度を丸出しにしてさっさと歩いていってしまった。

なにか優希の気に障るようなことでもしたのだろうか？

特に心当たりはないから、もしかしてただ単に虫の居ところが悪かったのだろうか？

それだといいいのだが、どうも僕に敵意を向けていた気がする…

まあ、気にしても仕方がないので学校へと向かって歩いていく。

〈学校〉

まいった…

教室に入る前に一番会いたくない人と鉢合わせてしまった…
いや、でもいつかは言わなきゃならないんだし…

「あの、はる「うるさい！私に話しかけないでよ！」

そう言うとき晴香はもと来た道を戻っていつてしまった。

僕が悪いのだが、当然ながら不機嫌なオーラを体中から発している…
こりゃ、本格的に嫌われちゃったかな…

無理もないよね。食事に招待してくれたのに食べずに帰っちゃった
んだから。

あの時は思い付かなかったが、もっとうまく事を運べたのではない
だろうか？

今ではそう悔やまれる。

悔やまれるのだが、今さらどうしようもないことぐらいはわかって
いる。

「はあ…

今日はなんか憂鬱だなあ…」

そう愚痴るように言いながら教室の扉を開ける。

するとクラス中の視線が一度僕に注がれ、みんな明らかな嫌悪を示
してそっぽを向いてしまった。いったいどうなってるんだろ…

晴香だけならまだしもなぜみんなまで……？

うつ、みんなの視線が痛い…

ああ、なんでこんなことになっちゃったんだろ…

〈放課後〉

「はぁ……」

今日は一日散々だったなぁ……」

これで今日、ため息をつくのは何回目だろうか？

数えきれないほどしたかのようにも思えるし、数えるほどしかして
いないのかもしれない。そんなこともわからないほど気が滅入って
しまっているのだ。

昼時にはいつものメンバーから仲間外れにされるし、部活ではいつ
の間にか顧問に辞表届けが出されているという陰湿な嫌がらせを受
けるわけで最悪だ……

ガラガラ

そんな沈んだ気分のまま帰宅する。

「お帰りなさい秋夜様。今日はおでんですよ」

「うん、ありがとう淡雪」

よかった……

淡雪は僕に今まで通り接してくれるよ。

「秋夜様『がつこう』で何かあったのですか？」

「うん……」

なんでか知らないけど、みんなが口も聞いてくれないどころか嫌が
らせばかりするんだ……」

もう、僕の休まる場所は家だけ……いや、淡雪と一緒にいるときだけだ…

「大丈夫ですよ」

小柄な淡雪が玄関先でうなだれる僕を包み込むように抱き締めてくる。

「大丈夫ですよ。私は秋夜様を決して裏切ったりしませんから。私はいつでも秋夜様の味方ですから安心してください」

「淡雪……」

女の子に抱き締められて泣くなんて情けない。
情けない姿を好きな人の前で晒すなんて嫌だけれど、今は泣きつく
ことしかできなかった……

淡雪SIDE

昨日の秋夜様、明らかに精神状態が不安定でした。

今朝は一応、いつも通りに発たれましたけど心配です…

なにか秋夜様を元気付ける方法はないでしょうか？

私は秋夜様の友人関係を知っている訳ではないですから、そちら方面での助力は無理ですし………そうです！

秋夜様にとびつきり美味しいものを食べてもらいましょう。

そつすればきつと笑顔になってくれる筈です。

そうと決まれば早速買い出しにいかないですね。

秋夜SIDE

「最悪だ…」

放課後、なにをするわけでもなく早々に家路につきながら自分を悔やむ。

なにがあつたのか話すのも億劫なくらい嫌なことだらけだ…

早く…早く家に着いて淡雪と話したい。

淡雪なら僕の話聞いてくれる。

淡雪なら僕と話してくれる。

淡雪なら僕と笑いあってくれるんだ…

半ば自嘲気味になりながらも帰宅をする。

「ただいま…」

あれ？

いつもなら元気に迎えてくれる淡雪の声がしない。

それどころか部屋の電気が全て消えていた。まさか…まさかそんな事ないよね…

だって淡雪は僕を裏切らないって…

だって淡雪は僕の味方だって…

だって淡雪はいつも僕と向き合ってくれたじゃないか…

そんな希望的観測を持ち、リビングに向かう。
そこにはテーブルに乗った一通の手紙があった。

『秋夜様へ

今までお世話になりました。

正直な話、もうあなたといえるのは退屈でつまらないので家を移らせていただきます。あなたには会いたくありませんから、どこか遠い所に行きます。

では、顔も見たくありませんので絶対に探さないようお願いいたします。

淡雪より』

しばらく状況が飲み込めず漠然とその場に立ち尽くすしかなかった。

淡雪が僕を見捨てた…？

裏切らないって言ったのに…

僕にはもう淡雪しかないのに…

終わった…

なにもかもが、全て…

淡雪SIDE

「ただいま戻りました！

秋夜様、今日は肉じゃがにしましょう！」

ジャガイモにニンジン、ひき肉を入れたびにーる袋を持ちながら帰

宅します。

あれ？

秋夜様の靴はあるのに家の中が真っ暗なままですね。

もしかして、秋夜様はもう寝ちゃったんでしょうか？

そんな疑問をもちながら私はリビングへと入り、電気をつけます。

「っ！？」

思わずなにも声になりませんでした。

そこにある光景が信じられなかった。いえ、信じたくなかったんです…

秋夜様が死んでいたなんて……………

リビングには横たわる秋夜様。一見すると寝ているようにも見えますが、なぜだか死んでいるということが確信できたんです…

私は茫然としながらも秋夜様の亡骸に泣きつくようにします。

「秋夜様！秋夜様！！」

どうしてなんですか……

私じゃ…だめだったんですか……

私じゃ…秋夜様の力にはなれなかつたんですか……」

こんなことを言っても意味がないことはわかっている。

冷たくなった骸は再び動きだすことはない。

だけど、こうでもしなければ自分を保てない気がした。

私にとって唯一の存在だった秋夜様を失ったからっぽの私は……

「絶望してるかい？」

突然の後方からの聞き慣れた声に振り向く。

「訳がわからないって顔してるなあ？」

そこにいた人物の言う通り、訳がわからない。本当に訳がわからない……

なんで秋夜様が二人いるの……？

「あなたは誰なんですか……」

ただ言えることはそれだけ。

この人物が秋夜様ではないということ。

「ククク。」

誰って、お前の大好きな秋夜様だぜ？」

「嘘です！」

秋夜様はそんな下卑た笑い方はしません！」

なによりも秋夜様に感じた温かさが感じられない。

「下卑ただなんて酷いこと言ってくれるねえ、一夢^{ひとゆめ}」

一夢？

この人物はなにを言っているのでしょうか？

「ククク。」

そうだ、今は淡雪つて名前だったなあ、座敷童子よお？」

「座敷童子……」

「それすらも忘れちまったってか？

こりや傑作だ。いいこと教えてやるぜ。

お前は俺から秋夜を守るために遣わされた座敷童子だ。

記憶がないのも今回が初めての主人なんだから当然なんだが、まさか自分が座敷童子だってことまでわすれてるとはな。

まっ、どの道お前が秋夜を護れなかったから秋夜は死んだんだ」

「私が…秋夜様を……」

私が悪いんだ…

座敷童子である私が人を好きになるべきじゃなかったんだ…

私が役目も思い出さずにうつつを抜かしてたから秋夜様は………

「ククク。いいねえ、もつと絶望しな！

そしてからっぽになりやがれ！」

言われなくても私はもうからっぽだ。

からっぽの私はもうなにをすることもできないし、する気もおきなかった…

明久SIDE

「その後、いつの間にか私を秋夜様の元へと遣わせた、いわば座敷童子の主である方の元へと連れ戻されていました。

そして私はそこで私自身の真名と秋夜様の想い、行動を聞かされたのです」

そう言つて淡雪は話を締める。周りを見れば、みんな一様に暗い顔をしていた。

あれだけの話を聞いたのだから無理もないだろう。

それなのに淡雪は嫌な顔一つせず、僕らに……いや、きっと淡雪はいつでも笑っていたいんだ。天国にいる秋夜さんが好きだった笑顔を絶やさないために。

「お察しの方もいるかと思いますが、秋夜の偽物が妃様を拐ったドッペルゲンガーです。そして秋夜様のフリをして、秋夜様を孤立させたのも……」

「だが、秋夜の時も今回もそいつはなにがやりたいんだ？」

さすが、雄二は切り替えが早いなあ…

僕なんて未だにブルーな気分だよ……

「秋夜様の時は居場所を食べるのが目的でした。

ドッペルゲンガーは狙った人を孤立させ、その人のいるはずだった居場所に空いた穴をいわば栄養源としているのです。そして今回狙われたのが吉井様なんです」

「なら、なんで姫路さんが…」

また、僕のせいで姫路さんに迷惑かけちゃってるんだ…

「おそらく妃様を拐うのが一番効果的だとふんだのでしょ」

「……納得できる」

霧島さん、そこ納得するところじゃないからね！
霧島さんも最近、順調におかしくなってきたる…

「じゃが、なぜ明久が狙われておるのじゃ？」

「それは秋夜様と吉井様が似ているからだと思われます。
やはり、ドッペルゲンガーの方にも好みというものがあるの
でしょ」

僕と秋夜さんが似ている？

確かに話し方とかは結構似ていたけど…

「はた迷惑な話ね。」

ところで、あんたはずっとドッペルゲンガーを追いかけてるの？」

「いえ、私が吉井様の配属になったのは偶然です。ですが――」

淡雪が一旦合間をいれる。

「絶対にここで仕留める。だよな？」

「はい」

僕の答えに満足いったのか淡雪は笑顔でこたえてくれた。

「話は聞かせてもらったさね」

突然、しわがれた声と共にババアと教師陣が入室してくる。

「ババア、なんでここに!？」

雄二と僕の声がきれいにハモる。

「あんたらの仲間が私を呼びにきてね」

「仲間？」

頭の上に疑問符を浮かべる僕達をよそに教師陣の間から須川君たちがでてくる。

「一応、これでも吉井のことわかってるつもりだぜ？」

「なんでも抱え込もうとするなよ」

「友達に気遣いはなしだろ？」

「みんな……」

僕の気遣いはみんなにバレていたんだ…

いや、気遣いなんかじゃなくて、わがママが。

それでもみんなは僕たちのために教師を呼んできてくれたんだ…

「ババア、後でたっぷり話してもらいたいことがあるが今は姫路が先だ」

「わかってるさね。館内の妖怪システムはすべて停止させといたよ。それに本来は私ら教師陣が行くべきなんだろうけど今回はあんたに任せたよ」

そう言つてババアは僕の方を指さす。

「いいんですか…？」

ババアにとつても成績優秀な姫路さんは必要な人材の筈だ。それを僕なんか…

「どうせ止めたつて聞きやしないだろ？」

「そうですね」

もともと僕一人でも姫路さんを助ける予定だったのだから当然だ。

「だろ？」

それに私はあんたを結構評価してるんだよ。

殊更、姫路瑞希のことに關してはね。

行つてきな吉井明久！」

「はい！」

ババアに激励されて僕は部屋を飛び出す。
僕に続くようにいつものメンバーも着いてくる。

「雄二と霧島さんは右を！」

秀吉にムツツリー二、島田さんは左を！

明希と淡雪は僕に着いてきて！」

「oooooooooooo（はい）（うむ）（ええ）！」「」「」「」

僕の指示でみんなが散り散りに別れてく。

ぬりかべも消えているため、廊下を使うのにも何の不自由もない。

この勝負、淡雪のためにも秋夜さんのためにも、なにより姫路さんのために負ける訳にはいかないんだ！

第54問 僕と過去と二人の宿敵（後書き）

次回、やっと瑞希の出番があります。

ここまで長かった…

あと、私事ですが本日就職試験がありました。

受かってるといいのですが、不況ですので心配です…

第55問 僕と決着と二重協奏曲（前書き）

夜兔さん、來霧さん、感想ありがとうございました！

第55問 僕と決着と二重協奏曲

明久SIDE

淡雪と明希と走りながら考える。

僕は淡雪のことを妖怪なのに食い意地はつてる変なやつと思ったこともあったけど、本当は違ったんだ。秋夜さんとの思い出を……自分が座敷童子ではなく、淡雪だということを忘れないために必要のない食事をとってきていたのだ。

名前にしてもそれが当てはまる。淡雪は僕に『一夢淡雪』だと名乗った。

名字は引き継ぐもの。それに引き換え、名前は自身を表すもの。

淡雪が自分の真名と『淡雪』という秋夜さんからもらった名前、どちらを大切にしているかなど考える必要もない。

「淡雪、絶対に勝とうね」

「はい。私も非力ながら尽力いたします」

「とつ、意気込んでるところわりいが、ビンゴらしいぜ」

明希の声に前方に視線を向けると、そこには通路が二つに別れていて左右に灯籠が置いてあった。妖怪システムをOFFにしているのに、灯籠が館内にあるのだから一目瞭然だろう。

「化け灯籠ですね。」

元来は旅人をあらぬ道に迷わせる妖怪ですが、おそらくヤツに使役されているでしょう」

淡雪がいつものように解説してくれるが、今は姫路さんのもとへいち早く着きたいんだ。そう思い、まっすぐに進み続ける。

二つの別れ道をまっすぐに進む。それはいわば――

「^{マスター}主人壁にぶつかるぞ！」

「いえ、これでいいんです」

僕は腕で顔を守りながら壁におもいつきりぶつかる。

目を開けるとそこは、みんなが使っている個室と同じ部屋だった。ただ一つの相違点は窓を含めた出入口が存在しないということ。それでいて、どういう訳だか周りをちゃんと見渡せる。

大方、これもドッペルゲンガーがなにかを仕組んだのだろう。

「よつと！」

「ふう……」

後ろの壁から明希と淡雪も部屋に入ってくる。

「驚きました。まさか吉井様が化け灯籠の性質を知っているなんて……」

「知らないよ」

僕は僕の思う通りに行動しただけなのだから。
以前、雄二が僕に言ってくれたように……

「えっ？」

じゃあ、どうして壁に突っ込んだりなんかしたんですか？」

「そこに姫路さんがいた気が……姫路さんへの近道だと思ったから。
なら、せめて自分の想いくらいはまっすぐにつてね」

なぜだかそれが最善の策だと確信できたから。

僕が姫路さんにしてあげられることだと思ったから、なんにも恐くなかった。

「……………不思議な方ですね。ほんとに……」

真実を見極める力があるのか、あるいは想いの力なのか……

私も、私たちもそれだけの関係になれていれば……

いえ、すべては遅すぎたんですよね……」

秋夜さんのことを思い出しているのか、淡雪は暗い顔でうつむいてしまった。

「遅すぎたなんてことはないよ。」

秋夜さんは淡雪のことが大切だったから…本当に大切だったから拒絶されたと勘違いして…それが堪らなく辛かったただけなんだ。それだけ淡雪のことが好きだったんだよ」

僕だって姫路さんに拒絶された時は悲しかった…辛かった…

秋夜さんの気持ちがすべてわかるなんておこがましことは言わないけど、少なからず好きな人に拒絶される気持ちはわかっていてもりだ。

そう、姫路さんに初めて拒絶されたあの日の気持ちは今でも僕の中で残っているのだから……

僕の中で確固なる恐怖として。それは残っていることがおかしい記憶なのに…

「私は…秋夜様のお役にたてたのでしょうか…」

「うん、きっと秋夜さんは淡雪といわれて…会えて…関われて、とっても幸せだったんだと思うよ」

僕も姫路さんに同じ想いを抱いている…

その想いの向かう先は違えど似たような感情を秋夜さんも抱いていたのだろう。

「ありがとうございます…」

「どういたしまして」

いくらか明るさの戻った淡雪にほっと安堵する。

と、その時、前方の壁が歪んだかと思ったら、そこから姫路さんが走り出してきた。

「明久君！」

僕を見つけた姫路さんは安堵した表情で僕の方へ走りよってくる。久しぶりに見る姫路さんの姿。一日も間が空いた訳ではないが懐かしく感じる。だけど、だからこそ――

「止まれ」

ささいな違いにすら敏感になってしまっただ。

「明久君、どうしたんですか？」

姫路さんの姿で声でそいつは僕にしゃべりかけてくる。

「その声でしゃべるな！虫酸がはしるんだよ！」

「ひどいです明久君……」

明久君は私のことを嫌になっちゃったんですか……？」

姫路さんの姿をしたそいつは手の甲で涙を拭くようしながら言う。

「姫路さんのことは好きだ。大好きだ！

だけどお前は姫路さんじゃない。

いや、僕の知っている姫路さんの姿をしてるし声も同じだ。

だけどそれは全部、僕の知っている姫路さんであって僕の好きな姫路さんじゃないんだ！」

姿形だけを真似したところで騙されるものか。

そんなので騙されるくらいなら最初から姫路さんを好きになる資格なんてない。

姫路さんのことが好きだからこそ、冷静な判断ができるんだ。

「ちっ、どいつもこいつもウザッテェなあ！」

そいつはさっきまでの姫路さんの声とは打って変わった低くどすのきいた声をだす。

「いい加減、姫路さんを返してもらうぜ」

「秋夜様の仇、ここでとります！」

二人も臨戦体勢に入る。

「ククク。やけに威勢がいいじゃねえか一夢？」

「黙りなさい！」

私は一夢ではなく淡雪です！」

「いまだにその名前を引きずってるとは、よほど秋夜様に執心らしいなあ」

「てめえ、人の想いをバカにしてんじゃねえぞ！」

淡雪が木刀を構え、ドッペルゲンガーに斬りかかる。

よし、この間合いなら避けられることはない！

「なっ！？」

当たったかのように見えた木刀はまるで空を斬るかのようにドッペルゲンガーを通り抜けた。

「ククク。」

お前ら、霊体に物体が通用するとも思ってるのか？」

くっ…

今までの妖怪は召喚獣システムの一部だったから特に気にならなかったが、相手は本物の妖怪だ。正攻法で勝てるわけがない…

「ダブル！」

だけど、なにもしないわけにもいかないので一応は副獣を召喚しておく。

Fクラス吉井明久 世界史138点

召喚獣 明希 世界史142点

「ククク、またそれかよ。」

ほんと、お前ら人間ってバカばかりだよな。

さっきの女だって同じことするわ、『明久君はどこなんですか！』
ってぎゃあぎゃあうるせえし、ほんとバカばかりだぜ」

「誰が…バカだって…？」

召喚獣ではなく、僕自身が走り出す。

「お前に姫路さんのなにがわかるっていうんだ！」

おもいつきり拳を振り上げる。

僕がバカ扱いされるのは構わない。事実、バカなんだから。

だけど、姫路さんを……誰よりも努力している姫路さんをバカ扱いだなんて許せるわけじゃないか！

勉強にしても、試召戦争にしても、苦手なスポーツにだって真剣に取り組んでいるんだ。それなのに……それなのに……

「そんなことすらわからないお前がバカなんだよ……！」

バゴツ！

「なにっ！？」

自分の体に僕の拳が当たったことが理解できないのかドッペルゲンガーは目を見開きながら驚く。………つて、えっ！？

なんで僕、ドッペルゲンガーに触れてるんだ！？

姫路さんのことをバカにされて後先考えずに殴りかかったのだから、なにか策があつたわけではない。当然、疑問が残る結果となる……

「霊体密度を上げれば物質は霊体に触れることができる」

僕の後方で淡雪が静かに言う。

さっき殴った拳を見てみれば不可思議な靄のような光をまとっているから、おそらくはこれのことだ。

「しゃらくせえ！」

触れられるようになったからってテメエらが勝てる理由にはならねえんだよ！」

そう言いながら、ドッペルゲンガーは右手を頭上に上げる。

そこにはまるで力が集約されていくかのように黒い球体が膨張して

いつていた。

「消し飛びやがれ！」

ドッペルゲンガーが右腕を振り下ろすと、球体は僕のほうに向かって飛んでくる。大きさも速さもさほどある訳ではない。だけど、さっきから足が動かないんだ…まるで麻痺してしまったかのように…

「吉井様！」

叫び声と共に淡雪が僕を庇うように立ち塞がる。

「淡雪！」

「なに考えてやがるんだ！」

明希も足が動かないのか叫ぶだけだ。そんな僕たち二人に淡雪は顔だけを振り向かせる。

「あなたたちは私の希望ですから…」

最期まで笑顔で…

一人が愛した笑顔で……

たった一人のための笑顔を残して淡雪は消えていった。

「ククク、こりや傑作だ。

霊体密度の操作もできない人間だけを残して自分が犠牲になるとはな

「犠牲なんかじゃないさ」

僕の右腕が白く淡い光が包み込まれる。
それは輪の型をとり、一つの腕輪となった。
淡く白く光るその腕輪が僕に力を与えてくれるのがわかる。

「二重協奏曲！（ダブルコンチェルト）」

僕が起動ワードを唱えた瞬間、副獣が消滅した。

……違う。僕が副獣と一体化したんだ。

その証拠に僕の左手には僕にあったサイズの木刀が握られていた。

「お前が木刀を握ったくらいでどうにかなると思うなよ」

「それはどうかな」

明希と共に息をあわせて一瞬で相手を挟み込む。

そして相手が目移りしている隙に駆け抜け様に居合い斬りを放つ。

ザシュッ！

ズバッ！

「バカな…」

一夢はもついないはずなのになぜお前らは俺に触れられるんだ」

斬られた部分を押さえながらドッペルゲンガーは苦しそうに言う。

「お前には理解できこつねえぜ！」

明希が押し出すように相手をつく。

「人の想いを利用し、踏みにじるようなお前には！」

僕はそれを柄の部分で受け止めるようにしながら突き返す。

「これがお前のバカにしてきた想いの力だ！！」

腹を抱え、うずくまるドッペルゲンガーを二人で一閃する。
その軌跡には淡く儚い白光がひかれていた…

「この俺が人間ごときに負ける…だと…？」

ドッペルゲンガーはそのまま、その場に倒れ込む。

「さあ、早く姫路さんを解放しろ」

木刀を相手の顔面に突きつけて脅す。

「ククク。なにか勘違いしていないか？

俺たち妖怪は真名を知られない限り死ぬことはないんだよ」

「フォン」

ただ一言、あの陽気な力カシの妖怪の名前を口にする。

「なっ……」

「おかしいと思ったんだよ。どうして一度も会ったことのないドッペルゲンガーが僕にとって姫路さんが有効って知ってるのかって。

なんてことはない。山で僕たちの行動を見ていただけなんだろう？
それにドッペルゲンガーは認識を狂わせる妖怪だ。フォンに違和感
をもたなかったのもこれでつじつまがあう」

「お前はいい…」

「ただのバカな学生だよ」

「ただし、姫路さんを拐ったのが運の尽きってな」

僕に続くように明希が言う。

「姫路さんは無事なんだろうな」

「ああ。この壁の奥だ。」

あいつは返してやるから見逃してくれよ」

壁といえば、こいつが出てきた場所だろう。

「そう…」

なら見逃してあげてもいいよ」

「ククク。恩にきるぜ」

そう言うドッペルゲンガーはフォンの姿に戻り、僕たちの入って
きた壁から出ていった。

「逃がしてよかったのかよ…」

「大丈夫だよ。」

だって外には境内院さんがいるし、僕たちはちゃんとした滅し方わからないでしょ？」

「えげつねえ……」

明希が多少軽蔑混じりの視線を僕に向けてくるが理には叶ってるはずだから問題ないだろう。

それに、半端にやって取り逃がしたとなれば淡雪に申し訳がたたない。

「まっ、最後の詰めといこうか」

「だな」

奥の壁に触れると、ぐにやりと壁が歪み中に入れるようになっていた。

その奥に進んでいくと、姫路さんはすぐに見つかった。どうやら気絶しているようだが、目立った外傷はない。

「よいしょっと」

できれば再会を喜び合いたいが、起こすもはばかれたので担いだまま謎の部屋から出る。

「よっ、明久。お姫様の救出ご苦労さん」

廊下に出れば雄二が笑いながら話しかけてきた。

雄二の後ろにはみんなもいる。

「雄二、みんな……」

あれ……？

みんなの顔見たら安心してきて……………

バタッ！

第55問 僕と決着と二重協奏曲（後書き）

次回はついにラブコメパート！
そろそろ強化合宿編も終了です。

第56問 僕と祭りと招待券（前書き）

きるぐまー1号さん、感想ありがとうございました！

第56問 僕と祭りと招待券

明久SIDE

「——んっ……」

「目が…覚めましたか？」

「姫路さん……」

目を開けると、姫路さんが僕のことを心配そうに覗き込んでいた。

「僕はたしか……」

「姫路を助けた後に気絶したんだ」

声がした方を向くと姫路さんから少し離れたところに雄二がいた。

「あっ、雄二いたんだ」

「お前をここまで運んでやったのにその言い種か？」

雄二が呆れ半分、怒り半分といったふうにする。

たしかに、いくら相手が雄二でもお礼は言わなきゃだね。

「そうなんだ……」

姫路さんの安全を確保してくれてありがとう」

「つたく、お前らしいこたえだな…」

なぜだか雄二は嬉しそうに納得している。

僕らしいっていったいなんのことだろうか？

僕は普通のこと言っただけなだけども…

「明久君」

姫路さんが僕に優しく諭すように語りかけてくる。

僕はそれに合わせるように姫路さんへ視線を戻すと、なぜだか姫路さんの頬にはうっすらと涙の痕があった。

「明久君はもっと自分を大切にしてください。」

私の心配をしてくれるのは嬉しいですけど、私にとっても明久君は大切な人ですよ。だから、もっと自分を大切にしてください」

「ごめん…」

たしかに姫路さんの言う通り、僕は少し自分を雑に扱っている節があるだろう。

だけれど、これは僕自身がだした答えなのだから今さら覆す気もない。

姫路さんのためなら僕はなんにだって――

「そうやって、また嘘をつくんですね…」

「えっ…」

そうやって姫路さんはまた僕の嘘を見抜くんだね…

どうして僕の隠したいと思ったことばかりいつも……

このままじゃ、いずれ僕の想いすら察せられてしまいそうだ…

「言葉ではわかったフリをして、本当はなにもわかっていないじゃないですか！

どうして……どうしたら明久君は自分を大切にしてくれるんですか！」

「おい姫路、そこまでにしとけ」

「いいんだ雄二……」

姫路さんを止めにはいるうとした雄二を僕が制止する。

「姫路さん……」

姫路さんの言いたいこともわかるよ。

だけれど僕には僕なりのやり方があって、それで大切な人のなにかを護れるなら僕はそれでいいんだ」

大切な人が君だなんて言えない。

言ってしまうばこういった会話すらできなくなってしまうから……

「なら私のたい「差し入れ持って来たぞ」

突然、部屋の扉が開いて鉄人が入ってきた。この上なく間が悪い……当然だが、三人の視線が鉄人に集まるわけで……

「こほんっ……」

えっと……なんだ、すまん。これは好きに食ってくれ」

そう言っ透明タッパーに入った焼きそばを三人分置いていってく

れた。

「なんで焼きそば？」

「そうか、明久は寝込んでたから知らなかったんだな」

「なんでも、ふもとの村でお祭りをやっているそうですよ」

祭りか…

姫路さんの浴衣姿はさぞかわいらしいんだろうなあ…

というか、姫路さんならなに着ても似合うと思うけどね。

「そうなんだ………って、今日合宿何日目！？」

「五日目だ」

はつとなり、窓の外を見ればもう夕暮れ時の空だ。あれ？

寝ながら夕暮れ時の空を窓から見るなんてデジャブ？

って、そんなことはどうでもいいって！

それよりも僕の意中の人と温泉ピンポンしたり、気になるあの娘と内緒話をしたり、姫路さんと星空を見上げながら語り合う計画が台無しじゃないかあああ！

「（段々と人物が特定できるようになってるところか、最後は名前だしてやがる…

というかぱっと見、明久が三股野郎に見えるのは気のせいかな？

いや、あいつに限ってそれはないから単純に明久の言語能力の低さだろう）」

なにか雄二がさっきからぶつぶつ言っているが特に気にすることは

ないだろう。

それよりもどうやって残り少ない時間で姫路さんとの時間を確保するかが重要だ。

「雄二、祭りのやってる場所詳しく教えて」

「この旅館から西に200メートル程の所でやってるが、招待券がないと無理だぞ」

「招待券？」

小さな村祭りのはずなのに招待券が必要なんて何様のつもりだ…

「このことですよ」

そう言って姫路さんは胸ポケットから紙でできた招待券を取り出した。ん？

あれってたしか……

「あっ！

それなら僕も持ってるよ！」

はっと思いだし、バックから姫路さんのもっているものと同じものを取り出す。

「この中で持っていないの俺だけかよ…」

ところで、二人ともどこでそれを手に入れたんだ？」

「たしか…」

姫路さんと雄二と変な人が出てきた夢を見た次の日の朝、枕元に置

いてあつただけっかな」

「私も同じです。」

明久君と坂本君、それに知らない方が出てきた夢の翌朝でした」

「なんだよそりゃ……」

雄二が呆れたように言うが、僕だって理由がさっぱりなのだから仕方ない。

「まっ、逆に俺は招待券なんて持ってなくてよかったかもな。そんな限られたやつしか参加できない祭りに参加したら翔子になにされるかわかんねえから……」

「安心してください、坂本君。」

この招待券、一枚で二人入場できるらしいですから」

雄二に対する死刑宣告を姫路さんが嬉々として言う。

「そうか、よかったな明久。お前ら二人で祭りに二回参加できるじゃないか」

雄二はあくまでも目の前の現実を認めないつもりのようだ。へそまがりもここまでくると霧島さんがかわいそうである。

「雄二、招待券を見ると祭りは今日限りで一枚でその日、何回でも入退場できるらしいよ。だから、これは霧島さんにあげるね」

「……ありがとう。吉井はいい人」

雄二の隣に座っている霧島さんは招待券をもらって嬉しそうだ。

うんうん、やっぱり誰かのためになることをすると気持ちがいいね。

「翔子、一つ聞いてくれるか？」

「……エッチ」

「その反応はおかしいだろ！」

頬を赤らめる霧島さんと自棄になる雄二。この二人も相変わらずだなあ……

「……雄二が私に言うことを聞かせようとしてくる。きっといやらしいこと」

「そんなこと聞きたいわけじゃねえ！」

ただ、なんでお前がさも普通というふうにいるのか聞きたいんだよ！」

「……呼ばれた気がしたから」

「明久、てめえの責任か！」

そう言つて雄二が敷き布団に座っている僕の襟元に掴みかかってくる。

「待つてよ雄二！」

なんでもかんでも人の責任にするのは良くないって！」

「……吉井の言う通り。」

私は雄二の心が私に会いたがってたから来ただけ。
だから雄二のお望み通り、今から二人でお祭りにいく」

あつ、霧島さんが雄二にアイアンクローを決めた。
あまりの早業に思わず惚れ惚れしそうだよ…

「うわっ!？」

離せ翔子! 助けてくれ明久! 姫路!」

まあ、当然ながら僕と姫路さんはそれを苦笑しながら見ているしかないわけで…

「いつちやいましたね」

「そうだね…」

姫路さんも誰か誘って行ってくれば?」

姫路さんが楽しめる機会を僕のなんかのために潰してほしくない。
せめて合宿で楽しいこともあったと言えるようにしてあげたいから…

「じゃあ、明久君…」

私と一緒にお祭り出してくれますか?」

姫路さんが僕に気遣って、こう聞いてきてくれることも今まで経験から予想の範囲内だ。

「ありがとう姫路さん。」

だけど、僕は姫路さんに祭りを楽しんできてほしいんだ。
だから、姫路さんが一番楽しめる人を誘いなよ」

ここで僕が選ばれる可能性はないだろう。
最近、少しだけ近づいてきた感覚はあるが流石にそこまでの関係になっ
て――

「姫路さん……？」

僕の右手に伝わる温かな感触。

それは小さく、儚く、僕の大切な人の手で……

「私は明久君と行きたいんです。

明久君とお祭りに行けるのが一番楽しいんです。

だから、私と一緒にお祭りに行ってくれませんか？」

「僕なんかでいいの？」

繋がれた手から姫路さんに視線を戻せば、僕の探していた笑顔がそこ
にあった。

「明久君でいいんじゃないくて、明久君じゃなきゃダメなんですよ」

そう言う姫路さんの笑顔を見て思う。

そうか……これは姫路さんなりの恩返しなんだ。

まがりなりにも姫路さんを助けることのできた僕への……

また、僕の中のバカな僕が勘違いをおこしてしまいそうな状況が偶然
できあがってしまったただけなんだ。

なら、そのことを念頭において恩返しを受け入れればいいじゃない
か。

結局、束の間の夢とわかっていても、その誘惑に勝てないのだから……

「うん、ありがとう姫路さん。」

じゃあ、日も落ちかかってるし早く行こうか」

たぶん、今からじゃどんなに急いでも夜の祭りを楽しむ事になっちゃうけどね…

「では、着替えてきますから先に玄関で待っていてくれますか？」

「うん」

僕の反応を確認すると姫路さんは、さも僕と行く祭りが楽しみで仕方ないというふうに出ていってしまった。って、しっかりするんだ僕。

さっき、自分を律したばかりじゃないか。

姫路さんは『僕といく祭り』が楽しみなわけじゃなくて『祭り』そのものが楽しみだけなのだから。

「はあ…」

僕のバカさ加減にもほとほと呆れてくるね……」

第56問 僕と祭りと招待券（後書き）

次回は二人でお祭りの予定です。

第57問 僕と甘さと優しさに必要なもの（前書き）

青龍さん、感想ありがとうございました！

第57問 僕と甘さと優しさに必要なもの

明久SIDE

「お待たせしました明久君」

「あつ、ひめ——！？」

落ち着け、落ち着くんだ僕。

開始数行目で鼻血を出す主人公なんてお笑い草もいいところだぞ！

「どうしたんですか明久君？」

必死で鼻をつまんで抑えている僕に疑問をもったのか姫路さんが前屈みでたずねてくる。見える！あと少しで浴衣の間からその柔らかそうな——うっ！？

収まりかけたものが再び再来してきてるって！

「な、なんでもないんだ姫路さん」

平静を取り繕っている暇もない…

それにたぶん、本人は自身が生物兵器になっっている自覚がないのだろっ。

僕もある程度は予想していて取り乱さないように精神を集中させていたというのに、その研ぎ澄まされた精神も一瞬にして崩壊してしまったのだ。

恐るべし姫路さん…

「姫路さん、ここに来るまでに誰かに会った？」

もし会ったなら、その人の記憶から姫路さんのこの姿を消さなければいけない。

さもないと、僕のライバルが余計増えるはめに…

「会ったのは木下君となぜだか鼻血をだして倒れていた土屋君だけです。」

ムツツリーニ、君の気持ちはよくわかるよ。

僕だって危うく天に召されるところだったんだから…

まあ、秀吉は姫路さんに変な気をもつことはないと思うから安心かな。

「そろそろいきましょ、明久君。」

「うん、あんまり遅くなると鉄人に怒られちゃうからね。」

鼻血の方もようやく収まってきたので姫路さんと並んで歩きだす。
ここに来る前に鉄人に出かける許可を得にいったのだが、案外すんなり了承してもらえて幸いだった。なんだかすんなりいきすぎな気もするけど……

「そういえば姫路さん、体の方は大丈夫？」

「はい、特に負傷したわけでもありませんから大丈夫ですよ。ただ

――」

途端、姫路さんの顔に陰が落ちる。

「どうしたの？」

「その…」

「淡雪ちゃんのことを……」

「……知ってたんだ」

「はい…」

「明希君が話してくれました。明久君のこと、淡雪ちゃんのこと、全部……」

「明希のやつもお節介がすぎるよ…」

「こんなことするやつじゃないと思ってたのになあ…」

「すみません。私のせいで淡雪ちゃんが……」

「たぶん姫路さんは自分が拐われたから淡雪もあんな目にあったと思って気に病んでいるのだろう。だけど、それは——」

「違うよ」

「えっ？」

「姫路さんが涙で濡れた顔をあげる。」

「姫路さんの責任なんかじゃないよ。」

「僕にも淡雪にも自分のやるべきこと、成すべきこと、譲れないものがあつた。」

「それをただやり通したただけなんだ。」

「だから、きっと淡雪は誰も恨んでないと思うし、誰のせいでもない」

本当のところはどうかかわらない。

これは僕の勝手なエゴなのかもしれないのだから…

だけど、淡雪が僕たちを庇ってくれた時のあの笑顔。

あれは僕の大好きなそれと似ていた。

見るものに癒しと安らぎを与えてくれる笑顔。

そんな笑顔を憎しみをもった相手に向けることはないと思うから。

「ですけど、明久君にもみんなにも迷惑をかけてしまったことには変わりありませんし…」

「姫路さんは気にしすぎなんだよ。

一人で抱え込まないで。僕でよかったらいつでも相談にのるからさ」

姫路さんを安心させるように、いつものように笑いかける。

「その言葉…」

姫路さんがはつとしたようになる。

そう、これは姫路さんが僕に言ってくれた言葉だ。

僕が考え、思い直すことになったきっかけである言葉。

僕はこの言葉に……いや、何度も姫路さんに救われてきたんだ。

目に見える表面的なものじゃない。目に見えないもつと大切なところで。

だから、せめて目に見える事だけでも精一杯姫路さんの力になりたいと思った。

他の誰でもない僕が姫路さんの力に、助けに……

「僕は迷惑だなんて思ってないよ。むしろ姫路さんを助けられて…僕が助けることができてよかったと思ってるんだ」

「明久君は…優しいんですね…」

「優しいんじゃないさ。自分に甘いだけなんだ…」

淡雪が二人の人から聞いたあの台詞を言う。

秋夜さんの真意はわからないけれど、僕のは優しさじゃない。優しさとは無償で相手のことを思いやれることをいうんだ。

僕はただ、自分のために姫路さんを助けたにすぎない。

僕がそうしたいから行動した。それは決して優しさじゃない。

僕の自制が効いていないだけ……

自分に甘いから、こんなことになってしまっただ。

「自分に甘いことは…自分に優しいことはいけないことなんですか…？」

「それは…」

思わず答えに困ってしまう。

自分に優しいことがいけないことかどうかなんて考えたことなかった。

ただ、姫路さんが僕のことを優しいと言ってくれることに負い目を感じていただけで……

「私、思うんです。誰かに優しくできる人は自分にも優しいんだって。

だって、優しさを知らない人はどうやって人に優しくしたらいいかわからないはずなんですよ。だから、明久君はやっぱ優しいと思うんです」

いつものように姫路さんは僕に諭すように優しく言うてくれる。

「優しさを知らないと優しくできないか…

そうか…そうかもね。ありがと姫路さん。おかげでなんだか前向きになれたよ」

「こちらこそありがとうございますね」

僕の甘さは優しさを知るための甘さ。決して傲るつもりはない。

だけど姫路さんの教えてくれたことによつて、また僕の枷が一つとれた気がした。僕が姫路さんに辿り着くための枷。

自分で自分を律するためにつけたはずだったのに君と関わるところも簡単にとれてしまう。すべて取り去った時に僕の前に君はまだいてくれるだろうか？

僕が自分を制するのが先か、君が僕に見切りをつけてしまうのが先かは今はまだわからない…

わからないけれど、諦めるつもりなんてない。

僕はバカだからと君との距離もわからないんだ。

そんなみえすいた嘘で今日も僕は自分を騙し続けている……

第57問 僕と甘さと優しさに必要なもの（後書き）

なんだか祭りにいくまでが長くなってしまいましたね…
自分の計画性のなさに泣きたくくなります…

第58問 僕と祭りと花火にのせた言葉（前書き）

SHINさん、ハム信者さん、感想ありがとうございました！
見逃していましたが、ユニーク40,000突破です！
皆様のご愛読、心より感謝しています。

第58問 僕と祭りと花火にのせた言葉

明久SIDE

「わぁ……」

見てください明久君！

たこ焼きにたい焼き、綿菓子やリンゴアメもありますよ」

子供みたいに目を輝かせて楽しそうにする姫路さんを見て苦笑する。清涼祭の時も感じたが、姫路さんは祭りに対して特別な感情があるのか子供っぽくなることもある。まあ、そこもかわいいんだけどね。

「ははは、確かにどれもおいしそうだね」

「うう、笑うなんてひどいです…」

さては明久君、私が食いしん坊だと思ってますね…

（たしかにお腹まわりは少し太ってますけど、決してそういうものの食べ過ぎというわけじゃ…）」

なにやら姫路さんがぶつぶつと言ってるけど、周りの喧騒でなにを言っているのかいまいち聞こえづらい。

「まあ、姫路さん、まずはかき氷でも買ってかない？」

「そうですね。」

夏の夜にはぴったりです」

どうやら姫路さんがかき氷でいいらしいので、かき氷の屋台の前まで行く。

「なにになに……」

味はイチゴにメロン、レモン、ブルーハワイ、コーラか。
姫路さんはどれにする？」

「私はイチゴ味がいいです」

「僕はブルーハワイかな」

なぜだか知らないけど祭りでのかき氷っていうとブルーハワイを食べたくなるんだよね。ところであれの原料ってなになんだろう？

「すみませーん」

屋台ののれんをくぐり中に入る。

「いらっしゃい」

「……………なにやってるの境内院さん……」

独特の間延びした声で僕たちを迎えてくれた境内院さんに言う。

「なにつて、かき氷屋だよ？」

「最近の住職さんは夜店もやるんですね……」

姫路さん、それは絶対ないと思うから……

あたかも境内院さんが住職さんの代表みたいな考えはやめてほしいものだ。

「そういう意味じゃなくて、なんで境内院さんがかき氷屋をやっているのか聞いているんだけど…」

「ボランティア？」

「なんで自分のことなのに疑問系なのさ……」

「なんだか境内院さんと話すと調子狂うなあ…」

まあ、他も見ても回りたいから早くかき氷作ってもらおうと。

「とにかく…イチゴとブルーハワイを一つずつお願いね」

姫路さんの分も奢ってあげようと思い、財布をとりだす。

「二つで合わせて千円だよ」

「たかつ！？」

「なんでそんなに高いのさ！？」

かき氷が二つで千円なんてぼったくりもいいところである。

これでは、境内院さんが知り合いでもさすがに首を縦に振るわけにはいかない。

「おっと、そういえば今はサービス中なんだよね」

「サービスですか？」

姫路さん、嫌な予感しかしないからできれば聞かないでほしいんだけど……

「そうそう、カップル割引サービスだよ」
なんと、今ならカップルでご購入の方はかき氷が無料だよ！」

「無料！？」「

姫路さんときれいにハモリながら驚く。

千円なのが無料って一体どういう待遇なのさ……

「で、よっちゃんとみずちゃんはカップルなのかな？」

「えっと、それは……」

「（姫路さん、悪いんだけどここはカップルってことにしとかない？）」「

そう姫路さんに耳打ちする。

姫路さんには本当に申し訳ないが、特になにかする訳でもないからいいだろう。

「（そ、そうですね）」

姫路さんも僕の意図を理解してくれたのか頬を赤らめながらも了解してくれた。

頬が赤いのは女の子がカップルという言葉に憧れをもっているからだろう。

「も、もちろん僕たちはか、カップルだよ」

「そ、そうです。私と明久君はこ、恋人なんです」

姫路さん！？

なにも恋人だなんて言わなくていいよ！

いや、結果的にはカップルも恋人も同じ意味だけど、恋人って言われるとなんだか恥ずかしさが増してくるって！

「ほほー」

二人はカップルなんだね」

じゃあ、このかき氷はタダであげるよ」

そう言つて境内院さんはイチゴとブルーハワイのかき氷をテーブルの上に置く。

「ただあーし、カップルである証拠として『はい、あーん』をやつてもらつからね」

「「ええええ！？」」

『はい、あーん』とは、ラブラブのカップルにのみ許される神聖な儀式であり、主に女性が男性に手作り弁当等を食べさせてあげるアレである。

仲の良いカップルがそれをやれば二人だけの世界を作り出すこともできるが、それ以下の者がやろうと迫れば気まづくなること必須である。

もちろん、僕と姫路さんはカップルではないのだからそんなことができるわけがない。仮にやれば前述の通り、待っているのは破滅のみである。

「や、やりましょう明久君！」

見れば姫路さんは頬をより一層赤らめながら目をつぶって、僕の方

にストローでできたスプーンを差し出してきていた。

その上には当然だが、姫路さんのイチゴ味のかき氷が乗っている。

「姫路さん落ち着いて！」

なにも、かき氷が必須な訳じゃないから！」

「もう作っちゃったんだから、カップルじゃなかったらお代はしっ
かりもらうよ」

うっ…

まさに八方塞がりだ。

金欠の身にたかだか、かき氷ごときで千円払うのは痛すぎる…

かといって、ここで姫路さんを受け入れたら………あれ？

よくよく考えたら姫路さんがやってもいいって言ってるんだからいいのではないだろうか？

姫路さんが嫌がっているのに強要したらまずいのであって、姫路さんがいいと言っているのだからまったく問題は無いはずだ。

なら、多少恥ずかしくもあるが、ここは姫路さんの厚意に甘えよう。

「いただきます？」

なにを言っているのかわからないが一応は食前の挨拶をしてかき氷を口に含む。

「おいしい…ですか？」

片目を開けた姫路さんがたずねてくる。

うっ…

片目での上目遣いって案外威力でかいなあ…

「も、もちろんおいしいよ」

嘘です、すいません…

本当は緊張して味なんかわかっていないんだよ…

「さあさあ、次はよっちゃんがみずちゃんに食べさせてあげる番だよ」

「それもやるの!？」

「当然だよ」

くっ…

絶対、境内院さんはこの状況を楽しんでいるに違いない。

なんで、こう僕の周りには人で遊ぼうとする人ばかりなのだろうか…

「明久君／＼／」

姫路さんが目を瞑り、小さく口を開けながら待っている。

僕は姫路さんに自分のかき氷を食べさせてあげればいいんだ。

そう、たった一口でいいから姫路さんに食べさせてあげれば……

そ、そうすれば僕と姫路さんは間接キスすることに／＼／
って、ダメだダメだ！

今は目の前のことだけに集中するんだ僕！

「い、いくよ／＼／」

一度深呼吸を入れた後、意を決して姫路さんの口へかき氷をのせたスプーンを運んでいく。

パクッ

それは思った以上にすんなり入った。入ったのだが……

「……………」

緊張からなのか羞恥からなのか、姫路さんは僕のスプーンをくわえたまま離さなくなってしまった。

カシャッ

僕たちの後ろでシャッターなんかたかれてないし、ムツッリーニが走り去っていくのが横目で見えてなんかしてないぞ。

なにもない。なにもなかったんだ。

そう自分に言い聞かせながら姫路さんの口からスプーンを引き抜こうとする。

しかし、さっきにも増して姫路さんはスプーンを離さず、食いついているといわんばかりの状態だ。

「姫路さん、離そうよ」

「……………」

ダメだ…

完全に意識が別次元にとんでいつてる…

仕方がないのでスプーンから手を離し、姫路さんの両肩を揺さぶる。

「姫路さん、しっかりして!」

「ふえ……明久……君？」

よかった…

ようやく意識が戻ってきたようだ。

「おっと！」

姫路さんが意識まばらのまま口を開けたので、スプーンが落下しそうになったところをかき氷のカップをだして受け止める。

「あつ、すみません…」

「大丈夫、気にしないでよ。それよりも他のところも見て回ろうか？」

早くここを立ち去りたい気持ち半分、本当に見て回りたい気持ち半分で言う。

「そうですね」

「まったね」

境内院さんものんきなものだ…

僕なんかもう気が気じゃないよ。

シャクツ

金銭的にはタダだが高いかき氷を口に含む。うん、たしかにおいしい。

だけどそれ以上に、姫路さんとの間接キスだという事実が…／／／

姫路さんの方はどうしているだろうかと思い、横を見るとまたスプーンをくわえたままボーツとしていた。

「姫路さん？」

「ひゃう！？

あつ、明久君！？

いつ、いえなんでもないんです…」

なんか凄い驚きようだけど今は僕もボロがでそうだから追求するのはやめよう。

それにしても、さっきまで傍にいたのに驚かれるなんて…

僕って、姫路さんにとってそこまで存在感ないのかな…

「ちょっと、その兄ちゃんに嬢ちゃん、たこ焼きはいかがかね？」

シヨックでうつむいている僕にたこ焼き屋の店主が声をかけてくる。

「姫路さん、たこ焼き食べる？」

「私一人では食べきれないので明久君とで一パックなら食べたいです」

そう言いながら姫路さんは一度自分の腹部へと視線を落とした。

もしかしてカロリーのことも気にしているのだろうか？

なら、そんな必要ないのになあ…

姫路さんはちつとも太ってないし、飯に少し太ってたとしても健康的でいいと思うのに。だけど、こういうことを女の子に言っちゃダメなんだよね。

前、テレビで言っていたことを思い出しながらのれんをくぐる。

「たこ焼き一パックください」

「へい毎度。カップルはタダだからお代は結構だよ」

「いったい、この村はカップルにどれだけ優しいと言っただ…」

「……………」

無言でたこ焼きを詰めている店主を見て思う。

「どこかで会ったことありまっけ？」

「ば、バカ言っちゃいけねえ。俺とあんたは初対面だぜ？
つと、たこ焼きお待ちどうさん」

僕の話流すように店主がたこ焼きの入ったタッパを差し出してくる。

「ありがとうございますね」

たこ焼きを受け取った姫路さんはご満悦の様子だ。

「今からなら向こうの丘からいい花火が見れるぜ」

「花火ですって！いきましよう明久君！」

「う、うん」

あまりの姫路さんの食い付きに多少焦りながらも返事をする。

「じゃあ店主さん、たこ焼きありがとうございました」

「花火の情報もありがとうございますね」

「楽しんできてくれよ!」

僕と姫路さんは店主さんに手を振りながら小高くなっている丘を指して歩き始めた。ん？

今、たこ焼き屋の屋台に福村みたいな人が裏口から入っていったような気がするけど気のせいだね。

く丘の上く

僕達が丘の上に着くと、穴場なのか両手で数えられる程の人数しかいなかった。

「どこかに座りませんか？」

「そうだね」

丘の上の広さは中々あるので、なるべく近くに人がいないところを選んで座る。

ひゅ~~~~~ドーーーーン!

「きれいです...」

姫路さんが花火を見上げながら呟くように言う。

僕は花火に照らされて、よく見えるようになった姫路さんの顔を横目で見ながら花火で楽しむ。

そこで、何の気なしにポケットに手を入れると手になにかが触れた。取り出さなくてもわかる。これは合宿前に僕の靴箱に入っていたあの手紙だ。

合宿の五日目の夜。

すなわち今、旅館前のベンチで僕を待っているという内容のもの。差出人はわからない。

わからないけど、確認する気もなければ行く気もない。

今、姫路さんと共にいられる。それだけで、それこそが幸せだからそこに行けば、僕とその子は付き合うことになっていたかもしれない。

だけど、やっぱり僕にとってここ以上の幸せなんてないと思うから。伝えたい想いは幾千も。

言いたいことは一つだけ――

ひゅ~~~~~ドーーーーン!!!

「大好きだよ、姫路さん」

一際大きな花火に僕の、耳をすましても聴こえないような小さな声はかき消されてしまった。

第58問 僕と祭りと花火にのせた言葉（後書き）

おそらく次回で強化合宿編終了となります。
次回もよろしくお願いします。

第59問 僕と腕輪と再会の時（前書き）

パンドモニウムさん、感想ありがとうございました！

第59問 僕と腕輪と再会の時

瑞希SIDE

「……瑞希、手紙どうだった？」

合宿の帰り支度をしている私に翔子ちゃんが小さな声で話しかけてきます。

「結局は無駄になっちゃいました」

私はそう言いながら苦笑します。

『吉井様へ』、そう記した手紙。

差出人が私だとわかったら明久君はきっと私に気を遣って来てしまいますから、わからないように他人行儀で書いたあの手紙。

「だけど私にとって手紙にこたえてくれることよりもいいことがあったからいいんです」

明久君と一緒にいけた、あの祭り。

私にとって一生忘れることのできない大切な思い出。

ちよつと恋人同士みたいなこととしたドキドキな経験。

一緒に花火を見上げた時、聞こえた気がしたかすかな声。

私の思い違いだということくらいはわかっています。

それでも、私にとってはそんな勘違いすら大切な思い出なんです。

「……たまに瑞希も吉井もよくわからないことを言う」

「いくら翔子ちゃんでも秘密ですよ。」

それより、翔子ちゃんは坂本君となにかあったんですか？」

「……うん。昨日は雄二が――」

明久SIDE

「やっと着いたね」

電車から降りて、後ろにいる姫路さんに話しかける。

「合宿、楽しかったですね」

よかった…

姫路さんも合宿でいい思い出ができたようだ。

もちろん僕にとってもいい思い出ができたのは言っまでもないだろう。

「じゃっ、今日はもう解散とするか」

「うむ、あまり遅くなれば家の者も心配するであろっしのう」

いつものように指揮をとる雄二に秀吉が賛同する。

僕個人的にはこの後、みんなで遊ぶのもいいけどあまり遅くなれば秀吉の言う通り、家の人に心配をかけてしまうだろう。

特に姫路さんや島田さんといった女の子の家ならなおさらだ。

「ウチと木下、土屋はこっちだから。また明日ね」

「皆の者、さらばじゃ」

「……また会おう」

時々思っけど、なんかムツツリー二がかっこよく見えるよ…

「俺と翔子はこっちだからじゃあな」

「……また明日」

今さら、なんで霧島さんがいるかなんてツッコミはいれないよ…

「バイバイみんな！」

「また明日、学校で会いましょう」

僕と姫路さんはそれぞれの方向へ帰っていくみんなに手を振る。

「じゃあ、僕たちも帰ろうか」

「はいっ！」

姫路さんと共にならんで帰路をたどりながら出発前のことを思い出す。

姫路さんと祭りの翌日の昼過ぎに僕はババアに呼び出された。

ババアが言うには妖怪騒動の発端はババアが作り出した半自立式召喚獣であり、僕たちの団結力を高めるために仕向けたらしいのだ。

まったく、明希から得た情報を変なことにつかわないでほしいよ。

まあ、それは置いとくとして、ババアもまさか本物の妖怪が入り込

んでいるとは思ってもよらなかったらしい。

その時、自身も妖怪なのだからどうにからないものかと言ったら、すごい形相で睨まれたけど弱みがあるので強くは言ってこなかった。それに今思えば、鉄人の歯切れが悪かったのも旅館内が隠し通路だらけだったのも全ては召喚獣による妖怪騒動の内の計画だったのだろう。

結局は姫路さんを僕が助けだして境内院さんの方からも無事ドッペルゲンガーを退治したとの報告があったので、万事解決ということにはなっている。

「見つけた！

よっちゃん、みずちゃん、こっちだよ！」

思考の海をさ迷っていた僕の頭にもしつかりと響く元気な声。

こんな独特の呼び方をするのは境内院さんしかない…

若干呆れながらも辺りを見渡せば曲がり角から境内院がこちらに走ってきていた。

「美娘ちゃん、どうしたんですか？」

「いやあ〜

よっちゃんとみずちゃんをあるところに連れていきたくね」

昨晚のこともあつて嫌な予感しかない…

「まっまっ、早く来てよ」

「うわあ！

境内院さんストップ！」

「美娘ちゃん急に手を引つ張らないでください!」

〈数分後〉

「「はあはあ……」」

姫路さんと共に荒い息を整える。

体力にはそこそこ自信はあるが、自分で走るのと人に引つ張られる
それでは話が違ふ。元々体力のない姫路さんはなおさら疲れてるだ
ろっ……

「姫路さん、大丈夫?」

「は……はい……私は大丈夫です……」

口ではこう言ってるが、無理をしてりことは見え見えである。
ふと周りを見渡せば、どうやらここは墓地らしくたくさんの墓があ
った。

「つたく、境内院さんもいたいなんなのさ……」

「いや、ごめんね……」

どうしても二人にこれを見せたくてさ」

そう言つて境内院さんは一つの墓を指さす。

「お墓なんか僕たちにみせ——!?!」

言いかけた僕はそこで自分の目を疑ってしまった。

姫路さんも明希から事情を聞いているためか固まっている。

「なんで秋夜さんの墓が……」

そうそこに記されていたのは『月島秋夜』という名前。

淡雪の最初の主人であり、淡雪が好きだった人の名前だ。

「私の家が神社だつていうのは前話したよね？」

「うん」

「それで私たちの家は少し変わっていて、妖怪絡みで他界しちゃった人たちの霊が無事に成仏できるように全国から引き受けてるんだ。普通のお墓だと負の念から化けたり妖怪になったりするからね」

なるほど、それで秋夜さんの墓がここにあるというわけか……

「じゃあ、美娘ちゃんは秋夜さんの仇討ちに来てたんですか？」

「うん。」

みずちゃんたちの学校の学園長に呼ばれたというのもあるけど、元々親戚の仇くらいはとるつもりだったよ……」

あのババアも妖怪騒動に真実味をもたせるために境内院さんを使うなんて性根が………ん？ 親戚？

「美娘ちゃん、親戚つて……」

「あつ、気にしないでいいよ。」

元々、すごく遠い親戚だし小さいころに一度あつたきりだから……」

そう言う境内院さんの頬には涙が伝っていた。

きつと、その一度きりの出会いが境内院さんの中では色濃く残っているのだろう。だから、他の家族に頼らず一人で退治してきたのかもしれない。

「まつまつ、ほんと大丈夫だから気にしないでよ。」

それよりもよつちゃんとみずちゃんも手を合わせていってくれないかな？」

「うん（はい）」

僕と姫路さんはお墓の前にたつと祈るように手を合わせる。

秋夜さん、淡雪はあなたのことが大好きだったんですよ。

あなたのことが好きで、あなたのために生きてきた。

あなたが好きだったものを守るために戦った。

あなたが好きだったものを忘れないために自分を淡雪でいた。

あなたが好きだったものを残すために笑っていたんです。

だから、淡雪がそちらにいくことがあつたら温かく迎えてあげてください。

その儚い冷たさが溶けてしまうように……

「淡雪は……秋夜さんのところにいるべきなんだ」

僕は自分の腕から淡く白い光を放つ腕輪をとると墓の前におく。
ダブルコンチェルト

二重協奏曲が使えなくなるのは痛手だが、これは元々僕の力じゃない。なにより、淡雪には秋夜さんのそばにいてほしかったから……

「秋夜さんと淡雪ちゃん、会えるといいですね」

「会えるよ。」

だって、二人は互いのために悩んで苦しんで、それでもこたえをだしたんだから。二人は一緒にいられるだけで幸せなんだ」

そう言いながら天国にいるであろう二人を見上げるように空を見る。

「……あつ……」

三人の声が重なる。その原因は空から降ってくるものだった。

暑さもこれから本格化していくであろう初夏に降る季節外れの雪。

暑さで溶けてしまいそうだけれど、それらは溶けずにちゃんと地についてゆく。

そしてそれらは秋夜さんの墓の周りに降り積もるよう降っていく。

だけれど、決して降り積もることはない。

地につくとまるで寄り添うに消えてしまうから。

でも表面的な意味じゃなく、もっと大切なところで繋がっているんだ。

そう確信できる儚く、優しいそれは――

「淡雪だ……」

第59問 僕と腕輪と再会の時（後書き）

これにて強化合宿編終了です。

次回は恒例の座談会となります！

特別問題3 座談会（強化合宿編）（前書き）

いつもの座談会と同じ注意事項を留意し、お読みください！

特別問題3 座談会（強化合宿編）

唐「お馴染みの座談会が始まります！

今回のゲストはムッツリー二に美娘、淡雪でーす！」

ム「……ハーレム」（ぶしゃあああ！）

唐「自己紹介もままならずに一名ダウンしましたが、気にせずに続けてください」

境「こんにちは」

境内院美娘だよ。よろしくね」

淡「一夢淡雪です。

どうぞよろしくお願いいたします。ところで土屋様、大丈夫ですか？」

ム「この程度、問題ない」

唐「カッコつけてるけど自滅だからね……」

境「まあ、そんなことよりも議題を話し合おうよ」

淡「なにを話されるのですか？」

唐「じゃあ、三章について質問なんかでいいや」

ム「……適当」

境「じゃあ、私からいくね」

三章の後半でよっちゃんとみずちゃんが妙な夢を見たと言ってたけど詳細は？」

唐「あつ、それはこのことなんだよね。

詳しくは第一回座談会参照ということで」

淡「では、次は私ですね。

吉井様と妃様がいったあの祭り、なんかおかしくなかったですか？」

唐「それはそうだよ。

だって主催者はすが——おっと、黙秘するように頼まれてたんだつたよ」

ム「……あいつらも物好き」

境「私もボランティアで参加してたからね」

唐「まあ、まる一日彼らは暇を持て余してたんだからなにかは企むって……」

ム「……俺も。

三章の一番最後で美娘と秋夜との関係について触れたがフラグか？」

淡「秋夜様は私のものです！」

唐「まあまあ、それは本人談つてことで境内院さんよろしく！」

境「秋夜さんと遊んでもらったのは一回きりだったから特に恋愛感情とかはないよ。ただ、優しかった。それだけは覚えてるんだ」

唐「だそうです」

淡「よかったです…」

ム「……つまらん」

淡「人の不幸で遊ばないでください!」

〈反省点〉

唐「反省をしよう」

ム「……珍しい」

唐「いや、こつちも色々と考えているわけですよ…」

淡「で、具体的な反省点はどのようなことで?」

唐「三章って、思ってた以上にグダっちゃったからさ…」

境「それって自分のせいだね?」

唐「おっしゃるとおり、作者の文才の無さが招いた事態です…
ですから、そんなグダった状況でも読んでくれた方々、どうもありがとうございました!」

「今後について」

唐「ということで、重大発表がある」

ム境淡「「なんだ（なに）？」」「」

唐「次は閑話の前に番外編をやらうと思ってるんだ」

ム「閑話となにが違う？」

唐「閑話は比較的まだまともな話だし、物語に関わってくる。

その点、番外編は物語に深く関わらないし結構フザケ気味かな？」

淡「具体的になにをやるのですか？」

唐「ある作者様と考えた遊。王大会とかだよ」

境「じゃあ、私にも出番があるかもだね」

唐「文月学園内でやるけど出番あるかもね」

淡「じゃあ私も！」

唐「いや、さすがに死んじゃった人は蘇生させられないよ……」

淡「じゃあ、なんでここにいられるんですか？」

唐「座談会だから、なんでもOK」

ム「……少しはメタ発言自重しろ」

唐「座談会だからオールOK」

境「ネタに走ったってことは話のタネがなくなっただね」

唐「笑顔で痛いところ、つかないでほしいなあ」

ム「で、本当に話すことないのか？」

唐「一応あるからちよつとした雑字でも話そうか。

淡雪が苗字として使っている一夢、あれって『儚い』って意味なんだよ」

淡「知りませんでした……」

境「でも、辞典に一夢なんてのってないよ」

唐「それはそうだよ。

『儚』の成り立ちを調べると人偏は『一』が元らしいからね」

淡「それで一夢ですか……」

ム「……他の候補の成り立ちは？」

唐「その場のノリ」

ム「……やっぱり適當」

唐「と、まあ本当に話すことがなくなっただからお開きという。最後になにか言いたいことある？」

ム「……特になし」

境「私はあるよ」

いつになったら、よっちゃんのみずちゃんはくつつくのかな？」

淡「それ、私も気になります！」

唐「あの二人の恋についてはこの物語の本筋でもあるから中々くつつかないかな？」

淡「たしかに恋愛パートとバトルパートだと同一人物が書いてとは思えないくらい執筆速度に差がありますからね」

唐「バトルの描写って苦手なんだ……」

ム「……別に心情描写がうまいわけでもない」

唐「うぐっ……」

そうやって、痛いところつかないでよ……」

境「一言なのに結構話し込んだよね」

唐「基本、計画性皆無の作者が書いてるからね。ということでは今度こそお開き」

淡「出番はこれっきりかと思いますが、さようなら」

境「雪ちゃん暗いつて…」

きつとまたチャンスはあるから元気だして!」

淡「境内院様、お慰めありがとうございます」

境「気にしないでいいよ」

ということ、私の方からもバイバイね」

ム「……さらばだ」

唐「だから無駄にカツコつけて言うなよ…」

なにはともあれ、これから拙作をどうぞよろしくお願いします!」

特別問題3 座談会（強化合宿編）（後書き）

ということで次回からしばらくは明久たちに遊戯王をやってもらいます。

オリカなども数枚で予定ですので楽しみに！

番外編 1 僕と君は決闘者（前書き）

來霧さん、ソニックケイさん、感想ありがとうございました！
番外編はパロネタなどが入っているので注意してください！

番外編1 僕と君は決闘者

明久SIDE

「まずい！」

カチカチ！

急いで回避行動をとろうとするが雄二は既に僕の懐に入り込んでいた。

「めえ、かつぽっじつてよく見てな！」

これがおたくの最期の光景だ、エクスペンダブルズプライド！」

雄二の操作する『アルフレ。』というキャラクターが僕の操作する『終盤は主人公します』に向かって銃を滅多撃ちにする。

そしてトドメといわんばかりに上空から炎をまとった急降下を放つ。これだけ喰らえば即死は免れないだろう……

『2P WIN』

画面にそう表示され、僕の負けが確定する。

「やっぱり雄二の使うアル。レッドは強いよ……」

「明久、隠しきれてないぞ……」

おかしいなあ……

よし、やり直してみよう。

「じゃあ、○ルフレドかな？」

「もう伏せ字の意味がねえよ……」

「じゃあ、ア○ヴィンでどう？」

「もうこれ以上はやめてくれ…」

下手すると俺たちが抹消されかねないし、ネタがわかるやつがいるかも怪しいんだからよ…」

雄二が懇願するように言う。

たしかに僕も消されちゃうのはイヤだから気をつけないとね…

「二人とも、なにをやってるんですか？」

後ろから聞こえてきた柔らかな声に振り向けば、そこには――

「あつ、姫路さん。」

今は雄二と通信対戦してたんだ」

そう言つて姫路さんに手持ちのP○Pを見せる。

「どんなゲームなんですか？」

「これは、尻尾シリーズっていうRPGのキャラクターたちが戦うゲームだよ」

ちなみに僕と雄二が使っていたのはどちらも最新作のキャラクターだ。

ヒロインが主人公をしてると専らの噂である。

「尻尾シリーズがどんなのかは知りませんが楽しそうですね」

「うん、今度姫路さんにも貸してあげるよ」

姫路さんはあまりゲームが得意なイメージはないが、一緒にできたら楽しいだろうな。それに僕が姫路さんに一から教えてあげるのもいいかもしれない。

「ありがとうございますね。」

「……………あつ、そうです！」

明久君と坂本君に聞きたいことがあつて来たんです」

「僕でよかつたら力になるよ」

「俺もいいぞ」

姫路さんが僕と雄二に聞きたいことは珍しいが、そんなに難題なのだろうか？

というか、姫路さんに解けない問題が僕と雄二に解けるとは考えづらい…

「では早速なんですが、坂本君はいつから王様になったんですか？」

「「????」」

姫路さんのあまりにも突拍子もない質問に僕と雄二の頭上にはクエスチョンマークが浮かぶばかりだ。

「……瑞希、順番を追って話さないとわからない」

いきなりの霧島さん登場。

当然、逃げようとする雄二。それを捕まえる僕。

姫路さんはそれを見て苦笑している。うん、なにもおきていない平和な毎日だ。

「離せ明久！」

「雄二、あまりこういったことに時間割いてられないんだから大人しくてして」

「……吉井の言う通り。私たちにはわからない大人の事情がある」

「はい、霧島さん」

あまりにも雄二が暴れるので霧島さんに預けることにする。

「明久！裏切るのか！？」

「裏切るもなにも僕は最初から霧島さんの恋を応援してるんだよ？」

「……我々は吉井と姫路さん、二人の仲を応援してるぞ！」「……」

僕はなにも見てないし聞いてないよ……

須川君たちの声なんてきこえてないよ……

「まあ、なにはともあれ姫路さん、順番を追って説明してくれるかな？」

「はい。このポスターを見てくれればわかると思っんですが…」

そう言っつて姫路さんは一枚の紙を取り出した。
なにに、そこに記されている内容はえーと……

『文月学園生徒決闘大会

主催者 須川 亮

提 供 妖怪ババア

時はきた！

立ち上げれ決闘者よ！
デュエリスト

今週火曜日に行われる二人一組のY u - z i - o h！大会で勝ち上がれ！

上位入賞者とそのクラスには素敵な景品もあり！
皆さまの応募、ふるってお待ちしております』

「たしかに雄二が王様になってるね…」

見落とした方はよくローマ字を読んでほしい。

雄二がコン。イに喧嘩をうっているのがよくわかると思っ……

「大方、須川辺りが書き間違えたんだろ…
にしても面白そうだな」

「あつ、雄二もそう思っ？」

実を言っつと僕、OCGをやっつていたりする。

まあ、雄二や秀吉、ムツツリー二とはよくやるから知っつてるだろうけどね。

「明久、俺と「坂本を殺せえええ！」」

黒装束を身にまとった異端審問会の面々に連れていかれる雄二。
たぶん、雄二は霧島さんから逃れるために僕を誘おうとしたのだけ
ど、どうやら須川君たちの逆鱗に触れてしまったらしい…

「えっと、結局坂本君は王様じゃないんですか？」

「うん、たぶんあれは書き間違えたよ…」

なんとも紛らわしくはあるけどね…

「そ、それでこの大会ですけどね、私と一緒に出てくれませんか…
？」

そう言つて上目遣いになる姫路さん。

おそらく本人は意図してないだろうけど、破壊力抜群だ。

というか姫路さんにここまでやらせといて断るやつがいたら見てみ
たいものだ。

余裕でぶっ飛ばしてやる自信があるからさ」

つと、それはさておき、そんなうらやましい状況になっている人の
返事がいつまでも聞こえないのはなぜだろうか？

「やつぱり…私なんかじゃダメですよね…」

くそ、姫路さんをこんなに悲しませてるのはどこのどいつだ！

今すぐ明希と共におもいつきり殴つてやる！

そう思つて辺りにそれらしい人を探すが、この教室には貼り付けに
あつている雄二とそれに制裁を加えてる霧島さんと須川君たちしか
いなかった。

「明久君、せめてこちらをむいて話を聞いてほしいです……」

「えっ、僕？」

「さっきから明久君に話していたんですけど……」

さっきから姫路さんは僕に話していたといつことは、うづやましいやつ。僕。明希に殴られるやつ。

「サモン！」

「急にどうした？」

「明希、なにも言わず僕を殴って」

「おらあああ！！！」

「ぐはっ！」

僕は見事に宙を舞っています。

明希のやつめ、躊躇も手加減もしなかったな……

バタンッ！

「明久君！」

畳に叩きつけられた僕に姫路さんが駆け寄ってくる。

「姫路さん、一緒に大会でよ……」

僕は痛む体をさすりながら、これだけを伝えたのだった。

番外編1 僕と君は決闘者（後書き）

ということで次回から明久たちは決闘を始めます。
誰がどのデッキかはこうご期待ということでは！

第60問 僕と優待券と想いのかたち（前書き）

來霧さん、感想ありがとうございます。

携帯が壊れてしまい、番外編のデータが全てふっとんでしまったので、しばらく番外編はお休みとさせて頂いていただきます。楽しみにしていてくださった方々、どうもすいません。

活動報告でも報告しましたが、その際は神代美樹さん、黒炉さん、ナハト・リコリスさん、どうもありがとうございます。

第60問 僕と優待券と想いのかたち

くたまにくるバカテストく

『日本人の結婚適齢を答えなさい』

く姫路瑞希の答えく

男性18歳 女性16歳

く教師からく

正解です。

しかし、最近では女性も18歳にするべきだという意見もでているので姫路さんが結婚できる日が遠くなってしまうかもしれませんね。

く教師コメントについて異端審問会からく

吉井だけ結婚できるのを16歳にすることを提案します！

く土屋康太の答えく

できちゃった結婚という言葉がある

く教師からく

そんなことは聞いてません

く霧島翔子の答えく

想像妊娠という言葉もある

く教師からく

だから、そんなことは聞いてません！

というか、もう結婚関係ないじゃないですか！

く吉井明久の答えく

二年も間があるなんて……

もう、ダメだ…

きっと姫路さんはその二年の間でいい人を見つけちゃうんだ…

く教師からく

テストに私情を持ち込まないでくださいと言いたいですが、先生は吉井君の味方です。いつそのこと、想いを伝えてみてはどうですか？

く教師コメントに明久からく

先生も僕を破滅の道に誘おうとするんですね…

く明久コメントに雄二からく

ここまでくると勘違いも滑稽だな

明久SIDE

「じめん、やっぱりムリだよ…」

夏風の吹く屋上で僕は目の前にいる少女に告げた…

「さかのぼること一週間前」

「おじゃましまーす」

合宿から帰ってきた翌日である土曜日、僕は姫路さんの家に赴いていた。

理由は姫路さんの両親に謝るため。

結果的にはなにもなかったとしても姫路さんには怖い思いをさせちゃったし、僕なんかが姫路さんと祭りに出たことを知っておいてもらった方がいいだろう。

「おお、吉井君か。瑞希は買い物に行っちゃってしまっているがあがってくれ」

「失礼します」

快く出迎えてくれた姫路さんのお父さんに感謝しながらも家に入る。それに姫路さんがいないならむしろ好都合だ。

仮にも合宿のことを話しに来たのだから、できれば嫌な思い出のある姫路さんは話に交ぜさせたくない。

言葉にしなくても恐かったことも辛かったこともあったのだろうか…

「合宿から帰ってきて早々に未来の我が家に来たということはないかあったのかね？」

居間の椅子に腰を掛けながら姫路さんのお父さんが言う。

今は僕も向かいの椅子に座らせてもらっている状態だ。

「一部おかしい文面が混ざってますが、話があるのはたしかです」

相変わらずな姫路さんのお父さんは、さておいて話を進めることにする。

「そうか…」

瑞希と共に一夜を過ごしたか…」

「なっ!？」

な、なんで知ってるんですか!？」

まさか姫路さんと一緒に夜、祭りに行ったのを知られてとは思わなかった…

あの日は帰るのがつい遅くなってしまったから、一夜を共に過ごしたと言っても過言ではないだろう。

しかし、情報の出どころは誰だ？

姫路さんが話したとは考えづらいし……

「すいませんが、そのことを誰から聞いたんですか？」

「なに、跡取りになる子のことくらい、顔を見ただけでわかるさ」

恐るべし姫路さんのお父さん…

伊達に姫路さんのお父さんじゃないってことか。

「そうですか…」

その…なんというか、すいません…」

「吉井君が謝ることないさ。」

それよりもちょっとだけでいいから状況を聞かせてくれないかい？」

ここで断ることもできるだろう。だけど、それではせっかく目をつぶってくれている姫路さんのお父さんに失礼だというものではないか。

「えっと、ですね…」

場所はちよつと小高くなつた丘でして…」

「なに！？」

そ、外なのかい…？」

なんで姫路さんのお父さんはこんなに驚いているのだろう？

僕は当たり障りのないように花火のことを話そうと思ったただけなのになあ…

「はい、そりゃ外ですけど？」

「……以外に君はハードなんだね…」

で、瑞希は君の期待にそえたかね？」

「僕の期待つて、そんな大層なものじゃありませんよ。」

ただ、合宿に行く前と今では心持ちが違つただけ言っておきます」

そう、合宿に行く前から僕自身の姫路さんへの好意は自覚していた。いや、していたつもりだったんだ…

漠然と『姫路さんが好き』だと。だけど、今は違う。

合宿先で食事をした時、一緒に山菜採りに出掛けた時、姫路さんを助けようと奮闘した時、一緒に花火を見上げ時、そして姫路さんが僕に言ってくれたあの言葉……

『自分に甘いのは優しいということ。』

他人に優しい人は自分にも優しくできると。

なぜなら、優しさを知らなければ優しくできないから……』

それらの中で実感した。

僕の姫路さんに対する感情は『好き』なんかで表せないほど大きいと。

それは有り体に言うならば『愛してる』や『大好き』だろう。

僕らしく言うならば、そう――

『誰よりも傍で力になりたい。』

そして、ずっと僕の傍で笑っていてほしいと』

きっとこれが一番僕らしいんじゃないかと思う。

臆病でバカで一步踏み出す勇氣もない僕ができることを表している
と。

傷つかずに姫路さんと関わるための言い訳。

それは姫路さんから見たら『優しさ』

僕自身からしてみたら『甘さ』

それが、この感情の本質なのだと…

「そうか……」

姫路さんのお父さんが僕の顔をじつと見つめてくる。

「そうだね、清涼祭の時よりも清々しくなっているじゃないか」

「僕なりに吹っ切れたってことですよ」

少し生意気とわかっていながら、からかい混じりに言う。

「だけど、瑞希とハードな一夜を過ごした罪は背負ってもらっよ」

「うっ…」

なるべく善処しますけど、なにをするんですか…」

案外、姫路さんのお父さんはしっかりと物事を覚えている人だなあ…

姫路さんの記憶力のよさもお父さん譲りだったりするのだろうか？

「まず第一に私のことを『お義父さん』と呼びなさい」

「わかりましたお義父さん…」

もはやここまで来てしまつたら折れるしかないだろう…
それにしても本当に目ざとく覚えている人だなあ…

「次に私の持つている株主優待券で瑞希と食事でもしてきなさい」

「はい……………って、それは罰じゃありませんよね!？」

姫路さんと一緒に食事に行けるのが罰なわけない。
むしろ、ご褒美ではないだろうか？

「これをどう捉えるかは君次第だ。

ただ、私はそろそろ有効期限が過ぎる、この優待券を使いたいだ
だ。

もらえるものはもらつておかないと損だろ？」

そう言いながらお義父さんは二枚の優待券をヒラヒラさせる。

僕をからかっているのか、試しているのか、本当にこの人は読めな
い…

「ところで、吉井君は行つてくれるのかい？」

お義父さんがわかりきつたこたえを聞いてくる。

「当然ですよ」

ここで僕に断る理由なんてない。

ただ一つ、気掛かりなことがあるだけで…

「ただ、姫路さんが僕なんかとそんな所に行つていいのか氣になつて…」

「そのこたえは瑞希に聞いてみるんだね」

姫路さんがもっているこたえ…

聞くのが恐い。

いつもそうだ。僕はこたえを求めているのに傷つくのが恐くて、拒絶されるのが堪えられなくて逃げてばかりなんだ。

想いを自覚しながらも、いつも逃げ道をつくっていた…

自分が傷つくのが嫌で自分で自分を傷つけていたんだ。でも――

もうやめよう。

逃げるのも、自分を傷つけるのも全部。

ただ、まっすぐに自分の想いに向き合おう。

バカでも前がどちらかぐらいは解るはずだから…

君のいる場所なら見つけられるはずだから…

「ただいま」

あつ、明久君が来てるんですか！」

玄関から姫路さんの声が聞こえてくる。

僕がいるのは、おそらく靴から判断したのだろう。

「ちょうどいいタイミングじゃないか。いつてきなさい吉井君」

「はい、お義父さん……」

お義父さんに促されるように僕は玄関に向かう。

そこにはエコバックを傍らに置いて、靴を脱いでいる姫路さんがいた。

「明久君、こんにちは」

「こんにちは、姫路さん」

いつものように明るい笑顔を向けてくれる姫路さんにこちらも精一杯の笑顔で返す。

「あのさ、姫路さん……」

少し話があるんだけどいいかな？」

この時、僕の新たな歯車が回り始めたんだ…

第60問 僕と優待券と想いのかたち（後書き）

次回は瑞希と外食！？

もしかして彼らにとっては初デート？

それと私事なのですが、代替品として貸してもらっている携帯がとてつもなく使いにくいため、更新がスローペースになってしまいかもしれません…

第61問 僕と君とカップルジュース（前書き）

S H I Nさん、感想ありがとうございました！

それと、前回書き忘れましたが今章は章の題名からもわかるとおり、恋愛中心のオリジナル構成となります。

明久たちを取り巻く恋愛事情はどうなるのかお楽しみください。

第61問 僕と君とカップルジュース

明久SIDE

僕は今、すごく後悔している。

なにがかと言われれば、世の中に甘い話なんか無いということ忘れてた事だ。

姫路さんと食事なんて虫のいい話だと思っただよ…

「あつあ、明久君はな、なにを食べますか」

姫路さんも緊張の余りか、メニュー表を上下逆さまに持っている状態だ。

「ぼつぼ、僕は懷石セットにし、しようかな」

「わ、私もそれにします」

かく言う僕も緊張しっぱなしである。

というか、この状況で緊張するなって言う方が無理だよね!?

だって今、僕と姫路さんがいる場所は高層ビルの中に建てられた一流レストランだよ!

周りを見渡せばカップルばかり……

外を見れば夜の街並みがきらびやかな光をはなっている。

そんな状況の中、姫路さんと一緒に緊張しないわけがないよ!

ああ! お義父さんからあんな話、引き受けるんじゃないかな…

「お客様、ご注文はお決まりでしょうか?」

そんな最中、これまた一流レストランに相応しい出で立ちのウェイターが注文をとりに来た。

「か、懐石セット二つで…」

「かしこまりました」

丁寧に礼をするとウェイターは厨房に戻っていく。

あれか、お義父さんはここで僕に恥をかかせて、ただてさえ低い姫路さんからの僕の評価を底辺にまで墮とす作戦か…

そりゃ、大事な一人娘を僕みたいなバカで不細工で甲斐性なしに任せられないよね…

はあ…今さらながら、すごく惨めな気分になってきたよ…

「み、見てくださいあ、明久君、や、夜景がきれいですよ？」

姫路さん、厨房の方に夜景は広がってないよ…

平静ならばそう言えるのだが、僕の方も気がないため、そんな余裕はない。

「そつ、そつだね…」

結局、僕は僕で入り口の方を見ながら言っている状況だ。

当然ながら、夜景なんか見えちゃいない…

「お待たせしました。まずはお飲み物となります」

そう言つて、僕らの前に差し出されたのは一つのグラスに二本のストローがささっているという、いわゆるカップルジュースだ。

中に入っているのはメロンソーダみたいだけど、飲めるわけがない。

そんなことをすれば、姫路さんに嫌われること間違いなしだろうから……

「……………」

「……………」

姫路さんとの間に気まずい沈黙が流れる。どうする！？
どうすればいいんだ！？

「あつ、明久君は飲まないんですか？」

「じゃ、じゃあ飲もうかな？」

つて、なに言ってるんだ僕！
なんで自分から破滅への一步目を踏み出してるんだああ！！

「い、いただきます……」

飲むと言ってしまった手前、退くわけにもいかないのでストローに口をつける。

「わ、私もいただきます！」

そう言うやいなや、姫路さんは反対側のストローに口をつけた。

「！？」

待つんだ姫路さん！！
そう言いたいのは山々だが、緊張のあまり、ストローから口が離せ

ない。

こっ、こうなったら仕方ない……

僕は姫路さんがしているのと同じように目をつぶると、ジュースを飲むことに集中する。

「……………」

「……………」

ちつとも飲めやしない……

いや、緊張してとかそういう意味じゃなくて物理的に飲めていない……
どうなっているのかと疑問に思い、片目をつすつらと開けて視線を
ストローの先に移すと……………あれ？

ストローの先がない？

しょうがないので、更に目で追っていく。

えっと、一回転して、交差して、ジグザグになって……………

……………姫路さんと目があいました……

「……………」

「……………ごめん！姫路さん！！」

反応が数秒遅れたが、なんとかストローから口を離すことができた。
それにしても――

「ちょっと店員さん！

これはいったいどういうことなのさ！」

一本に繋がって、それぞれが飲み口となっている意味不明なストロ
ーを指さし、近くにいた店員を呼び寄せる。

「そちらは当店自慢のカップルジュースでございます」

「これじゃあ、ちつとも飲めないんだけど…」

「ではお二人で吸いあつてくれて構いません」

「できるかあああ!!」

あまりにも大きな声がでてしまったので、周りからの視線が僕たち
に集まる。

「ごめん姫路さん…」

視線が集まっていることへの恥ずかしさからか、姫路さんは顔を真
っ赤にしてうつむいてしまっている。

「い、いえ…」

私の方こそ明久君に迷惑かけちゃったみたいでごめんなさい…」

申し訳なさそうに言う姫路さんを見て胸が痛む。

お義父さんの提案といえども、半ば僕のわがままで姫路さんを連れ
てきたというのに、僕はなにもしてあげてないじゃないか…

「そんなことないよ。」

僕はちつとも迷惑だなんて思っていない。

むしろ、姫路さんが僕と食事に来てくれて嬉しいよ」

たしかに今の状況は客観的に見れば好ましくないだろう。
だけど、僕はそれでもよかったんだ。

姫路さんが僕の誘いを受け入れてくれたことが嬉しかったから。
姫路さんが僕を少しでも親しい仲だと思っていてくれることがわかったから…

「明久君…うう……」

「ひ、姫路さん!？」

突然、泣き始めてしまった姫路さんに困惑しながらも隣に急いで移動する。

そして――

第61問 僕と君とカップルジュース（後書き）

明久のつた行動とはいったい…？
次回もよろしくお願いします！

第62問 僕と君と鏡あわせの恋心（前書き）

黒炉さん、感想ありがとうございました！

第62問 僕と君と鏡あわせの恋心

瑞希SIDE

「そんなことないよ。」

僕はちつとも迷惑だなんて思っていない。

むしろ、姫路さんが僕と食事に来てくれて嬉しいよ。」

明久君がそう言ってくれた時、私の中で色々なものが込み上げてきました。

明久君は私とこんな所に来て楽しくないんじゃないか

私なんかとじゃなくて、本当は別の人と来たかったのになんらかの理由で私を誘ったんじゃないか

緊張しすぎて変なことばかり言っている私に幻滅したんじゃないかって……

だけど明久君はそんなことを気にしてないふうに言ってくれたんです。

『私と来れたのが嬉しい』って…

それは私の望む意味の言葉でなく、友人としてだということもわかっています。

ですけど、私にとってはそれが嬉しかったんです。

明久君が私に優しさを向けてくれることが…

私を親しい人と感じていてくれることが…

「明久君…うう……」

泣いたらまた明久君に迷惑かけちゃいます…

そう頭ではわかってはいるのに涙が止まりません。

明久君の優しさが嬉しくて涙が止まらないんです…

「姫路さん!？」

明久君はいつものように私を気遣って席を離れてきてくれます。

私が困っている時、助けてほしい時、明久君はいつも傍にいてくれましたね。

誰よりも傍にいて、こんな私のためにがんばってくれたんですね…
それなのに何もしてあげられない私を許してください…
好きになっただけいいと言いません。

だから、せめて嫌いにならないでください……明久君…

明久SIDE

「帰ろうか姫路さん」

もう、いいんだ…

これ以上、姫路さんにムリをさせられない。

これ以上、姫路さんの悲しむ姿を見たくないんだ…

たとえ、その原因が僕だとしても…

「明久…くん……」

すいません…私、なんにも言いませんから…いかなないのでください」

どうして君はそんなに僕に気を遣うんだ…
どうして僕なんかのために時間を使っちゃうんだ…
どうして…僕にそこまで優しくしてくれるんだ……………姫路さん…

瑞希SIDE

「帰ろうか姫路さん」

明久君が私に諭すように言います。そうですね…
いくら明久君が優しくても私なんかと一緒にイヤになりますよね…
私じゃ明久君と釣り合わない。そんなことはわかっているんです…
わかっていても諦められないんです。
明久君の優しさにふれる度、何度でも好きになってしまいますから…
何度でも明久君に…明久君にだけ恋をしてしまうから…
だから、せめて明久君の言ったことくらいには従いましょう。
明久君が帰りたいと思っているなら、私は――

「……………姫路さん」

「っ!？」

明久君!?

どうして私を抱きしめて…
ダメです…頭に靄がかかったようになってなにも考えられません…

明久君の温かさ

明久君の優しさ

明久君がそこにいてくれるという事実

その全てが私にとって甘美な響きとなつて私の思考を鈍らせていきます。

全てのことがどうでもよくなるような甘い誘惑。

今、ここにあるものがあればなにもいらぬほどの幸せ。

私にとっての全てがここにあるという錯覚さえおこしてしまいそうです…

でも…だからこそ、現実を見るのが辛いんです。

虚像だとわかつていても…明久君が本当にしたいことじゃないとわかつていても離れられないんです…

余計に明久君に依存しちゃうんです…

ダメなのに…明久君から離れられないんです…

明久SIDE

「ごめんね、姫路さん…」

帰り道、僕は君を背負いながらそつと呟く。

空を見上げれば星の輝きが見えないほどにネオンが光り輝いている。その中でも月だけは今日も僕らを照らしていた。

その優しい光で僕を慰めるように…

「ごめんね、姫路さん…」

もう一度、さっきと同じ言葉を繰り返す。

姫路さんが泣き始めてしまった時、僕はとっさに抱きしめてしまった。

なぜだかそれが正しい気がしたから……

正解なんてありはしないけど、それが姫路さんのためになる気がしたんだ……

独りよがりだってわかってる……わかってるさ……

事実、気づいたら姫路さんは寝てしまっており、頼んだ注文もキャンセルして今にいたる。食事の前に寝ちゃうなんて、よほど退屈にしていたのだろう。

……いや、僕が退屈にさせてしまったんだ……

ねえ、君はなにをしてあげたら喜んでくれるの……？

なにをしてあげたら笑っていてくれるの……？

どうしたら君を好きでいる資格があるの……

僕は君が……姫路さんがいてくれるだけでいいんだ……

だから、ちっぽけな僕のバカらしい質問に答えをほしい。

『もう少し……君の傍にいていいですか？』

瑞希SIDE

明久君…

気づくと私は明久君に背負われていました。温かい……
夏の夜の冷たさも明久君と一緒にならへっちらです。

「ごめんね、姫路さん…」

私の意識が戻ったことを知らないのか、明久君は呟くようにそっと
言います。

どうして謝るんですか…

どうして明久君が謝るんですか…

謝らなきゃいけないのは私なのに……

明久君に迷惑をかけ続けた、私が謝らなきゃいけないのに……
だけど、私にはそれすら言い出す勇気がないんです。

『ごめんなさい、明久君……』

そう言えたら、どんなに楽でしょうか…

でも言えないんです…

私には現実を見据えるだけの勇気も決意もないんです…

明久君を失うのが怖い

明久君が私の前からいなくなってしまうのが怖い

明久君が私を見てくれなくなってしまうのが怖いんです……

こんな臆病で卑怯な私にでも答えをくれますか？
私を見て答えをくれますか？

『私は…明久君の傍にいていいんでしょうか？』

明久SIDE

「よいしょと」

背負っていた姫路さんを近場の公園のベンチに寝かせる。

姫路さんが起きるまでしばらく待とう。

そう思い、夜空を……いや、月を眺める。

いつたい僕はどうすればいいんだろう…

この想いを伝えられるだけの勇氣はない。

かと言って、このままじゃいつか姫路さんが僕から離れていく日にくるだろう。いつか姫路さんに相応しい人が現れる日が……

僕はその時、笑顔で祝福してあげられるだろうか？

その相手に嫉妬してしまわないだろうか…？

姫路さんのことを考えずに、ひどいことをしてしまわないだろうか

……？

ははは…

おかしいよね…

僕って本当にバカだよ……

だって、好きな人の幸せすら願ってあげられないなんてバカげてる
だろ。

どんなに取り繕ったって所詮僕は、わがままで卑怯で自分の幸せが一番の最低な人間でしかないんだ……

「バカなんだよ……」

自分で自分に言い聞かせるように言う。僕にぴったりの言葉だ……愚かで愚直で最低な僕に……

「そんなことはありませんよ」

「っ!？」

突然、視界が暗転して温もりに包まれる。

温かい……

気持ちいい……

幸せだ……

そうか……僕は姫路さんに抱きしめられているんだ……

「明久君はバカなんかじゃありませんよ。」

たしかに、ちょっと勉強が苦手かもしれないけど、そんなことは些細な問題になってしまっただけで明久君は優しいんです」

姫路さん……

君が優しいと思っている人は好きな人の幸せすら願えないんだよ……自分勝手な想いを優しさで偽ろうとしているんだよ……

「私はその優しさが大好きです」

情けないな…

姫路さんにこんなこと言わせといて、僕は返す言葉一つ持ってないなんて…

「明久君のくれる優しさが大好きなんです」

僕だって好きだよ……大好きだよ！

姫路さんのくれる優しさが…

僕のと違う本当の優しさが……姫路さんのことが！

「それで…その……明久君に今日のお詫びがしたいんです…」

お詫びつて…

僕はなにもしてあげてないじゃないか。

むしろ、僕が姫路さんになにかしてあげなきゃいけないのに……退けない。ここで…ここは退いちゃいけない気がするんだ。

「それなら…

お詫びなら……僕がするよ」

「そんなことできません！

だって、私は明久君に迷惑かけてばか「迷惑なんかじゃないよ！」

「……………」

「……………」

姫路さんは黙ってしまった…

少し、強くない過ぎただろうか…

「さつきも言っただけど、僕は迷惑だなんて思っでないよ」

今度は強く言い過ぎないように、慎重に言っでいく。

「僕は今日、姫路さんと来れて楽しかった。
だから、姫路さんになにかしてあげたいんだ」

「私も同じです…」

私も今日、明久君といられて楽しかったです。
だから、明久君になにかしてあげたかったんです…」

僕と姫路さんは一度離れると目をあわせる。それでわかってしまった。

ああ、この目は僕と同じことを考えてるなと。

僕たちが共通して得意なことをしてあげようとしていると。

僕たちはまるでタイミングを見計らうかの様に互いを見つめ合う。

そして――

「「姫路さん（明久君）帰ったらご飯作っであげるよ（ますね）」」

第62問 僕と君と鏡あわせの恋心（後書き）

今回は一緒に手作り料理♪

彼らはいったい、なにを作るのか？

次回もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9907t/>

バカとテストと失われゆく記憶(ロストメモリー)

2011年11月4日06時03分発行